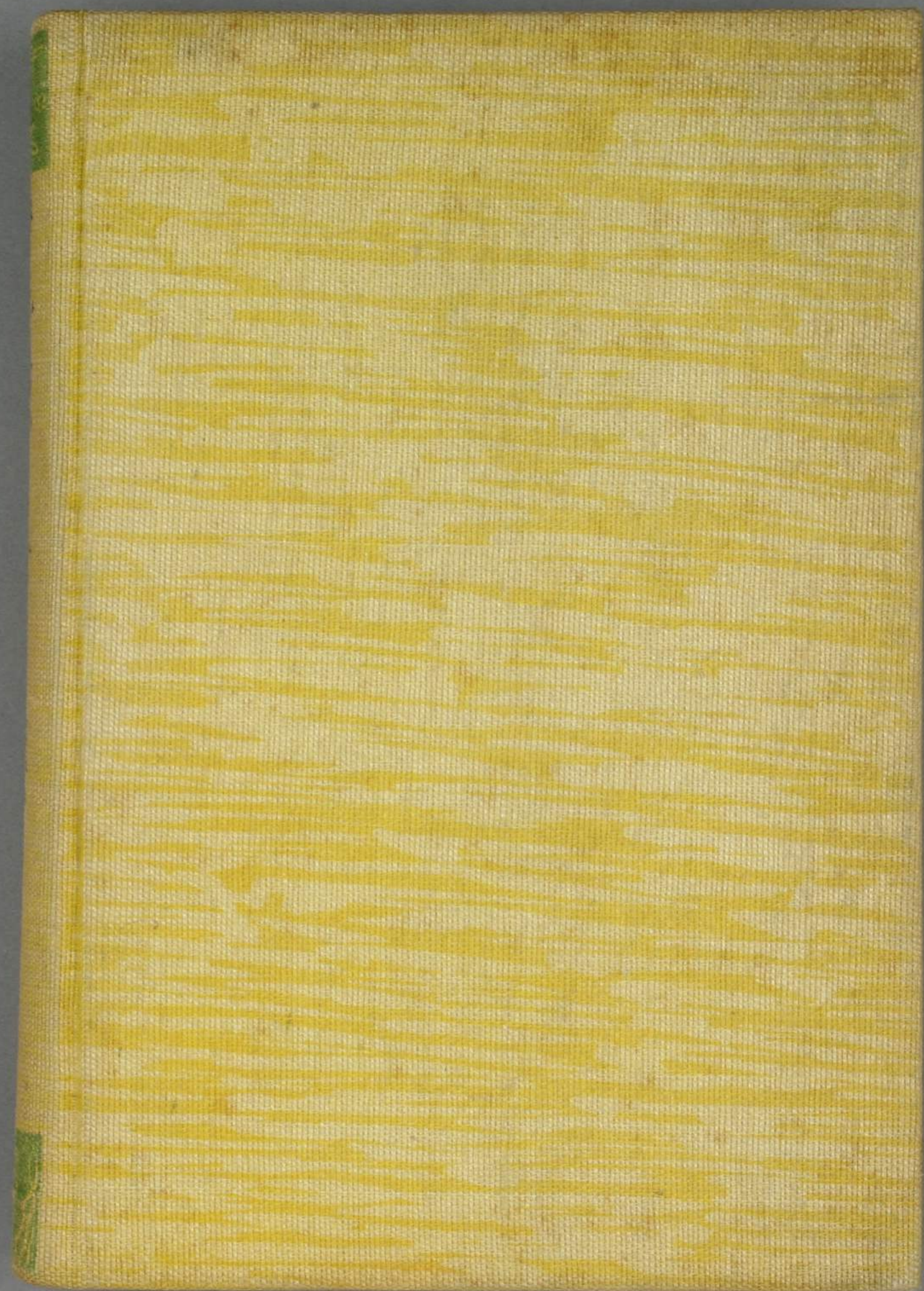


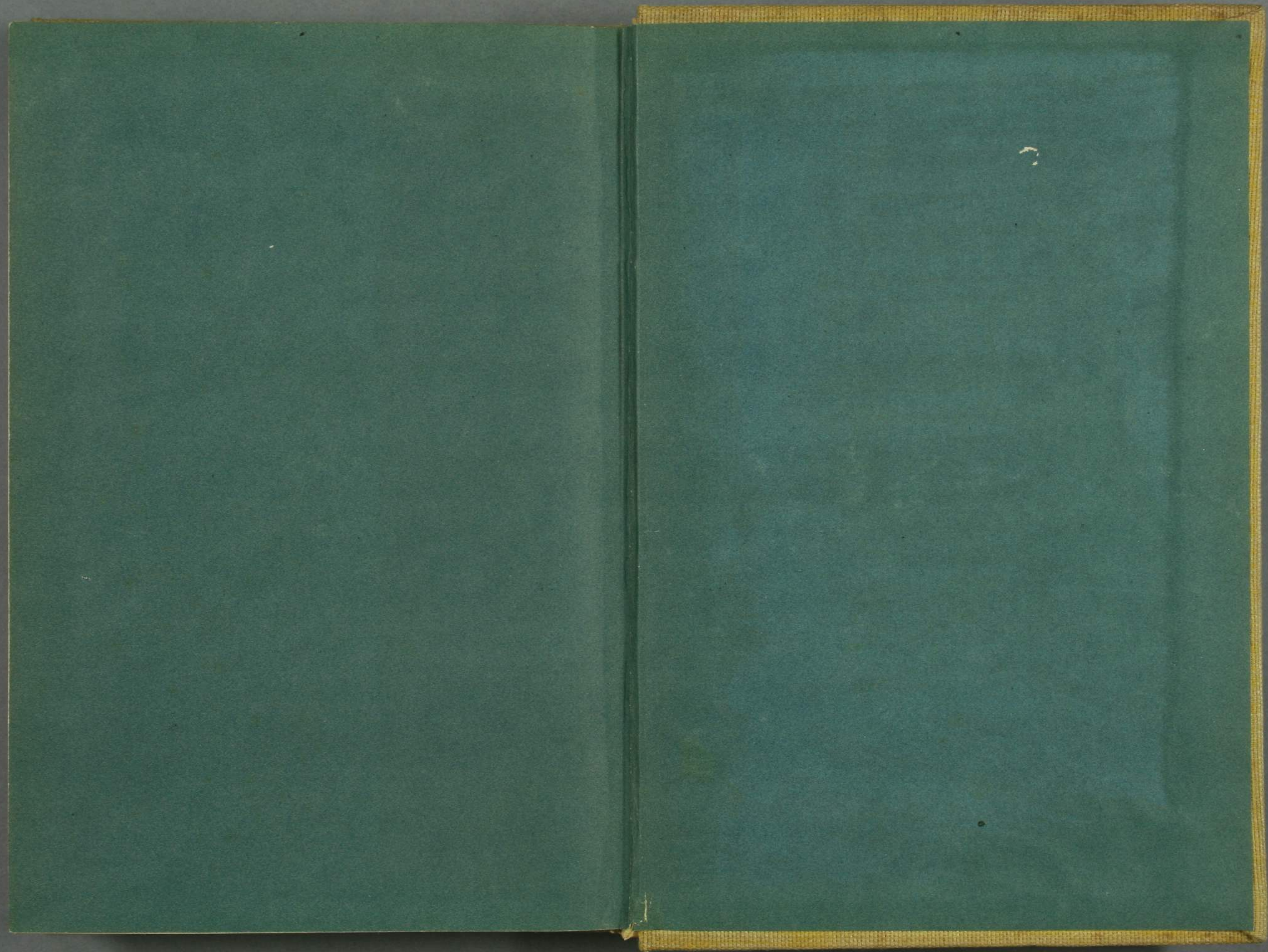
學藝
通筆
集

肝

錄

市島泰城著





筆隨藝學

鯨肝錄

著城春島市

刊
房書宛東

筆隨藝學

鯨肝錄

著城春島市

刊
房書宛東

鯨肝問答（本書の序にかへて）

私は白鳥省吾氏の懇懇に依り、早稲田大學の同人數氏と學藝隨筆の一冊を擔任した。白鳥氏が最初私を訪れて、隨筆一冊を書けと云はれた時、學藝隨筆の叢書を作ると云はれたので、私は學藝の二字が直ぐ氣になつて、自分の隨筆は出鱈目で學藝隨筆など云ふものは書けぬと斷つたが、強て云はるゝから、學藝の二字に拘束されないのなら、書いてもよいと終に諾したが、さて書名をどうすべきやなど深くも考へず、編纂をやつてゐると、廣告の都合があるから早く書名を定めよとの催促があつた。己むなく、假りに鯨肝録と名をつけて、後に適當の名を考へる積りで、取敢ず其假りの名を申送ると、一兩日後に其名で廣告され、遂に本名となつて仕舞つたのに閉口した。實は鯨肝録などは當世向の書名でなく、且つ典故も調らべてゐない。鯨肝は無用を意味する語と思つて匆卒命じたのであるが、果して左様であるかどうか、甚だ心許ない。或は逆に威張りくさつた意味であつたり、亦そんな風に解釋されたりすると私は甚だ恐縮する。私は事實鯨の肝臓は見たことが無い、唯だ鱈などで作る肝油は惡臭のあるもので、營養になるとは云へ、極め

て不愉快のものであるから、鯨の肝臓もそれに似たものであるまいかと想像し、その臭気のある爲めに忌まれて無用とされたのであるまいかと、今尙詮索もせず斯やうに思ふてゐるのだ。肝臓にビタミン素があるなど云ふことは近頃食物化学が開けてから云ふことで、昔はそんな研究もなく、食料にならぬとして無用視された事があつたので、鯨肝と云へば無用のものと、支那人あたりが考へたものであるまいかと思つてゐる。

此頃或る友人と會した時鯨肝の二字に就て質して見ると、誰れも本當の典故を知るものがない、或る者は云く、それはよい名だ、肺肝は眞實の宿る所だから、支那でも言肺肝より出づと云へば、胡麻化しを云はないことになつてゐる、鯨の如き大きいもの、肝には必らず大きな眞實が宿るに相違ないと云ふてマゼツかへした。處がある一人の友は、此の説を否定して、鯨肝録は好酒家の隨筆にふさはしい名だと云ふ。其説を聞くと鯨は百川を吸ふほどの大飲の族で豪酒を表徴する。肝は酒を司る臟腑であるから、酒豪は概ね肝臓病で斃れるではないかと、座客を笑はせたが、自分は其のマゼカへしを排して鯨肝の無用説を主張したが、一友は云く君の解の如くするも可也、世には無用之用と云ふことがあり、隨筆家は自から謙遜して自著を無用の書と爲せど、有用の書として出版されたものに比して却つて幾倍の用があり、自分は寧ろ無用の書を歡ぶものだ

と云うた。私は之れに對し、自分の此隨筆は學藝隨筆の叢書中に置かれたのを自ら愧るが、之れを學鯨隨筆と云ひ得べくんば私は寧ろそれを快とする、肝臓が無用であつても、其の巨大さ鯨肝の如くであれば無用も大乘的無用である、どうせ無用ならデカイ無用を欲する、若し亦自分の典故が全く誤つてゐて、鯨肝に無用の意義がなく、或は反對の意があらばそれはモツケの仕合此書の望外の譽と申したいが、それは自分署名の本意でない。

昭和十一年十二月

牛込の僑居小精廬に於て

春 城 生

鯨肝録

市島春城



鯨肝録

學藝隨筆
第五卷

市嶋春城著

次 目

目次

丙子雜俎

富嶽禮讚	三
可否茶館	四
銅否茶脈	四
み筆のさ	五
退筆の利	六
紅白の利	六
雅邦の逸	七
ダツチ、ワイ	八

次 目

集古十種の隠れた編纂者	九
行誠上人	一〇
醉人松延源八	二
スケッチの狂歌	三
藝術家の放屁	三
畫家の鍊金術	四
木堂の諧謔	四
節分の歎	五
江戸兒の任侠	六
田中正平博士の料理	六
石川博士と猿	七
選舉要	七
未來の鳥魚戰	八
鄙俗の藝術	九
可笑味	九

目次

不合理の詩材	二四
紅霞	二四
線美人	二四
俳人の洋行	二六
風月の領有權	二七
修驗祭	二七
喜怒を鐘に托す	二九
柳北翁の碑に對して	三〇
良妻	三一
川柳の碑	三一
日誌	三四
畫幅の格好	三五
園丁	三六
慢心	三九
和歌漫涉	四〇

學名	四一
銀座畫廊	四二
三圍の川柳	四二
葉かかくれ	四四
兩雄趣味の遭遇	四五
馬琴の秘話	四七
濫讀の弊	四九
森立之の事	五〇
頼山陽の微時	五三
一畫家を失ふ	五三
北一戰	五四
目森林愛護	五五
外人に北海道漫遊を勸む	五六
日本の庭園を語る	五九

目	松霞安田翁の深秀園	七五
	四時循環の天恵	八〇
次	日光徳川氏廟の外人觀	八四
福	内鬼外	九一
讀書餘録		

出版の今昔	九九
書物の敵	一〇八
反譯難附雜誌	一三七
小野粹全集序	一三六
紅葉山人の日誌	一三九
里見八犬傳に就ての追憶	一四七
三馬の浮世風呂を讀んで	一四九
雲萍雜誌に就て	一五三

回顧録

外國の圖書蒐集家	一五四
讀書の處則ち書齋(移動書齋)	一五八
貼り込み帖	一六〇
謎の良寛	一六三
相馬御風の隨筆集について其他	一六六
『目明きの垣覗き』を讀む	一六七
みさご題名の由來	一六九
回顧録	
搖籃時代の議會回顧	一七三
選舉の回顧	一八〇
青春時代の回顧	一八八
長岡の回顧	二二八
奇遇	三三三
郷土自慢	三三六

大隈侯の國民葬 三九

大隈侯と國民敬慕會 三六

大隈侯追隨記 二四〇

初度の旅 二七七

旅の今昔 二八三

雪の想ひ出 二八八

双柿舎に於ける坪内逍遙君 二九四

逍遙博士の業績 三三三

後藤新平伯 三三三

聖夢と國難 三四一

西園寺公の事 三四三

閑耳目

頼山陽の新事實 三四五

驚婚 三四五

戀愛結婚是非 三四六

軍費 三五〇

鬼門 三五二

琴臺と高田の雪 三五三

原宏平と蓮月尼 三五三

親不知の三家村 三五四

浮世繪大家は多く田舎出身 三五五

新戸渡博士と唐人お吉 三五七

世界的好色本 三五七

浴場の女 三六〇

鰻の串 三六〇

おいらん芋 三六〇

丙子雜俎

次	目
署	墮雪
	胎中
名	專の
	業履
狂	者物
—	—
三六三	三六一

裝題
 幀簽
 佐尾
 々上
 木柴
 孔舟

畢

丙子雜俎

富嶽禮讚

元日のうらゝかの朝富士山を望むと戴白の山顛が青宵を凌ぎ、屹然立つてゐるさまは、常に倍して崇高の美を感じる。日本の詩人は古來之れを形容するに苦心してゐるが、八朶の芙蓉だ、倒さに懸る白扇だなどゝ形容するに過ぎないので、甚だ嫌きたらない感がある。西洋詩人は流石に見方が違つて、形容も斬新である、佛蘭西の哲人ポール・リシヤルは普く世界を巡つて正義の國を求め、遂に日出る國日本にそれを得たと喜び、富士を讚して、宛がら合掌して天を拜する趣がある云ふたが、これは邦人が思ひ付かない形容である。如何にも兩腕を張つて掌を合せると圓錐形を爲すこと富嶽の如くである。此哲人が數へ擧げた世界に超越する日本の七つの名譽は、建國以來一系の天皇を戴くことを始め、流血の跡なき宗教を有すること、嘗つて他國に隸屬せざること等で、皆な此の誇るべき山の合掌から齎らしたものであるかにも思はれて、富嶽の美を彌益

丙 々高く感ずる。

可否茶館

今はカヒイハウスは街頭到る處にあるがこれが最初出来たのは明治二十一年頃で、同年四月の郵便報知新聞に下谷黒門町の警察の隣に可否茶館が設けられたと出てゐる。此の可否茶店こそ珈琲店で、客は喫茶しつつ新聞を読んだり碁將棋を弄したりした。即ちこれが當時の小クラブであつたのだ。こゝに注意すべきは、當時既に珈琲の字があるのに、可否の二字を充てたのは漢學の餘波でもあるが、實は珈琲と云ふよりも、可否の二字はカヒイハウスの本來の面目をよく現はしてゐるかに思はれる、多分此の館は當時社會雜多の人の集合所で、互ひに世話を交換し巷説を可否したであらう。可否茶館と云ふのはなか／＼よい思ひつきで、漢字應用當時の名としては上乘のものと思はれる、當時のカヒイハウスは、今のやうに女給に戯れる所では無かつた。

銅脈

狂詩の天才、上方に銅脈あり、江戸に蜀山あり、自分は銅脈の詩を読むごとに、其の諧謔の輕

妙なる、どうしてこんな人が上方にあるかと怪しむ程江戸氣質であることを感じた。此人の狂詩で自分の好きなのは「鈴鹿多雲助、山中賭突催、輸來當^{クニ}焚火、散成^{ゴマ}胡麻灰」の一詩で、雲助の生活と宿驛の光景をコンナに甘く歌つたものは無い。此人は聖護院宮の諸太夫で畠中頼母と云ふ人だが、銅脈が通り名で本名など餘り知つてゐる人はない。銅脈の戲名も餘り詮索されたことがないが、古く贗物を銅脈と云ふた所から、狂詩の詩に似て詩でない、似而非の贗物であると洒落れた所に滑稽がある、恰かも汽車に乗るものが見へを張つて發する時と着する時のみ一等車に乗り、其中間は三等車で濟すのを烟管乗りと云ふと一般で、兩端は金銀でも中間は竹であるから矢張り銅脈と同じことだ。

みさご

「みさご」を標題とした書物があり「みさご」を屋號とする鮭屋がある。「みさご」は鳥の名で、此鳥は海中の魚を捕つて噛み碎き口中の唾で酸味を加へるので肉の腐敗を防ぎ、それを巖穴に貯藏するハビットがある。人間が動もすると此の貯肉を失敬することがあるが、その肉は鮭の如くおいしいと云はれてゐる。鮭屋に「みさご」の屋號のある由來も凡そ推し得るが、之を書物の標

題とするのは諷刺の意味があつて更におもしろい。他人の調たものを吾物顔にそつと失敬した書物がどんなに多いことであらうか。

退筆の利用

昔しの文人墨客は其使用後の筆を埋めて筆塚を作つた。筆を粗略にしない文人の心掛けだと考へればなんでもないやうだが、實は自家宣傳の爲めにやつたものが多いことを思ふと愛想がつきる。市河米庵などは多くの名筆を集めて百筆譜を作つた位だから、その藏筆は夥しいものであつたらう。彼は不要の筆の爲め意匠を凝らし、之れを材料として圓形の火鉢を作つた。幾百大小の筆が火鉢の胴に應用され、筆の刻銘が自づから其裝飾ともなつた。米庵には之れを坐右に置き玩賞したと云ふが、如何にもよい趣向で、敗残の筆に執着する心意氣も寓され、筆塚などより俗離れした工風である。惜しいかな此火鉢は大震災に烏有となつたが、自分はその犖に倣ひ、退筆を以つて欄間を作らんとして折角蒐めてゐる。

紅白の鞠

瀧鶴臺の細君は非常に醜婦であつたと云ふが、容貌は醜でも其心は嬋麗で、良人が敬服するほどの良妻賢母であつたと云はれてゐる。此婦人はいつも左右の袂に紅白の手鞠を潜めてゐた。或る時それが良人の目に留まり、何んの爲にそんなものを袂に入れ置くと問はれ、妻の答に、自分のやうな不束ものは、氣をつけてゐても日に幾回かやり損ひ、他日再びせないやうにと、過つた時は紅い鞠に絲を巻きます。たまに満足に思ふ事がありますと白の鞠に絲を巻きます。近頃はヤツとやり損が少くなつたので白鞠が聊か太りましたと云うたとあるが、之は珍らしい自修自製の思ひつきで善悪玉をレコードにした所が面白い。

雅邦の逸事

橋本雅邦は近代の巨匠で、其高潔の性格は種々傳ふべき逸事を遺してゐる、自分がいつか聴いて感心したのは、雅邦が最後の病床に就いた時である。知人が何か雅邦の病苦を慰める法がないかと評議した末、雅邦は長唄を聴く事が好きだから其道の名人を呼んで病床に弾かせたらよからうと云ふので杵屋勘五郎を呼び榮藏等と共に訪はしめた處、病人は何故か今日は都合が悪いと云うて聴く事を辭した。其辭した譯は雅邦は平生藝術の貴むべきを口癖に云うてゐるのに斯界の名

丙 人を病床に導き臥し乍ら聴くなどは如何にも無禮で平生自分の主張と相反すると考へ折角來たの
子 を斷つたのだと分つた。此時雅邦は三十圓の金を杵屋に與へたが義理堅い勘五郎はどうあつても
雜 受取らないので、數次往復の面倒もあつたと云ふ。

姐 ダッチ・ワイフ

熱帯地方に凌暑の具として工風された竹器がある。籠のやうなもので添寝の具である。西洋では
ダッチ・ワイフの名があり、支那では竹夫人と云ふてゐる。此器は臺灣邊では現に作つてもゐ
るが、内地では日向の佐土原に製すると初めて聞へた。何にしるエロテックのものだから、いろ
くの傳説があり、詩人などは好題目として多くの作もあるが、元の謝宗可と云ふ人がよく此器
を言ひあらはしてゐる。其詩を約めて云ふと、同衾の具ではあるが粉黛を羞ぢて胸次玲瓏であ
る。敢て綺羅の衣裳を纏ふことなく亦雲雨三更の夢もない。靈心と忠節で溫柔に老いることなく
却つて六月氷霜の秋がある、此故に房を専らとすれども、敢て蛾眉の嫉妬を受けないと、如何さ
ま此器は貞淑の夫人と比すべきである。偶々相馬御風氏より寄せられた、近著「道限りなし」を
翻譯するに、最愛の細君を失つた御風氏に此器を寄せた人があると云ふ。それに對して氏は左の

如く感想を書いてゐる。

このことによつて私には涙ぐましい、をかさがついこみ上げて來たのである。正に笑へぬ
ナンセンスと云ふべきであらう。

など、書き、愛兒にそれは何の爲めのものと問はれて、説明に困つたらしく、嘯嘯として説き
得ない所に苦悶が見えて同情に堪へない。

集古十種の隠れた編纂者

白河樂翁侯の集古十種は谷文晁が編纂したやうに云はれてゐるが、實際に於ては多くの人が與
つたのであらう、それ等の人々は皆下積となつて一向に知れない。あの書物は當時に於ては大出
版と云うてよいものである。上版された外に續篇とも見做さるべき稿本が立派に表装されて松平
家に藏してあるのを先年拜見したこともあるが、全國に亘たり各部門の物をあれほど蒐集するに
は、なか／＼人手が多くかゝつたらうと想像されるが、文晁門下の者が諸方へ出張したやうなこ
との外、これ迄編纂に與つた人は知れなかつた。然るに秋田の人で白雲と云ふ僧が樂翁侯の知遇
を得て此の編纂に助力した事を初めて知つた。此僧は南畫をよくするもので、樂翁侯に知られて

白河の常泉寺の住職となつたが、侯の内命を受け 諸國を遍歴して諸社寺の寶器書畫の類を摸寫し、古碑古鏡古瓦の金石類をも蒐集したと云はれてゐる、當時此僧に會した菅茶山は左の詩を詠してゐる。

僧白雲上人 上人奥州白河人能畫白河侯著
集古十種搜索模寫上人亦與焉

飛錫浮杯動歷年、彩毫到處壯山川、更將妙喜通神技、助作歐公集古篇、

贈大野萬年 名文泉奥州白
河人善寫真

遍訪儒流便寫真、知君家法妙傳神、關東今日多々士、欲置山崑許幾人

白雲が此事に與かつたことが此詩で知れるのみならず、其補助役に大野萬平のあつたことも窺はれる。白雲の僧名は教順と稱し白雲とは樂翁侯自筆で閑松堂白雲と認めて與へられた名で、白河の片名と松平の頭字とを合はした名である。侯の歸依の深かつたことが知れる。侯は領内に布告して此僧に無禮のないやうにと特に注意されたと傳へられてゐる。

行 誠 上 人

芝三縁山に近代名僧が二人ある。行誠と徹定がそれで、自分は二僧とも景仰してゐるが、徹定

に就ては他日録することにして此頃行誠の文集を読んで見て、其の和歌の超俗高韻に感じた。上人は漢詩もよくしたが、和歌の方が優れてゐるやうに感じた。上人の和歌は敢て師承あるでなく、歌道の外から得た和歌で、和歌と宗教は上人に於ては一致してゐて、普通歌人の及ばない所がある。嘗つて宮内省の高崎正風が、杉宮内大輔より上人の和歌七首を示され、一見してこれは凡俗の歌よみの歌でない。これをよみし人かならず人傑であらうと激賞し、其人を尋ねんと匆卒其人の寺と名を問うて、縁山と泉山とを聞き誤り、はる／＼京都に尋ねても其人がなく、却つて東京の三縁山で此の活佛に出遇ひ、高崎が喜んだことが、上人自身の筆で「おかしき話」として其の隨筆に書かれてゐる。上人は高崎に見出さるゝまでは埋もれてゐたらしいが、爾來大いに名聲を發した。今左に上人の旅の歌一二を録す。

けふは野べあすは山邊と浮雲の行へもしらぬ旅衣かな

柴人もつりするあまも海山も見なれぬをのみ見る旅路かな

見なれさる旅寝の床に見なれたる人をしみれはうれしかりけり

醉 人 松 延 源 八

前掲の高僧から醉人の逸事を聴くを得たのも一奇である。其人の碑が寺門靜軒の撰文で私の住所附近の赤城明神の境内にあると云ふから、元旦の散策に態と尋ねて見たが遂に見當らなかつた行誠上人の松延源八に關する記事は左の如くである。

松延源八は水戸吉田の人なり、長崎に遊びて唐音を學びしとて、人によりて素讀をも唐音にて教へたり、書籍とては一冊もたざりき。講釋などおほかた暗記なりしとぞ。山野邊氏其人となりをきき、招きて大川町の邸にをかれ、長屋たまはりしかど、机一ツもたで、飯櫃を圓机と名づけて其上にて書を教へらる。書きたるもの風に飛び散るに困じて、疊の下に入れたるなどおかし、或冬鮭といへる魚を人のもとよりおこせけるに、これを作るべき庖丁、まないたもなければ、柱にかけしまゝにて、やがて、腰刀をぬきて、きりてくひけるとぞ、またしらみなど出來しにや、單物を釜の中に入れて煮けることもあり、殊の外酒好にていかなるものも酒にかへるより、同藩の者謀りて世話人を立て、俸祿をあづかりたり、入用のこととて酒の外なし、紙に酒一合と書いて世話人のもとにやれば一合の代りおこす、みづから徳利を袴の下にかくし買ひもてかへる、これにて足らぬ時は「又一合」と三字を書きてやる、かくすること日々なりけり云々

此人磊々落落生涯を醉中に送りし一奇人也、墓は傳通院中景久院にありと、酒客は訪ふて香華を捧ぐべし。

スケッチの狂歌

川端玉章が旅次船車の中で風景のスケッチを作る要訣として門人に示した狂歌は簡にして要を得てゐる。

杉は棒 松はうねりて 木の葉點 人家「へ」の字に 海山は線

藝術家の放屁

神佛に極度の敬虔を拂つた頃寺や宮の屋根の修繕に屋根師が屁を催しても、それを放つことが出來ず、態々梯子で下りてきたかどうか、川柳には確か皮肉の句があつた筈だが、今思ひ出せない。畫家などが佛畫をものする最中、屁を催してどうしたかと云ふに、平福百穂は其父の逸事として其間の消息を語つてゐる。親が畫室で無中になつて佛畫を書いて居る最中、時に室外に出てくることがある。何んの爲めに出るのかと思ふと椽先きに出て一發放つて衣服を振つて亦畫室に

入るとあるが、無邪氣の話の中におのづから無量の興味がある。

畫家の練金術

藝術家は東西共に貧乏と凡そ相場が極まつてゐるが、稀れには除外例がある。古るい洋畫家にルーベンスと云ふがあつた。鍊金家が貴君に鍊金の秘傳を教へてやらうかと云ふと、此畫家は「二十年も前であつたら教へて貰ひたかつた、實は私もとうに其の製造法を發明した」と云ふて畫室に散つてゐるキャンバスや繪の具やブラツシなどを指さし、「驚ろき給ふな私がこれ等に手を觸れると忽ち黄金となります」と云ふたとあるが、それほど此畫家は繁昌したと見える。これなどは藝術界稀れに聞く景氣のよい話である。

木堂の諧謔

犬養木堂は有名な皮肉屋で、惡罵を浴びせて人の怒を買つたこともあるが、滑稽の間に愛嬌があるので喜んだものもある。なか／＼機略縱横で、滅多に人に負なかつた。ある宴會席上、木堂は首席に坐して傲然としてゐると、席に周旋してゐた藝妓の中に奇抜な妓がゐた。木堂に酒をす

ゝめながら、先生私に何か書いて下さいと云ふと木堂は快く諾した。妓は別室に退いて内々脱ぎ去つて携へて出て來たのは、ぬく／＼のさめない腰巻であつた。流石にそこは木堂だ、敢て苦面を作らず小言も云はず、平然筆を揮つて「觸處生春」の四大字を書いた。一座は之を見て妙と稱した。妓も何等か思惑があつてやつたことであらうに、木堂が其裏を搔いたので、顔負して満座に冷かされた。

節分の歎

二月の二日節分の前奏曲として福内鬼外を放送し、歸路自動車内で行く／＼感じた。節分の豆蒔などの興味は全く青春時代にある。あの老若男女が無心にキヤツ／＼と騒ぐ賑はひは、老境に入つては唯だ夢裡の想像に過なくなつた。全體節分の行事は家族の少ない狭い家庭にやつては興味がない。行事が賑はないからだ。自分が田舎に居た小兒時代の事を想ふと、家も廣かつた。家族と仕用人をも併せると通例三十人位家に居つた。家庭の規模が此位であると、節分の豆蒔もや甲斐があつた。母屋から隱宅婢僕の部屋／＼まで隈なく蒔と相當に時間もかゝつた。此夕べはどんな秘密の處へも年男は立入る権利があつたので、下婢などをいやがらせた。此夜は自然無禮

丙 講の態であつたので、男女は入り亂れて豆拾ひに喧噪を極め、終りの果てに年男を擁して胴あげをやつた。これがまた莫迦に陽氣なもので一家沸が如き騒ぎとなるが、平生憎まれてゐる番頭などが年男となると、胴上に托して落さるゝこともあつた。自分の家の家例として此夕べは一同に酒を饗したが、此氣節はまだ雪の深い時であるのに、家の中では時ならぬ春氣分が漲つて、小兒ながら自分は愉快を感じたが、今はどうかと云ふと、相變らず豆を蒔くけれども、一家寂寞たるもので、眞に今昔の感に堪へない。偶々也有翁の節分賦を讀んで見ると、翁も年老てからの追儼には興味がないと歎じ、此老ぼれを鬼と共に外へ掃き出さないのは、せめての幸だと云うてゐるが、私も翁と同感同歎を禁じ得ない。

江戸兒の任俠

私が青年時代或る江戸兒から聽いて今尙記憶にあるのは左の一話である。江戸には諸藩の屋敷があつて、召抱へられてゐる面々は外出しても門限には必ず歸らねばならぬ規則もあつた。邸内のある奉公人が外出中、久方振りて懇意の仲間に出會つた。珍らしがつて互ひに立話をしてゐる内に、門限の時が迫つたので、屋敷ものが云ふには、どこかへ行つて一杯やりたいが、門限があ

つて遺憾ながらそれが出来ない。ア、困つたと云ふて一杯飲んだ積りでセメテも言ひながら、今しがた買つて手に下げてゐた陶器を惜し氣もなく地上に抛つて粉微塵にし、それを心よげに見てこれで氣がヤツト濟んだと云ふて別れた。と、この話は卒然考へると、江戸兒が人前に見えを張つたに過ぎないやうに見へるが實はなか／＼複雑な原因からコンナ妙な氣前が生ずるのである。江戸兒は封建時代の環境で任俠的の氣前も自然養成せられ犠牲的精神もどうかすると閃くが以上の挿話なども其の一端であらう。しかし江戸兒の氣前の淵源を尋ねると、随分古い時代にまで溯らねばならぬと我は此頃平泉澄氏の「中世紀の精神生活」を讀んで感じた。その中に「源平盛衰記」を引き奇抜な送別會の記事のあるのに注意を惹くと共に、江戸兒氣性の淵源も古るいものだと感じた。盛衰記の記事は日吉神社の祭に關係武士成田兵衛爲成が不都合があつた廉で伊賀へ流罪に處せられることになり、其別れを悲んで同僚共がある人の家に集つて送別會を開いた。席上段々酔が廻ると、

甲が「兵衛殿田舎へ御下向に御肴に進すべき物なし、便宜よく、之こそ候へ」としてモト、リを切つて抛り出した。つゞいて

乙「穴面白やあれに劣くべきか」

とて耳を切つて投げ出す者が出、はては

「大事の財惜しからず、大事の財には命に過ぎたる者あるまじ、之を肴に」

とて腹かき切つて臥した男さへあらはれた。そこで成田兵衛も

「穴ゆゝしの肴ともや、歸り上つて又酒飲む事も有り難し、爲成も肴出さん」

とて自害した。こゝに家主の男これを見て、我一人生き残らば、六波羅へ召出され安穩なるまじと思ひ、家に火をかけ、炎の中に飛入つて自殺した。

以上の如き事實が果してあつたかどうか知らないが、あの頃の氣風の一端は如實に描かれてゐると見てよからう。斯る士氣が徳川期になつても侍は勿論町人の血にも浸潤して、俠客の如きものを出したのは決して偶然とは思へない。

田中正平博士の料理

前月石川千代松博士の追悼會のあつた時四五の同窓が落ち合つた。其中に田中館田中二博士もゐた。食卓では坐が隣接してゐたので、勝手な話が出来た。田中館博士がメートルをあげて、外國の下宿で主婦の老婆に惚れられた自白もおかしかつたが、田中博士の料理談にも頤オトガヒを解いた。

田中博士は誰れも知る通り帝大を卒業すると洋行して十三年も伯林にゐて、音樂の大發明をやつたが、此十三年間は随分つらかつたと語り、毎日の西洋料理にも飽き果て、時には日本料理を自分で試みた。或る時某日本の大官が公使館に見えた際、日本食を饗應することになつて、自分が其料理番をつとめることになつた。其時の料理は鰻の蒲焼で、實は自分に荷が重過ぎたが、どうやらお茶を濁して田中は料理が上手だと評判された。其後外國の某紳士夫妻を吾公使館に招いた時も、客から特に蒲焼の注文が出たので亦自分（田中）が腕を揮ふことになつた。自分は臺所でぬらぐらの鰻を俎上に載せ、眼に釘を打つて、いざ刀を以つて肉を平ざかんとする時、自分の背後に突如悲鳴が起つたので驚いて振り向くと、紳士の婦人が見物に来てゐて、眼に釘を打つたのを見て驚ろいたのであることが知れたが、此の夫人は後に「田中と云ふ人は文化的の人だと聞いてゐたのに案外野蠻だ」と人に語つたと聞き一笑したと語つた。尙ほ同博士の話しに新年に際して餅が喰ひたくなる、在外日本人が公使館でいろ／＼相談したが何分其頃は餅米は愚か、米と云へば南京米の外には手に入らず、やつとのことに日本米を手に入れたが、さて之を搗くに臼も杵も無く、銘々が手で鍊チりつぶして、怪しげな餅を作つたことがあると云ふ話も出た。

石川博士と猿

前項と同じ席上林權助氏の石川博士に對する追憶談は簡潔で頗る要を得た。流石に外交家はうまい。林氏曰く

私が外國に大使をしてゐた頃、石川君は訪ねて來られた。その時相携へて散策し動物園に遊び猿の居る檻外に立つと、猿は自分に對し頗る不遜の態度であつたが、石川君が現はれると急に其の様子が改まり、宛がら故人にでも會したかのやうに、親しみのある態度になつたのには自分も感心させられた。

選舉 三 要

戯れに選舉の要訣を説くものがある。一に曰く「カバン」二に曰く「地バン」三に曰く「カバン」(看板)と。如何さまよく擧げた。逐鹿の勝敗は全く繫つて此の三訣にあるのだ。中にも勝敗の決を握るものは第一とす。なぜなれば投票の兌換券は此中にあるからだ。

未來の鳥魚戰

靈知靈能の人間が鳥や魚を學んで出藍の名を博さんとし、鳥の眞似だけは既に成功し、其の飛翔の安全と速力の迅速は遙かに鳥を凌駕するに至つたが、魚を學ぶ潜水艦は未だ魚を凌ぐ迄には成功しない。何分艦内が窮屈でもあり、陰鬱でもあるので、西洋人の如き長幹肥滿の人間は之れを厭うてゐるに反し、日本人は身體が矮軀であるのみならず屈伸自在の手足を有し、魚を學ぶに適してゐるので、西洋では嫉んでしきりに妨碍を加へんとし、いつの軍縮會議でも彼等は潜水艦の廢止を主張してゐるが、これも其内には出藍的に魚の眞似に成功し、魚の如く方向を誤らずに進退し、縦横自在に游弋して勝手に浮き沈み、機械の操縦でどんなに早くも走らせ得るやうにならないと誰れが言ひ得よう。飛行機だとして其の成功を収めたのはつい大戦後の事で、工風に工風を積めば彼が如くなるではないか。魚を學んでの成功も恐らく今後二三十年を待たないであらう。達觀すれば今後の戦争は鳥魚の戦争で海洋に浮ぶ艦艦は案外力を失ふことになるであらう。日本が今後極力心血を注ぐべきは魚に倣ふことであらう。

鄙俗の藝術

何事も熟すれば人間業を離れて神に入るとも云ひ得る。丸ビル附近で毎度見るが蕎麥を運ぶさまが、いつも吾等をして佇立せしめる。一枚の盆に二十箱程のへぎを載せ其の頂點に汁の徳利を三つ四つ積んで毫も危なげなく安々と運ぶさまは正に一種の藝術である。又或る喫茶店で感心したのは、皿洗ひの敏速で且つ巧みであることである。五六枚のコーヒー皿を湯壺から掴み出し、それを幾枚も重ねて指に挿み、順次に布巾で拭き清よめる事の早さ、看る／＼二三十枚の皿を綺麗に拭き終つた。新宿の某菓子屋の店頭で飴を切つてゐる家がある。繩のやうに長く伸べた飴を庖丁で切る事の早さ、おのづから拍子があつて、手中に尺度があるかのやうに、切られた飴に大小の不同がない。往年北海道のビール會社に香氣を敏感する一婦人がゐた。幾百本の空ビンの集まつてゐる所に臨み、普通は一々ピンを取つて石油などの悪臭のあるのを取りのけるのだが、此の婦人は其場に臨むと、どれかれと指摘すれば百中するので頗る調法がられてゐた。又鮫を握ることにも巧拙があつて、江戸兒は鮫は氣で握つて氣で喰ふものだなど云うてゐるが、此握りに熟するには相當の修業を要する。然るに此道の天才とも云ふべき少年が三原橋の某鮫屋に居り、食

通は後生恐るべしと云うてゐる。

可笑味

藝人などが滑稽を弄して人の笑を博せんとする時、先づ自から笑ふものがあるが、それは却つて可笑味を殺ぐことになる。拙な落語家や駈け出し未熟のものが此失を免かれない。演説や講演などする人でも、不慣れの人は、をかしまのあることを云ふ前に、豫じめそれを匂はせることが往々にしてある。此期待があるから愈々面白い話となつても其割合に興味を惹かない。狂歌や俳句などでも初句に「をかしさは」とあるのがある。これなどは全くの贅句で、をかしさはと斷はらずとも、をかしさを十七字で言ひ現はせばよいのである。内容を説明する語を前置するなどは拙の尤も甚だしいものと云はねばなるまい。僅か十七字の内五字をば斯く無益に遣ふなどは、愚の骨頂で丁度おかし味ある話をする前に豫告をする初心の講演者と同一般である。

不合理の詩材

科學が進んでくると詩なども合理的になつてくるのは自然の勢であるが、詩の材料は必ずしも

丙 科學的であらねばならぬとも思へない。非科學的でも詩的であれば採つてよいものがいくらもある。例へば蚯蚓が聲あるものとされてゐることや、腐草が螢と化すると考へられたりすることや雀が海中に入つて蛤となると考へられたりすることなどは、今日でも因襲的に俳人に慣用されてゐる。それは不合理ではあるが、宛がら月に聲ありとすることく、詩的であるから許さるべきであらう。

紅 霞

自分の書齋を兼ねた座敷の入口に紅霞山房の四字額をかけて居る。これは故人となつた濱村藏六が揮毫した篆字額である。私の平生を知る或人が訪ひ來つた時、此額を見て如何さまこれは酒客の看板だと云ふから、おかしなことを云ふと聞き咎めた所、紅霞は酒の異名だと云ふたので、自分も始めて之れを知つた。實は紅霞は印の異名であるので、自分が印を多く蒐集した際、それを堂號にしたのであるが、酒にも通ずる名であれば尚ほ更らよしと自分は一笑した。

線 美

同じく線であつて味のあるのと無いのがある。味のあるのが藝術線で否らざるのが凡線である。轆轤で作つた器物は立派な圓形だが、整形ではあるがウマ味が無い。名人が轆轤を藉らず、手づくねで作つた器物は整形ではないが、其の線に何んとも云ひ難い味がある。畢竟線に作家の精神が打ち込んであるからそれが生きてゐる。作家はある時の感興で或る線を作り出すので、之れを再び繰り返す事の出来ない線である。茶人の重んずる線は斯様なものである。我邦では書に於ても畫に於ても線が藝術的のものとしてされてゐる。乃ち平假名などは線のさまざまの姿を現はしたもので、そのすら／＼と連なるさま、其の墨色の或は濃く、或は淡く、字が或は大きく或は小さく、長く短かく錯綜の間に趣をなす所に線の趣がある。道風や貫之や公任や行成の作る線が何故持囃されるかと云へばそれは藝術的であるからである。僅かに一本の線、豎にしる、横にしるそれを引くだけで筆者の巧拙が判ぜらるゝと云ふ迄に、線が生きてゐるのだ。繪畫界でよく聞くことだが、「あの人はよい線の持主だ」など云ふ、これは外國には無いことである。日本畫の根本は線にあるので、線が軟かで無ければ哥鷹の美人繪が出来ない。線のウマ味が畫の七八分の成功を収めるものである。渡邊華山の線は強烈なもので多くの畫家が模倣を試みて、いつも其の及ばないことに驚歎する。兎角西洋の線は機械的で亦幾何學的であるから整正はあつても、ウマ味

がない。骨ボクつて肉がない、膩氣が缺けてシナやかさが無い。グレースフルの處がないのが西洋の線の缺點であらう。我邦の能や舞踊が、西洋のに較べて情緒のあるのも、必竟線が藝術的であるからのことだ。

俳人の洋行

俳人高濱虚子が外國へ漫遊するので出發前のラヂオ放送を聴くと、我邦の俳句は日本特有のものであることを、自から外國の物に接し、又外國詩人の作にも觸れて感得したい爲めとあつて：現在外國に行はれてゐる短詩形のもを日本俳句だなど云うてゐるが抵ね然らずと評した。外國では我邦の如く四季さまざまの氣候がなく、亦その折々の風物や禽蟲もないから、季節をあらはす詩を作ること出来ないと云ふた。虚子がどんな研究を遂げて歸るか他日に徴する外無いが萬里の天涯で日本俳句を宣傳することも一興であらう。尾崎紅葉などは獨乙に巖谷小波が出かけてゐた時、しきりに滞獨中俳諧で大氣焔を揚げよと勧め、吾れ若し外國に在らば到る處大理石の句碑を建て芭蕉に倣ふべきにと云うたが、それは空威張であつた。今度の虚子の行には、大理石の句碑を建すとも、初めて外國詩人に日本俳諧の眞味を理解せしめて歸つて貰いたいと冀望する。

る。

風月の領有權

「好風景の處に俗僧多し」と云ふは廣瀨旭莊の句だが、よく實際を穿つてゐる、大概寺は絶景の處にあるが、僧達の風流氣が微塵もなく、絶景區に居りながら無神經に日を送り、アタラ絶景を閑却してゐる。然るに却つて百里笥を曳いて此の區を訪ふものが多く、絶景もそれが爲め徒爾でない。エマーソンの語であつたか、「風景を眞に愛するものが其風景區の所有者である」と云ふたが、如何にも風景區は往訪の觀賞客の領土であると言ふ方が本當であらう。愛の無い所に實は眞の領有は無い。寺に限らず多くの風景區はすべて觀賞客の共有である。風月に對する領有權は愛する者が掌握するので、必らずしも登記の手續を要するものでない。昔し支那の著名な文人は、名畫を購はんとして其價を拂ふことが出来ず、詩を賦して愛惜の情を寄せ、それで領有を満たした心地となりて喜んだものがある。風景に對する領有も亦これと同様である。

修 驗 祭

我邦の交通歴史を考へる時に、吾等はいつも佛僧が深山峻嶺を平地の如く往來したことや、寺を建るに未拓の地を搜がしたことや、道なき所に道をつけ、橋なき所に橋を架した勞苦に想ひ到らざるを得ない。僧侶の内にも山伏と唱へるものが、殊に山野開拓、道路開通に功があつたと云はれ、其の代表者として役小角ヤクカクがいつもうたはれるが、小角は實際山嶽開拓者であるけれども、山伏の創祖ではない。小角の事蹟が顯著であるため之れを創祖と考へるものもあるやうだ。全體此の宗教は普通修驗道と云はれ、或る雜宗と稱せられてゐるが、如何にも雜駁のもので、密教の思想が取り入れてある外に、我國固有の神祇信仰支那の道教思想が打混じたもので、全く日本に創造された新宗教である。此の宗教はよく日本の好尚に應ずるやうに工風されたとも云ひ得る。其の雜駁であるのも畢竟日本にアダプトするやうにしたからでもあらう。日本は山國であるから山嶽思想がある。山嶽に親しむ考もあり又山嶽を神聖視もする。俗界に超越した無上の清淨地は山嶽と信ぜられ、神佛の爲めの好適地とされ、支那の神仙思想も参加し、深山幽谷に仙人が居ると信ぜられ峻山高嶺道なき所を行くのが心身の鍛鍊の法とされ、飛瀑に打たる、荒行を始め、猛獸と闘ひ、雷雨を凌ぐことが心身を鍊ることに利用された。末世の僧侶が聞くだけでも戰慄するほどのことを實踐躬行したので、信仰を一般に博したのも無理はない。彼等の山中生活は仙人の

如く身體を枯らし其の動作を鳥の如く軽くしたので、天狗の俗説を生ずるに至つた。彼等は剛健である上に武装もした、これは戰國時代の僧兵を思ひ出さしめるが、山中に野宿し猛獸を防ぐには斯る武装も必要であつた。此の心身共に超人に近かいものが山野跋涉を事としたので左なくば後世までも拓けずに残つたであらうものが拓けた。これを思ふと今日登山を遊戯としてゐるものは、先輩の勞苦に思ひ到り、修驗者の爲めに盛んな祭典を行ふことがあつてもよいと思ふ。未だ斯る企てを聞かないから、私は之を提唱する。

喜怒を鐘に托す

私は鐘聲に興味を感じて聊か書いたこともあるが、西洋の鐘で興味のあることがないかと、考へてゐる内、モーパッサンの短篇小説を読んで、僅かに一つを得た。佛蘭西が塙軍の爲め敗れ或る地點が敵の爲めに占領されて、その地にある佛國の教會の禮拜堂が鐘を鳴らさなくなつた。それが不便でもあるので、占領軍が種々鐘を鳴らせと交渉したが何んとしても應じなかつた。然るに占領車の士官が、徒然を慰める爲めある夜佛の娼婦數名を召して酒宴を斡旋させた時一人の士官が粗暴の言動をなしたことが娼婦の敵愾心を鼓舞して士官が刺殺され、其の娼婦は遁れて身を

丙 教會に隠したが、占領軍は怒つて百方搜索したけれども、其女を捕へ得なかつた。扱て刺された
子 士官の遺骸を教會で葬るにつき、若し此場合に於ても教會が鐘を鳴らすことを拒むに於ては、そ
雜 れを理由として禮拜堂を破壊すべしと内々意を決して葬儀を營むと、教會では注文を待たず盛ん
に鐘を打鳴らしたと云ふのが此短篇小説の筋である。面白い筋と云ふでもないが、彈壓下にあつ
て悶々の情に堪へない佛蘭西僧が、鐘を藉りて喜怒の情を漏した所に興味がある。即ち前に鐘を
鳴さなかつたのは憤怨の表徴で後に鳴らしたのは敵の不幸を慶んだのであるが、私は此の皮肉の
脚色を面白く感じた。因みに遁れた娼婦は鐘樓の中に潜み、亂平らぎ無事で舊處に歸つたが、此
の愛國行爲が評判となつて或る愛國者の妻となつたと云ふ。

柳北翁の碑に對して

伊豆の熱海には種々の記念碑が建つてゐるが、成島柳北翁を記念する何物もない。實は熱海の
蒙昧期に好んで彼地に遊び、其都度新聞や雜誌に此地の風光美や温泉美を宣傳した人は翁其人で
熱海開創の第一の恩人は此人であるのに、今は全く忘れられてゐる。翁が熱海に遊ぶ毎に宿つた
旅舎は今の聚樂で、其頃は前代の樋口屋であつた。自分も長い間此旅舎が定宿であるので時々翁

を憶ひ出し、或る時坪内逍遙氏と話次柳北の爲め切めて此の旅舎の庭内に一小碑を建て、柳北を
紀念してはと目論んだこともあつた。それは十數年前のことであつたが、昨年逍遙君が重患に罹
つてゐた際、偶然吾等同人が十數人聚樂に會し、席上私から一同の賛成を得て建碑を發起すると
最も喜んだのは聚樂の主人で、聚樂が何もかも擔當して工事はズン／＼進み、茲に建碑の功を竣
つたのは、昨年十二月で、吾等發起人は三月廿二日除幕の式に臨んだ。碑は逍遙君と嘗て語り合
つた案に基づき、碑の上部に翁の面貌を刻し、其下に拙筆で「成島柳北翁」の五字を署し、背面
には翁の熱海の詠歌を刻した。出來て見れば案外堂々たる趣があり、聚樂の庭内に一風致を添へ
た。私は除幕の當日同人と共に榊を献じて坐ろに感懐に堪へず、これまで嘗つて考へたこともな
いことをフト考へて同人に語つたのは隨筆家としての柳北翁であつた。翁は才筆を以つて當時に
鳴つたが、明治初年に於ける隨筆家は何んと云ふても此人を第一に推さざるを得ない。當時大新
聞の間に伍して朝野新聞を重からしめたものは、末廣鐵腸の社論よりも翁の毎日の短篇漫筆であ
つた。あの人は硬軟あらゆる文體をよくし、溫藉の間に諷刺を寓して常に世を警醒したので、柳
北の戯文は一世を風靡する概があつた。翁の著述は曰く柳橋新誌、曰く京猫一斑、共に漢文體の
戯文で吾等は漫然當時之れを愛讀したが、實は皆隨筆に外ならない。翁が毎日新聞に書いた漫言

丙も隨筆であるし、人の爲めに書いた多くの文も亦隨筆とすべきものである。そして尤も隨筆の體を備へた大部のものは花月新誌で、これは雜誌として刊行されたものだが、翁の詩でも和歌でも紀行でも翁の交友の詩文でも皆これに收めてあつて、事實翁の隨筆と見るべきものである。當時堅くるしい漢文系の文章家はいろ／＼あつたが、艶麗にして而かも氣品を保ち、大衆に投ずる文章はと云へば翁が專賣であつた。翁は確かに明治初期の第一の隨筆家であつたことを今シミ／＼と感ずる。自分などは、翁に私淑して隨筆を書き出したのでは萬々ないのだが氣が付いて見ると翁は隨筆家としても吾等の先輩で、あらゆる點に於て翁に及ばないことを愧ぢざるを得ないと云ふのが當日碑に對しての私の所感であつた。此碑が成つて遺憾に思つたのは、折角逍遙君の案に従つて出來た此碑を君が見ることもなく鬼籍に入つたことである。

良妻

西洋の諺に「無妻に次いで良妻」と云ふのがある。これは言ひ換へれば、無妻の方がよい、強て妻を持つてと云はゞ良妻を持ちたいと云ふので、随分苦しい言ひ草で、人事の尤も大切とする結婚を否認せんとしてゐる。これに依つて西洋人が如何に細君に困つてゐるかが想像される。全

體良妻はどんなものか、ある人は云く、妻は愚なるに限る、愚妻こそ良妻であると。これも激する所があつて云ふことで、愚は良妻の條件でない。賢であつても良妻なるを失はない。良人をよく理解し良人と琴瑟和するものであれば、賢妻こそ良妻であるが、兎角賢妻は良人を蔑視したり貞淑を無視したりして己れの能を誇つて、跋扈跳梁、仕末にゆかない所から、寧ろ妻なきに若かずの歎聲を發せしめてゐる。我國にも賢妻型と云ふ一種の婦人があつて良妻たる素質を缺いてゐるものがある。警戒しないと、西洋の諺が日本にも至言とさるゝやうにならう。

川柳の碑

觀櫻がてら墨堤に散策し三圍社の境内に入つて見ると六世川柳の句碑がある。それには「つまらぬといふはちいさな智慧袋」の句が刻してある。これは川柳の辭世であるかどうかとも知らない。亦三圍に因んだ句とも思れない。卒然讀むと、川柳式の竦味もなく、一向つまらない凡作でなぜ此句を刻したかと怪しまれるが、再考するとなか／＼含蓄がある。世の中の種々相を無意識に看過すると、何もかもつまらんやうだが、智眼をもつてこれを見ると、何もかもおもしろい。川柳氏などは世間が看過して一向頓着しないことを取り上げて常にそれを詩材とする。そこに本

領があるのだ。斯う考へると此句は決して平凡でなく、よく其の本領を道破したとも思へる。

日 誌

私は長い間日誌を書く習慣があつて、若い頃から今日まで續いてゐる。何んの用にもたゞないが習慣となると廢することが出来ない。但し始終一定の冊子を日誌に使用し來たつたから、世間に作られてゐる當世風の日誌を曾て遣つたこともなく、亦それを氣にとめて見た事も無かつたが或る日の書物漁りに書肆の店頭で堆積してゐる日誌を見て愕然とした。それは種類の如何にも多いことで、曾ては博文館の日誌がよく賣れるなど聞いたこともあつたが、其頃の日誌の構造は一應調法に出來てゐたに過なかつたのが、今はあらゆる方面に應ずるそれ〴〵の日誌が出來てゐて記入の諸欄もそれ〴〵工夫されてゐる。これ等を一々擧げるとは煩瑣に堪へないが、一二念入の工作のものを擧げると、日誌を書く前に、要件を先づメモに略記する要ありとし、切取りの出來るメモの添つたものがある。又今日と昨年の今日とを比較したのがあり、甚しきは三ヶ年間の毎日と比較したのさへある。尙ほ驚き入つたのは、日誌に錠を装置したもの、あるのを認めた。すべて工夫に工夫を重ね、調法がられる新案のあるだけを腦漿を絞つた結果は、驚くべき發展を

見る。日誌を書く習慣が各方面に起りつゝある反映かと思ふと喜ばしくも感じたが、實は自分の實驗から云ふと、多くの日誌に工夫された工作が寧ろ繁に失して却つて使用に不便であるかに思はれた。いくら調法からと案じた特定の諸欄も實地に於ては常に閑却され、何も書かずに仕舞ふのが常であるから、諸欄で紙幅を狭ばめるよりも紙幅に餘地の多いのを寧ろ可とする。自由日記など云ふのは繁瑣な諸欄を置かず、勝手に書かせる趣向で何んの工夫もないものだが、實際の用はこれに限る。實は多くの日誌は意匠倒れをしてゐるやうに思ふ。尤も或る特種の學藝的其他専門的の日誌におよそ必要の書込欄の置かれてゐるのは除外である。昔しは日記に野紙を忌んだことすらある。野があると見取り圖が書けないから、畫の書ける人の日誌例へば渡邊華山のなどは無界の薄葉を用ひた。斯やうなことを思ひ合はせると、複雑なものにはよくない。餘りに複雑であると、さなきだに筆無性の人達は、折角志した日誌をつける氣が挫かれるから、日誌を書くことを奨励のためにも餘りに工作を弄することが却つて目的に反する。

畫 幅 の 格 好

近來の畫家が展覽會などに出す作品を見ると、在來の型を破り、額にするとも幅にするとも豫

定を立てず、衝立か神社の繪馬額でもあるかのやうな恰好のものを書く。概して豎が短かく、横が廣く、段々正方形に近くなりつゝある。こんな形の作品を現在の日本家屋に入れてどう取扱ふべきか宛がら西洋畫を贈られて仕末に窮するごとき觀があるが、これは畫家に云はせると自由に書いて都合のよい形だと云ふてゐる。平福百穂の竹窓小話に云く、

(前略) かくの如き方形が作られる様になつた理由は、もとより一樣ではない。西洋畫が方形の畫面を採用してゐるといふことも、日本畫の方形になるために直接の影響があるであらう。

又畫面が非常に大きくなると畫面の形は自然に方形に近くなる。しかしその重なる理由は、畫面が著しく寫生的になつたことである。自然に對して寫生的な態度で、自然の一部を截り取つて之を畫面にまとめる事になると、方形は尤も便宜な形である。もしその幅が上下に長いと畫面に餘白が多くなつて、それを埋めるにはどこかに無理が出来る。この畫面の束縛を脱して自由な自然形を其儘に畫面にするには、方形或はそれに近い形が最も便宜であると。

按ふに徳川期の化政度并其以後所謂行燈形アジドの書幅が行はれた。これは方形とは云へないが、上部を切りつめたものである。この形が書畫界に嫌はれたことも久しいが、それよりも更らに切りつめたものが畫家に喜ばるゝやうになつたのは家屋の裝具たることを全く度外に措いた仕打とで

も云ふべきか。全體畫幅の形は頗る區々で、茶人風の幅は茶室の床が小さいのと斷簡零紙などを表装するので幅の形が自然小さい。尙ほ又床に卓置き花瓶や香爐を其上に置く所から、横幅が茶室に多く用ひられた。南畫を喜ぶやうになつてから長條幅が行はれ、幅が狭い割合に豎の長いのが恰好がよいと、今も書畫屋は幾パーセントか多くの價を附するが、これも其内に變ずるであらう。現に南畫も漸やく餘白の多いのに困んでゐるかの觀がある。しかし山水を描くに餘白をのこさず書き埋めてゐるのは面白い工夫で西洋畫にない意匠である、これに就て百穂は云く、

東洋の畫面が正方形でなく、著しく長幅であつたり、横卷であつたりするのは、それだけの理由がある。東洋の山水畫にその中に住み且つ觀る心持で畫くやうにといふことは、既に宋代から注意されてゐる。自然と遊觀する心持で、山水畫を描くことになると、西洋の風景畫のやうに、一畫面一視點のものとならずに、その視點は畫面中を道に沿ひ或は川に沿つて動き行く筈である。視點がかくの如く動いて自然を誘ふならば畫面は上下に長くなるか左右に長くなるかするであらう云々。

一畫面一視點の西洋畫が果して畫中の視點の動く東洋畫に優るかどうかは研究を要することだが、視點の畫中に動くのは南畫の心髓の繋る所で、一概に之を排することは出来ない。南畫に

丙 丙 丙 丙
あらずとも日本畫に多くの餘白を存じ、背景を觀者の想像に委する點も寫實主義の爲めに破壊されてはならんと思ふ。

園 丁

自分は前年郊外に幾許の地を購うた時、そこに自分流義で庭を作つて見ようと無謀な考を起し、有り合せの樹木でいろ／＼試みたが、逆も思ふやうに行かないので、さて／＼作庭はむづかしいものと感じた。今の宅を定めてから年に二度は必ず園丁が松などの手入にやつてくる。その時多少庭の模様替をやることもあるが、園丁は斯道に修養があるだけに、到底自分は及ばないと感じたとき云へば、それは當然過ぎるほど當然だと人は笑うだらうが、實は多少腦中描く所があるので、それを如實に行はんとすると、一木一石と雖も自分の意の如くならないのは如何にも情けない。そこで園丁に相談をかける。彼等には即座にチャント案があつて、確かに自分の胸中の案よりも優つてゐるので、自分はこれから園丁に聊か敬意を拂ふことになつた。通例どこの家でも園丁が他の勞働者に較べて頻々と休憩するのに苦情があるが、實は園丁は必らずしも逸を貪つてゐるのではなく、其の喫烟しながら椽に憑つて庭を眺める時が彼等の思構を練りつゝある時だ。

例へば一石をすえるにも、どこに置くべきか、如何なる向に石の面をあらはすべき敷等この休憩しつゝある間に多くは決するので、必ずしもヅルケて時を偷むのではない。すべて精神的の工風を要する勞働には多少考量の餘地が無ければならぬ。作庭も實は畫を作ると一般、一枝をおろすにも樹の風姿如何と案じねばならんから、彼等が時に憩うて烟を吹くのは畫家の筆を握つて案ずるのと一般であることに思ひ到ると、彼等に多少の敬意を拂ふことが當然であるやうに思ふ。

慢 心

慢心ほど人の惡徳はない。諺に高慢の花は惡魔の庭に咲くとあるが、如何にも好箴である。全體慢心は利巧の人に少なく、慢心家は大概愚物である。馬鹿と高慢は同根より生ずと云ふが、如何さま兄弟分であらう。或は云く自慢は馬鹿の行どまりで、展開のしようがない。段々自慢が募つてくると死滅が近い。蟻などは羽が生えると其姿は豪勢だが間もなく死ぬではないか。老子は言うた、自から矜らず故に長ずと。矜るものには進歩がない。見ずや稻の實の満ちたるは頭を低く下げ、實なきは昂然頭を擡げ居るにあらずや。古へより慢心は戒められてゐるが、實は自家の

慢心を自身知らない人が多い。自分の缺點を棚へ上げて他人の高慢を指弾する人がある。それも道理、自家の慢氣を知るは、暗夜黒地の上を走る蟻を見るよりも難いと哲人が言ふたが洵に至言である。

和歌漫涉

大隈言道の歌に「はきだめの塵の下なる芋すらも子は親にこそつきてありけれ」とあるのは人の注意を逸する物を捉へた所に慧眼もあるが、倫常の至理を寓した所に味がある。加賀の千代の句に「手になりし垣根を倒す瓢かな」とあるは恩を仇で返すやうにも解されるが、生育の力の大なる青年の後世恐るべき意を寓したものと解し得らる。我邦の道歌は卑俗と露骨に失するので、歌人に忌まれるが此二首などは立派な道歌で、教訓を寓しながら卑俗に陥らない所に妙がある。川柳子は云く「俗名で呼ばば薬種は安くなり」と、豈啻薬種のみならんや。普通誰れでも口にすることを羅旬語で云へば、警語だと傾聴するが、およそ羅旬の死語を使ふ者は大馬鹿である。西洋でも羅旬語を知らない内はまだ馬鹿でもないと思してゐる。我國で先生と呼ばれる程の馬鹿でないと同一意である。

學名

學者が或る種の發明をすると、其學者の名を發明品の名とすることが學界の通例となつてゐる。これは發明者の名譽を表彰するもので、學者に與ふる勳章に齊しいものである。されば幾つも〜或る學者の名で呼ばるゝものがあるほど其の學者の名譽となる譯だが、此の名の附け親に由つて名譽に等級がある。若し學界の大家が名づけ親であれば其名譽も高いが、門下生などが名づけ親であれば輕んぜらるゝ。宛かも某大國の勳章が誇りとなるに反して、劣等國の勳章が恥辱になると一般で、學名につけ親が誰れかと一考する必要があるのは此の故である。偶々丘淺次郎博士の隨筆を讀んで見ると、博士が發見した種名に丘の名が附されてあるのが、七つあるさうだが、それが悉く世界の學界の大家が命じた名だとあつて、博士は左の如く云つてゐる。「種名に自分の名の附いて居ることを得意とする人があるならば、その人に對して、私は戯れに、僕のは悉く舶來の上等品ばかりで安つばい和製のものは一つも無いと云うてやる積りである」と。

銀座畫廊

去る四月中銀座に漫歩を試みると、商店のショーウ・ウキンドーに洋畫の額面が飾つてあつた。始めは何んの氣なしに見て歩るいたが、どここの商店の窓にも一枚若くは二三枚の額面があるので氣がつくと、文展に反對の洋畫家が展觀の處を得ず、銀座各商店の後援で斯くしたのであると分つた。斯る事は初めてのことである。一時の窮策から工夫したのであらうが、よい工夫であると思つた。飾り窓には種々の商品が置かれてあるから、そこに額面があれば商品も自から發揮する。額面にしても置かるべき所を得た趣がある。文展の會場などでは幾十枚も幾百枚も並べて其間に間隔もないから各個の畫が互ひに殺し合つて一向に發揮しないが、こゝは各店の窓を獨占して掲げるべき處に掲げてあつて互ひに冒すことがないから眞に額面の仕合である。私は銀座全部を畫廊とした處にも興味を感じた。

三圍の川柳

墨堤の三圍社に其角の祈雨の句があるために、川柳子は之を題として何百と云ふ句を詠じてゐ

るが、多くは其角をほめた句中には秀句もあるが、其角をあしざまに罵つた句はないかと尋ねて見ると、それが又少からずある。それも其苦、降雨の爲め迷惑したものから云へば、其角をあしざまに云ふのは道理であつて、川柳の本領は寧ろほめるよりもケナス方にある。

三圍の手柄小賣は二合さげ

米屋から云へば米價が二合下つたと云ふ苦情がある。

あのヅクニフが其角かと米屋共

かく米屋は其角を罵つてゐる。米屋ばかりでなく乞食と云ふ一群も喜ばない。

其角の句宿なしばかり悪くいひ

藏前方面の門弟子が減つたと云ふも皮肉である。

夕立に藏前の弟子五人減り

他に苦情あるものは瓦師や乾物を作る渡世のものなどである。

梅干や干瓢の邪魔其角する

梅よ干瓢よと中の郷大騒ぎ

飛んだ雨だと瓦師は困つてゐる

葉がくれ

此頃「鍋嶋論語」がまた世の中に賣り出されてゐる。此書は山本常朝の説を中心として、武士道の挿話を編した佐賀の「葉隠」である、葉隠の本書は佐賀言葉で書かれた讀みにくひものであるが、要點は湛念和尚の殿様名號に盡きてゐる。

武士たる者は忠と孝とを片荷にし、勇氣と慈悲とを片荷にして、二六時中、肩の割入る程荷なふてさへ居れば、侍は立つなり、朝夕の拜禮、行住起臥「殿様く」と唱ふべし、佛名眞言に少しも違はざるなり。

とは簡單ながら葉隠説をよく道破してゐる。鍋嶋侍の名號は殿様中心主義で、此主義は事に臨んで利害を顧みるを非とし、武士道は死にも狂ひでなければならぬと教へてゐる。言は甚だ奇矯の如くであるが、打算は勇を挫くものに相違ない。一圖に死にも狂ひたれ、決死の覺悟をもてと云ふのも勇を武士道の第一義とするからである。私は前號に江戸ツ兒の任俠の源を尋ねて源平盛衰記にある、侍の送別會のことを引いたが「葉隠」にも似寄りの左の挿話がある。

江戸で旗本四五人が夜會棋を打つてゐたが、一人が便所へ立つた。其後で口論が始まり、一人

が切られた時燈が消へた。便所からさきの男が馳出して「皆しづまつてくれ、何んでもないのだ、早く燈を」と言つた。再び燈がつき、人々は静まつた。と便所から出た男は、さつき人を切つた者の首をづばりと抜き打ちざまに切つて落した。あつと皆な驚ろいたが、下手人の言ふには「武運に見はなされた拙者、喧嘩の場になかつた爲に、臆病者といはれ切腹は極つてゐる。便所へ逃げたなど、云はれては辯解は出来ぬし、いづれにしても腹は切らねばならぬ場合だ獨り恥をかいて死ぬよりはと考へたから相手を殺したのだ」と言つた。

臆病と云はるゝことが如何に恥辱であつたかを物語る挿話であるが、此事は將軍の耳に入つてもお咎めがなかつたと附記されてゐる。

兩雄趣味の遭遇

外國の挿話で自分の喜ぶやうな趣味談はめつたに無いが、此の頃ある雜誌で見た一話が稀れに會心を感じしめた。それは米の前大統領ルーズヴェルトと英の故外相グレイ子爵との間に起つた趣味談である。ルーズヴェルトは大統領を罷めて、亞弗利加に獅子狩などをやつた漫遊の途次英國に立寄つて同國の小禽を見たいと、兼ねてより其の事を英國へ申込んだ所、當時外相であつた

グレイ子爵が案内者は別に物色するに及ばぬ、自分が案内するとあつた。實はグレイ外相は趣味の人で、釣の名人であることは隠れもないが、小禽に就ても専門家跣足の造詣が深かつた。子爵は自信があつて案内を引受けたが實はお客のルーズヴェルトにどれほどの鑑識があるかを判じ兼ねた。愈々ルーズヴェルトが英國へ渡ると、此お客は多忙中小禽研究を忘れず、一日約の如く、グレイ子が先導して或る田舎に出かけた。勿論一人の従者も伴はなかつた。グレイ子は途中内々お客に退屈を來しはせぬかと心配したが、追々鳥聲を聴くに及んでお客は直ちにその鳥が何んであるかを判じたのみならず、小鳥に就てはあらゆることを該博に知つてゐるのでグレイ子を驚かした。ルーズヴェルトは鳥の歌を聞くに不思議な耳の所有者で、三四の鳥が一緒に歌つてゐても、一々それを區別することが出来初めて知つた鳥でも其聲を聞くと過たず、二度目にそれが何んであるかを言ひ當る位敏捷であつた。尤もルーズヴェルトの耳を感服させたのはブラツクボルドと云ふ鳥でそれを大いに褒めた。この鳥は英國では左まで珍重しないものであるのに、歌がうまいと云うてこれに折紙をつけたのである。政界の兩雄が全く政治を離れて別天地に一日趣味の遊びをしたことは類例のない出来事で、兩人は歸途に水に浸つてゐる道路をツボンをまくり膝まで達する水を涉つたなどの椿事もあつたが、グレイ子が他日米國に赴いた時、ルーズヴェルトの

母校ハーバート大學に講演を請はれた時、此時の事を説いたとあるが、誠に興味ある兩雄の遭遇であつた。

馬琴の秘話

和田萬吉博士が精根を凝した里見八犬傳の評釋が漸やく刊行された。私は之れを翻譯中これまで知らざりし二件を知つた。其の一は馬琴が著述嫌ひであることを白狀したことで、和田博士は左の如く云ふてゐる。

(前略)彼は生來讀書を好んだけれども著述の嫌ひであるを白狀してゐる。彼の著作は單に糊口の料を得る手段に過ぎなかつたと云ふ。随つて知己に與へた書信には「いやながらも著述にかゝらねばならず」とか「綴らねば且暮に差支候」とかいふ歎きを隨處に發見する。殊に老來著作を倦むやうになつてからは、つくづく憂き味を啣つて、天保八年の殿村氏宛書簡に於て苦痛を訴へてゐる。

心のすゝまぬ折はせんかたなきものに御座候。かゝる折にも世渡りなれば捨置かたく、強て筆をとり候へば出來のわるきは勿論に候へども、内幕を知らぬ看客はゆるやかなる眼にて見てい

さゝかなる事もかれ是れといはるゝ事、さりとは思ひやりなき事と存候へども、世の人はかゝる事をしらで、いつもたのしみに著述に耽るならんと思はさるもの稀なればその筈の事に御座候

と言つてゐるが、剛情我慢の馬琴に此言をなさしめた苦痛の程も思ひ知られて一味の哀愁を覺える。

馬琴が失明に及んでも尙ほ八犬傳の筆を絶たず、嫁のお路を泣かしてまでも、口授筆録せしめて、遂に彼れが如き大部の著を完成したのは、糊口の爲め止むを得なかつたと考へるよりも、寧ろ之れを以つて大切な使命としたのではあるまいかと迄人を思はせたのであつたが、其赤裸の告白を聞けば、矢張彼れも人間であつた。彼れは如何に傲岸でも又如何に外面を粉飾してゐても糊口には遂に勝てなかつたのである。斯る内情は私信に依つてのみ知らるゝことで、今更ながら書簡の大切味を感ずる。

尙ほ自分の寡聞、これまで曾つて知らなかつた事が左の如く説かれてある。

(前略) 珍中の珍とすべきは「八犬傳」が一時絶版になつたといふ噂が喧傳された事である。勿論虚説であつたが、事の起りは或悪戯漢が御書付の偽物を拵へて、觸れ歩るゝ事によるので

あるが、是には流石の馬琴も驚いて、町奉行に其眞偽を問合せたりしてゐる。とこれも何かの手紙にでもある事實か、自分には初耳である。

濫 讀 の 弊

自分は老境に入つて時に書名はとくに熟知でありながら、讀んだことのない書物を求めて讀むことがある。又曾つて讀んだことのある書物を更らに讀み直すこともあるがそれは甚だ稀れで、兎角一旦讀んだものを再讀する氣になれないが、實は書物は何んによらず度々讀んで見るべきものだと感じた。と云ふのは、書物は同じでも自分の年輩や識見で全く書味が違ふ。青年期に向興を感じなかつたものが、老境に入つて同感を惹き起すことがあり、文章の巧拙や含蓄などを味ふ能力の無つた時には、匆卒に讀過して、名著とも覺えないものがある。さてそれを他日讀んで見て、妙味を感ずるやうなことが甚だ多い。實は青年時代の濫讀は讀書の一弊である。一讀を経ない書物は或る年輩になつて、披見もするが、一遍讀んだとなると兎角再讀を厭ふて、遂に其の書の眞味を知らずに仕舞ふから濫讀はすまじきものと感じた。話はチト違ふが、小中學で教師が生徒を引率して修學旅行に出かけ、史蹟などを訪ふことがあるが、生徒に豫備知識もな

く、何等有形のものゝ存じてゐない故蹟に、多少の説明をしたからと云うても稚童の頭脳には何等の感じも起らない。回顧趣味など云ふことは本來高級の思想に屬することだから、幼稚の兒童には過ぎたことで、何もわからない時分に名所故蹟などを濫りに喰ひ散らさしては、恰も少年時代に書物を濫讀すると一般、後の爲めに寧ろ害をなすとも言ひ得る。わかりもしないが一たび往訪したとなると、再歴を欲しないことに成り勝であるから、教員は此點注意を要すると思ふ。

森立之の事

人の家庭の裏面などは容易に知り難いことで、故人となると別して知り難く、往々想像を裏切るゝことが珍らしくない。森立之と云ふ人は福山藩の醫で、伊澤蘭軒や狩野掖齋とは深い關係があり、立之の筆蹟を見ると其の楷書は掖齋と見紛ふ位に書き行書は掖齋以上とも見らるゝことで、此人の遺書に就て其の校勘や書入を見ても學識のほども略々窺はれ、好書家であり鑑書家である。書誌學界に知れ渡つてゐる人であるが、其の人柄はと云ふと餘り知れて居らぬ。此の人の孫に當る婦人の語られたのを又聞きすると、立之が若い時藩の忌諱に觸れて流浪十六年に及んだと云ふが、其の原因は案外である。吉原の娼樓に娼婦と戯れてゐる際に、娼婦から椽下に衝き落

されたことが、藩に聞こえて失脚したのだと云はれてゐる。此の長い流浪の間に江戸付近の諸方に漂泊し或時は生活の爲め採り旅行をやつたこともあると云ふ。立之は美男子型の優男で、宛がら梨園の人の如くであつたのみならず、性來劇を好み自らも素人芝居をやつたと云ふが、どれほどの技倆があつたか、音曲丈は全く見込がなく、師匠に諭されて稽古を斷念したと傳へられてゐる。斷片的にコンナ事を聞いても、立之の人となりを想像してゐる多くの人の思惑を裏切るが、實は當時の世相を考へると、これ式のことには敢て案外とするに足らない。當時詩人として名のあつた、柏木如亭は吉原の竹枝で有名だが、あの人が私の郷國に來る途次梨園に伍して素人芝居を演じたことが、いつぞや見た彼の書簡に自白してあつた。狩野掖齋でさへ、ある時仁木彈正を扮して茶番をやつたと云はれてゐる。掖齋が津輕藩の江戸の留守居役を柳橋に招いた時、座に侍した妓が、田舎侍の主賓を袖にして、目を狩谷に屬したので取持役の狩谷が閉口したと云ふ艶聞も傳つてゐる。江戸末期の世相は通人才子を男子の誇りともしたから、ひとり森立之を難するに及ぶまい。立之の子約之も相當學才もあつたが、ひどいシマリ屋で、古い手拭ですら決して棄てることなく、簞笥一棹に満したと云ふから、他は推測に難くない。此人の妻は大槻家の女で、如電翁の姉に當る人だが、良人のシマリ屋に困らされ、良人が歿すると反動が然らしめたか大の

酒客となつて親族を困らしたと云ふ。此の婦人が大槻家の親族であつた爲めに、森家の遺書は皆大槻家に歸し幸ひに散佚を免かれた。今度それが安田文庫に歸したので其書目を見ると、立之や掖齋の貴重な書入本が少からずある。

頼山陽の微時

森立之の舊藏書目を翻閲中、フト眼に入つたものに、玄應音義校正と云ふ二冊の寫本に、頼山陽自筆と註してあることであつて、自分は不思議の感を抱いた。玄應音義は一切經音義であるが、山陽が斯る佛書を自寫したことがあるかと、其書物を取り出して貫つて一覽した。乾坤二卷の内乾卷の中ごろから坤卷全部が山陽の手寫に係るとして、卷尾に森約之の左の識語がある。

乾卷大智度論以下此全卷皆頼山陽子成昔在東都之日所賃書者豈可不寶藏乎 約之誌

私は靜かに翻閲して見たが、如何にも鄭寧に正楷に寫してあるが、掖齋や森立之の楷書に比して見劣りするやうに直感した、若し識語を捲ふて私に正筆ですかと質すものがあつたとすると、私は多分否定したであらう。併し約之が識語を書いて居るのを見ると、それを信ずる外はない。山陽は江戸に出た書生時代に生活の爲めにこんな寫字をやつたことが約之の識語中「傭書」とある。

るにても知られ。自分は之れを見て、山陽の爲め一種の悲哀を感じざるを得なかつた。前年中井敬所翁珍藏の掖齋自寫の古京遺文の中に、山陽の寫したものが三枚あるのを認めた。此の山陽の書體は疑ふ餘地のないものであり、山陽が津輕屋に寄寓でもした折、主人の寫字を手傳つたものであらうと想像してゐたが、其頃賃書をやつたことが知れて見ると、古京遺文の三枚も或は賃書範圍のものであるかも知れない。兎に角山陽として餘り名譽となる記念物でないが、彼れの微時を語るものとしては誠に珍物である。

一 畫家を失ふ

此頃鬼籍に入つた畫家尾竹竹坡は自分に多少の因縁がある。自分が郷里の新聞記者時代に、新潟新聞社は、繪入の新聞をも發行し、其の挿繪を擔當したものは、新潟の染物屋の子で、尾竹國雪であつた。これは他日伊藤公から越堂の號を受けたが、其頃はまだ繪は未熟であつた。當時日々國雪の辨當を持つて來たのが、弟の竹坡と國觀の二少年であつた。此等三兄弟が後に富山縣に移つて、自分が衆議院議員であつた折、富山縣選出の同僚島田孝之が、自分に竹坡國觀の二人を紹介して、此兩人は君に縁故もあり、他日畫界に名を成す見込もあるから君より學資を與へて兩

人の内一人でも學問をさせてはどうかと云ふから、自分はそれを諾して、兩人の内竹坡を學校へ通學させることにしたが、遂に實行が出来なかつた。實は無理もなかつた。彼等は既に雑誌の挿繪を書いて多少の収入もあつたから、それを休めて學校へ通ふなどは苦痛であつたに相違ない。併し彼等も少しく忍耐して一ト通り學問をする方が他日の爲めに利益であつたと私は常に思ふた。彼等兄弟は追々畫壇に頭角を擡げ特に人物を畫くに長所があり、兄の越堂よりも天分もあつたが、惜しいかな學問の素養が無かつたので畫品は低級であつた。竹坡は川端玉章に師事し、八火社と云ふを創立し、國定教科書の挿繪を擔當したこともある。俗名を染吉と云ふたのは家業の名を留めたのだ。享年五十九歳で死んだのは惜しむべきである。

此 一 戰

支那産の繻子の織留めに「如源」の二字が立派な書で織り出されてゐる。この二字は織屋の記號であらうが、我國の婦人は此繻子を帶として用ひると此記號を切り棄てず、一種の裝飾として丁度臀部に其一端を現はしてゐる。悪戯者は生殖を聯想して如何にも「源」に相違ないなど云うて皮肉る。東郷元帥が國運を賭した大海戰に此一戰云々の大號令は不朽の大文章だが元帥は戰捷

つて伊勢灣に上陸した時、某酒樓の妓が請ふに任せ元帥は妓の帶に「此一戰」の三字を書かれたと或る隨筆で見たが、腰を生命としてゐる妓の帶に、「此一戰」の三字が「如源」の二字に比して活氣があり、いつか書いた犬養木堂が妓の禪に「觸處生春」と書いたよりも遙かに優れてゐると云うても、純眞な元帥は恐らく其意を得ないであらうが、崇嚴のことを藉り滑稽を弄するはユモリストの慣用手段で、事が崇嚴であればあるほどユーモアの効果が多いのである。話は違ふが此頃聞けば、考證家なる眞面目の研究家の範圍に「後家搜し」と云ふ通語があると云ふ。變にエロテックの言葉だなど、仔細を糺して見ると、考證家のあこがれてゐる研究資料は多く名家に藏せられ、それが門外不出となつてゐるので未亡人に就てセビリ出す外はないと云ふので此通語があると云ふ。譯を聞けば如何にも道理であるが、何分にも聞こえがよくないと一笑した。

森林愛護

四月の二日（昭和十一年）が森林保護デーと云ふので、林學者の放送があつた。本多靜六博士の肉聲も久方振聴き、森林に多少の趣味をもつ自分にも其の歴史を追憶して今昔の感に堪へないものがあつて、翌朝筆を把つて本多博士に教へられたことを自己流の尾や鱒を附して書きつけたものに左の一篇がある。

原始時代の吾國の家居の有様はどんなことであつたらうかと追想するに、その有様を目のあたり見るときものが今尚ほ存じてゐるやうに思ふ、それは何かと云ふと、神社や祠堂である。吾々の遠い祖先の祀られてゐる多數の社は皆な深く樹木に鎖されてゐる。どんな小さな祠堂でも、それが田畝の間に散在してゐるものでも、必らず鬱翠たる小森林に圍まれて、遠く望んでも、コンモリしてゐる光景で直ぐに祠堂があると知れる。大きな神社になると大抵大森林が其背景となつてゐる。神社境内の樹木は保護されて斧斤の侵害を受けないから、皆天を摩して大なる發展をなしてゐる、抑々の當初に溯ると暴風掩護の爲め樹木を植えたのでもあらう。或る迷信から社祠

境内の樹木を神木として崇敬し伐採を禁じたからでもあらうが、原始時代の吾等遠祖の住つた頃の光景は、大體コンナ風であつたらうと想像しても敢て不可なきやうに思はれる。原始時代の我邦には如何にも深い小森林が到る處にあつたらしく思はれる、其頃にまだ利用厚生の道が開けず、森林を繁殖するに委したから、物凄い陰鬱な大森林が到る處に横はり、其中にどんな魑魅がしたでゐるか、どんな怪獸が伏してゐるかも知れないやうな秘密な處が多く、人間は之れを恐怖潜んとも想像される。林學者には此頃を恐怖時代と云うてゐるのは偶然でない。社祠を圍む密林は即ち其時代そのまゝを髣髴するものと見ることが出来るのである。

人文が漸やく開けて、耕作を知るやうになつて來ると、樹を伐り出して土地を整理することに、日光を受けない處が初めて太陽の光と熱を受け、陰鬱の處が追々明朗の處と變じて來た、樹を伐り出して土地を整理するに、根を引き抜くこともなか／＼容易でなく多く勞力を要したので、密林を厄介ものと考ひ出したのは此整理時代で、林學者は此頃を開墾時代と云うてゐるが、今日の如くどこに行つても田畝を見ざる所なきに至つた徑路を考へると、開墾時代もナカ／＼長くつゞき、如何にこれが爲め努力を拂つたか、想像に餘りあるが、開墾が大切なこととなると、極端に趨するのは人情の常で、随分濫妄な伐り出しをやつた。其濫伐がやがて水源を涸らすと云

ふことを知らずに、無闇矢鱈に濫伐した。その例は昔に求めるまでもなく、幕末明治の初年に盛んにこれをやつたので、保存を要する大切な森林までも惜気もなく伐り付した結果は水害を將來して長い間悩んだ、追々其非を語つて森林の保護が提唱せられ保安林、風致林、防風林などの規定を設けて濫伐を制することになつたが、殖林事業がいくら企てられても、直ちに効果の擧るものでないから今尚ほ濫伐の餘害を水災其他で見るやうな有様である。どこでも亡國に不毛の禿山を見るのは、樹木を濫伐して殖林を勉めないからのことだが、我邦は晩時ながら、森林法が定まつて亡國の醜態を免れたが、朝鮮の如きは合邦以前は全く亡國的状态であつた。

人文が益々開け理科學が今日のやうに進んでくると、樹木を人間の用に供する範圍が大いに擴大したが、殖林が其割合に進まない觀がある。曾ては樹木は家屋家具などを作る材料であつた。それだけでも我邦の如く土壤が狭く人口が莫迦に増加する國土には樹木が需用に應じ兼ねる不釣合があるのに、理科學が進んだ結果として想ひも寄らないことに樹木が材料となるに至つた。例へば製紙の材料のミツマタ、コウゾ等三四の樹種に限られたものが、今では幾んどあらゆる樹種が材料として用ひらるゝやうになり、莫大の製紙の原料として大なる森林も多く伐り盡して今は外國から木材の大輸入を餘儀なくされるやうになつてゐる。尚ほ樹を釜に煮てドロ／＼にしたも

のから絲を作る法も工風されて、一種の織物も出來てゐる。樹木が砂糖の如き食物を製することにもなつた、乃ち樹木萬能とでも云ふべき時が來たので、いくらあつても樹が足りないが、さて化學的に樹木を作ることは未だ發明されない、恐らくそれは不可能であらう。我邦は他邦と異つて習慣的に樹木に親しみがあるので、矢鱈に樹を濫費してゐる、一時の用を足すに過ぎない箱を木で製したり、新年の祝にとて門松を結んだり、マッチを濫費したりするやうなことは他國に無いことで、まだ樹木が足りるからとは云へ、三思すべきことである。どうしても一方に任用するだけの樹木を他に補充する計畫が無ければ、前途寒心に堪へないことが起ると想像せざるを得ない。

獨逸は森林を重んずる國だが、其一端は自分が青島に遊んだ時に見た。二十哩の鐵道に沿うて兩側に樹木があつて鬱蒼として蔭をなしてゐる、この樹は風致のためばかりでなく、それが成長する時は鐵道の枕木が腐敗する時で、それを見込んで樹を植へて居るのだと聞き深き慮りのあるのに感服をさせられたが、日本はまだそこまでは届かない。元來多雨の國である爲め毎年例として多くの河川が氾濫する、それは主として殖林が充分でないので雨量を吸収するものがないからだ云はれてゐる、この水害のため年々國庫の支出する治水費は貳千萬に及んでゐるが、何故に

殖林に巨資を投じて禍源を絶たないのか、吾等はいつもハガ、ヨイ感じがする。

森 我國は外國から這入つてくると、鬱鬱なる國土であるので快感を覺へると云ふが、まだ蓬萊島の面目を保つてゐるのは愉快であるが、實に内地の旅行をやると、年毎に到る處明朗の天地を現じ、嘗つて在りし森や樹がいつの間にか無くなつてゐるのに驚ろく、人口の稠密に赴く爲め國の開けゆく現象だと、近視眼連は喜ぶけれども、實は憂ふべき暗影が明朗の光景の後ろに潜んでゐることを想ふと寒心に堪へない。

護 愛 林

外人に北海道の漫遊を勧む

日本へ來る世界の遊覽客は、年毎に増加しつゝある。彼等が日本へ來て主として見るものは何であらうか。名所としてあるものゝ中に、富士山と云ふものを始めとして、火山質の山々、日本古來の美術としての古い寺院等にすぎない。大體は東京へ來てそれから關西方面や京都や奈良に遊んでそれで歸へる人が多い。九州へ行くものは少なく、又北の方北海道へ渡るものは殆んど稀である。外國から來る旅客の日本滞在日數は少ないので、遠く北海道まで足を伸ばすことが出来ぬと云ふことは、彼等が我が北海道を見のがす大きな原因である。勿論日本人の宣傳下手であることも一原因ではあらうが、日本内地でさへその極めて少部分だけしか遍歴しない外國人に向つて、遠く北海道まで足を伸ばせと言ふのは或は無理なことかも知れない。長く日本に住居した外人で、北海道で種々の研究を遂げて、興味を感じたいくらいの人々があつて、北海道についての外國人の著書は多少あるけれども、此等を見た外人は幾人と無いであらう。現に北海道廳について調べて見ても、外國人の爲めに特につくつた案内なども全く無い位である。然るに私は突飛

録 肝 鯨

かも知れないが特に外國の遊客に向つて北海道に漫遊を勧誘するものである。

凡そ國が異なればその國民の趣味も異なるべきもので、我が國人の趣味とするものが必ずしも他國人の趣味とするものではない。吾々が非常によい風景として賞するもので、他國人に何等の好感を興へぬこともある。日本には氣候に四季の別があつて、その季節によつて風物も異なり、種々多様である。又大自然の變化にも頗る富んでゐるが、日本人はこれを天恵と云つて喜び、そしてこれを他國人に誇らんとしてゐる。しかしこの變化の多い氣候は果して他國人の喜ぶところであらうか。日本は暑熱は大體に於て、臺灣の外は高くはないが、ある季節には雨量が頗る多く、冬季のある地方は雪の恐るべきものがあり、特に日本は海中に屹立する島國である關係から、蒸發氣が盛んで、梅雨の季節などには濕氣みなぎり、人間の體はそれが爲めに蒸されて、宛然釜の中にある如くで、これに馴れてゐる邦人ですら、耐へかねて汗を流して不愉快を覺えるのである。邦人既にかくの如くであるから、大陸から來る旅客はこの氣候には殆んど耐へぬことであらうと思はれる。

外國人で日本に幾年も來てゐる人達は、どんな處を住所として選んでゐるかと云ふに、それは勿論その人の境遇によつて、さまざまであるが、寒暑の休日などには高燥の地で、空氣の疏通よ

く、廣闊の地に遊ぶのが通例である。その地は必ずしも風景の美なる所ではないが、衛生本位となつてゐる。輕井澤などは大體この條件の具はる地であつて、全く外國人の爲めに開拓されたとも云ひ得る所で、日本に來る外國人が好んで遊ぶのはこゝである。夏季になると、各地にゐる外國人はここにみな集つて來る。従つて外國人に對する種々な設備供給なども敢へて不足なく整備になつてゐる。富士の裾野や箱根なども外人の喜ぶ所であつて、随分邊鄙な所に三三、五五、假設に近い家屋を建て、住居してゐるのを見うける。これを日本人の目から見たならば、あんな所、あんな寂しい所、風景の美もない、狼でも出さうな所、物資を得るのに困難な所によくも住むものであると不思議の感を懷くのであるが、實は外國人の欲する所は、乾燥せる空氣であつて、これをめあてに住所を定めるのである。日本の梅雨期の天候は、外國人の最も嫌ふ所で、彼等はこれを避けることに努力するのである。所で乾燥の空氣のある所と云ふものは、自然大陸的の所であつて、我が邦人が久しい間閉却してた輕井澤の様な土地が漸く注意を惹き、外國人の喜ぶ土地は從來の日本風の風景地ではなく大陸的風景のある所であり、これは棄てがたい所であると漸く値打ちつけられて、日本の重大風景地を全國的に選んだ時、この種の風景地がその中に入

れられたわけである。

日本の本土で、大陸的土地は何れにあるかと云へば、それは北海道である。吾々が外國人に向つて切に漫遊をすすめめるのは、その故である。恐らく外國人が青森海峡を越えて北海道に上陸すると、直ちになつかしい故郷へ歸つたかの感を懐くことであらう。僅かに一葦の海水をへだてただけで、土地の形勢も風物も全然異つて、際涯のない廣漠たる平野に、起伏する丘陵、遠くにそば立つ山々、その間を流れる河川、これ等はみな大陸的な趣きがあつて、規模は極めて雄大である。

こゝに至つて先づ氣のつくことは、日本内地の到る所にある竹が全くないことであつて、そこでまづ北海道の大陸的であることに氣がつく。吾々は幼少の時分に、外國の讀本の繪を見て、大きなオーク Oak が枝を垂れて、それが殆んど地に接してゐるのを見て、なるほど大陸の樹木はこんなものかと子供心に感じたこともあるが、か様なものを北海道に行くとあちこちに見受ける、そしてなるほどこゝは大陸的であると感ずるのである。いろ／＼の草が生えてゐるが、その草の中には日本の内地に全くないものが可なりある。いつぞや北海道旅行中植物學者三好學博士に出會つて、いろ／＼北海道の話聞いた時に、北海道の草は多くは大陸の草そつくりであると云はれた。こんなわけであるから、北海道の動物又は植物などの類も、それ／＼専門家が研究し

たなら、大陸的のものが必ず多いことであらう。特に吾々が北海道に行つて心よく感ずるのは、空氣のいかにも乾燥して内地と甚だしく異なる點である。我が邦人は常に頭寒足熱と云ふことを云ふが、これが衛生上大切なことで、人間をよく眠らせるのは頭寒足熱なる場合である。所が内地ではこの頭寒足熱と云ふことが、めつたに得られないが、北海道に行くと、必ずその土地の人間が、これを誇りとして説く。これは畢竟乾燥してゐる空氣の結果であつて、僅かに數日北海道に遊んで見てもいかにも心地よく眠ることが出来る。尙ほ北海道と内地とひどく異なるのは、梅雨季になると内地には濕氣がみなぎるが、北海道には全然これがない。濛々たる梅雨の氣は、青森の海峡に遮斷せられて、その以北には絶對に入らない。だから吳服など賣り歩く商人は、雨季になると微の生えることを恐れて、海峡を渡つて北海道に預けることが例となつてゐる。要するに、外國人が日本へ來て最もいやに思ふ氣候は、北海道に限つては全然それがないので、この點に於ては北海道は、大陸の人々の爲めに特に出來てゐる天惠の地とも云へるのである。

北海道に對して外國人はどう考へてゐるであらうか。やゝもすると、日本全體を極めて未開の土地と思つてゐる人さへあるから、北海道の如く、北限の土地がたゞ空漠たる原始的の高原であるかの如く想像する人もあるかも知れぬが、それは今より一世紀も前の事であつて、今日では實

に立派なものである。私は今北海道の開拓された歴史を語る違をもたないが、聊か語つて置きたいことは、北海道開拓の草創には外人殊に米國人に負ふ所が多いのである。同道の礎石は實に米人に依つて置かれたのである。グラント將軍が來朝の時、吾が明治天皇より將軍に感謝の意を表されたのも其の爲めであつた。今の農科大學の前身はマサチューセツの農學校の特色に則つたと云はれてゐるが、學校草創の際招聘された米人は人格の高い人で學生の爲に宗教的薰陶を施した其の効果が長く同道によき感化を與へ、およそこの植民地でも徳操の荒廢に陥るのは幾んど避け難いものとされてゐるのに、北海道に此の弊のないのは教育のお蔭と云ふべきでこれも又米人に謝すべきものである。

北海道の風景に就ては近年選んだ日本國立公園十二景の内二つまで北海道にある。それは「阿寒」を中心とする地帯と「大雪山」を中心とする地帯で、全く人間に汚されない、雄大で幽邃で、自然の風景其のままの處女地である。日本内地にも風景地はあるが、早く開けた關係から、うぶなものは少ないが、北海道のは亞米利加合衆國で天然の地域を國立公園として誇りとしてゐると同じやうに、我邦でそれに後れを取らぬものは北海道の二公園であらう。阿寒地帯は廣袤實に八百五十町歩此地域内には疊々たる山岳があり、蒼鬱なる處女林があり、幾多の大湖水があり、

瀑あり溪谷あり温泉がある。此地點は緯度の關係から歐羅巴と多くの共通點があるので、殊に外客の歡心を惹くであらう。又大雪山は千島火山系の連峯と古生層山脈から成り、石狩十勝の二ヶ國を跨ぎ、東西八里南北六里に及ぶ廣大な地域を占め、二千米を超ゆる十坐の高峯は雲表に聳え連なり、山容は奇抜で瀑布を懸くるものあり、爆裂火口を現はすものあり、南北の麓に豪華の勝仙、層雲二の大峽あり、就中層雲峽の風景は變化を極め天下の奇勝と云はれてゐる。此外名勝は頗る多いが、殊に外人の目を悦ばすものは到る處進取の氣の漲つてゐることである。北海道には今は立派な都市があり、縦横の鐵道があり港灣があり、大學があり、鑛山があり、師團があり、又廣い原野も今日は凡そ開拓されてゐる。然し何と云つてもまだ新開地たるをまぬかれないので遺利が多い。その遺利のある所、又新開である所に趣味があるのである。即ち生き／＼した空氣に充ちてゐる。札幌にせよ、旭川、小樽、室蘭にせよ、發展はまだ半途にあるとも云へる。これ等の都市が時々刻々發育する状態を見るのも、文化人にとつては特に興味のあることであらう。日本の内地に於ては、文化は既に熟して他國の人の目には餘り興味がないであらうが、北海道に於てこそ外人に興味を興へるものが到る所に充ちてゐる。

北海道には先民族の遺蹟がまだ存在してゐる。その民族の住む所を尋ねて、その風俗を見るの

も一興であらう。北海道には到る所に先民族の名づけた地名が残つてゐるが、これを研究するの
も、その道の人にとつては興味のあることである。又海産も豊で、その中でも海を覆ふ鯨と昆布
とは、恐らく外國の遊客の驚異を博するであらう。山野跋涉に興味をもつ外國人に對して、北海
道の未拓の地は、吾々邦人の知らない興のあることであらう。

要するに北海道の風景は、内地の盆景的纖巧な趣きはないが、男性的豪放で雄大な自然は到る
所に展開して、外人を迎へてゐる。此等こせつかぬ、快活、雄大な大陸的風景こそ、外人の郷土
に類似のものであつて、彼等になつかしく感ぜしむるものはこれであらう。そして今日は外人の
旅行に何の不便もなく、萬端とつてゐる。

日本の庭園を語る

庭園は觀賞の目的で家に附隨してゐるやうに思はれてゐるが、必らずしも觀賞のみが其目的で
ない。庭園の沿革に徴するまでもなく、昨今のやうに洋式のアパートやそれに類する建築が盛ん
に起つてくると、家には絶対に庭がない、亦幾んど餘地がない、火災でも起ると遁げ所がない、
そこで市街に公園が起り、これが共同の庭園で、變災の時は之れが避難所でもあり、平素の散策
場でもあり、遊戯の場所ともなるので、觀賞の設備もあるけれども、其目的は單純でない。

庭を觀賞の用に供するやうになつたのには、種々の沿革がある。昔しから家を建てるに屋敷内
に幾許の餘地を残すのは、已むなき必要からである。通風の爲光線を導く爲めに必要であるのみ
ならず、或は物を置く爲め、農家などで云へば、農作物を處理する爲め、例へば穀類のモミを落
したり、依につめたりするにも、家に附帶して多少の餘地が必要である。自然生垣で之れを圍
み、生垣にむくげを植えたり、餘地の一隅に花卉などを植えたりすると、原始的の庭らしい處と
なつて、實用から追々觀賞に移つてくる、これが其第一歩である。

庭と云ふても觀賞を目的としない處は昔も今もある。例へば京都の舊皇室の紫宸殿の前に廣い庭があるが、左右に櫻と橋があつても觀賞の庭でなく儀式を取り扱ふ時に用ひらるゝ必要の場所である。寺院などにも觀賞を目的としない庭があるのは護摩を焚いたり、種々の式を擧げたり、舞踊などを行ふなり、多衆の觀者を收容するために庭が必要とされた。斯る場所には目を遮るものを嫌つて樹石などを入れて居らぬ。

屋敷内に餘地を存することはもと實用から生じたのであるけれども、それがいろ／＼の變化を生じた。寺院などは、宗教鼓吹の爲め、經典にある須彌山に擬した塔を置いた巖窟を作つたり瀧を落したり、極樂淨土を象徴するために、池水に蓮花を植えるやうな事も起つた。庭中に盛り砂をやることも佛教に縁ある西域の沙漠に擬したものとの説もあつて、大徳寺にも庭一面に盛り砂があり、金閣銀閣兩寺にも圓形の盛り砂があつて觀月臺だと云はれてゐるのは誰れも知る通りである。

僧侶に對し戒の嚴重であつた時には、諸慾を絶たしむる爲め、葷酒の山門に入るを禁じ、人寰に超越する生活を企圖する上から、寺の境内を深山宛がらの如く經營し、多くの樹木を取り入れて山林に擬し頗る幽鬱の境地としたが、實は後世觀賞本位の庭の起つたのも源をこゝに發してゐる。

京洛の金銀閣寺の庭を始め、名園が多く寺に屬してゐる。そして京洛の寺々の庭園美を誇つてゐるのも、深山の自然の風趣に倣つた點にあつて、追々意匠が加はつて爰に作庭術が成つたのであらう。

古るい寺院の庭に著名なものが多くあるけれども、恐らく種々の變遷を経て、一木一石も創削頃のものは残つてゐないかも知れない。多くの場合地域は頗る狭まつてゐる、いくらか廣がつた例は修學院の御苑位であらう。しかし舊時の面目は強ち想像に難くないものもある。京洛の西芳寺の庭は夢窓國師の作と云はれ、國師は支那から作庭法を齎らし、足利氏も國師の教を受けてあの金銀閣の庭を作つたと傳へられてゐるが、今存してゐる苔むす西芳寺の庭は、その當時と變化して居るとは云ひ、舊記に照し合つて見ると、其の面貌は凡そ窺はれ得るやうにも思ふ。京洛の古刹は抵ね積翠の中にあるので其の環境と重複せぬやうに庭の趣向が工風され、特に樹木を避けて海景を摸した處もあり、高雅の意匠に感服されるものが少なくない。如何に當時の庭園が大規模であつたかを髣髴するに、京洛の寺を例に取るまでもない、近い都下の三縁山増上寺の庭の跡を見ても思ひ半ばに過ぎるものがある。今日は公園となつてゐるが其地坪は三十幾萬と云ふ大なるものだ。亦上野の東叡山にしても不忍池を合はせると都下第一の公園として恥ぢない規模の

ものである。

庭園も追々發展するに連れて小細工が行はれて、漸やくエラボレートに成りつゝある時、茶道が行はれてこれが庭に大きな影響を與へた。茶道は禪から生れたものだけに、瀟洒閑寂を喜び、庭も自然に則ることになり、すべて華麗を忌み、猫額大の地に一木一石を置くを以つて足れりとするやうになつたことが、一般の園冶術に影響し、西洋にも無く支那とも異なる特色ある庭園を見るに至つた。

作庭法にも追々流派が起つたが、流派は祖法に拘泥する弊があつて感服が出来ない。支那の道學から導かれた陰陽説などが入り來り、或る流派は是れを金科玉條として、一木一石を置くにも陽陰説に基いたが、自分などは却つて自然に背馳する忌味があるのでおもしろく感じない。亦支那崇拜家たちは矢鱈に範を支那に採つて、樓閣を營んだり多く碑を立てたり風景も支那に擬したりする向もあつたが、これも實は餘り感服が出来ない。

徳川時代に諸侯が其封土に思ひ／＼經營した庭園に名園と云はるゝものは一にして足らない。尙ほ其他に禁苑である修學院の庭だの奈良の春日社の神園などもあつて、禁苑の外は多くは今公園となつてゐるが、これ等の諸侯の餘澤とも云ふべきものである、江戸に於ても諸侯は其本邸並

に下屋敷へは廣大の庭を營み、名園と呼ばれたものも少なくなかつた。江戸は海に接してゐるから、海水を池に取り入れた所もあり、自然の丘陵を利用して山と見立てた所もあり、鬱蒼たる森林が都會の方々に在つたのは、此等庭園があつた故である。或は權勢を利用して賄賂的に諸大名から巨石を徵發して庭を飾つた例もあり、豪奢の極東海道五十三驛や琵琶湖に擬した庭園を作つたものもあつた。大名の後房に於ける婦女が滅多に外出も出來兼ねたから、これを散策行樂の天地としたのも無理はなかつた。廢藩後此等が公園とも成らず、工場などを置く所とされたのは惜しいことであつたが、十四年前の大震災で概ね頽廢に歸した。併し江戸の藩邸に作庭の大土功が起つた爲めに作庭術の進んだことと言ふまでもない。

庭園と畫風は切つても切れない因縁があるもので、藤原氏時代には土佐家の畫風が行はれ、其の書き残したものに由つて當時の庭の面影が髣髴される、又狩野四條の畫風が久しい間作庭の範となつて、所謂名園は概ね此の範疇に屬してゐる。文人風即ち南畫式の作庭も或る好事の範圍に行はれ、一生面を開きかけたが、普及に至らない内に洋式の建築が行はれ出したので、作庭の風も聊か洋風に墜した趣が無いでもないが、幸ひに甚しきに至らない、日本の作庭は自然を範としてゐる點で誇るべき特色があるのだから、建築が洋式となつたからと云ふて、之れを變ずるに

及ばない。建築それ自身を心して聊か折衷すれば、日本固有の特色を庭園に保つことは決して不可能でない。

松霞安田翁の深秀園

大震災の厄に遭うて都下の名園の亡びたものは一にして足りない。中には修補を経て多少回復したものも無いでもないが、絶望的の荒廢に歸したものが少なくない。安田松霞翁の本所横網の別墅などは其一である。

園記を案ずるに、翁の別墅は頗る來歴に富み、三諸侯の邸趾が一處にあるだけでも稀有である。此園の廣さは南北一百三十歩、東西之れに半ばし、中央は元祿年間高崎侯の築造に係り、明治の初年田安公の住した所である。南は茶博松浦鎮信公の隱居所で、北は享保年間加納侯が幕府から賜はつた車茶屋と稱するものであつた。上陳松浦公の隱居所には白藤庵と云ふ有名な茶室があつて、元祿年間赤穂の遺臣が仇家を襲ふた時、公は偶々此茶室で自ら茶杓を削りつゝあつたが、復仇の報を聞き、茶杓に「夜撃」の銘を附したと傳へられてゐる。また加納侯の車茶屋と云ふは、車輪を窓枠に用ゐた築造で、斯る名があつたのだが、庭中の石は皆石臼を用ひ、飽くまで輾轉の意を寓した好事のものであつた。

三諸侯の舊趾が一處に集まつて茶趣横溢の景致を有することが、名園たるに充分の資格を具してゐる。尙ほ其上に諸名家の舊物の此園に歸し風趣を添へてゐるものが一にして足らない。即ち書院の階下にあつた古銅の巨燈は筑波山寺の物で、それには寛永十年大樹公云々の銘があり、閑林亭と云ふ室は曾つて尾張公の書齋であつたのを翁が申受けて爰に移したのであり、白藤庵の西に「又隱」の扁額を掲げた方丈室は茶博千宗且が世塵を避けて隱栖した室で、宗且の遺族が田安侯に獻じたものである。石佛育兒地藏尊は秋元侯の舊物であり、藥師堂は元と毛利公邸内にあつたのを移したものであり、芭蕉の古池の句碑がある外に、名工與次郎が作つた鐵燈で「河童」と名付けられたものがある。尙ほ二三由緒ある茶室もあつたが、漏らしてならないのは椎の大樹である。これは松浦家の舊物で、此樹のあるため椎の木松浦とまで云はれた名木で、神として祀られてあつたものだが、惜しい哉皆亡びた。唯幸ひに此の椎の實が植木職の手で培養され、今は成木して安田氏の現在の園中に移し植へられたが、氏に近年椎園の號のあるのは此故である。

以上は園の梗概に過ぎないが、唯だこれだけでも園は史蹟並に茶趣味の淵藪の觀がある。尙ほ横網の此地は自然の風致に富み、鬱蒼たる大樹あり、楓葉あり、池蓮あり、蓍苔あり、園前には巨川が流れてゐる。園名は成島柳北の命じたもので「深秀」の名はよく園の特徴を現はしてゐる。

る。自分は安田氏父子と舊あつて、災前屢々訪問しながら、園を見るに及ばず、亡びたのは如何にも遺憾に堪へない。頃日安田氏を訪うて席上園記のあるのを一觀した。先代松霞翁が華甲壽宴の時大槻如電氏の選んだ文で、園の狀況がよく敍されてゐる。すなはち園記の全文を左に收める。

深秀園記

深秀園。在東京隅田河東横網第二坊。爲安田氏別墅。正門面水。入則三層石閣。巍然高聳。曰成務館。構造準洋法。館左有門。門徑一曲。有玄關。有書院。有水樓。有茶室。整然廣廈。曰懷德館。館前水深樹秀。是成島柳北所以命此園也。園本三侯乙第。南北通一百三十餘步。東西半之。中央爲高崎侯邸。元祿中所築。喬木碧水。古趣靄然。明治之初。田安二位公居焉。南則松浦侯邸。係鎮信公隱棲。世傳。赤穂遺臣之襲仇家也。公時在白藤庵。手製茶七。深夜聞鼗鼓之聲。心知良雄等義舉。竟名其七夜擊。此地是也。北則加納侯邸。侯先爲有德大君親臣。蓋亨保中賜第。舊有稱車茶屋者。車輪爲窓格。而跋石悉用石臼。亦取其輾轉也。今主人合三邸一之。在明治戊寅以降。仍不改舊貫。但有疏兩池。爲一水等耳。書院階下。銅製巨燈。筑波山寺舊物。銘有寬永十年大樹公等文字。跋石幾十。間存古石臼。

池畔北轉。楓林小丘。曰紅葉山。卽車茶屋墟也。楓外小舍。方不滿丈。曰閑林亭。尾張一位公看書處。舊在河西。往年公割愛主人。因移焉。今則可以看池蓮。丘北石佛。爲育兒地藏尊。秋元侯邸舊置。傳云。一里塚上物。其後隴有藥師堂。亦毛利侯邸所安置。邸俱在濱街。今歸主人。故移焉。堂側一碑。刻芭蕉翁所咏池蛙水音句。碑陰有記。按翁廬。當時在深川六間堀。後爲尼崎侯邸。文政中。有故徙其邸鍊砲州。爾時所建。主人近獲之亦移焉。其南福德稻荷祠。田安邸遺構也。林下路窮。忽通短橋。蒼石橫臥。古燈照入。步至池南。老楓鬱鬱。下有藤花架。此地爲白藤庵故趾。稍西有方丈室。扁曰又隱。在昔茶博宗旦。既致仕。尙且築此屋。以謝世紛。所以名又隱。傳在西京千家裏園。田安公深通茶儀。追慕之餘。遺工就其家模之。裔孫某以爲名譽。併屋及茶博所筆又隱書幅。以獻。此室是也。前庭安一鏡燈。扁而卑。狀甚奇。銘曰河童。天正中名工與次郎所作。樹影扶疎。莓苔紺碧。自是洞天。使人有遺世脫塵之想。而中潛戶待合舍。斯道諸規。悉具。此他有養清庵半齋等茶室。亦公所造。俱在懷德館內。今不具述。鎮信公吾邦廬陸。其隱棲趾。而設此又隱。兩公風流。香色可味。曲徑西繞。有門常闕。門外平蕪數百步。乃成務館後庭也。其沿外垣處。有古椎樹。龍蟠虎踞。不知歷幾百年。世有椎木松浦之稱者。環以短籬。神而祀之。

此樹隔河水。與首尾松。蒼翠相望。古來稱爲東都一名勝矣。

鳴乎。名園歸名士。抑亦非無謂也。主人號松霞。中越人。年十九。來江戶。從事沽販數年。元治甲子。始開兌銀鋪。爾來三十有五年。其業極隆。近十數年來。通邑大都。無不置支鋪。所謂安田銀行。是也。語云。秀而不實。以其立基不深也。主人執業著實。其本甚深。以致今日之秀榮也。然則深秀之稱。何啻此園水樹。今茲戊戌。主人齡六旬有一。以十月之吉。張華甲壽宴。大會諸同人此園五日。余見囑園記。宿諾多年。今遭此盛舉。豈可躊躇不履其約。乃筆其梗概。以爲遊此園者之指南車云。

四時循環の天恵

我國の氣候に春夏秋冬の變化のあるのは、天恵の一つであると思はねばならぬ。氣候が單調である所には、自然の現はれも亦單調であつて、耳目を怡ばせるものとは、決して多くはない。一年暑熱の候のみで通す熱帶國には春の景色も秋の風光も無い。烈寒で終始する極地には幽鬱の外何物もない。自然程多彩多角のものは無いのに、僅かに其一端を現はすに過ぎないのは、單調の氣候國で、幾んどあらゆる蘊奥を發現して、ふんだに自然を滿喫せしむるのは、節序を逐ふて四季が循環する國である。即ち斯る國土が天恵の饒かな所と云はざるを得ない。

以上の如き天恵も其國にゐては何んとも思はずに看過するが、風土の異なる外國に出かけて振り返つて祖國を見ると、平生氣のつかぬことがあり／＼と見へてくる。暑熱ばかりの單調の國にゐては、本國の春や秋の好氣候の如何に身心に快よいかを思ひ出さずには居られない。磅礴なる禿山ばかりの國にゐては本國の積翠の山を想ひ出さずには居られない。海に遠ざかつた國に於ては海を環らす本國が如何に多幸であるかに想ひ到らざるを得ない。山水の景はどこにもあると思

ひの外、その無い所にゐてはどんな無風流人も本國が山水美に富んでゐるかに氣がつくであらう。

我邦には四季さまざまの風物に感じて十七文字の短詩を作る風習がある。この短詩には必らず氣候を詠みこむことが法則となつてゐる。これは他邦にないことで、我邦では、廉價文學だと云はるゝ程廣汎に行はれて、田夫野人と雖も之れを口ずさむ、これを詩と見れば日本ほど詩人の多い國は世界のどこにもあるまい。片田舎の村社の祭に燈籠を献ずることがあると、權兵衛も八兵衛も續々月並の句を吐き出す、これが四季の齋らす藝術で、人間はこれに依つて自然に接觸し、自然は之れに由つて大いに發揚される。春夏秋冬の句作に、其の氣節を現はさねばならぬとあるから四季の風物には自然意を注ぎ、花に月に其の特徴をあらはさんとし、其の努力の結果は、往々普通人の閑却する自然の奥底にまで言ひ及ぶことがある。日本に與へられた天恵を發揮するの効なしと云はれない。西洋人の物の認識に周到であることは彼等の專賣であるかの如く思ふものもあるが、一艸の微も苟くもしないものは此短詩人で、自然に對する微細の注意を邦人に訓練したものは、理科の教科書以上であると云ふも強ち誣言であるまい。

四季の風物が人間の老若、委しく云へば人間の年輩に重大の關係がある。小兒は四季の變化に

頓着するものではない。それにしても花を喜び、蟬や螢を捕へるに興を感じ、雪に戯むるなどは其得意とする所だが、しかし自然に對して認識は頗る薄弱で勿論言ふに足らない。小兒の域を脱して稍々長しても、氣候の推移などは頓着なく過す時が可なり長くつゞく、學生時代など夏休みの爲めに暑候を待ち、スキー遊戯のために雪候を待つ、彼等の秋にあこがれるのは果物を食り食はんが爲めであり、花が咲ふが月がさえやうが、それ等に愛着の念がない。況んや二百十日がどうあらうがそんなことに頓着がない、彼等に四季さま々の氣候や風物に對し、唯だ冬は寒く夏は暑く感ずるだけで、空々若々に過すのが青年期である。彼等は危険を冒して山の征服をやるけれども、自然の風景などを味ふ域には達して居らぬ。自然の風景に憧憬するのはモット年輩の進んだ後である、人が漸やく老いると、秋の月はいつも同じでも蟲のすだく聲に變はりがないとも、青年期に無い一種の趣味が生ずる。所謂物の哀れを感じるには青壯の年輩を経てからである。前に短詩の事を言ふたが、物に感じて詩に現はすなどは、抵ね此年輩に入つてからの事だ。四季の風物は千殊萬態でそれについて年輩の相違で感想の同じからざることなど一々擧げることとも煩はしいが一例として柿と云ふ樹に就て考へて見ようが、幼者の此樹に愛着のあるのは、赤い果物の爲めである。之れを食はんとする嗜慾の外に何物もない。彼等は此果實を見ると澁の

有無を直ちに判する。彼等は澁柿をサハシたり串柿にしたりして食ふ法も心得てゐるが、口腹を離れては彼等に興味はない、夏期に入ると緑葉密集して所謂新緑の景を爲すが彼等は敢て之れを喜ばない。萬顆の實が枝に満てもそれが澁柿であれば敢て顧みない。而るに漸やく年輩が進むと、新緑の景も丹柿の枝を飾る景もおもしろなつてくる、更らに老いてくると、實も葉も謝して樹が其の軀幹を露出すると、其の錯綜の枝に枯淡の趣味を感ずることになる、枯木寒鴉などの幽寂の味は老境に到らねば決して賞翫が出来ないものである。こんな風に考へて見ると、四季さま々の風物は之れを見る人の年輩に依つて或は看過され、或は賞翫され、深みの知れない天恵の風物には、年輩のあらゆる時期を満足させる趣味があつて、それが四季循環の致す所であることを思ひ世界に類例が多くないことを思ふと、四季の天恵も亦大なりと感謝を禁じ得ない。

日光徳川氏廟の外人観

世界の旅客が來朝すると必らず日光の徳川廟を見る。彼等は奈良や西京の種々の景物を見るともせず、何んとしても日光を見遁さない、彼等は其の建築の豪華を驚異の眼で觀、之れを歸國の土産とするが、彼等は果して専門的に建築を觀察して感服を拂ふのであらうか、否々、彼等は唯彩色建築の美觀に打たれ譯もなく豪華の美觀に目を眩するに過ぎないのである。或る外人は日光の森林美に感興を發したものがあつた。或る外國畫師は日光の雨姿の多様に驚ろき、米國には卵の種類は三百五十種もあるが、日光の雨はそれよりも多様で、何んとしても其の風姿を描し得ないと歎じたと聞いてゐる。亦或る美術家は大谷川の前岸に苔蒸して並んでゐる石佛に惚れこみ、あれを雨ざらしにして居るのは惜しいものと云うてゐる。併し日光の建築につき外國の専門家が如何に見てゐるか、私は其の批評を聞きたいと思ひながら、會つて聞いたことが無い。

今、日本で専門的に日光の建築を研究してゐる技師や美術家がいろ／＼あつて、其研究の結果を發表してゐるが、それに據ると日光廟の建築美は華麗の彫刻や彩色のみに在るのでなく、日本

國有のあらゆる工藝を遺憾なく表現した所にあると云うてゐるが、さて外國の建築家が此の異様な東洋建築、殊に世界に餘り例の無い極彩色の、且つ神佛混合式の此の建築を如何に評して居るのであらうか、西洋の建築家も今では東洋建築に相當の認識があつて、其の觀察は必ずしも不公平でない。近年日本に來た某建築技師が日本建築を評したのを聽くに、彼れが日本で敬服した建築は皆な日本特有のもので、伊勢大廟の原始的の宮作りを始めとして、各神社にある華表各地にある封建時代の城や茶室などを賞賛してゐるが、西洋感化の建築に就ては一切論ずるに足らないと云ふて、日本固有の建築を賞揚してゐる。此等を以つて見れば、西洋建築家も東洋建築に對して相當の批評眼がありと云ふを妨げない。併し日光の建築は僅かに八百數十坪に過ぎないもので設令ひ當時二十萬圓を費したとは云へ、それが今の金にすると二千萬圓に當り、日本は勿論世界にも殆んど類例のない莫大の金を投じたものにせよ、其の規模の小なる、洋人から見たら玩具に近いものであらうが、洋建築家は之れを見て見戲に類するものと一蹴し去ることは無からうか。これが自分の長い間秘かに抱いた懸念であつた。

一昨年あたり米國シカゴから日光研究に來た技師があつて、日光の旅館に長く滞在してゐた。

野口米次郎氏は偶々其技師と同宿して日光の建築に關して談話を交へた筆記が氏の隨筆に收めて

あつて、自分は始めてそれを讀んで外人の日光觀を知ることを得た。今左に建築に關する一二の項を轉載する。

僕は建築師として已に二週間此處に滞在してゐる、而して日光建築を側面に研究してゐるものである。面積の上から見ると、五重塔や廻廊の東西に當る神庫なども一切計算に入れて僅々八百二十五坪である。日本の建築家から聞くと、それは淺草の觀音堂の二倍で、若しそれを東京停車場に比較すると其の三分の一（此の比較は疑はしい）更らにそれを奈良の大佛殿に比較すると少し小さいやうである。かういふ建坪の小區域に神祕的建築と佛寺的建築とか確定した組織の上で統一されて巧妙に居並んでゐる。この藝術的奇蹟を行つた昔の設計者の力は實に偉大なものであつた。見給へ、此處に鐘樓があつてそれに相對する經藏がある。そして又本地堂、藥師塔、五重塔、仁王門など、云ふ、佛寺的建築が作られて居る。然るに一方に石の鳥居、神庫、水盤舎、拜殿、本殿など、いふ神祕的建築が作られてゐても、決して混淆の醜態を暴露した低級の建築藝術でないのである。重ねていふが當時の設計者の力は實に偉大なものであつた。彼等の偉大なる力は、あらゆる其他の日本藝術に於けるが如く外形的制限が精神上の充實を阻害するものでなかつた點に懸つて居る、これ等の小建築に何たる充實した人間の努力が入

れられて居るのであらう。それが最高點に達した時に音に名高い陽明門が顯はれたのである、僅々八坪餘といふ小建築の陽明門に何たる東洋建築の精髓が含まれて居るだらう。

以上は總論的の説話であるが、更らに進んで左の如く建築の専門觀を述べてゐる。

今建築の技工上から見ると、仁王門前の五重塔は仁王門の右手から覗えて見える、下神庫の屋根の側面と斜めに對照して、破格な均齊の一方法を案出して普通の建築技工をひそかに罵るの感がある。更らに又門に入つて、右にある三個の神庫と左にある厩舎とが左右均齊を破らんとする場合、五重塔の姿が門前から應援して力負けして居る左手の建築に力を添へ、立派に飛將軍の役目を解除してゐる、水盤舎を左に見て、北に折れて歩むと、右手の神庫に到る左に輪藏がある。それから石の段々を上ると、正確な均齊が此處から始まつて居る——左に鼓樓、右に鐘樓、正面の陽明門を左右に飾る廻廊がある。廻廊の一ト間毎に極彩色に塗られ異つた意匠の花鳥其他の透し彫——これは決して陽明門を辱かしめない日光建築彫刻の秀でたものである。僕はいつも鳥の羽毛など一本／＼正直に細か／＼彩色してある全部丸彫の前に立つ度に、さういふ藝術品を無慈悲な雨露に曝すのは、如何にも無鐵砲だと思はざるを得ない。陽明門に立つて顔をまともに向けると唐門がある。そして左右に神輿舎と神樂殿、唐門の屋根は所謂四方唐破

風で極めて奇抜な曲線を巧妙に適用して居る。僕は日本の建築家がこれを日光建築中一番振つたものゝ一つとする説に賛成せざるを得ない。門の扉の上に欄間があつて、支那史傳中の物が彫刻してある。これは陽明門に於ける人爲彫刻と共に、珍奇な試みといつてよからう。唐門の左右からも陽明門の廻廊と並立して廻廊が出て居る、此の廻廊は東手に長く延びて居る、そして其處に人が異つた場所に誘ふといふ暗示がスラ／＼と讀まれる。——我々はその廻廊に沿つて坂下門をくゞると奥の院で家康公安眠の御所へと小山を上つて行くのである。勿論最後の本殿が如何にも嚴肅な左右均齊を守つた建築であると云ふことはいふまでも無い。僕は世界各地に存在せる宗教的建築多數を見て居るが、日光の建築位各部が擧つて一丸となり、極めて完全に中樞歸趨の妙諦を具現して居るものが他にあることを知らない、規模の小なることは決して内面的表現の小なることを意味しない。——眞實な意味に於て日光御廟は大建築であるといつても差支ない。僕はそれが龍動のウエストミンスター或はセントポール更には巴里のノートルダムの諸伽藍に匹敵し得ると信じて疑はない。

以上米國技師の觀察は一場の談話に過ぎないから、簡單ではあるが、建築に優れた所のあることは明かに認めて吾等が期待以上に賞讃してゐる、但しデテールに就ては缺點もあると云ふてゐる

るが、それは如何なる建築にもあることで、大體の體制を害することでない。但だあれだけの藝術殿にどれほどの耐久力があるかと云ふ點に説き及んでは、持續の困難を云うてゐる、此點に就ては曾て自分が日光廟を訪うた時の所感を書いたことがある。

日光を訪ふものゝ何人も愉快とし且つ幽玄の感に打たれるは大自然の美である。杉の大森林を街路の杉並木から續いて、全山立派な大森林で、其の境に入ると、物凄くほどである。三代將軍が廟を建築した時でも鬱茂の森林があつたであらうが、爾來神聖の地となつて、斧斤の入ることを許さないから、益々繁茂したであらう。日光は森林を鑑賞する爲めにも遊んでよい所である。さて其の大自然の中に人工の極度を盡した宮殿がある。これは金銀五彩の華麗を盡したもので、鬱蒼の山に深く鎖されて、個様なものゝあるのは、何人が見ても意外とせざるを得ない。別して日光の山は鬱林がある結果として雨師が常に去來して濕氣は漲つてゐる、そこに惜し氣もなく金碧燦爛たる宮殿並に附屬建造物を、野ざらしにしてゐることは實に人を驚かす、金碧燦爛の人工美と鬱積の大自然と互ひに映發せしむるは、美麗の最上の偉觀 相違ないが、よくも思ひ切つて、斯る經營を敢てしたもの、吾等は溯つて當時を考へると、如何さま桃山時代で豊太閤が建築に豪華を極めて、徳川期も三代頃は斯る豪華に目慣れてゐて、京都で豪華

な二條の城を經營したりした。徳川の祖廟に全力を盡して豪華を極めたのも強ち無理もないが、しかし日光の建築美は果して永續するであらうか、數十年前久能山に登つた時には、恰かも大修繕をやつてゐた時で、雨露に剝落してゐた時繪や繪畫をすりおろして改造中であつたが、其の工程の複雑であることを聽いて一驚を喫したことがあつた。日光に於ても幾十年に一回修繕を加へないでは美觀の維持が出来ないとなつては、實に容易ならぬことである。何故に當時の人は巨萬の金を散して、アンナ小規模のものを作つたものであらうか、本殿にこそあらゆる美を盡し、他は白木で神々しく作つたら、著しく規模も大くなり、諸建築も年を経るに従つて蒼老のサビを生じて、神祠佛社にふさはしい崇高な建築が出来、修繕も改造も容易であるべきに。

と、自分は日光の建築美を感じながら其の規模の餘りに小なると、其裝飾の纖巧に過ぎるのみに慊焉を感じ以上の如く云ふたことがある、今日に於ても尙此の考を捨てずに居るが、しかし徳川期の華麗建築の代表として一つ位日光廟のやうなものがあるのは、強ちわるくもない。久しいことと日本を世界に宣傳したのは實は日光廟であることを思へばである。

福内鬼外

節分の行事は氣節の分れ目に行ふ式で、陰鬱な三冬を送つて朗らかな陽春を迎へる分岐點が節分で、曆にもチャンと書かれてある大切な氣節で、種々のセレモニーが今より一千年も前の奈良朝に早く行はれ、平安朝には尤も盛んであつたと傳へられてゐる。これは元と支那の道教から導かれたもので、道教では陰陽は人間の運命と其の吉凶禍福を司るものと説きひどく人心を支配した。元來我邦は日月を崇拜したけれども星を崇敬することは無かつたが道教が導かれてから星を崇拜するやうになり、密教が入つてから一層星を崇めるやうになつた。國家の安泰は星を祭るに由つて得らるゝものと信じたから、朝廷でも嚴かに取扱はれた。節分の追儺の式も其行事の一で、其儀式次第は内裏式や延喜式に規定され、其式には方相を司るものがあつて、大臣參場の席へ面を被り盾と矛とを執つて追儺の式を行ふた。これが俗間に所謂福内鬼外の母胎で、鬪とヒイラギは鬼が嫌ふと云ふて各家の戸口に備へることが古くから行はれ、豆を以つて鬼を追ふことも古るい式である。

民間の此行事は各戸にも行ふが、寺社に於ては場所柄大袈裟に行ふので、大勢が群集するので大いに賑ふ。豆まきを司るものは年男と呼ばれ社祚の禮服姿で、三寶に豆を盛り、家の隅々までまくのが各戸の式だが、寺社では群がる大衆に向つて撒くから大混雑を生ずる、其の混雑が陽氣であるので、陰魔を拂ふにふさはしい光景を現出する、今でも淺草寺や成田の新勝寺などの節分の式は頗る盛んである、兎角年男が大切な役目で、人氣のあるものでないと、式が引き立たないので、年男を選ぶには何方も苦心をする。昨年節分には小石川の護國寺で何某の大關を年男に選み、丁度其頃來朝の米國のサルカスの女優を引張り出し、社祚を着せて豆を撒かしたので、大喝采を博したと聞へてゐる。

節分の行事は凡そ以上の如きものだが、私などは小兒の頃から好きであつた。勿論陰陽の説などは解りもしなかつたが、一場の戯れとしても興あることに感じた、實は節分を期として善惡の清算をすることは美なる習慣である。自分の幼少の時を憶ふに、年男が各室を回つて鬼は外と呼びながら豆を撒くと妙に心が引き立ち、豆の撒れた所は、邪惡が掃はれて微塵も存在しないやうな氣がした。惡しざまの人間が若し家内に居ると、内心恥て改めるであらうとも思ふた。禮服姿の年男は舉措の壯嚴でありながら、おのづからユモアと愛嬌があり、家族を緊張せしめながら微

笑をも湛へしめた。茶目氣分の年男は婦人の大切がる頭髮に向つてわざと豆を亂打するので、それを避けんとてキャツ／＼とさはぐ、男の若いものには顔を目がけて用捨なく豆を放射するこれも避け回はる。その騒々しい中に、男女共己れの年齢に相當する數の豆を拾はんとあせるもあつて、時ならず芝居氣分が漲ぎる。豆撒が終はると男女は年男を擁して胴上げをやる、これも亦陽氣のものであつた。

以上は一家内の事であるが、ハデ好きの田舎の豪家などでは、節分の夕べには、近邊の惡太郎や貧民などが家の前に群集する。年男はそこへ現はれて豆と共に愛嬌を振りまく。豆だけでは人氣がないので。錢や餅や密柑や塗金の黒天などを豆と共に投げ出すから、ひどく賑はひ、皆な一齊に鬼は外と叫ぶ、それが恰かも其家の萬歳を叫ぶのと同じ趣であつた。此時分には鬼は外と叫んだ揚句、鷄鳴の假聲を發した。これは鬼を逐うても關所が開けないと困ると云ふ所から關所守を起すのだと云はれてゐる。

以上のような行事は一切昔し流の迷信を離れて、遊戯として存続してもよいやうに思ふ。今日地方などでは、相當の團體が統制的に之れを行ふてゐる所がある。此團體では年男や福男を投票したりして。會員は思ひ／＼の景物を寄附する、或は寄附を募ることもあるが、金婚銀婚の式を

福 擧げる心持で或る夫婦は進んで之れに参加し自から福男になつたり、いろ／＼の景物を寄附した
内 りするものもある。随分雑沓するから救護班などが自然組織せられて、今頃の文化を現はしてゐ
鬼 る。

外 一年中稼ぐばかりの家では、いつも家内の空気がツメたく、召使などは笑ふやうなこともな
く、上下擧げて騒ぎ興ずることが絶対に無い、斯る家に於て偶にはこんな行事があれば、冷かな
空気がぬくまり、主僕の感情も和らぐに相違ない。そしてコンナ機会に婢僕にくらかの心づけ
をして喜ばせることは、家庭を繁榮に導く一法であらう。私などは右のやうな觀察から此慣習の
持續を主張するものだが、幸にして此慣習は廢らず、昔しに較べて却つて盛んになつた觀がある
のは主として交通が開け汽車の便があるからであるが、成田や高尾山などでは、當日特に臨時汽
車を出すなどの盛況で、お賽錢が五六萬圓にも上ると云ふを聞いた、併し段々お寺も營業的にな
つて來て多少の弊のあることは事實だ。年男福男次第でお賽錢の多寡に影響がある所から、藝妓
や活動俳優を傭うて年男にするやうなことが行はれ、某々の寺々は監督官廳から叱られたと新聞
に見えてゐた。

餘談であるが節分の行事に附屬して種々の厄拂が此時に行はれる。近年の事だが、淺草の觀音

堂の側に、曉天になまめかしい婦人の腰巻が三十も落ちてゐたことがあり、警察では遂に厄拂の
爲めと解したと云ふことである。諸國には色々厄拂の慣習があるが、雲州松江では節分の夕べに
橋の袂に枕を棄てる習慣があると聞へた。淺草の觀音から節分に出す守札に節分と書いてある
「分」の字を割き、之れを妊婦にのませると安産するなどと云ふ種々の迷信がある。

世間の好事家は節分を機としていろ／＼の工風を凝らし人を招き宴會を催したりする。自分の
知人にも毎年二月四日に友人を招いた。自分は其頃豆本の蒐集に没頭してゐたから。豆のチナミ
で其會に臨んでみたが、成る程豆づくしとでも云ふべき工風が何から何まで凝され、床の間には
豆の圖と豆の俳句の幅が掛けてあり、菓子は一合枱に煎り豆が盛つてあり、膳部のあらゆるもの
が皆豆に因んであつて、料理も相應よく出來てゐた。藝者が年男となつて坐中に豆を撒いたりし
た後、多くの電燈を消させ一燈を點し薄暗らき處へ薄紗を纏ふた裸女が現はれて座中を跳り廻は
り人を烟に捲いた、私は翌日禮狀を送つて昨夜は御馳走意外の豆まで拜見ありがたくと謝したこ
とがあるが、兎角豆の工風も軌道を逸しては困る。これにも肅正を要する歟（昭和十一年二月二
日の放送に多少補足したるものなり）

讀書錄

讀書餘錄

出版の今昔

版書版本は文化の生んだ華で、昔は或る階級の外見ることが出来なかつたものである。この華の咲かない前の吾等の遠い祖先などは夢にも版本を知らずに墓に入つた。出版が出来てからも地方のものなどは全く知らなかつた時代もある。今は婦女小兒の娯樂用に澤山の繪本があるが、或る時代には貴族の家でも、お伽草子は筆寫のものであつた。平安朝には既に版書が行はれた頃だが、版書は幾んど寺院の摺經に限られてゐた。源氏物語を書いた紫式部などは、石山寺で版經は見ただもあらうが、己れの筆作に係る大部の小説が、後世版刻されようなどとは夢にも期さなかつたであらうと想像されるが、出版が盛んになつた後の世には、幾十回もこれが板に刻されて教科書ともなり、その注釋、その評論、その拔萃等の末書が幾百に及んでをること式部を地下に起して見せたらどんなに驚くことであらうか。

書物が如何に文化に大切であつても、それが衆庶の眼に觸れないでは、文化に餘り裨益する所がない。出版はその傳播の方便であることは、ラジオが思想の傳播機關であると同様で、出版を知らない國土には文化は無いとも言ひ得るのである。随つて日本の出版の歴史は取りも直さず日本の文化史である。その歴史は複雑であるから、簡単に語ることは困難だが、日本の出版は佛教宣傳より其因を發し、その發達も佛教の隆盛に伴ひ、出版の歴史は佛教の歴史と常に纏綿し、長い間出版と云へば佛教の經典に幾んど限られたものであつた。往々佛書以外の書物即ち外典が出版されたけれども、それは佛書出版の餘波に過ぎなかつた時代もある。

佛教では教義の研究のため又誦讀のために多くの經文を要したが、經文を作ることが佛の供養とされ、亦罪障消滅と云ふ思想からも作られたから、其數は實に夥しいものであるが、それは宗教を弘めるに功があつても、直接一般文化を裨益したのは佛書以外の書物が多く出版されてからで、それは比較的近世の事に屬してゐる。文權は久しく僧侶の手にあつたから、僧侶の爲めに詩文や字書や韻書などは寺から出版されたこともあるけれども、一般圖書が佛典から獨立して出版されるに至つたのは、文祿の役に朝鮮の活字を持ち來り、出版界に一生面を開いてからの事である。豊公の征韓は此意味に於て日本文化に偉功があると云ひ得るのである。

日本の最古の出版は世界最古の出版で、それが矢張り佛典であるが、勅版から端を發してゐるのは面白いことである。則ち聖武帝が百萬塔を寺々に納めらるゝに當り、塔内に置く百萬部の四種の陀羅尼を印刷したのが、所謂寶龜版で、此時代には世界のどの國にも出版はまだ無かつた。支那の書物には寶龜に少しく先んじて出版があつたと書かれてゐるけれども、其の實物が存在しないから、日本が最古出版の誇りを持つものである。この陀羅尼經は小さなものであるけれども、其數が百萬と云ふ大量である爲め、便宜上出版が工夫されたが、それが木版であつたか金屬版であつたか、研究家に一二の説はあるが、金屬版であつたらしい。これが空前の最古の出版で、この先蹤はありながら、久しいこと出版はまだ行はれなかつた。

古く佛教の開けた所は、奈良の舊都で、こゝには東大寺興福寺法隆寺等の名刹があり、この興福寺の配下には春日社があり、紀州には高野山があり江州には叡山がある。京都を繞つて、多く有力の寺があつたが、京都も各宗の本山があつたので、京都を中心とする上方が、出版の淵藪で、寺々の出版物はこゝに輻輳した。大なる寺院には自から版を刻し且つ自から印刷した所もあつたが、多くは京都の書肆に由つて出版され、江戸に徳川幕府が開け文權はこゝに移つても、出版となると京都が專賣で、諸侯その他が出版を企ると、多くは京都の書肆に托した。江戸で盛ん

に出版するやうになつたのは降つて元祿頃である。京都は江戸の如く火災の無い處だから、方々から托された版木がこゝにどれほど堆積したか、想像も及ばない程の大量であつたに相違ないが、預りものであるから勝手に處分することも出来ず、縦まゝに出版することも出来なかつた。當時の法として、版木を二三軒の書肆に分けて預ける法が行はれたから、其書肆が共同しなければ、出版が出来ないので、そこにおのづから版權の保護と制裁もあつた。江戸に出版が盛んになつた沿革的記述は煩瑣に渉るから、それは後項に點出することゝして、出版界の大勢を知る便宜のため、左の六類に分つて多少の觀察を試みよう。時代を逐ふて多數の書目を列擧する如きはこの短篇の企て及ばない所であるから、六類に就て聊か述るに過ぎない。

- 一 勅 版
- 二 官 版
- 三 諸 侯 版
- 四 豪 族 版
- 五 寺 院 版
- 六 私 版

此分類は勿論學術的ではないが、談説の便宜から假りに斯く分つたに外ならない。

(一) 勅版の最も古いのは聖武帝の百萬塔納經四種の陀羅尼で、これが日本ばかりでなく、世界の最古の出版であることは前に言つた通りである。其後朝廷の支援で多くの名刹から種々の經典が出版されたが勅版は其後長く無く、文祿二年秀吉が朝鮮から獲た活字を朝廷に獻じたので、時の天皇后陽成帝が、その活字を以て古文孝經を出版遊ばされ近侍に賜つた。これが聖武帝勅版後初めてあつて、其後同じ御宇の慶長二年より同八年に至るまでに、錦繡殿、勸學文、日本書紀、神代卷、四書、職原抄などが出版されたが、その活字は朝鮮に倣つて製作されたものであつた。尙後水尾天皇も父帝に倣つて元和七年に皇朝類苑十五冊を活字で印行せしめられ、これも近侍に賜つただけで、廣く流布しなかつたにせよ、以上の勅版は大なる刺戟を公家其他に與へ、徳川家康が、特に活字を製して皇室に獻ずるに至つた。家康が足利學校の元信(三要)に命じて作らせた木活字や、晩年林羅山や金地院の崇傳に作らせた銅活字などで、大藏一覽集、群書治要、孔子家語、三略、六韜、東鑑、其他を刷行したのは、勅版の刺戟に由るとも云ひ得るのであつてこゝに注意すべきは、儒書が漸く佛書から獨立して出版さるゝに至つたことである。

(二) 官版は爲政者の出版であると解すれば、勅版も官版であり、家康の出版に係る數多の圖書

も官版と見るべきであらう。徳川將軍が諸藩に命じて出版せしめたものも官版に準ずるものであるが、勅版と諸侯版は便宜上類を立てたから、それを除くとすると、官版は樂翁公執政の時多く出てをる。林述齋が昌平學校で官版の銘を打つて出版された多くの書物は支那刊本の覆刻であつた。支那に佚して日本のみに存する佚書の叢刊（佚存叢書）と稿保己一の和學講談所で出版した群書類従なども共に幕府の補給で出版されてゐるから官版として差支ないであらう。

（三）諸侯版と云ふのは各藩で出版したものを云ふので、藩には大抵學校があつたので、その教科用に出版したものは勿論少くない。又藩公に著述があつてそれを出版したことも少くない。水戸の大日本史の如きは其顯著の例である。尙徳川幕府は諸藩に令して出版を奨勵し此結果として、各藩競うて思ひ／＼の出版を試みた。それ等は大抵儒書で、宋版の覆刻も少くなかつた。如何なる小藩と雖檢討すれば必ず何か出版のあるのは、幕府の奨勵に由來するものである。諸藩の出版の内によく知れてゐるのは、川越版の校刻日本外史などである。この書は確か八版位重ねて、江戸の板木師は長い間この板刻に専らかゝり切りであつたと云はれる程盛んに行はれた。同藩では當初學校用に版刻したので、營利の爲めにしたのでなかつたが、この版本が盛行のため、頼家の出版が押されて一向賣れなくなつたので、頼家から版權の訴訟をやつた結果、二萬圓の權

料を取るに至つた位よく流布したものだ。尙道樂出版とも云ふべきものを舉ると、樂翁公の集古十種の如き豪華版があり、水野氏の丹鶴叢書百三十餘冊の佳版があり、富山侯が本艸の豪華版を作りつゝある時、仕事場が火災に罹つたので、擔當者が斬罪に處せられた悲惨事があつたので、後世その書に「人斬り本艸」の名を留めるやうな椿事もあつた。

（四）豪族版と云ふのも自分の便宜上一類を立てたので、諸侯にもあらざる人で、出版界に功績ある有力者の名を没却したくない微意に外ならないが、此部類には正平版論語を刻した堺浦の道祐がある。同じく堺の阿佐井野宗瑞は醫書大全を刻してゐる。高師直、足利尊氏が罪障消滅の祈願に佛典を刊し、尼子晴久、大内義隆にも刊經があり、秋田城介泰盛は高野山の開版事業を助けて功績あり、直江兼續は文選を開刊し、豊臣秀頼は倭漢合運圖を出版してゐる。本阿彌光悅、角倉素庵が幾多嵯峨本を開刊してゐると、醫師で出版に功績あるものは小瀬甫庵や五十川了庵、延壽院玄朔、醫徳堂守三、梅壽軒などがあつて、共に活字本を多く出してゐるが、以上醫家の出したものは醫書のみでもない。以上は書史に著名の人々であるが、皆室町より慶長に到る出版の困難時代の有力者であつた。尙以上出版の内、嵯峨本と唱ふるものは、光悅の獨創の意匠に成り、光悅書風の活字を作り、紙も特別に作らせ、或は五色に染め或は雲母を引き、標紙には雲母

の繪で裝飾せらるゝなど、當時のみならず後世に至つても異彩を放つ豪華本で、此式で謡曲百番が開版され、光悦の門人角倉素庵は師の意匠に倣つて諸版を作つた中に史記の出版もあつた。

(五) 寺院版は出版歴史の最も須要の類で、出版の最初でもあり、亦一般圖書出版の範ともなつたものは此類である。日本最古の百萬塔納經は聖武帝の勅版であることは前に陳べたが、この古い先蹤はありながら、追隨は餘程後年で、寛弘六年(一千九年)十二月の御堂關白の日誌に中宮の御安産を祈るため法華經千部を「摺初」したことが見えてゐるが、或は此頃が經典出版の初めであるかも知れぬ。佛教では摺經供養が大切とされ、多くの經を納めれば、納めるほど功德がありとされたから版經が珍重されたことは言ふまでもない。南都の興福寺東大寺西大寺法隆寺などは帝室の歸依もあつたので、寺の裕福時代であつたから、各寺が競うて摺經を行つたことは想像に難くない。尙南都諸寺の外に空海の野山があり最澄の叡山があつて、こゝにも多くの摺經が行はれ、京都は後の帝都で各宗の本山は爰に集まつたから、各宗の摺經が盛んに行はれた。殊に禪宗が導かれてから、近世名づけて五山版といふものが出た。この宗は武家の支持を得たので、南北朝時代には隆盛を極め、經典の外に外典も多く出た。これまでは寺院は隆盛であつても、經典の出版に忙しく、未だ儒書、詩文、字書、韻書などに手が延びなかつたが、五山隆盛の時には

多くの宋元本が支那から舶載され、五山の寺院は之を覆刻する爲めに多數の刻工を支那から招致したから、此際の覆刻に佳版の多いのも偶然でない。この覆刻のため吾刻術も一生面を開き、後來進歩をなしたのはお手本が宋版で、指南番が本場の刻工であつたからとも云ひ得よう。五山版は匡郭の一隅に姓名が細刻されてゐるが、それが即ち支那の刻工の名である。尙支那の刻工俞良甫、陳孟榮の兩人が特に自家の名義で、刻した相當大部の儒書がある。此等は寺の出版とも思はず、彼等の自家出版とすると、南北朝時代の一異彩と見るべきものである。

活字が導かれてから、京洛の各寺は競うて活版の法を用ひて摺經を行ふた。その寺院の中にも法華宗の要法寺が最も多く活字本を出した。勿論寺で活字を作つた。所謂要法寺活字と云ふもので今でも、存在してゐる。直江版の文選も實は要法寺版である。此寺の僧は日性で圓智と云うたが、出版には餘程の熱心家であつて、佛書の外に、論語集解、太平記、沙石集、倭漢皇統編年合運圖などを出して、慶長五年より同十八年迄十數種の本を活字で出版してゐるのが、活字應用の顯著の例である。高野山比叡山等にも活字版の行はれたことは申すまでもない。後年活版を底本として覆刻された出版が少くないが、如何に活字が盛んに行はれたかの一端を語るものであらう。

宗教出版の因縁でこの類に附記を要するのは、耶蘇教徒の天草版である。天正前後九州に耶蘇教が盛んであつた頃、宣教師が本國から、印刷器械を携帯し、幾多の書物が出版された。それは總じて天草版と云はれてゐるが、耶蘇教布教の用として信徒の間に流布したもので、宗旨に關する書物外に日本の歴史や文學もある。即ち平家物語、太平記のやうなもの、外に、字書などが和字を以て出版された。これ等の書物は耶蘇教の禁令と共に影を收めたが、この活字版は朝鮮活字の渡來より數年先だち、活版の先輩であるが、これは宗教上に専用された爲め、他の出版物に何等の交渉もなかつた。

(六) 私版の類は勅版や官版に對して云ふのではなく、モット廣く前に擧げた五類の外のものを全部包羅して云ふのである。豪族版などは勿論私版であつて、その尤なるものである。出版の困難時代には有力者で無ければ私版を作ることが出来なかつたが、追々板行の術が進むと、個人が自家の著述を出版したり、書肆が独自の見込で種々のものを出版するやうになつて、官府や寺院に獨立して出版が出来るやうになつたのは主として經濟状態が斯ることを可能ならしめたからである。元祿時代以後江戸の文化が多く、圖書を生み出したのは、概ね此類に入るのだから、其の一端と雖この短篇に陳べることは出来ないから、僅かに一事を陳るに止める。それは江戸文學の

隆盛につれて、娛樂書の多く出版されたことである。それは太平の文化を語るもので、既往には多く見ないことである。勿論多少娛樂の書物は早く出版されてもゐるが、繪入本の出版は江戸時代に最も盛んであつた。これは浮世繪の發達に由るものでもあるが、娛樂の書には必ず挿繪が伴ひ、終には本文よりも挿繪の方が讀者の喜ぶ所となつて、草双紙などは宛がらバノラマ式に毎頁にあつて、それが半分物を言ふやうになり、繪の板刻は江戸が本場とさるゝまで進んだ。

以上の如き簡単な説話でも出版の大勢が略々分れば望外の幸であるが、尙二三觸れて置かねばならぬことがある。それは或る時代に偽書偽版の出たことである。偽書は内容の論で、こゝには關係がないやうでもあるが實は幾多の偽書偽版の出たことは、明かに出版界が進歩して、それだけ餘裕があつたことを語るものである。日本にはまだ纏まつた偽書偽版考は著はされてゐないが、自分が會て聊か調べた結果に據ると、意外に澤山あるのを認めた。其委曲はこゝに語ることを得ないが、著名なものには舊事大成經と云ふ大部のものがある。これは伊勢の内宮外宮のお株を奪はん爲め作つたものであるが、相當の勞力と資力を以てしないでは出来ない業であつて、遂に禁版となり著者は罰されてケリが附いた。尙寺や家の本末の争で、證據として作つた系譜や縁起類の偽書や、神道佛教の兩部一住説を浮屠氏が方便の爲め偽書で宣傳したものが少からずあ

り、書肆が營利の爲め、學者が學殖を銜ふ爲めに、佚書を偽造して正書とした類等は一々擧げるのも煩はしいが、こんなものゝ多く出たのも、出版界にそれだけ餘裕が生じた一端を語るものと云はざるを得ない。尙以上と相似た一事に聊か觸れて置きたいのは、末書の盛んに出版されたことである。末書と云ふは本書乃ち根本書に對して云ふので根本書は唯だ一であるが、それに附屬する末書が頗る多く出て、著名の書物となると末書の出版が數百に及んでゐる。乃ち長く流布した寫本には轉寫の誤があるので、それを校正した本が幾種も出で、その注釋本が亦幾種も出で、評論書が出るとそれを駁する書が出版され、摘要の書やその書に擬した書迄も刻さるゝ仕末で、日本の古い時代の根本書を煎じ詰めると、割合に少いものであるが、末書の多いことはこれに十倍——百倍し目錄は多く末書を以て充たされてゐる。此類の書物は古事記や日本書紀や萬葉集や源氏物語其他のクラシックであるが、これも亦出版區域が大いに擴がつたことを語るものである。

以上の如く偽版や末書が多く出た位だから、江戸時代の出版隆盛期には、出版の冀望者は格別の困難なく其目的を達したであらうと想像するのも強ち無理はないが、事實はさうでなくなかなか難儀をしてゐる。その事實の一二を語るのも、當時の出版界の實情を知るに無益でもあるまい。

と思ふ。柴野栗山には雜字類編と云ふ二冊の著書がある。初學に熟字を教へるために編したもので、どこの古本屋にも轉がつてゐるものだが、誰もそれを見て栗山が出版に苦心したと考へない。それも其筈、昌平大學の三大儒の一人である栗山先生あれほどの本を出版する氣があれば、どんな書物屋でも直ちにお受けをして、ヤス／＼と出版したであらうと思はれるが、事實はそんな譯のものでなく、今の人が想像も出来ない苦心を経てゐる。栗山は先づ刻工を自分の家に置き、それに衣食を供して彫刻させた。當時は旗本の次男坊などで、生計の爲め版木師となつたものがいくらかあつた。栗山は之を捜して家につれてきたのである。さて一年も費して刻は成つたが、之を刷るに、紙が要る段となつて、之を購ふ資に窮した。そこで郷里讃岐の實弟で醫業を營んでゐるものに手紙を寄せて紙代を借りたいと無心を乞ふて、若干の借銀をしてヤツト出版したのが此書の出版された経路で、其手紙が現存してゐるので、私と雖其意外なるに驚いた。若しこの手紙が無かつたら、何人も書物屋の出版と輕々に理解するであらうが、當時の大儒でも僅かに二百枚許の出版に自ら刻工を備ひ借金までして、紙を購はなければ成功しなかつたことを思ふと、當時出版の容易でなかつたことが窺はれる。

福山藩の儒者太田全齋の韓非子翼叢(十一冊)は韓非子の注釋本で、支那にも誇り得る名著だ

が、その出版には悲哀の歴史がある。全齋が多年心血を灑いだ此書が脱稿した時、江戸の藩邸附近に火災があつて、藩邸が類焼すれば、此苦心の結晶も一炬に附し去つたかも知れないのであつた。幸ひに免れたが、全齋は此時戦慄しながら案じた。僅かに一部しかない稿本が、どんな變災で亡びないとも限らない、せめて二十部位版にしたいものと考へた。偶々知る人から木活字の供給があつたので、家庭で年少の小供等を役して組にかゝつて見ると、足りない文字が澤山あるので、先づそれ等を補刻する必要が起り、それを長男次男に課したが、それが容易の業で無かつた。この補刻中全齋の妻が病に臥したので、まだ乳離れをしない幼児を全齋が抱いたり負うたりして兒等を督勵して、泣きの涙で、辛うじて二十部を印刷し卒へた。この家庭の印刷には四人の青年兄弟が皆與つたので、全齋は其の仕末を敘して巻尾に附し、子供の名を列記してゐるが、この仕末書は涙なくしては讀めないものである。

菊池容齋の前賢故實は、歴代著名人物の風貌とその時代の服裝を考證して繪にしたもので、今は珍重されて居るが、しきりに繪本が刻された江戸時代だから、何の面倒もなく出版されたと思ふ人が多いが、事實は之に反し、容齋が半生の心血を灑いだ此本も、當時出版の方法が無かつたのである。芝増上寺の學僧福田行誠が、容齋に同情を寄せて、或る富豪を説いて千圓の資を出さ

せ、それに由つてヤツト世に出たのが此書である。斯る例はまだいろいろあるが、他は略するとして、平田篤胤が前金豫約の法を案じて、自家の著述を出版したことを語らう。

平田篤胤は秋田出身の倭學者で、該博の學問がある上に經綸もあつたので、その豊富の著書が盛んに流布した。併し篤胤の著書もヤス／＼と出版された譯ではなく、なか／＼苦心の結果漸く成功したのである。篤胤は先づ購讀講とでも云ふべきものを方々に組織し、その講元を江戸と大阪に置いた。この講中の規定の大略を云ふと、講員は毎日神棚を拜する時に、必ず十文錢を賽錢として神棚に上げよと勧めた。これが一種の貯金法で、一三ヶ月若くは五六ヶ月を経ると、其金を講元に届ける。さうするとその價に相當する篤胤の著書が配本されると云ふのが規定の骨子で、毎日十文錢を神棚へ上げる位は、誰れにも苦痛のないことで、それが積れば篤胤の新著が手に入るから、多くの人々は喜んで之を實行した。講元は信用ある富豪で、金の管理に聊かも間違が無かつたので、この法が成功したと云はれる。自分は曾てこの宣傳ビラを手に入れたことがある。それには貯金の法も書物頒布の法も委しく且つ巧みに書かれてゐたが、多分篤胤自身が書いたものであらうと思つた。篤胤の著述が多く出版され、所謂篤胤宗が到る處に出來たのも、斯る手段に由つたからであらう。前金豫約法を巧みに工風したのは流石に社會通の篤胤である。

江戸時代は出版の隆盛期であつたとは云へ、實際に於て以上語る如き悩みがあつた。慶長頃に風靡の勢をなして、整版を壓した活版印刷も漸く衰退して江戸時代に整版の復興を見るに至つた。江戸の出版界には稀に活版印刷もあつたけれども、大體は整版印刷であつた。これは一寸不思議に思はるゝ現象で、活版が便利とされ、それが整版を壓するまでに行はれたとすれば、活版が益々珍重され江戸の出版界も既往に倍する活版の盛行を見るべき筈であるのに、その然らざるは整版が漸く發達して敏速の點も敢て活版に譲らないのみならず印刷の面目は活版に比して優つた故でもあらうか。兎に角活版の隆盛期は明治以後に屬するのである。明治より今日に至り活版は遂に整版を壓し、整版は幾んど其影を止めない迄に至つたのは既往に見ざることで、全く活版の威力に由るものである。但し今日の活版を以て慶長頃のものと比較することは不倫である。私共は明治以前の活字を古活字と稱してゐるが、この古活字は多くは木彫で、版に字を彫る代りに活字を植ゑて彫刻の勞を省く相違があり、一旦用ひた活字を幾回も使用する便利はあるにせよ、實はそれだけでは整版と餘り隔りが無い。況して當時は印摺の術が進まず、一枚／＼の手摺であつたから整版の印刷とは些しも違が無かつた。一時盛つた活版が、衰退した原因はこの邊にもあつたであらう。實を云へば活版の威力は活字にあると云ふよりも刷行の敏速にあるのである。活

版の本能は全く機械の作用で發揮せらるゝので、斯る發達を見たのは明治以後の事に屬してゐる。活字で一枚版を作ると紙型に取つて同じ版を幾枚も幾十枚もつくり、輪轉機にかけて一瞬幾百千枚を印摺し、それを裁斷機で斷り離し、更に機械で綴る如きは江戸時代に於てすらまだ無かつたことである。斯る敏速の功程が出版の價を低廉にし、書物を廣く流布する原因をなしたのである。但しいくら廉價出版が出来ても運搬の便が開けねば流布は出来ない。更に書物を欲求するだけの文化即ち教育が普及せねばならぬ。今日毎朝百萬以上の新聞紙を發行する社が京阪で數社あり、一部幾十萬の雑誌を發行するものが幾社もあるのは、單に印刷術の進歩に依るばかりでなく、社會の進歩に由るものであることは云ふまでもなからう。

以上の如く大量出版が要求さるゝやうになると、獨立の製産會社の起るのも自然の勢である。昔も印刷所があつたであらうが、すべての印刷は書肆が擔當して之を刻工や印工に頼つてやらせた。獨立して印刷業を専門とする會社などは無かつたやうである。昔寺院で盛んに出版した時は寺院自らも印刷したが、寺院附の書肆が御用をつとめた。川瀬一馬氏の調査に依ると、慶長寛永頃に寺院の用をたした書肆が四五軒も寺町にあつたと云ふて、其表を示されたことがある。此等の書肆は即ち印刷者であつたのであらう。今日では印刷業は書肆と獨立し、大書肆と雖印刷

工場を有するものはいくつも無いが、併し多少の除外がある。新聞紙のごとき敏速を要する出版をなす所は社内には必ず工場がある。内閣に隷屬する印刷局などは獨立の印刷所として早く起つたもので、民間に印刷會社が起つてもこの局で種々の印刷をやつた。元來この局の主務は紙幣、印紙、官文書等を發行する特別の任務があるので、そこに特異性があるが、私設の印刷會社も早くから續出して、一張一弛の沿革はあるが、時運に伴うて今日では西洋に比して遜色のないまでに發達してゐる。その發展は機械の充實などばかりでなく、寫眞術の發達と相待つて美的印刷が大いに進んだ。しかし我邦の印刷には西洋と異なる難件がある。西洋では廿六個の羅馬字を組み合せる單純なものだが、我邦では「いろは」四十八文字の假名の外に、數萬の漢字が交るので、活字を作るにも活字を拾ふにも、複雑な手数がかゝつて職工にいくばくの教育も要る。今より僅かに二十年程前、早稻田大學出版部と富山房が互ひに相期せず、漢文の出版をした際の事を想ひ起すが、早大出版部では漢籍國字解全書を、富山房では漢文大系を毎月一冊、十數ヶ月に涉り定期的に續刊を企てたが、當時第一流の印刷會社は毎月一冊を製することを引受けなかつたので、已むを得ず早大では一會社を起すことを計畫するに至つた。それが今共同して大日本印刷會社となつてゐる日清印刷會社を起した動機であるが、富山房でも同じやうな難關に出遇つて三四の一流會社

に仕事を分擔せしむることを餘儀なくされたと云ふが、二十年前は印刷の幼稚時代でもないのに、漢文となると尙この悩みがあつた。

明治以後の出版界に就ては沿革的に語るべきものが少くないが、餘りに近いことであるからすべてを略する。唯最後に觸れて置きたいことは、書肆が漸く確實性を帯びてきて、或る時代には書肆が獨立でなし得ないことゝなつてゐた事業が今はそれによつて成され、官府が爲すよりも、學者がなすよりも却つて確實の信を博するに至つたことである。それは數年若くは十數年を要する大部の書物の出版である。就中文字書辭典の類は編纂に多くの歲月を要し、昔は官府の力で別に一局を開き、多數の専門學者を會し、巨大の資を投じて幾十年も費し、僅かに成したことを今は有力の書肆の手で着々出版さるゝことになつた。これを餘り古い時代でもない蘭學渡來の時、學徒が一々字書を筆寫した頃の事を思ひ、薩摩字書が初めて出版された時、官府がそれを買上げて頒布を手傳つた頃のことなどを考へ合せると、眞に今昔の感に堪へない。今日の字書辭典は曾ての如く洋書の翻譯を事とする舊套を脱して獨創のものが多くある。百科辭典なども一部十數冊のものもあるが、これも獨創のもので、西洋のエンサイクロペディアに較べて決して譲るものではない。如斯は明治以後出版界の偉觀で、書肆が目前の小利を顧みず、其氣宇を大にした爲めと、そ

の實力が増進した結果で、慶ぶべき現象とは云ざるを得ない。(「富山房五十年」に掲載したるもの)

書物の敵

圖書の敵は種々様々あつて或は全部を滅し、或は其面目を害しあたら貴重のものをメチャクにするには、圖書に對する冒瀆であり罪過である。其の罪過の最も重きものは戦争や革命或は忌諱などに由り、わざと幾萬の圖書を束ねて劫火に附することであるが、實は圖書に對しての無理解から其取扱を粗略にして、蠹魚の餌にすることを顧みず、或は雨露に侵さるゝを保護することをせず、動もすれば圖書を崩して厠紙となし、或は焚料に供するなど、其の程度は小なれども、其の罪過たるや同一である。

凡そ圖書に對する無理解ほど恐るべきものはない、彼の眼には、書いたものは一概に無用の反故と見へて、父祖の執筆に係るもの父祖の愛藏したもので、それが整然書冊の體をなしてゐないと、直ちに反古と見做して、或は襖や屏風の下張りにすることが、昔しから頻々行はれてゐるが、實は其の廢紙らしいものゝ中に、ドンな貴重ものが潜んでゐるか、無理解者には分らふ筈もない。されば道風の書が反故中から發見されたこともあり、清盛重盛などの書が反故裏から出

たこともあり、文翰志林の寫本が將さに下張りとならんとする利那、或る識者が助けた例もあり、屏風を改装するに方り、其の下タ張りから多くの貴重な文書を發見した例もあり、ゼシユエツト本の表紙裏から、貴重な版本の零紙を獲た例もある。古い寺院や由緒ある舊家などには、一片の反故でも容易ならぬ稀覯のマニユスリツトがあるから決して油斷がならないものである。然るに無智無理解の故を以つて厠紙とされ焚料とされたものがどれほどあるか、斯くして失はれたものゝ多いことを想ふと、實に寒心に堪へない。假令ひそれが無理解に由るとは云へ、實に慘虐の甚しいものと言はざるを得ない。

以上の如き圖書の無理解から生ずる過失は是非なしとして、自ら圖書の愛藏家を以つて任じ、圖書に相當の認識を有しながら思慮の足らない爲めに、顰蹙すべき悪行をなすものが少なくない。昔し行はれた手鑑を作ることなどは、折角一部纏つてゐる貴重な寫本を寸斷して幾十百の帖に貼付け標本帖を造つた。それは一部として賣らんより截つて多くの斷片を賣る方が儲かると云ふ打算から出た過であるが、實は惜しいことをしたものである。或人は名家自筆の文を集めんとして書物の序跋を切り離すものがあり、簽題や挿繪や標紙などを切り抜いて一部の書を毀損するもあり、之等は標本を寄せ集めんと熱に侵された所爲で、圖書に興味があつての業であるが、

断片零紙を廢書から拾ひ集めるなら差支もないことだが、折角整つた書冊を解き放つたり断截したりして書物を毀損することは罪の深い所業と云はねばならぬ、或る人は其性癖から矢鱈に藏書印を幾つも所構はずべたく押ししたり、或は無闇に拙惡の字で書き入れをしたり、或は古色ある書冊の表紙を改めたり、或は小口を断截して原形を變したりするものもある。此等は強ち惡意のある譯ではないが、書物の面目を害する點に於て確かに冒瀆である。書物屋が二冊三冊合卷となつてゐるものを漫りに分冊したり、巻尾の刊年や奥付を刪去し、若くはそれを偽造したりする例も決して少なくない、亦書冊に厚味をつけるため或は入紙し或は裏打をするなども多少の除外はあるが、紙質を辨し難からしむる意味に於て褒めた話ではない。書名の知れ難いものに書店が勝手の書名を選ぶなどは全く沙汰の限りである。此等の冒瀆と罪過は數へ立てれば殆んど際限ないほどあるが、自分は更らに製本に就て聊か考察を試みん。

書物に大切な關係を有するものは製本であつて、製本の爲に書物の外貌が美ともなり醜ともなり、書物を手にして快感を興へると否とは一に製本に依ることを想ふと、製本には深く注意を拂はねばならぬ。前にも云ふた如く圖書の補修に裏打をすることが止むを得ない場合もあるが、實はよくないことで、それが爲めに蠹魚を誘致したり紙質を辨し兼ねるやうにする失もあり、ウブ

の原形を傷害することにもなる、裏打に比すれば入紙がまだ優しである、其の入紙の方法は支那と日本に多少の相違があるが何れかと云ふと支那の方が優つてゐる。支那では入紙に白紙のやうな極めて薄手の紙を選び、原紙よりも上下兩部に二三分入紙を伸ばしてゐることが、日本と異なる點で截斷も入紙の伸びた所を斷ち切るから、原紙は完全に保たれ、薄紙の入紙だから開閉もしなやかで、甚だ呼吸がよく、流石に書物を尊ぶ國の美習だと、日本も之れに倣らひたいと思つてゐる。尙ほ帙を作ること法帖を表装することも支那には日本に優る點があつて、日本の装釘はどうしても支那のごとくフツクラせず、ゴチ／＼して呼吸がわるい。支那は製本費が廉であるため、我邦から態々彼れへ送つて和本すら製本せしめることが行はれてゐるが、併し國風が異なるため、充分の指定をしてやらないと往々取り返しのつかない遣り損ひが起る。いづぞや林道春自署の本を或る人が支那に製本を托した所、出來たのを見ると、道春の署名が刪去されて影も無いので其人はひどく驚ろいた、實は其書物は道春の手澤本と云ふ所に値打があつたのに、その證據となる自署が刪られては、持主が困つたのは無理もない。尙ほ足利寫本などに高僧の書入などが往々あつて、日本では之れを重んじてゐるが、彼等には斯る理解がなく、蠅糞と同視して取り去る危険があるから注意せねばならぬ。

愛書家にも種々の性癖があつて、古びた表紙の汚れや破れをひどく嫌つて、一刻も其儘に置きかね、直ちに表紙を取り換へたり、小口の汚れを截ち切らねば承知の出来ない人がある、或は自分の好みの表紙や題籤を用ひねば氣が済まぬ人もある。或る人は本の美觀を欲する爲め、本の輪廓外の餘白を全然斷り去つて、之れを帖に張り込絹表装をして金欄の帙に入れたりする人もある。現に内府に藏しある宋版の陸放翁集などは、此の最後の例に屬するもので、申分のない立派な宋版ではあるが、原形を損してゐるのが如何にも惜しいもので、十數年前支那の提學使黃紹箕等を案内して幾部かの宋版を見た時、此の放翁集も出たが之れには彼等は一顧も與へなかつた。私の拙藏にも同じ例となるものがある、それは汪敬淑の最小の印譜「錦囊印林」で、申分のない鮮明な本だが、皆な輪廓外の餘白を切り去つて帖に張りつけ、緞子表装がしてある、其外貌は如何にも美麗であるが、原形が失はれてゐるので、隨つて價も半分位であつた。斯ることは所藏者の潔癖から書物を大切がる爲め、貴重にしたい一念が却つて識者の唾棄を招く過失に陥るものである。

體裁の美化と原形保護とが往々にして衝突する、こゝが書物冒瀆の岐路で、頗る危険な處だ。假とじの本などは勿論體裁が整はないので、愛書家は多くの場合表紙をつけたりするけれど

も、假とじにも一種の風味があつて、原形のまゝになし置くことが大切の場合が少なくない。昔の書札の體に奉書を二ツに折つて書く例がある。此二ツ折が原形であつて、それが或る時代を語るものである。普通の半切と格好を同一にするには裁斷の念の動くものだが、原形の保護から見ると、之は冒瀆であり毀損である。書畫趣味のある人に往々古經の裏を打つ、經の用紙が麻紙などであれば、裏を打つ必要もなく、ウブな麻紙の特徴を表裏に存する所に風味があるのに、それを没却して顧みない。殊に危険なのは製本師や表具職が經文の末端を斷ち切ることである。此の末端には往々にして若干の文字がある。それが寫經生の名であつたり、校閱者の名であつたりすることもあり、筆者の名の記入あることもあつて、大日本史料などで調べて見ると其の筆者が分明することもあるから之れを裁斷し去ることは、大切な文獻を喪失するもので、其の過失は冒瀆以上であるのに、書畫愛好家の中に此の過失を敢てするものが少なくない。

外國でも製本師がアタラ貴重書を改装してメチャクにした例は少からずある。愛書家が製本師のヤリ損しを憎むこと惡魔番ならざるものがあり、或る時代の有名詩人は詩を作つて「貴重書の斷ち屑を集めそれに點火して製本師を焚き殺しても憤懣を醫し得ない」と叫んだものすらある。兎角製本師は古本の汚穢を厭ふてそれを美化することが本職であるとは云へ、實は一種病的

とも見らるべき本能で、汚穢な處に刀を揮ひたくなる。詩集などには特に餘白が多く残つてゐるものがある。それを斷ち切つても敢て本文を侵さないからと云ふて、深く刀を揮ひ折角存してゐる餘白が縮まつて原形と全く異つたものとなる。如斯は製本師にこそ美觀でもあらうが、愛書家から見ると鮮血淋漓の慘禍で、製本師に濫裁家など云ふ綽名のあるのも偶然でない。彼等の刀は不用の毛髪や爪を去るに止まらず往々にして手足の指にまで及ぶから、濫裁の名は辭し難いのである。但し製本師には圖書愛重の教養があるでもなく、特に工場の職工に之れを望むのは野暮の沙汰で、貴重圖書を補修のため一日でも一夜でも此の危険な手に委することは、愛書家の戰慄すること、貴重書の修補を已むを得ずとする場合は、自から信ずる製本師を充分監督してやらせる外はない。

愛書家が愛書の美化を欲して、製本師の乗ずる所となり、原形を滅するの過失に陥るのは寒心すべきであるが、併し愛書家の主張にも一應道理がある。曰く如何に貴重書でも餘りに體裁が蕪雜では、家人に濫妄な取扱を受ける危険があると、如何さま家人が無用の反故と早合點して還魂紙料に葬り去ることは随分あることだが、自分は此難を避けるため、見すばらしい書物や文書などは特に不相應の立派な箱を作つてそれに納め置く、斯くすれば無理解の家族と雖粗略にせ

ぬ。恐らくこれも一法であらう。亦前に云ふた、書物の標紙を自家特定の標紙に換へる習癖のある人に注意すべきは、元の標紙を存して其上に自家特定の標紙を装ふべきである。標紙は二重になるけれども、外貌の美と共に原形を併せ保つの一法たるを失はない。これは現に圖書館あたりで實行してゐる方法である。亦見すばらしい書物を改装せず、それに立派な帙をつけるのも箱に納めると同様、保護の一法であらう。自分は前に裏打の非なるを強調したが、敢て絶対に非としたのではない。随分物に由つては裏打をせねばポロ／＼で手にすることの出来ないものもあり、蟲喰を繕はねば仕末のゆかないものもある。流石に前田家の如き大名は修補の術は實に精到であつた。松雲公時代には表具の名工を邸内に集めて、宛から古畫の損所を補修すると同じ方法で、蟲喰の箇所を丁寧に繕はせた。之は製本師を超越する技術で一つの蟲喰を補ふにも全幅の力を籠めたから、一日の工程は遅々たるものであつたに相違ないが、其の修補の跡を見ると流石に肉眼では辨し兼ねる程よく補つてある。如斯は一般の做らひ難いことであるが、確かに古書修補の範とすべきことだ。前田家は有名な寺々にある古文書を澤山に影寫したが、其の影寫したのが二三十枚金澤の某富豪にあるのを一覽して其の丹精を凝してあるのに一驚を喫した。字は勿論寫眞を超越する程よく影寫して、蟲喰ひの處は畫家の筆に係つて居り、各紙に一々附箋があつて、

寫生、畫工、校閲者等の名が列記してあつて、其責任が明らかにされてゐた。又嘗つて前田家の陳列に製本の様式が模型に作られて、和書、漢書、和歌等々類を分つて宛から實物を見るやうにそれ／＼標紙、題籤、綴じ糸まで模型に作つたのを見たが、製本には之れに則とらしたものと見える。原形保護に對してどれだけ注意を拂つたか知れないが、圖書に就て些事と雖も苟くもしなかつたことが推測され、及ばないことではあるが、松雲公の流石に愛書王としてのあらゆる資格を具備した人と思はれる。

洋風の製本に就ては、別に陳ぶる機會もあらうが、明治以來多少の進歩を見て居るけれども、外國の製本に比すると何んと云ふても遜色がある。雜誌同様一應讀過すれば生命を失ふやうなよい可減の書物の裝釘は強ち吟味を要しないが、永久性のもの、頻繁に開閉する字書辭典目錄聖書などのバイディングの堅牢を要するは言ふまでもないが、日本製本は巨冊になると、グワ／＼して開閉の際二三紙が飛び出したりして往々醜態を現する。今は製本器械も優秀のものが使用されてゐるのに、兎角製本に重きを措かぬ因襲が然らしむるか、或は製本代の頭をはねる惡習があつて、實地事に當る職工の給金が薄い爲めか、今日尙遺憾を感じることが頻々とある。梅雨期になると標紙のはげる失態もあるが、これなどは穀類で糊を作るからでもあらう歟、西洋製本は梅雨

期にも決して崩るゝことがない。いつぞや獨逸から假製の本を取り寄せ更らに若干の製本代を添へて、本綴を頼んだことがあるが、出來て來たのを見ると如何にも堅牢で把握開閉に快適を覺へたが、日本洋式製本にはまだ改造を要する點が少からずあると思はれるが、今は委しく説かず、他日の問題としてこゝに筆を擱く。

反譯難附雜話

反譯は叛逆だと西洋で言ふてゐる、偶然雜句語の反譯と叛逆の二語が音が近かいから、斯る諺が生じたのだが、事實多くの反譯は原作をブチ毀はしてゐるから叛逆と云へ得る。それほど反譯は難澁のもので、日本語は西洋語と根柢が異つてゐるから、反譯は別して困難である。日本では原作の一語一句をそつくり譯するのを直譯と云ひ、意を採つて譯するのを意譯と云ふてゐるが、直譯は讀者に頗る受けがよい。必竟語も語法も彼我に大なる逕庭があるからで、多くは意譯であるが、意譯と云ふ中に創作の加味されてゐるものが甚だ多く、そしてそれが成功してゐる。併し嚴正に云へば、これは反譯でないかも知れないが、日本ばかりでなく、どこの國でも純正の反譯は幾んど有り得ないやうに思はれる。

所謂意譯者の内には原文に由りながら、思ひ切つて、自分の心持で書く人もある。それは明かに創作が加味されてゐるが、其方がよいと主張するものもある。坪内逍遙の沙翁譯なども實は此方に屬するかも知れない。日本の通用語に日本の舞臺語をも加へて、自家の感情や思惑を書いてゐるから、設令原作に據つてゐても、逍遙の創作としか思ひない、實際に於て創作が加味されねば反譯は不可能のものであるかも知れない。

明治初頭に種々の反譯が出たが、實は嚴正の反譯と見るべきものは幾んど無く、西洋小説を讀んで勝手に筆者の思惑で書いたものが多い。それが今日になつて却つて讀者に一種の興味をそゝると云はれるのも原作に拘泥せず、自家の感興をそれに托してゐる所に妙があるからだ。必竟創作家が餘業にやつたから、どことなく餘裕があり又字や語句にも豊富なウケブラリーがあつたからでもあらう、中村正直の西國立志篇などは、原文に比すると随分誤譯もあるけれども、文章が立派で筆者に人を導くの意があり、それが隨所に閃いてゐるから、今讀んで見ても此節の馱反譯よりも遙かに優つてゐる。

どこの國の言葉でも他國の言葉で描し難いものがある。名詞などは移し易いとしても言ひ回はしの味や、匂ひがどうしても移らない。アクセントだけでも言葉に死活がおこる、俗語となると

別して移し難い。滑稽、諷刺、地口などいふものになると、何んとしても移すことが出来ない、花柳界などの通語や馱洒落などは、其國に於てこそ味があるが、譯しては全然味を失ふ。日本の和歌枕詞、さては、カケ言葉、これ等によつて味つけられてゐるものをどうしてもそれを他國語に描すことが出来ない、去れば西洋の詩を譯して見ても、興味が索然であると同じやうに、日本の俳句や和歌を外國語に譯して見ても、まるつきり趣味がない。西洋の詩には言葉が顛倒したりしておのづから綾をなすが、それすら他國の語に移し兼ねる。譯文には往々言葉の間に説明が混ざる。之は意義を理解せしめる方便ではあるがそれだけ譯だ拙だと云ふことになる。どこの國の言葉にも特有の匂ひと味とがあつてそれが神髓となつてゐる場合が多い。同じ言ひ方でも其匂ひと味とによつて愛情が閃めいたり、憤悲がほのめいたりする。此の微妙さをどうして移し得ようか。グード・モーニング・サーと云ふ言葉をおはやうと云へば軽くつて多少の愛嬌もあるが、これを森田思軒の譯したやうに好朝君よと譯すると、何んの味もないではないか、日本のやうな敬語の多い國言葉では、西洋の You と云ふのに對し、十位異なつた稱があつて、それ／＼に趣をなすのだが、洋譯すると一概に You と云ふより外に言葉がないのだ。

自分が經營した文明協會では毎月一二冊の譯本を出版することが十數年續き、自分も随分苦勞

したが、常に反譯が粗笨だ、誤譯が多いと云ふ訴へを聞へた。浮田博士其他が監督をして直すこともあつたが、なか／＼直し切れない。概して外國文を読み得るほどの人は譯本を嫌うが、それは主として善譯の無いのに歸因する。善譯の無い譯は、第一原書が讀めると誰れでも反譯をなし得ると考へることが甚しい間違である。多くの譯者は原書を一旦精讀してから筆をつけ始めるでなく、ブツつけ筆を執り始め矢鱈に譯するから、好譯の出來やう筈はない。原書がよく讀めても外國語に通ずる人必らずしも譯筆に長じない。創作などやるやうな文學的の人は、面倒くさいので他人の作を刻苦して譯することを好まない。これも好譯の出来ない一原因である。忠實の反譯家は原文の研究に時間が潰れて、一日一枚も譯し得ず、一卷を譯するに數年も費す人がある、衣食足るの人が譯者であれば、それも出來ないことでないが、生活の爲めにする反譯はそんな氣長なことは出來ない。尙其上に日本の反譯料は極めて低いから、これも一原因だ、反譯に對する批評家の少ないことも亦一因であらう。

私などは面倒なことが出來ない性分で、自から反譯した經驗は幾んど無い。青年時代外字新聞の雜報を學校から課されて反譯を試みたこと、西洋のアネクトトを譯して「蟹の泡」の書を出版したこと、記者時代にコールド・バックと云ふ露西亞小説の英譯を口譯して人に書かせた

ことのある外、反譯を企てたこともないが、回顧的に反譯に關する思ひ出を語れば左の如きものがある。

富山房の前身東洋館書店で小野梓氏が良書の刊行を企てた時、高田半峰氏がゼボンの貨幣論を譯した。小野氏は之れを校閲したが、あの堪能の人だから、全部自家流に直した。其の用語も語調も小野流で、好譯とはなつたが、半峰氏の味はどこを搜しても片影を留めず、出版されたのを贈られて一讀すると、小野梓譯とする方が妥當だと思ふたこともある。譯者に依つて同じ原書でも全く其の面目を異にする。

沙翁のマクベスを森鷗外が前に譯し坪内逍遙は後に譯した、試みにマクベス夫人の獨語の處を讀みくらべて見ると、味が全く違ふので、譯者により斯うも違ふものかと一驚を喫したことがある。譯の優劣は別として劇に通じ舞臺を解する逍遙と、否らざる鷗外の譯筆に斯る相違のあるのは偶然でないとも感じた。

自分が稿した時文を兩三度人をして英文に譯させたことがある。其譯文を讀んで見ると、自分と同じやうな考を他人から聞くやうな感じがして、何となくクスグツタイ氣がして堪らなかつた。畢竟言葉の相異が斯くするので不思議はないが、原作と譯本との間に感情其他の隔りがある

讀 のはこれに由つても分かる。

書 歐洲大戦中或る必要があつて外事新聞の切抜を和譯させたことがある。聯合軍の進退に關する記事であるのに、譯文の内に聯合軍の文字が一つもないのでおかしいと思つたが譯者は、アライスの語を解し得無かたことが分つて一笑したことがある。某雜誌に誤譯の一例として、インノセント十世を Innocent X と書いてあつたのを、羅馬法皇とは知らず、X をクリストマスの略字とする所から、これをクライストと早合點し、無邪氣なクリストと譯した笑話もあるが、斯る滑稽な誤譯は決して珍らしくない。

德川期の或る頃しきりに支那小説や叢話などを和譯することが行はれ、岡島冠山が其巨擘と云はれた。上田秋成の雨月物語なども支那の小話の和譯であるが、原文に較べて見ると、秋成の文が遙かに優つてゐる。これなどは反譯とは云へ、矢張り譯者の創作が加つて成功したものと見ねばならない。

上田敏は上乘の譯者と云はれたが、其の門人が辯護してゐるのに反して、批評家はどの譯を見ても上田流だと云ふてゐる。上田の譯がうまいと云ふて門人の賞揚して擧げた例を見ると、仰ぎ見ると云ふやうな原語を「ふりさけ見れば」と譯し「聲高らかに鳴けよ郭公」と普通譯すべきを

「名乗りを上げよほとゝぎす」とあるなどであるが、よく日本の言葉を應用してゐる處に才は認めるが、しかしこれも矢張り原語を日本化してゐるので、創作が加つてゐると評することが本當であらう。

原書にもいろ／＼の種類があつて、外人が日本の事を書いたもので耶蘇教徒の紀行などになると、いろ／＼の書き違ひがあり人名や地名に聞き違ひがあり、觀察の誤りなども多くあるが、それを他國で譯するのならば、敢て訂正を加へずとも済むであらうが、日本で之れを譯するとなると、誤謬に相當の註脚を加へねばならん。これが譯者の義務である。しかるに其の訂正が随分面倒で、探り當らないことがあると、其の取調べの爲め筆を停めて、多くの日子を費すことがある。これも亦反譯の一難である。

堀口大學氏は多くの反譯をやつただけに其の所感が要を得て居る。氏は曰く「原書は反譯者にとつては、たゞ一面の陥穽以外の何物でもない、彼はその中を抜き足、さし足、然も隅から隅まで歩き廻らなければならないのだ」と。

反譯は譬喩的に云ふと、口眞似である。他人の言ふことをそつくり其通り似せねばならんが、實は原作者に種々の筆癖があつて、中にはダラ／＼と留め度もない文をなすものもあり、極めて

讀 解り兼ねる艱澁の文をなすものもある。それを反譯者の務として其筆癖まで描さねばならんとあ
書 つては反譯者の務も亦難いかなである。斯の如きは反譯者を鸚鵡石となしラジオ器とするもので
餘 無理の沙汰である。原書にどこまでも據つた譯書は讀みにくいのが多く、譯書を迂遠として讀む
録 ことを欲しない者があるのも此故である。そこで譯者は原書の正髓を掴んで意譯する人がある。
これは讀者の理解を博する方便であるが、しかし其の選擇がなか／＼六つかしく、動もすると反
逆となる。

何故面倒至極の反譯を敢てするかと云ふと譯者にはさまざまの心理がある、譯料を得ん爲めの
反譯などは論外だが、著者に對する崇敬や私淑からやるものもあり、著書の内容が己れの境遇に
似て居るとか、描かれてゐる村落が己れの居村に似て居るとか、小説中の主人公に同感があると
か、種々の心理に由るものであるが、中には何人も譯し得ないことをやつて見る功名心からやる
ものもあり、文章や思構や脚色などの研究の爲めに、苦痛を忍んで刻苦するものもあるが、樂ん
でやるものが敢て無いわけではない。斯の如きは衣食足つて譯料を眼中に措くものでないから、
往々一冊の反譯に數年を費すものもあるが、精譯好譯は往々此の範圍から生ずる。

吾々東京大學に學んだ頃漢文の先生として中村敬字翁が詩經を受持つた。翁の云はれるには詩

經などは講釋すべきものでなく、誦讀すべきものだであつて、英譯本の詩經を吾々に誦讀させ、
翁は支那音で原文を朗讀された。これも一種の譯讀だが、當時は何んの感じも起らなかつた。

日本の和歌や俳句を英譯した例はいくらもあるが、洋人のも邦人のも概して成功しない。想ひ
出すのは角田竹冷が華甲の年賀に「点滴」と題する小冊子を知人に頒つたことがある。竹冷の女
兒に相當英語を修めたものがあつて、父翁の俳句の英譯を試みそれを印刷したもので、妙齡の女
子の譯としては相當出來てゐたが、父翁が若し英語を解したら、必らずヨセ／＼と不満を云ふた
であらう。實は俳句の反譯は難中の難である。

自分共の東京大學にゐた頃、大學から「學藝志林」と云ふ雜誌を發行してゐたが、これには重
もに西洋の理科法文科の論文を反譯して收めたが、譯者は皆大學生であつた。其文章は皆立派な
ものであつた譯は能文の人が譯稿を直す爲め傭はれてゐて、その手にかゝつたからである。こ
ゝに吾等の懺悔話がある。

其頃の大學に給費の制度があつて吾等も給費生であつた。時の總理加藤弘之氏はある時學生に
自立の精神をもたせたいと云ふので、十圓にも満たない月額から二圓を減じ、其代り學藝志林に
收める反譯をすれば十行二十字につき一頁五十錢の譯料を支給することとされた。尤も一ヶ月四

讀 頁即ち二圓が限度であつた。學生の中には眞面目に長文の譯をしたものもあつたが、理工科方面
書 の學徒は筆無性で抵ねそれをやるものが無かつた。そこで吾等の金融策として、彼等の反譯權を
餘 貫らひ受け、本來ならば其の譯しかけの文を繼續して譯すべきであるのに、匆卒勝手なことを書
録 きなくつて、立どころに十枚位の原稿を作り、稿料を學校の會計から受取つてそれを酒資とし
た。こんなことを今追憶すると眞に慙汗至極である。

小野梓全集序

東洋小野先生逝て既に半世紀を經過す、先生に縁故深い富山房主坂本氏は昨年秋先生の銅像を
早稻田大學に献じ、今又富山房開店五十周年記念として先生の全集を出版さるゝことゝなつた。

小野先生は春秋太た富むの身を以つて、早く他界せられた。先生の齡は僅かに三十五歳で、先
生滿腔の冀望は繫つて帝國議會を見るに在つたのに、不幸それを見ざりしは如何ばかり遺憾であ
つたか、想ふてこゝに到る毎に、吾等はいつも胸の塞がるを禁じ得ない。併し先生が刻苦數年に
亘つた大著國憲汎論、あの浩漭な一書が完成して、帝國憲法欽定の參考となつたことは、先生が
生前満足に思はれたことであらう。先生は全く此書を著す爲めに生れ出られたかの如き觀があ

る。先生は此書の末巻を出して幾月かの後に他界せられたのである。或は此書の著作に心血を瀉
ぎ、死期を早められたのかも知れないが、その生前に完結を見たのはひとり先生の本懐のみでな
く、學界に於ても政界に於ても實に至倅とせねばならぬ、此書は先生の著書の白眉で不朽の書
であることは今更暇々を要しない。

今回發行された全集の内に、以上の名著が收められないのは、深い仔細があるのでなく、飽く
まで此の名著は單行本として不朽に傳へたいと云ふに外ならないと聞いてゐる、如何さま全集に
收められたものは、比較的小著が多く、大著國憲汎論と混ざるは釣合が取れず、且つ汎論は今更
出版せずとも既に世に流布しあり、他日單行本として幾版を重ねるにしても、雜著と合せ刊する
のは寧ろ其の權威を害ふ嫌ひがないでもない。これが全集に收めざる所以と聞けば、至極尤もの
ことゝ思はるゝ。

全集は雜著を編成したものである。雜著の内には一たび刊行されたものもあるが、多くは今頗
得難いものとなつてゐる。國憲汎論こそ多くの人に讀まれてゐるが、爾餘の書は人多く知ら
ず、今にして之れを刊行せずば、先生の國憲論以外の思想は泯滅に歸するであらう。君には民法
に、經濟に、外交に、教育に、文學に、それ／＼の意見があり、隨時筆作されたものが少からずあ

る。唯た全力を國憲汎論に傾けられたが故に、爾餘の問題に就ては精なる事を得ず、雜著に小篇が多い所以だが、併し君の意見の大意は小篇ながら窺ふ事が出来るのである。天若し君に藉すに壽を以てせば、恐らく小篇も追々敷衍されて大著となつたであらうと思はれる、國憲汎論とても最初「共存同衆」の雜誌に掲げられた時は、國憲論綱と題する小篇に過ぎなかつたことを思ふと、民法にせよ財政經濟にせよ教育其他に就ても大著にならなかつたことをシミク遺憾に思ふ。私は此の全集に序するに殊に深い感慨に打れる譯は、此書ほど自分がどの篇も漏れなく其の草稿に就て見たものは無く、實は一時此の草稿の中に起臥したことすらある。今こそ言ふが君の歿後遺稿を出版するの議が起つて、不肖なる私が編纂の衝に當ることになつたことがある。自分は内心甚だ之れを喜こんで、あらゆる遺稿を自分の書齋に置き、一二月間は翻讀に時を費し、其の中には幾回もくも翻閱したものがあつて、編纂の準備をなしつゝある間に、自分は郷里の新聞社に迎へられたので、貴重な草稿を百里先きへ伴ひ去ることも出来ず、高田博士に託して出来たのが東洋論策二卷であつた。今君が歿後半世紀を経て、自分は尙ほ生存し、宛がら五十年前擔當したと同じ編纂事業を見るにつけては、實に感慨に堪へないものがある。尙ほ自分の擔任した頃は先生の留客齋日誌は存在してゐたが、種々遠慮を要することがあつて、刊行など思ひも寄らなかつ

た。然るに今度の全集にはそれが加はつたことは特筆に値する。君の雜著の内他の諸篇に優るとも劣ることなきものは君の日々の漢文日誌で、それが洋行より歸朝後歿する月まで書き續けられ、自叙傳とも云ふべきものだが、此の大切な記録が何故か久しく所在不明となつてゐたのを、幸ひにして或る人が私の爲めに割愛したのは誠に處を得たと云ふべきだが、それを坂本富山房社長に譲つて、全集の内に加へ得たことは私の頗る満足する所である。

紅葉山人の日誌

紅葉山人の日誌が先頃佐々木信綱博士の手に歸したので、博士が補注されたのを中央公論に收められた。それは明治三十四年七月二十九日から翌三十五年一月三十一日までの日誌である。山人の日誌で世の中に刊行されてゐるのは石橋思案の出版した十千萬堂日録で明治三十四年一月元旦から同年十月十日に及んでゐる。八九十の三ヶ月が博士の得られたのと重複してゐるのがどうかと思ふけれども、博士は兩者を比較して見て少しばかりの異同増減があるのみだと云ふて居るゝが、マサカある月だけ二部ある筈もないがどうしたことか自分も疑ひなきを得ないが、それは兎も角二者を併せると一年程の日誌が連続した譯である。

私は山人の日記や手簡を読むと其人と對する如き懐しさを感じるので、今度も早速讀んで見た、例に依り珠玉を連ねた文章で毎日の起居が書き記され一日も脱した所がない。段々續んで行くくと、自分の事も二三所に見へてゐる。乃ち八月廿五日に此日市島氏新潟近江家にて咯血臥尊の報ありと記し、十月五日に（前略）出るに臨み（外出）市島氏の門生書畫帖及色紙二枚を兩三日前に持來りしを早速揮灑して送らんと云ふ、氏は病を養ひて鎌倉三橋に在りとぞ、則ち樓に延きて直ちに揮毫せしが極めて拙也とあるが、自分は此病の爲め山人と會することも少なかつたので自分に交渉ある記事が甚だ少ない。自分の病臥に就て山人が新潟に在る自分に寄せた見舞狀は幸ひに保存してあるので、取り出して見ると、如何にも長文で、懇到の意が悉されてゐる、即ち左に全文を收める。

久しく音容に不接候へども不相變の御元氣にて共進會御見物の事と存居候處本日御書面にて夢ならずと驚入申候別して旅中の御不慮いかばかり、心細く在すやらんと察し申候へば胸もつふるゝやうに覺え候此上は御養生肝要に御座候要するに平生過飲の致す所なるべく後來一層の御自愛を祈り候

唯今手元に何も無之候へども座右を搜し何ぞ入御覽可申一兩日中に取纏め差出し可申候、實は

此方も去る五日より脱勝炎の爲に打僵れ候て、十日間ばかり身動きさへならざる劇痛に惱され此四五日來漸やくかやうに筆持つ事も相叶ひ候やうの始末にて來月半頃迄は門外に出候事不相叶時恰かも新聞の懸賞俳句有之候て内憂外患の苦む所と相成難澁を極め居候

尊臺の御症も追日輕快の趣を承り頗る安心いたし候へども決して御油斷はなさるまじく輕はづみの事あらざらんやうくれゝも御注意が大事に御座候枕上の御無聊御察し申上候何かこまゝに書記し度候へども此方とても餘り長く坐り居候事叶はざる體に候へば用事のみ記し申候御狀披見の際千葉鑛藏氏見舞に見えられ御話致候處是亦不料驚き居られ候病に不慮ならざる事とはなければと尊臺の今度のごとき何人と雖も驚愕可致高田氏にも暫く御目に掛り不申坂口氏無事に被居候や越智氏日々出精被致候か新潟の雜聞非常の事と察候へばお祭最中の御臥病御鬱悶も一層の事と存候時候不順に候へば御大切に被成度一日も早く中華亭にて祝盃を擧げ候を待居候草々頓首

二十四日

春城先生梧下

紅葉

此の手紙の日附で見ると、山人の發信は日記に私の病を録した前日と見へる。尙ほ忘れてゐた

が自分の歸郷したのは新潟に共進會が開かれたのを見物の爲めであつたことが分る、書信中にある坂口氏は坂口五峰越智とあるは越智修吉で、共に山人別懇の間柄で越智は元と讀賣の社員で其後新潟新聞の主筆であつた、尙ほ手紙の終尾に中華亭とあるがこれは木原店に於ける有名な割烹店でよく連れ立つて同飲の處である。尙ほ漏らす可らざるは山人自身も輕からぬ病氣に罹つてゐたことが此状にも知れ、又日誌にも續出してゐる。

山人が一年續けて日誌を書いたに就て自分の思ひ出を云へば、山人は嘗て自分が二十年も繼續して日誌を認めてゐることを知つて、或る時それはよい習慣だ自分も倣らひたいものだ云ふたことがある。亦或る時君はドンナ風に毎日の事を記すかと問はれたから、日誌を記す要訣は只だ簡単に其日の起居の大略を書くに止むべきだ。感想などを書くは禁物で、長文になると決して長く續かないと云ふた。コンナ問答はいつであつたか忘れたが、山人は或は其頃から日誌を書き始めたのであるまいか、山人の日誌が要を得て兎に角一年繼續したのも或は私の經驗に従つたのかも知れない。唯だ山人の日誌に異とするのは、毎日の梗概を書くのに飲食の事を決して略してゐない。どんなに食物に深い關心があつたのであらうが、人に招かれて饗應の獻立を記したり割烹店で會心の料理を喫した時の事などを録するのは、山人の如き食通に不思議はないが家庭に於け

る飲食まで毎日多少の記のあるのは、山人の日誌の特色とも見るべきである。山人と連れ立つて料理店へ出かけると、いつも手帖を出して細かに獻立を書き留める習慣があつた。偶々七月號の「書物展望」を見ると須藤鐘一と云ふ人が山人の日誌の零篇を有して居ると云ふて、其の寫しが掲げてあつた。その中には俳句もあるが自分が、山人と柳橋の升田屋竝に山谷の八百善に飲食した時の事が委しく書かれてゐたので、自分も一驚を喫したが、全く事實である、今左にその全文を揚げ、如何に山人が飲食に細心であつたかの一端を示す。

先頃、私は押入れを掃除して小さな軸を見出した。それは紅葉山人の日記帳らしい、罫紙三枚を縦に並べて表装したものだ。上の一枚には俳句、中の一枚には或る春の一日、友人と花を見ながら飲んだ日記の一節、下の一枚には、「紅葉」「十千萬堂」「風葉」「秋聲」「春石」「桂舟」などの黒印をベタ／＼捺してある。

田 家

菜の花の黄なり戸の隙壁の隙

東山遊歩

花を見て立てば盃さされけり
春の間にやうく逢ひぬ藤の花
あすの用蚊帳の傍まで呼ばれけり
咲きおほせ咲かせおほせし牡丹かな
見る花は過ぎぬ聞かうぞほととぎす
夕風や螢をふる ふ川 柳
一口は夢のやうなる清水かな
又、日記の一節とおぼしきは左の如きものである。

四月二十一日市島春城坂口五峰二子と柳橋舛田屋に飲む(料理は生稻)

時に墨堤の一重老いて雪の如く落つ

椀(大椀) 蕨。松露。ムシリ蝦。鳥の團子。

魚軒 鯛

小鮎の鹽焼。萌薑。

天ぶら(箱重) 車蝦。鳥賊カキアゲ。

香の物(細根。獨活。糸菜)

妓 小萬。金八。

更、に春城子と花を賞して山谷八百善に晩食す

味噌吸(蕨)

鉢 赤貝 白和へ 木耳 モヤシ 根菜 ツマ萌し蓼

魚軒 タヒラ貝の柱、鯛、鱈? 右三色 海雲 防風(モヤシ)(ワサビ)

替椀 小鯛の大切 莢豌豆 口木ノ芽

口取 蒲鉾二片 落甘露煮(長二寸) 車蝦(立二ツキリ) 四片 銀糸昆布

小鮎 魚田

香物 大根、瓜、西瓜(いづれも粕漬)

紅葉といふ人の老成ぶつた、丹念な性格や又その當時の文人生活の一面を知るのに面白い材料だと思つて敢へてここに録した。

いつか之れを石橋思案氏に示したところ、之れはほんものだ、面白いから僕の印も捺してあげようと下一枚の諸氏の印の中へ「思案外史」一顆を加へてくれた。(以上須藤氏文)

佐々木博士が發表された山人の日記にはいろ／＼録したいこともあるが、自分は山人のことをしば／＼隨筆に收めあらまはしは書いても居るからすべて割愛するが、唯だ一事抄録したいことは露國の中尉が山人の書齋を訪れた時の日記である。その中尉と云ふは要塞の砲兵中尉でビイソオキフと云ふ文學に理解のあるもので、其人が山人を訪れた記が後に露國の雜誌に載せられて、其譯文は自分の隨筆中紅葉山人を憶ふ記に轉載して置いたが、其の訪問は九月十八日であつて、山人は日記に左の如く書いてゐる。

午前夏葉より來狀にて、露國要塞砲兵中尉ビイソオキフ氏切に面會を乞ふ旨を告ぐ、乃ち午前(午後の誤か)二三時頃來れの返電す、故に午前二階の大掃除を作して室を清うし、床に蝦夷菊を挿し葡萄など買ひ置く、午後瀬沼氏同道にて來訪、五字位まで文學談あり、扇子一握外に「多情多恨」小天地(肖像入)「氷面鏡」等を送りしに大満足にて歸るとあり、こゝに「氷面鏡」とあるは山人が三越呉服店の爲めに編した衣裳の見本帖である。又山人が二階の書齋を特に掃除し、花まで活けて待つた歡待振は山人には破格の事であるが、露の士官が日本文豪の貧弱なる居を見て驚ろいたと云ふ記文と參考すると、自分と雖も日本文人の不遇に一脈の衰れを禁じ得ないのである。

里見八犬傳に就ての追懷

亡友和田萬吉博士の遺業たる、曲亭馬琴の『里見八犬傳』の研究が、今次出版されたにつき、吾等は坐ろに幼年時代に思を馳せ、如何に吾等が當時此の讀本に陶醉せしかを追憶せざるを得な

し。
時は明治八年頃、吾等は既に英學を學んでゐた頃であつたのに、書生間に何が流行であつたかと云ふと、『八犬傳』を讀むことであつた。あれは馬琴が二十八年の心血を凝ぎ、失明しても尙ほ屈せず、到頭百六卷の大部を完成したもので、一たび通讀するにも相當の時間を要した。然るに之れを二度三度も讀み直したものが幾人もあつた。坪内逍遙翁の如きは郷里に於て三度讀んだと曾つて語られたことがある。あの頃此書を精讀するのが書生間の誇りであつて、之れを讀まねば肩身が狭かつた程競うて讀み、サ、ハリ文句は暗誦されて、同窓の誰れかが暗誦を始めると、吾々も負けて居らず、相和して朗讀したものだ。

今は忘れたが信乃が濱路と暮夜別れる處など『信乃は臥房に入りしかど』から初まつて、約一頁程の名文句は誰れも彼れも誦じてゐたものである。信乃現八芳流閣上の格闘、犬坂毛野の對牛

樓上復讐の所などは、幾回讀んでも飽くことを知らなかつたもので、當時の書生は皆之れに陶醉した。

私が早稻田の圖書館長時代に、圖らずも饗庭篁村翁から其所藏の馬琴の遺書を譲り受けたが、其中に馬琴が失明後亡長男の未亡人に口授して書かせた草稿もあり、これなどは涙なくしては讀めぬ逸品で、曾つて圖書館に此等の遺書を陳列して公衆に見せた時、第一番に來觀したのは其當時の盲啞學校校長小西信八氏であつた。自分は流石に盲人に同情ある小西氏の來觀を喜んだが、その縁因で、自分は同校に臨み盲人に對して馬琴に關する一場の講演を試み、特に失明後の馬琴の苦心を語つたことがある。此時驚いたのは、或る失明の法學士が傍聽席にゐたが、其細君が良人を慰めんと、『八犬傳』全部を點字で作ることを企て、既に八分通り出來たと聞いたことであつた。現に或る部分を盲人が點字で四五枚讀んで聞かしてくれたのには恐れ入つた。

一部百六卷と云ふ小説は實に空前の大作であつて、それが一般に大歡迎を受けたことは、宛がら頼山陽の『日本外史』が冷熱なく讀まれてゐると同様であるが、私は嘗つて馬琴が人に寫させて所藏した外史の寫本を見たことがある。其の卷末に馬琴が漢文で十數行の識語を書いてゐた。其の文章は忘れたが、其意味は覺えてゐる。流石傲岸の馬琴も山陽をあしざまに評することな

く、寧ろ稱揚して、俺れも山陽と同じことをやつてゐるのだ、唯だ異なるのは、彼れは漢文で書き、俺れは和けて書く丈の事だと言うてゐたが、馬琴の抱負も之れで親ふことが出来る。實は小説とは言へ、幕末頹廢の士氣を鼓舞した道義觀念を作興するに力があつたことは、『日本外史』が世道人心を引立てたのと兄たり難く弟たり難き趣がある。

和田博士は馬琴に忠實な人で、前には難讀の日記を出版されたことがあり、『評釋八犬傳』に就ては特に長い間精神を凝して、著者の傳は勿論、各輯の梗概、八犬士性格の解剖、著者立案の態度などを充分研究し、各輯の美文は漏さず収録して、齧頭に細註が附してある。如此は和田博士の如き堪能の人で始めて成し得ること、吾等は博士に敬意を捧げざるを得ない。唯だ憾むらくは博士が斯く心血を灑いだ此業は成りながら、其出版を見るに至らず、逝かれたことは、返すくも残念な事であるが、博士の氣根強き研究は原著と共に長へに學界を益するであらう。

三馬の浮世風呂を讀んで

式亭三馬の代表作とも云ふべき浮世風呂は名高いものだが、自分は今度始めて通讀した。自分は壯年時代から滑稽を弄した讀物を餘り好まなかつた「八笑人」「七偏人」などもツイ讀んだこ

讀 となない。今となつてはコンナ書物もクラシツクの部類に入つた、當時の江戸兒の言葉、殊に市
書 井に行はれたシヤレや地口などに注解でもなければ解し兼ねるものが少からずある。今度自分の
餘 讀んだのは、出口米吉氏が注解を附したものである。出口氏は關西の人だから、江戸言葉は解し
録 そうもないと、不安心に思ふたが、東京の物數寄連などを顧問にして不明のことを質義してゐる
から、案外解注に誤りがなかつた。

徳川期の暢氣時代に市井の俱樂部とも云ふべきは髮結床と錢湯であつた。髮結床は噂の持寄り
場であり、錢湯も町内の交際場であつた。髮結床は噂を交換したり人の批評をする位なものであ
つたが、錢湯では音曲の稽古をやつたり、動もすると喧嘩口論もやつたから、騒々しい俱樂部で
あつた。勿論男女の浴室が離隔されてゐて、女湯には放歌をするものはなかつたが女同志のベチ
ヤ／＼喃々は相當喧しいもので、矢張り女性の俱樂部であつた。三馬の記は頃に湯女は無つた
が、二階に茶をすゝめる女がゐた。勿論ザク、ロから身をかゝめて浴槽へ入るのであつた。浴槽
の中は眞暗で一隅に燈があつても互ひの顔がよく判し兼ねる位で、中で内々越中褌を洗濯をした
り放尿するものなどもあつた、疥癬やインキンタムシなど人に厭がらるゝ悪疾持も、ゴツチャに
入つたから、随分不潔のものであつたが、肩々相摩しておのづから垢を去つた、其状宛から土つ

きの芋を桶に入れて攪擾して洗ひ淨めると一般であつた。男女の混浴を禁じながら三介は男子の
壯丁で、それが男女兩浴かけ持で、女の肌膚に觸れる特權が與へられてあつたのも一奇だ。

三馬が其の天稟の滑稽の筆を弄するに舞臺をこれに取つたのはよい思ひつきであつた。日本の
錢湯は確かに世界のバスの中で特種のもつと云ひ得る、單に湯屋の構造や年中行事や種々の慣習
や、湯錢祝儀や、洗粉垢すり等々を細かく書くだけでも多少の興がある。況して此の舞臺に赤裸
の男女をして勝手なことを言はせて、社會の斷層、人情の至微を現はさんとするのは面白い試み
である。三馬の此作は最初男湯と女湯の正編が出て次で男女湯の補遺が出てゐる。如何に此書
が當時持て囃されたかゞこれで窺かはれる。湯屋の場面が毎回變じて市井の雑話がおもしろおか
しく書かれ、中にもどこの舞臺でも適するやうな話もないがすべて市井のあらゆる方面
の人を躍らせて、江戸兒生活の一面をあり／＼と見せてゐる。讀んでゐると宛から小さんの話で
も聽いてゐるかの如くに引きつけられる。上方の人が八百屋の行商を引とめ根強く價を引かせる
一篇などは妙甚しとも評すべきか。

此種の戲作には記事が淫猥に墮し勝であるのに、不思議にそれが無い、挿繪もあるが、裸女を
畫して居らぬなどの謹慎で、洋畫家五姓田の書いた女湯の光景などは此書には求められない。尙

又筒様の戯作には人の口を藉りて己れの不平を漏らしたり、競争者を罵倒するやうなこともあるもので、三馬のやうな罵倒家は、或はそれとなく鬱懷を漏らして居りはせぬかと暗に期したが、諷世嘲俗が絶體にないとは言はぬが、自家に關しては商賣品の化粧品や賣藥の宣傳位であるのを寧ろ意外とするが、自家宣傳や淫猥に流るゝことは作者の品位にも關し、その氣味のないのは此書の一徳である。

雲萍雜誌に就て

柳里恭（柳澤淇園）はなか／＼洒落れた人物で、其物した琴唄や今様などを見ても、亦若かりし頃の漫筆、獨り寝を讀んで見ても、風流の人であり、今日の所謂新らしい人の型とも思はるゝ人で、逸事には大雅堂が此人の過度の性慾を戒めたこと、乞兒の茶席に赴いたことなどが傳はり書も書も善くし、其の漫筆「獨り寝」には、出來得ることならば自分の學問と愛する女の腰巻と交換したいなど、放言してゐる人だが、此の人の隨筆として雲萍雜誌と云ふが四冊傳はつてゐる。これは隨筆として名高いものであるが、讀んで見ると如何にも興味のない平凡のもので、里恭何れに在りやと言ひたくなる程のものである。但し自分がこれを讀んだ頃は書物に鑑識の無か

つた青年時代で、深くも考へなかつたが昨今岩波書店が多くの古書を縮刷した中に此の隨筆のあるのに氣付き購つて見ると、森銑三氏の校訂本であつた。巻尾に「雲萍雜誌についての疑」と題して委しく疑義を述べ、結局山崎美成が里恭に託して平凡の雜筆に里恭の名を冒したものであらうと云ふてゐるが、自分は大體森氏に同感である。隨筆と云ふものにも種々の體はあるが、自家の見聞を書くには個性のどことなく現はれることが禁し得ないもので、何を書いても其の裏面に筆者が潜んでゐて耳をすませば其人の呼吸も聽へるほどのものである。多くの記事の中には深く交つた人や自分に尤も親しみのある郷土の事も自然出る筈であるのに、多く人の名も出てゐるが世に知られてゐる人の名は一つも見えて居らぬ、大雅堂の名などはどこを捜してもない。九州あたりまで旅をしたらしく書いてあるが、これも疑はしいことで、里恭の郷里大和の郡山に就ては一ト言も出て居らぬ。隨筆は裏面から著者を知るの好材料としてあるものだが、この隨筆ほどの項を見ても里恭のおもかげの伺ひ得らるゝものがない。獨り寝は短篇ながらどの記事にも里恭を躍如として現はしてゐるのに、此の隨筆は何事ぞ、どの記事にも里恭の匂ひがない。思ふに此の隨筆は何人かの著であるものを、別に改竄も加へず、唯だ人を欺く爲め、里恭の撰として、蕪葎堂の序を偽作したものであるまいか。若し眞に里恭の者らしく讀者に感ぜしめんとならば、世

に傳つてゐる逸話や或は往來せる文人の事などを取り入れることは難いことではない。それをもなさざりしを見れば、唯だ某の著述を其まゝに里恭の名を冒したに過ぎない、尤も偽書の拙なるものとせねばなるまい。山崎美成は雜學者で品格のよい學者でなく、晩年は窮して書物屋の傭人とも云ふべき地位にゐたから、隨筆の流行期に賣らん爲め世に受けのよい著者を引きずり出したと見るのは絶ち邪推とのみ云ふべからず、森氏の見たる雲萍雜誌は美成の自筆本であり、版本の版下も美成の書であり、蕪葭堂の序も美成の書であるなどを聞けば、美成のいたづらであることと思はしめる。若し人あり里恭の傳を修めるに此雜誌にある事實を誠のものとして採用することもあらば、それは誤りを傳へるものであると私は言ふを憚らぬ。

外國の圖書蒐集家

西洋の圖書趣味家や、蒐集家や圖書狂や、圖書の價や、圖書獲得の競争や、圖書の盲目的蒐集などに就ての雜話を讀んで見ると、人情はいづくも同じであるが、唯だ異なるのは彼れに於ては大陸的で大袈裟であり、書價も馬鹿に高い別があり、西洋の狂熱家は圖書を獲たい爲め人を殺した極端な例もある。庄司淺水氏から寄せられた書に就て、西洋の圖書蒐集家が如何に大袈裟なこ

とをやるが其顯著の例を挙げると、或る者は二百萬の圖書を集めて置き所がなく、古城を二個所も購ふてそれを書庫に充たとあり、同人が大陸旅行で到る處圖書を購ふて、それを本國に持歸らず、出先の國々で幾つも書庫を造つたと云はれ、或る蒐集家は毎日長尺の竿を携へて書物を漁り歩き、竿の長さに書物の嵩が達しなければ満足しなかつたものがあり、或る人は外國に移住するに方つて藏書を移すに困つた。その譯は二百萬圓の關稅を拂はねばならなかつた爲めだと云ふ話もあり、盲目的に多くを貪つた蒐集家の例として、二百萬の藏書を擁したが、敢て自ら讀むでもなく、人に見せるでもなく、唯積むを以つて快としたが、其集め方が如何にも亂脈で、死後處分する段になると二束三文であつた例もあり、ある熱狂蒐集家が細君の諫めで已むなく購書を手控へると、忽ち神經衰弱となつて死んだ例もある。尙ほ獵奇的の奇談を多く聞くが、それ等と前に擧げたに蒐集家の名などは庄司氏が譯述の典籍雜話に譲り、茲に略するが、最後に世界に於ける尤も大形本に就て語ると、それはチャールス二世が和蘭から贈られた地圖で、幅と豎の尺は知れないが、高さ七尺重量八百封と云ふ大本である。尙ほ之れを壓する大きな本が歐洲大戰中に出來たと云ふが、それは加奈陀のオツタワ市の廣場に置かれた戰勝公債募集名簿で、長さ十五呎幅八呎厚さ三呎で、屋外に置いて雨にさらされても毫も損しない材料で作られてあると云ふ。

讀書の處則ち書齋（移動書齋）

燈火親しむべき時が來た。讀書の道場は書齋であるが、書齋は必ずしも書物を架上に陳列してある形式的の部屋のみでない。

實は書齋を廣義に解すると讀書の處はどんな場所でも書齋だといへ得る、恰も高僧が法を談ずるところは往還でも辻でもそこが道場だといふたように。この見解に従ふと、電車の中でも、汽車の内でも、讀書をすればそこが書齋である。昔支那の文豪歐陽永叔の明文は三上より生じたといはれてゐる、三上といふのは、馬上、船上、厠上の三つの場合をいふたので、騎馬の時、乗船の際、厠に入つた場合に考案したのが明文となつたといふから、馬も船も厠も書齋と見てもよい譯になる。厠は汚穢のところであるけれども、世俗にもよい分別は厠から起るといふてもゐる。事實厠は机案の上よりもよい思索場で、虚心のため意外に名案も生れる。また或る種の疾患があつて長時間厠に在る人は、特に見臺などを取り付け燈火を備へて讀書をする人が實地にいくらもある。

今は巡回文庫といふのがあつて、若干の書物を箱に入れて回覽に供することが行はれてゐる

が、移動書齋もまたあり得る。昔し文人墨客が各地を游歴したところのことを考へると、各所に客寓する時、携帶品に何が最も必要であつたかといふと、書齋の要具であつたに相違ない。今ならば革のカバンに詰めるであらうが、カバンは座邊に置くに體裁がわるい。自分が見たのは森春濤の文具箱であつて、それを見た時即座に、ア、アこれは移動書齋だなど思つた。この箱は漢方醫の藥籠匣の如くで、それよりもやゝ大きく、四段に抽子があつて、その中には筆硯や印や肉池や詩箋や韻書などが收めてあつた、多分詩稿や参考書なども入れてあつたであらう。春濤は作詩の時も揮毫の時も必ずこの中から物を出して辯じ、常に座右に置き肱掛け代りにしてゐた。この箱は立派な座敷に置いても見苦しからぬもので、自分はこの箱の中を點檢した譯ではないが、日記だの手紙だの人から寄せられた詩だの、財囊だの、折疊の出来る枕だの、藥品の類などが入れてあつたらうと想像する。畫家であれば筆硯は勿論繪の具皿などを入れるには最も適當であると思はれた、昔の遊歴者は旅に一年二年送ることがあり、船に乗つても一ヶ月や半ヶ月かゝることがあるのだから、かかる移動書齋の携帶が事實必要であつたに相違ない。

曲亭馬琴の懇意であつた、讃岐の松平家の大夫木村默老は、讀書や物を書くに、妨げらるゝことを忌み、大きな籠を室内に置きその中に這入つて靜かに讀書をしたといはれてゐるが、籠はす

べて紙が貼られてゐるから、喧囂の人語が聞えず、袖爐を入れれば冬時は暖かである、時々適當の場所に移しもしたらうから、これも移動書齋といふことが出来る。伊勢の儒者奥田三角はその名の如く、三角形の書齋を作つたと傳へられてゐるが、三角にしたわけがハツキリ分らない、自分の親族に普請ずきの人があつた、ある時自分にいふに、別荘の庭園の中心に書室を作りたいたが、それが運轉するようにやつてみたいが、名案がなからうかといはるゝから、それは雑作もない、寺の經藏は指頭で動かしても回轉するようになってゐる、あれに倣へば直に成るといふて、回轉室を作つたことがあるが、これは四圍の風景を時々變じて見るにもよく、また日光を迎へたり避けたりするにもよく、案外面白く感じたが、これもまた一種の移動書齋であると思ふ。

なほ變態書齋と見るべきものゝ一、二をいふと、牢獄の監室などもその一例である。昔から長い獄中生活で讀書し思索し書を著はした例がいくらかもある。高島吞象などは易斷を以つて名高かつたが、自分に語つたのによると、維新前何かの嫌疑で下獄し、己れの運命を占ふのが直接の目的で、易の暗誦を初めたのが、そゝ易の研究の第一歩だといふたが、一心一向に勉めればあれだけの易通になれる、即ち監室がその書齋であつたのだ。頼山陽なども家庭の檻室に幽閉されて、あれだけの日本外史を著したから、その檻室がその書齋であつたのだ。また昔し漢方の醫家

は病家を訪ふに籃輿に乗つたが、乘輿は毎日のことで、多くの時間が輿中に費された。そこで常に書物を携帯して輿中を讀書の處とした。ある名高い醫家は輿中に筆までとつて一書を著はしたこともあるから、籃輿もまた書齋と見ることが出来る。

九州の某藩の儒者は長い間心掛けた支那の珍書を獲たので、その喜びは一ト通りでなかつた。たゞしかゝる佳書は喧囂の俗地に讀みたくない、是非塵外の地に出かけてそこに讀みたいとあつて、藩から許しを得て、遠く函嶺を訪ふて山水絶佳のところに宿し、朝夕山を望み溪聲を聞きながら精讀したとあるが、これなども書齋の移動であるが、自己の轉身より生ずる移動といふべきだ。

以上書齋を挙げたのは、あへて奇を好んで爾るのでなく、書齋を廣義に解し、讀書のところはどんなところでも、それを書齋と見ることが、讀書子に必要であることを主張したいからである。普通書齋といふものは、机案が備はり架上に圖書が列してあるところをいふのであるけれども、これは形式に屬し、貧しいものはかゝる書齋を持ち得ない。自分なども書齋についていろいろの注文があり、理想的の書齋を建てたいと思ひながら、今もつてその目的を達せず、到頭書齋なしで墓に入るものと思つてゐるが、そのために負け惜しみをいふようでもあるが、形式のチ

ヤント整つた書齋をもつことも考へもので、人によつては書齋でなければ落ちつかないので、思索も出来ず筆もとれないようなことがある。習慣の然らしむるところとはいへ、アタラ時間をこのために無駄に費すことが甚だ多いことを思ふと、書齋を廣義に解し、思索や執筆に餘裕がある時、遭遇するところはどんな場所でもそれを書齋と心得て、時間を徒消しないことが甚だ望ましいと思ふ。ある著名の醫師は病家に宿直してその宿直部屋で立派な書を著した實例もある。燈臺守や城番などのようなものは二六時中間断なく務があるでなく、退屈に堪へないほどの時間がある。心がけさへあれば、讀書も研究も充分に出来るはずである。私は今突差に燈臺守や鐘樓守から、研究家の出た例を思ひ出せないが、城番などがひまにあかして精巧な細工をやり、人を驚かす根附の彫刻をした事實を聞いてゐる、彼等は工場を有してをるでもなく、番をして居るところを工場として丹精を凝らしたに過ぎない。と角光陰を無駄にしてはならない。林間でも海濱でも餘裕のあるところに讀書をすれば、そこが則ち書齋であると考へてこそ、時間が有効に利用されるのである。(大阪毎日ホーム、ライフに載せたるもの)

貼り込み帖

稀書複製會の同人が毎月一回安田善次郎氏の宅で會合するのが、例となつてゐるが、其都度安田氏より近購の圖書を示され、眼福に浴するが、九月の會にも種々示された中に、曲亭馬琴の張込帳を示された。標題には返魂餘紙と馬琴の自筆で書かれ、大奉書大のアルバムが三冊各百枚程のものに種々のものが餘地を存せず、雑然と張り込んであつた。あの周到綿密の曲亭は著作堂に舞ひ込んで来る、番付でも廣告でも詩歌俳諧菓子などの商標に至るまで他日何かの参考になりそうなるものは、一切棄てず丁寧に張り込んであるが、中には馬琴が自筆で注したのもあり、人に頼まれて報條を作つた其の校合摺りもあり、羅文や琴嶺の書いた書畫もあり。八犬傳其他の著述の下繪などもあり、新年各所から寄せた俳箋其他配り物の類にも渡邊華山が摸した風外和尚の布袋の圖や、山崎美成の肉筆の詩や屋代弘賢の書なども數紙見へてゐたが、殊に自分の注意を惹いたのは北越雪譜で知らるゝ鈴木牧之から寄せた短冊其他が少からず張りこんであつたが、馬琴と同時代の著作家連のものしたものは幾んど一つも見當らなかつた、恐らく馬琴は此等の人と餘り交らなかつた爲めであつたらうと推測さるゝ。貼り込まれてある一切は皆な馬琴當時のもので、今日から見るといろ／＼参考になるものもあるが、當時に於ては普通ならば反故籠に葬られて了ふものを他日を豫想して棄てずに助けたものであらう。世にも此種の蒐集家があつて、隨時自分

の案頭に飛び来るものを保存するのではなく、特に年代の古いものや珍しいものを捜し求めて苦心して張り込を作る一脈の蒐集家があるが、馬琴は耽奇會に興を遣つた人でありながら、珍しいものを張り込のため特に求めて金錢を遣ふ人でなかつたことが此帳に由つても窺ひ知ることが出来る、要するに馬琴の張込帳は全く身邊の反故を保存したに過ぎないのである。

元來張り込帳と云ふものは、馬琴の如くして起つたものであるが、好事家は自然身邊に寄せ来るものを保存するを以つて満足せず、進んで得難いものを購ひ求めるに没頭し、其の當時のものを閉却して或る際立つたものでなければ採用しないと云ふのが、此種蒐集家の常となつた。安田氏方には諸家の貼り込帳が多く集まつてゐる内に頗る好事の蒐集もあるが、近年整理して類を分ち、番號を附して目錄を製したのを見ると、目錄だけで十數冊の多きに及んでゐる。安田氏ほどの部類の圖書にも富んで居るが、一枚摺りの張り込帳に於ても天下獨歩で、各方面に於ける此道の蒐集家が長く苦心して蒐集したものが、皆此家に湊合して壯觀を呈してゐる。

私も曾て此脈の蒐集を試みたことがあつて十數年にわたり、柳合李二三に充ち、展觀には不便を感じ、或る夏人を僦ふて多少の整理をして、類を分つて大アルバムに貼り込むで見ると、それが幾んど等身にも及んだ、これを「鷄肋雜箋」と標題を附したが、勿論安田氏藏のものと量に

於て比較にならないが、其の類の大略を云ふと、古版本標本、双六類、番付類、阿蘭陀繪、千社札、商標類、ポスター集、名工肖像、繪封筒、繪半切、團扇繪、浴場圖繪、社寺圖繪、金石拓本類等々で時代の古るいもの、珍奇なものとなると、他人の蒐集した貼り帳より抜き取るやうなこともしたので、相當に骨も折れた。現代のものとなると、興味が薄いので、餘程意味のあるもので無ければ採らなかつたが、此種のことを捜し歩くのも一興であつたが、今は皆散じて一冊も留めてゐない。何人の手に歸したかも知れないが、今は唯だ亡兒を夢みると一般である。

謎の良寛

良寛禪師は其隨喜者から段々研究されて其事蹟も追々闡明されて來たけれども、いつまでも謎であるのは、父以南の事蹟である。随つて良寛の僧となつた原因に就て分つたやうで分らないやうな所があつて、良寛は佯狂であるまいかと疑ふものすらある。從來の言ひ傳ひでは、以南は勤王の志厚く、天真錄と云ふ書を著はしたが、幕府の咎むる所となつて世に行はれず、京都に出で公家や同志と往來したが、幕府の偵察が峻嚴で身の置き所なく、憤然天真錄を抱き桂川に投身したと、普通信ぜられてゐるが、或は云ふ入水と云ふは以南の逃避戰術で、實は高野山に隠れ餘生

を送つたと云ふ説もあるけれども今日まで確説は無い。或は高野入を信じて良寛は山で父に面したことがあるなど云ふものもあり、「蘇迷廬」の和歌は世を韜晦せん爲めの以南の手段で「朝露に一段ひくし合歡の花」の一句は、以南が高野で良寛に書き與へたものと推するものもある。

良寛の出家は十八歳の時、即以南の三十九歳の時で、以南が京都に上つたのは五十六歳時で、それより四年の後六十歳で入水したとなつてゐるが、此時良寛は三十九歳で備中圓通寺にゐた、此等に由つて見ると、良寛の出家は敢て父の勤王思想に關係が無いやうであるが、併し幕末の暗澹の風雲は橘家即ち以南の家は、人知れぬ波動を興して、良寛もそれが爲め出家の志を起したのかも知れない、これが即ち解けない謎である。良寛は少年の時晝行燈と云はれたと云ふので、或は解して良寛を呆痴となし、出家となつたのもうるさい浮世を棄てたのだと、譯もなく簡単に片付けるものもあるけれど、良寛は決して呆癡でなく世情に疎い人間でもないことが、その一代の行動に就て知ることが出来る、して見ると出家の動機も、何か當時感ずる所があつたのであると推測せねばならぬ心地がする。良寛が折に觸れて詠んだ歌を見ても、何か人に語る可らざる秘密を胸に潜めてゐたらしくもある。即「世の中に同じ心の人もがな草のいほりに一夜かたらむ」の歌に徴すると、懇信の解良や定彌などにも語られないことがあつたかとも取れる。流石に良寛は

追々修業を積んで悟りの人となり、其の詩や歌に心の秘密をほめかす拙をなさざれども、解しやうに由つては乃父の思想をほめかしてゐるかに取れるものも無いでもない。何分にも當時は幕府の監察が嚴格であり、殊に以南の家は政治に關係を辭し難い里正でもあるので、幕府の目に特に此家に光つたことを思ふと、良寛なるもの飽まで韜晦せねばならぬことは想像に難くない。

良寛の歿後三卷の歌稿を良寛を世話した木村元左衛門が製本すると、出雲崎代官所から、それを持参出頭すべしとあつて、三日間木村を留め置き、歌稿の検閲した後、歸宅を許したと云ふ、天真録を著した以南の子は設令出家の身でも、何か和歌で幕府をあしざまに、言ひ居らぬかと取調べたらしくもあるが、實は天真録と云ふよりも良寛の弟由之が五泉町の和泉家と往來してゐるので、其筋の注意を惹いたとは、木村家の人が言ふことである。これは相馬御風氏から聞く所だが和泉家は自分の妻の實家で、圓翁久澄などの如く和歌をよくする人が其家にあり、妻の父佳一は隠れもない勤王家であつた。由之が和泉家に往來したのも事實に相違ないが、自分はこれ迄唯だ和歌の交際とのみ思ふてゐたが、勤王思想の投合もあつたのであらうか。幕府の役人から見たら、一種の嫌疑があつたらしく思はれる。自分は幼少から良寛が好きで、お伽話にも此坊さんの逸事を聞かされたものだが、曾つて吾郷里なる下越地方に足を入れたことのない良寛が、其の弟

に由つて脈絡を通したとの説を聞くのは案外で、良寛の勤王的謎は今も尙ほ解けずにある。

相馬御風の隨筆集に就て

相馬御風氏が舊里に歸耕して既に二十年になると聞き、君の才を惜むものは、あの文藻を草深い田舎の泥に委したのは勿體ないと云ふに相違ない。私なども其の情が無いでもないが、實は私はいつとも逆に考へて、君の如き人が郷土に歸休してゐるのは至極の仕合せである。どうか他府縣にも君のごとき人があつたら、其の土地の幸であらうと、君の著述を讀む毎に、ムラノと此の感が湧き、君に對して感謝の念が動く。

どこの府縣にも相當の學者あり文人も無いわけではない、併し此等の人は必ずしも郷土に同感があり郷土を發揚するの能力があり、そして間斷なくその發揚に努力する人でない。相馬氏は既に歸休二十年に迫んだと云ふが、第一斯の如き人であつて始めて郷土の研究も發揚も出来るのである。氏が此の二十年間に如何に郷土の心田を開拓したか、如何に隠れた人の幽光を發したか、如何に埋もれた靈璧を掘り出し、それが如何に磨かれ如何に美化したか、其等の例は實に枚擧に遑ない。君の筆に載する材料の多くは、遠く西洋に求むるでなく、又都門に索むるでなく、手近

の田園に之れを求むるのが常であるため、一木一草と雖も、君の靈筆に依つて光輝を發し、長い間閑却された越後の風物も暗黒から脱して清朗となつたものがどれほどあるか知れない。越後は君一人の努力で幾割か其聲價を増したと云ふても誣言でない。私しが中央集權の眞只中から切めて一人の文豪を田舎に置きたいと望むのは強ち無理な望みではあるまい。

今度君の隨筆全集に收むる所は、専ら二十年間の折りに觸れての感想であつて、良寛一茶の如き一部を爲すものは除外するとあるが、これ尤も我が意を得て居る。隨時の感想録こそ君の愛郷心の發露であり、君ならではの考へ難く君ならではの言ひ難いものが、専ら此内に在るのだ。自分の想像では、氏の二十年の在郷は他人の想像の及ばない感慨の深いものがあらうと思ふ。君は外間から見ると屈托に似た長い生活をつづけて來たが、それで敢て不平もなく、靜かに郷土の爲めに盡された其功は、越後人の一員として私なども感謝を禁じ得ない。

『目明きの垣覗き』を讀む

松波博士の近著「目明きの垣覗き」は昭和六年に洋行された時の旅行記で、五百頁を越ゆる大卷だが、海外の見聞録は誰の著を讀んでみても、一種の形式があつて、悪しく云へばお極り文句

が多く、讀みながら餘りに常套であるのに倦厭を覺へるが、博士の旅行記は流石に常套を脱してゐる。それも其筈で博士は外國通である上に、到る處に博士の嘗て教へた人達が榮達してゐて、熱心に案内をやるので、普通の旅行者が到り得ない所に行き、見る能はざる所を見、接し得ざる人に交り、知り難いことを知るの便利があるので、赤毛布が一知半解の筆を揮ふのとは撰を異にしてゐる。

此書の名は、謙遜から命されたらしくもあるが目明きの紀行であると共に垣を覗いて堂に徹してゐるとも云ひ得よう。殊に此洋行には夫人が同伴された結果として、女性との交際が頻々として起り、それに由つて紀行が彩られ、夫婦間の應酬で興味を感ずるものも少からずある。

博士は文章の達人を以て任じてゐる人ではないが、其文は眞率で、多少の穉氣もあり、どこもなく無遠慮の所もあるので、讀者をして倦ましめざるのみか、罵られた人までも頤を解かしむるの妙がある。専門家の著述は、隨筆であれ紀行であれ、概ね自家専門の臭氣を免れないものだが博士の此種の著にそれが絶體に無いのは嬉しい。

みさご題號の由來

鑄金家會田富康氏雜誌を發刊せんとして其の標題を私に請はれた。私は佳名を案し得ないで呻吟したが氏が前年坪内博士の熱海の塔式書屋の屋上に、金屬で「かはせみ」(翡翠)を作り「風見」としたことをフト思ひ出し、標題を「みさご」(鶚)としてはどうかと言ふた。(鶚)は「翡翠」と同じ水鳥で、常に海上を飛んで時に水面に下り魚を捕へて喰ふ。そして、一種の唾液を魚肉に和し、岩穴に藏して不時の用に供するが、此の鳥の唾液は酸味を帯び、肉の腐敗を防ぐの作用があり、海邊の狡童は往々貯藏所を探つて、其肉を失敬することがある。彼等に聞けば其味は縮に似て甚だ美であると。自分は曾つて徳川期の俳書に「みさご」の標題を見たことがあるが、未だ雜誌にこれを名としたものを聴かない、所がこれが雜誌にふさはしい名だと思ふ譯は、雜誌は元來幾多の人が蓄てゐる滋味を寄せ集めたやうのもので、雜誌を經營する人は、宛がら鳥の貯藏を失敬する狡童の如しと云へば、失禮に當るけれども、其趣は甚だよく似てゐる。但だ雜誌の經營家は悽腕を以つてゐるから、敢て狡童の事を爲さず、ドシ／＼人の貯藏を誘致するから雜誌は大いに繁昌する。即ち雜誌の生きる道は、多くの「鶚」の後援を得るに在つて、其盛衰は一に繫つて「鶚」の向背に在りと云ふてもよからうと、説いたら、會田氏笑つて結構だと云ふから、乃ち「みさご」を題號とした。

回顧錄

回顧録

搖籃時代の議會回顧

帝國議會の生れたのは四十七年前の明治二十三年である。憂國の士が如何に之を見ることを待望したか、宛がら春を待ち花の咲くを待ち遠しがつたやうな觀があつた。其れも其筈、立憲政治は振古未曾有の事で、我國史の上に輝く大事件であつた。當時の政情を案ずるに、官民の抗争が甚しく、その安全瓣として議會が必要であり、志士のオアシスとしても之れが必要であり、民衆の氣を吐くにも亦之れが必要の處であつた。

議會は豫期の如く開けて、誠に目出度い慶びであつた。併し呱呱の産聲を揚げた計りの議會は危ない搖籃の内においた。議席に列した選良は、勿論議會の操縦に慣れなかつたが、政府者も選良よりも憲政の認識が足らなかつた。これは自分の偏見でなく、今となつては誰れも異論の無い公評である。斯様の譯で、折角議會が開けても圓滑な政治が行はれず、官民の抗争は益々甚しく、

明治二十七八年日清の役までの五六年間は、議會は官民抗争の土俵であつた。

初期の議會に於ける政府の首腦は山縣で、其次が松方、それから伊藤が出た。初期の議會は幸ひに無事に終了し、元勳三條、大久保、木戸の墓に特に勅命で第一議會無事終了を報告されたが第二期議會には早くも解散を見た。そして總選舉には激烈な選舉干渉が行はれ、高知、佐賀、熊本、石川の諸地には流血の慘劇を演じ、某々の地には軍隊の出動があつた。此間に保安條例や豫戒令が布かれ、國士も壯士も玉石同架に放逐され、言論の梗塞は此時より甚しきは無つた。

第三期議會は辛ふじて無事に畢つたが、第五期議會伊藤首相の時に亦解散の不幸を見た。即ち議會の初期より五六期に至るまでは騷擾の議會史で、呱呱の聲を擧げたばかりの幼稚なる議會は斯かる物騒裡に育つたのである。

翻つて當時の選舉如何と顧みるに、初期から、意外にも肅正の選舉が行はれた。當時は今日と異つて、普通選舉でなく、選舉人にも被選舉にも、納稅居住等の資格があつて、選舉人の數も甚だ少なく、二十五年の調べに依ると、京橋區の選舉人は僅かに二百二十數名に過ぎなかつた。

當時はどこの選舉區でも第一流の人物を擧げんと競ひ、輸入候補が多く、名家は諸方から引張り風で、二三區から擧げられた人もあつた。適當の人物に被選舉資格がなく、他家の養子となつ

て資格を作つたものもあつた。大石正己が尾崎學堂の媒妁で伊勢古市の油屋の養子となつたなどが其一例である。候補の選定が人物本位であつたから、後年のやうに金力で候補に立つことが出来なかつた。候補に擁立されれば、選舉費を煩はさないのを條件とし、選舉費は有志者が負擔したものである。其頃は投票の賣買が行はれなかつたから、後年の如く巨費を要することもなかつた。随つて選舉場は清淨であつた。

政黨は既に存在したが、政府黨の銘を打つたものは無つた。但し中立と云ふ無所屬の内に、暗に政府と氣脈を通ずるものがあつた。併し民間では役人の古手を候補とすることを恥とし、政府筋に秋波を送るものを吏黨と呼んで擯斥した。

以上の如き選舉區の情勢で生れた議員は、どんなものであつたかと云ふと、長く國事に盡したものが當然當選した。其他各地に散在の著名の人が多く擧げられた。政府に脈絡を通ずる者もあつたが、それは私生兒に齊しいもので、滔々たる議員は多く藩閥の非違を憤慨するものであつたから、民黨の氣勢の議會に横溢したのは自然の勢であつた。恐らく四十七年間の議會史に於て、尤も國士型の選良を議會に送つたのは初期であつたらう。

此際の議員は歳費八百圓などを眼中に置くものは無く、眞面目に且つ嚴正に身を持して、大概

は秘書などを置いて議案を調査せしめたり、相當の邸宅を構へて體面を維持したから議員の信用は此時が尤も社會に厚かつた。議會は搖籃期に在つたと云へ、選舉場の清淨と、選良の人を得た點から云ふと、搖籃期が模範期であつたと云ひ得るのである。

國士揃ひの初期議會は壯觀であつたが、政府は到底太刀打が出来ず、衝突の結果解散を二度迄行ふた。初度解散後の總選舉には思ひ切つた干渉を行ひ、保安條例豫戒令でクーデターらしいことをやつたのみならず、投票間際に自由改進黨の首領板垣大隈を始め、兩黨の幹部を裁判所に召喚するとき妨害までも試み、之れが爲め壯士輩を刺戟して其の跳梁を挑發し、軍隊を以つて鎮撫するとき不祥事さへ現出し、議會史に汚點を印したものは即ち藩閥政治家で、神聖の選舉場を汚したものは、決して政黨のみでないことを忘れてはならない。

吾々が遺憾とするのは初期の議會に折角粒撰りの國士が揃つて舉つたのに、此の干渉によつて其大半を振り落したことで、惜むべきことであるとともに、これも亦國民の長く忘れてはならぬことである。

初期より五六期迄の議會は物騒の事が多かつた。建てた計りの議事堂が焼けて、貴族院が華族會館に、衆議院が元の工學寮で開議し、閉院式が宮中の豐明殿に行はれたとき變態の事もあつ

た。

壯士が横暴を極めて議員が其襲撃を受けた例も二三に止まらなかつた。第四議會の時の首相伊藤が不慮の事で、議院の大切の場合に負傷し、臨時に首相を置いたこともあつたが、ここに漏らしてならないことは、第五議會の時の衆議院議長星亨が、院議で懲罰を受け、遂に議院から放逐されたことで、其原因は星の收賄事件で、議會は假藉なく之を罰したのを見ると、其頃の議會が如何に嚴正であつたかが知れる。

自分などは今になつて思ふのに、議會は搖籃期に於て相當の選良を得、議場並に選舉區の風氣も清潔であつたのに、政府には選良に對する雅量が無かつたことを遺憾とする。若し政府に相當の雅量があつたら、あれほど頻々たる衝突も無かつたであらうと思はざるを得ない。

山縣、松方など云ふ人々に、立憲的理解があらうとは思れない、唯だ伊藤こそ憲法の立案者で、斯人こそ理解もあつたであらうに、何故か最も大切な初期、二期に隠れてゐて、やつと四期に現はれたのは甚だ遺憾であつた。伊藤が折角現はれても解散を餘儀なくされたのは、松方の選舉干渉が祟つてゐて、議員の氣勢を如何ともすることが出来なかつたのであらう。

伊藤内閣の時豫算の衝突に、政府は妥協に意なく宛がら縁日商人の如く、一錢一厘もまからぬ

と喧嘩腰の態度は、偶々時の政府者が立憲的素養の無かつたことを自白したもので、吾等は四十七年前を追想すると洵に感慨に堪へないものがある。

選舉の回顧

過般の衆議院總選舉には、政府も取締の法を嚴にして頻りに選舉肅正が叫ばれたが、偕て、蓋を明けた後選舉違反が續々現はれ其の數、萬以上にも達し、當選した候補で訴訟中のものも少なくない。選舉肅正がどれほど効を奏したか、實に疑問である。當初選舉肅正の叫ばれた時、自分等は思へらく政黨が勢のよい時代に肅正を叫んでも無駄であるが、政黨が沈滞疲弊し、戦ふにも兵糧がなく、社會の受けもよくない時に乘じて、政府が本氣になつて選舉の宿弊を矯正せんとするのには、少なくとも時を得て居る、取締法も缺點なしとは言はぬが、大體要を得て居る、殊に選舉費を制限したことなどは、宿弊を矯正するに尤も重要な用意であつたが、投票の賣買は依然として行はれ、肅正の叫びに伴つて當該官の苛察の弊も起り、折角の肅正運動も餘り成績がよく無かつた。

自分は今帝國議會創始の頃の選舉を回顧して見ようと思ふが、それに先ち何が選舉を腐敗せし

めたかを一瞥するに、此の弊害は一概に政黨の責任にのみ歸するのは公平でない。既往に於て政府も度々選舉干渉を露骨にやつた。政府は自己に不利な候補を叩き落すに地方官を使喚した。總選舉のある毎に、政府に都合のよい結果を挙げしむる爲め例として地方官の交迭を行ふことは著明な事實である。乃ち選舉の神聖を害したものの、中に政府のあつたことを忘れてはならぬ。亦選舉の都度政黨は何時も陰に巨額の運動費を資本金から徴した。資本金は或る政黨を援助すると他日報酬があると云ふ打算から、巨額の出資を辭さなかつた。此の金が則ち投票を買ふの資金であるから、資本金も亦選舉腐敗に責任がないとは言はれない。選舉勝敗の決は、金をバラ蒔く多寡にあるのだから、選舉戦は金を蒔く競争である。逐鹿場が年を逐ふて益々腐敗するのは無理はない。地方官が或る政黨に加擔して聲援するのも、其の心理は資本金と同様で、他日の報復を期待するに外ならない。一概に國民が幼稚で選舉權の重要性を知らないなど言ふけれども、指導者の地位にあるものが、腐敗して居ることを思ふと、選舉民の無智を云々するは抑々末である。

明治二十二年に憲法が發布されて選舉法が公布され、初期議會の總選舉は其の翌年であつた。但し府縣會議員の選舉は前から行はれてゐた。帝國議會の選舉を回顧する前に先づ府縣會議員選舉の狀況を一瞥することが必要である。自分も帝國議會の開ける三年前ばかり前に、新潟新聞の

記者であつた際、或る人の勧めで縣會の選舉を争ふた経験がある、選舉は新潟であつた。此頃は縣會議員になりたがる人も極めて少なく選舉にも冷淡であつた。選舉規則もまだ甚だ備はらないもので、町の年番が投票を集めて歩くやうな仕末で、其の年番に一杯飲ませれば、投票の變改などはどうしても出来たものである。自分は或る有力者に任かしきりで、何等の運動もしなかつた。戸別訪問などは其頃まだ行はず、選舉人を饗應するやうなことも無かつたので、費用の負擔も無かつた。扱て愈々開票となつた結果、私が一票負けとなつた。然るに投票を改めて見ると私の門下生格の或る富豪の投票は自記調印までしてあるのに、それが失せて居ることが發見され、爰に争議が生じ選舉やり直しとなつた。實は従前投票を改めることもなく會つて争議も起らず選舉やり直しなどは無論無かつたのだが、此の選舉の候補者は一方は新聞記者でそれに對抗するものが辯護士であつただけに、既往の如くどうでもよいでは濟まず、双方極力争つて全投票を無効とするまでに至つたから、從來冷淡なりし選舉人も、争鬭の猛烈なるに驚ろいた位である。新潟は勿論吾縣で選舉の活機を示したのはこれが始めて、漸やく選舉に注意を拂ふことになつた。乃ち此の選舉は吾縣では劃期的のものであつた。

扱て明治二十三年議會開設當時の選舉はどんなものであつたかを回顧すると、此頃は被選舉人

選舉人にも若干の納税や幾年かの居住資格を要した、随つて選舉人は今に較べれば甚だ少なかつた。運動の取締もまだ寛大で、戸別訪問も勝手であり、選舉人を饗應するなども大目に見られてゐた、そして警察も不公平な干渉などをしなかつた。何んにしても初期の選舉に當選することが名譽と考へられたから一般に緊張した。併しどんな人を選良として送るべきかに惑ふた。既に黨派で候補を立てることはなつてゐたが、第一流の人が地方に由つてあつたり無つたりして、しきりに候補の輸入が行はれた。事實人物本位であつたが、長らく國事に奔走したものが、名聲が高かつたので、それ等が自然候補に立てられた。野心家が功名心の爲めに候補に立んとしても多くは顧みられなかつた。まだ金力で投票を買ふことが行はれず、候補に立つたものは抵ぬ有志者に擁立された關係上、選舉費は有志者が分擔した、黨の本部から所屬候補に選舉費を與へるやうなことは後のことで、初期には黨の本部は應援に演説者を派遣する位のこと、金錢の應援などは全然無つた。勿論選舉費も競争激甚地は別として大たい多くかゝらなかつた。三千圓乃至五千圓位であつたらう、一萬圓かゝつたと云ふと驚くほどであつた。候補者には金を出させないのが寧ろ原則であつたが、事實は候補者も出したに相違ないが、自家の費用を辨するのが主であつた。皆て當選した選良は流石に立派なもので國士型の人が多かつた。當時の歳費は八百圓であ

つたが、それ式のもの眼中に置くものは少なく、議員は自家の體面を重んじ、秘書の一人位は手元に置き、家も相當の構へをして抱へ車もあつたやうな仕末で、概して品位は高く、社會よりも尊敬を受けた。

當初の選舉法には選舉人たるものは直接國税を納める條件があり亦其他に若干年居住の條件もあつた。そこで其の資格を作る爲めに人から土地を借りた候補者が到る處にあつた。輸入候補の中には住居資格を缺く爲めに他家へ養子となるものもあつた。明治二十五年の新聞を見るに、大石正巳が尾崎學堂の媒妁で伊勢の酒屋の養子になつたことが見えてゐるが、こんなのは勿論資格を作る爲めであつた。選舉費用は地方の状況で區々ではあつたが、概して後年の如く多額の金を要しなかつた。僅かに端書代や事務所費位で濟んだのは、横濱市で、こゝは島田三郎氏が生涯選舉區とした所で、選舉費用の少ない點では、模範的であつた。

戸別訪問は早くから都會地に行はれた。これは選舉界の陋習で、候補者が自から選舉人に就て叩頭投票を頼むなどは不見識此上もない。傲岸なる候補者は之れを厭ふたが、それをせねば勝てぬと云ふから己れを屈して叩頭するに至つた。自分などは都會で選舉を争つたことがないから、此の醜態を免れたが、曾て友人の選舉を後援して五七の有志者と市内を回つたことがあつた、或

は酒屋の店頭或は薪炭商の家に就て誰れに投票を頼むと、鄭寧に申入れると主人は冷然たる態度で諾とも否とも云はず、宛がら乞食や物貰らひに對するが如きものであつたので、自分はつく／＼愛想をつかした。

地方の選舉も處に由つては戸別訪問もあつたが、自分の選舉區などでは此事が無く、寧ろ候補者の斯くすることは其人の威嚴を害ふものとして、高閣に据へられたから此點は樂であつた。勿論演說會には毎日幾度も出かけ、夜分もしきりに臨んで舌を爛らしたものだつた。總じて選舉の勝敗は參謀の如何に由るので、參謀其人を得ざれば、費用が嵩むのみで成績が舉らない。自分などは最初參謀に一任して日々其の情報を聞き結果をトしたものだが、參謀が不慣の爲め各地の報告に誤られ開票の結果が大いに齟齬するので、漫りに人に依頼するの非を覺り、後には自分自身諸方の情報を査察し、それに由つて表を作つてから、漸やく得票の豫算と實數に大なる齟齬を見ないやうになつた。

當時政黨の分野は民政黨の前身改進黨と政友會の前身自由黨は改進黨の先輩であるが、其の行徑は矯激であつた爲め、政治思想の幼稚時代には、穩健なる人に忌まれた、殊に資産家に恐れられた。そこで穩健の資産家は多く改進黨に與した。併し自由黨は政治運動に多少の經驗があり、

殊に壯年客氣のものに喜ばれたので、選挙運動にも強味があつた。彼等の運動は敏活軽快で足を勞することを意としないのに反して、穩健派側は運動には無經驗で且つ鈍重であつた。今の言葉で云ふと、穩健派はブルジョアで過激派はプロレタリアに比すべきものであつた。私の選挙區には殊に大地主が多く、それが一村若くは數村の素封家と仰がれ、封建制は廢されても、小大名は存してゐる如き觀があり、此の大地主は其の居村の牛耳を取つてゐたから、其の向背は一村の向背であつた。一村の包擁する幾十百の選挙人が、若し牛耳を取つてゐる人と共に動けば實に一勢力であるが、所謂長袖能く舞はずで、何事も萬事執事や番頭にかせで、唯々徒らに自分の村は大丈夫だと、運動がそれに副はないから、イザとなると多數の選挙人を擁しながら、棄權者が多く、大地主も決して頼みにならなかつた。いくら多くの財産を有し、いくら多額の税を拂つてゐる素封家でも、共有する投票は一票に過ぎない。貧乏人からでも多くの投票を得れば、勝利はそれに歸するのだから、自由黨の味方は實に於ては劣つたとは云へ、量に於ては敢て劣つては居らず、且つ輕快の運動で、手が届いたから、勝はおのづから彼等に歸する道理で、自分なども此點では苦がい經驗を嘗めた。

當初山村僻驛には投票場の設けがなく、二三里も往復して投票せねばならなかつた。英國でも

會つては選挙御免の請願をしたことが議會史に書かれてゐるが、如何さま一日のヒマを潰すことは選挙人に迷惑なことゝ感じた、斯様な譯だから此等の選挙人に日當を與へることも自然起る筈で、こんなことが投票賣買の俑を作り、投票を大切と教へれば教へるほど、投票を高く賣る習慣を養ひ、遂に抜き難い弊を生じたのである。

選挙人に酒食を饗することは初めから禁ぜられてゐたが、銘々會費を出して懇親會を開くことは敢て差支なかつた。そこで懇親會に名を藉り選挙人を手なづける苦肉の策も自然に行はれた、自分の縣の或る地方では一策を案じ出した、それは犯則ともならず結果は有効であつた。どんな方法かと云ふと、演說會を開くと五六百の聴衆が集まる。勿論郡部である、演說會が終ると、これより引續き懇親會を開くから、可成皆々其席に止まつて參列されたい。會費は金五錢と云ふから、大抵の人は其席に止まる、五錢の會費で酒の飲める筈はないが、酒は有志が寄附するから宴會が出来る譯だ。肴と云へば澤庵や鹽鮭スルメと云ふやうなもので、竹の皮を小さく切つて小皿に代へ、それに肴を盛つて出すから咄嗟に辨ずる。酒は飲みほうだいで、有志者が酌をして回はる、其の有志者は多くは地主で、會衆は小作人等である。平生地主の前に頭も擡げ得ない連中が、けふは地主から懇勲に酌をして貰らうのだから、彼等の好感を博するのは當然で、斯様なこ

とを選舉人收攬の策としたこともある。但しこれは選舉事前の準備行動であつたが、此の懇親會に列したものは大概味方となつた。嚴肅に云へば、酒の寄附と云ふに犯則が潜んだるのだが、當時は見遁された。

自分は今幾回か選舉を争ふた既往四十年前のことを考へると茫々夢の如くであるが、實は選舉に經驗が無ければ、呼吸の知れないものである。自分が全然政治と無關係の身となつてから、大隈内閣が總選舉を行ふた時、自分は強いて推されて大隈侯後援會の會長となり、選舉長として逐鹿戦に臨んだ時、侯の聲望と侯の努力とが大勝を博したに相違ないが、自分も昔取つた杵柄で、格別の困難を感じず任務を果すことを得た。

(此一篇前編と多少重複する所もあるが、其點は讀者の諒恕を請ふ。)

青春時代の回顧

本年の夏微恙に罹り數日病辱にあつた時、無聊に堪へかね、讀書にも飽いた、幸に無熱の病であつたので、葺申思ひ出づる青春時代即ち明治十七八年頃から同二十三年に至る、郷里越後の新潟新聞記者生活時代の事を床頭の筆を呵して、矢鱈に書き散らしたのが此稿である。勿論大方の

覽に供する心持で書いたものでなく、愧存文書ではあるが、自分の經歷の一端であるから、隨筆の一隅に存して置きたい慾もあるので、多少の補修を施し回顧録に收めることにした。自分の政治的經歷は既刊隨筆に聊か書いたこともあるから、成るべく避けたが多少交つてもゐる、又別項「選舉回顧」其他の項と重複することもあることを、豫め斷つて置く。

自分が東京に遊學したのは明治八年で、郷里新潟の新聞の記者となつて歸郷したのは明治十七年である。これより先き越後高田に高田新聞の創刊された時、自分は迎へられて初度の主筆であつたが、その時は高田事變が起つた際であつて、文禍で繫獄の身となり、八ヶ月の刑期が満ち東京に歸へり、早大の前身東京専門學校に教鞭を執つてゐたが、尾崎學堂氏が會つて新潟新聞の記者たりし縁故があるので、既に故人となつた前任記者吉田熹六氏の後を承け、學堂氏の推薦で、新潟新聞の主筆に迎へられた、其頃の自分は若かつたが既に妻帯であつた。妻は妊娠中であつたが、雪中清水越をして旅をした。途中道に迷ふて九死一生とでも云ふやうな難澁のことの起つたのは此時であつた。妻は案内者を伴ふて峠にかゝつたが、自分は書生時代しばし經過の地であるから、案内は不要として、道連れの或る紳士と共に自分が案内格で雪路を辿つて行くと、路に迷ふて、藥研の底のやうな所に落ちこみ、到頭斷崖の處に達した。これは全く樵夫の路で往來で

なかつたのを道があるまゝに欺かれて一圖に其道を辿つたのが誤りであつたことを知つたが、斷崖を見おろして初めて戦慄した。下つて來た道は七八町位もあつたであらう、雪に掩はれて一寸分らなかつたが、此の薬研の如き道の下には水が流れてゐて、兎もすると落ち込みそうである、是非なく樹木に身を托してしきりに聲を發して助けを呼んだが、妻に付き添へる案内者は餘程先きに進んだらしく三十分ばかりは救手も來ず、殆んど絶對絶命であつた。同伴の客は悲んで俺れはこゝに死んでも止むを得ないが、新潟迄事業用で行くので、懷中に壹萬圓を携帯してゐる、これを失ふことは馬鹿げてゐると悲鳴を發するに至つたが、漸やく自分の案内者が救ひの爲めやつて來たので、自分は喜んで遽かに元氣づき、傾斜のある雪路を物ともせず一氣に登つたが、同伴の客は頗る長幹の男であつたが、案内者に負はれてヤツト平地に出た。此人は東京に名の聞こえてゐる長谷川某と云ふ紳士であつた。新潟着の上、遭難記念にと、一夕會飲したことなどを思ひ出す。

新潟新聞に入社と同時に、自分の執筆した社論は、當時の政治を評論した「草茅危言」十篇許りで數日連載した、在社二ヶ月計りで長子が生れた、それは長男で、二十四五歳で早世したが、丁度自分が初めて新潟で初度の演説をする前日に産れた記憶がする。新潟に先づ落付いた宿は、古

町の「くし力」で、借家を捜がし當るまで此宿にゐた。新潟には自分の親族で栗林重三郎があり、妻の親族に藤井忠太郎があつた。自分の書生時代保證人であつた片原町の松木久作は既に歿して、其の家族は外に轉居してゐたが、そこを尋ねて未亡人に會した。此の松木は一時新潟で相當羽振りのよかつた實業家で、東京から地位ある人が來ると、こゝに宿泊するを例とした。

先考が懇意であつたので松木の借金に保證人となつたのが、自分の家の破綻の原因となつたのである。新潟に置かれた陸軍の分營が公金を松木に預けたので、松木はそれを資本として活動したのが、後に失敗して公金を返却するに松木の親戚某が少からぬ負擔をしたことなど後日聞いたことである。親族の栗林重三郎の長子貞吉は自分の新潟學校時代の同窓であつた。時々栗林を訪ふて種々の世話になつたが、妻は別して頻々と往來した。藤井は新潟に於ける有名な質屋で、紙店も出してゐた、妻の姉が二人まで嫁した家で、主人は書畫に鑑賞眼があり、藏幅家としても名高く、文人墨客の新潟に來るものは、多く此家に宿したが、自分の如き血氣で政治運動をやるものを嫌つたから、自分も餘り近よらなかつたが、此主人は舊式の風流を専らとし、子達の教育を怠つたので、後年には私しの世話になつたものもあり、家道は追々に衰へた。

自分は新潟學校に英學を學び、明治八年東京に轉學したので新潟には學友は殆んど居らず、前

に記した栗林貞吉と荒川才二、旅館營業の小山長作、富豪の子弟鍵富徳次郎位に過ぎなかつたが、此等は朋友として、親しむには全く趣味が異つてゐた。差づめ新潟で懇意になつたのは、新潟新聞社には小崎懋、新聞社の社友格であつた坂口仁一郎（五峯）辯護士では古閑定、新潟日々新聞主筆の佐瀬精一などであつた。坂口は詩人として名が高く小崎も坂口の詩友であつた。坂口は其頃米社の役人をしてゐて、まだ政治にたづさはらなかつたが、後には民政黨の領袖となつた人である。此人とは斷金の交りを結ぶことになり、自分の政治運動も新聞事業も、自分が新潟を去つた後は皆な繼承するに至つた。小崎は新潟新聞に自分が社中變革があつた際多くの社員は去つたが、小崎はひとり止まつて自分を助けた。自分は編輯事務を此人に委して、可なり長い間政治運動をやつた。小崎は佐渡相川の人で藍川と號した。後年石油事業に關係して柏崎にゐたが成功せずして終つた。佐瀬精一は自分の主筆たる新潟新聞と競争の地位にある新潟日々新聞の主筆であつたが私交上懇意であつたが、彼れの新聞は内政が振はない爲め、自分の新聞に對しては雌伏の地位にある商賣敵で往々衝突を生じた、自分は其頃官僚嫌ひで、縣廳の役人など、與々酒を飲んで遊んだりすることを厭ふたのに、反して佐瀬は常に役人と交り、伊太利軒あたりで碁を戦はした。自分の新聞の社長鈴木長藏は圓滿主義の利巧な人で縣廳にうまく取り入ることを寧ろ喜

んだのに、自分は逆であつたから、自分を喜ばなかつたやうに思ふた。自分は早く氣がついてゐたが、長く新潟に居る氣もなかつたので一年の任期が満れば、東京に歸る積りであつた所、忽ちに新聞社内の一變革が起つて、株主は鈴木社長を逐ひのけたので、自分はそれから六年ふみとゞまることになり、爾後自分勝手に行動した。その自分を助けた株主は龜田方面の有力者である本間新作、島山嘉三、玉井貞太郎などで、自分の政治運動は此等の人々の後援で追々進んだのである。

以上變革の事情を云ふと、新潟新聞社の株主中の有力者は、主筆が頻々と變はるのを不可とし、社長の好惡で主筆を更迭することを改めるには、社長並に社長に追従する株主を買収するに在りとなし、新潟附近の龜田方面の有力者が動き出し、其の頭目たる本間新作島山嘉三など云ふ人々は、社長に交渉して、其の株を譲り受けたので、事は忽ち解決した。此の改革問題の起つた時、改革派の株主連は、私に向つて暫時温泉場に閑臥せよとの勧めがあり、私はそれに應じて、出湯の洞春館に泊してゐると三日も経ない中に使が見えて、直ちに歸社して經營の衝に當れと云ふて來たので、餘りに早く事が片付いたので一驚を喫した位であつた。歸社の後事の経緯を聞くと、鈴木社長は株を譲つて引退したのみで、他に何等の異動がないことを知つた。此の變革があ

回 つて後任社長に推されたのは畠山嘉三で、編輯の全權を私に任されたので、私も留任することになり、終に二十三年まで六ヶ年足を留めるに至つたが、これは全く龜田方面の有力者の支援に由つたのである。

録

話は前に戻る。自分が新潟に落付いた数月の後に、私に英書を読んでくれよと云ふ連中があつて諾した。それは白勢春三、齋藤軍八郎、鍵齋卯一郎の三氏に對しゼボンの貨幣論の原書の輪講をやり始めた、白勢は今誰れも知る大財閥となつてゐるし、齋藤は其頃新潟商業學校の教頭であつたが、後には馬關の商業學校の校長となり、今は隱退したが一二年前東京で久方振りで面會した。卯一郎は鍵富家の秀才であつたが、惜かな若く歿した。尙此頃自分の酒友として記憶に存するものが二人ある、其一人は濱政弘であるが、これは土佐人で三菱の岩崎が新潟縣に多くの土地を領してゐるので、其差配のため新潟に常住してゐた。此人はある時私が餘り官僚と疎隔するのを諷めてくれたことがあり、大同團結で後藤が越後にやつて來た時は、濱と提携して面白い對抗をやつて自由黨の鼻毛を抜いたこともある。他の一人は柏村貞一で宮内省に奉仕して侍醫となつた人だが、當時は新潟に内科醫を開業して居り、自分とは深交があつた。

自分の新潟の住宅は度々變したが柎屋小路の角に住した時、濁川の親戚眞島の叔母が、一ヶ月

計り出療治と號して私の家に宿したことがある。これは自分の家即ち叔母の實家に何も家具が無いのでそれを供給するのが本意で來泊されたので、佛壇を作つたり容の膳椀を揃へたり。夜具蒲團まで拵へてくれたことは感謝に堪へない。自分はこれに依つて初めて必要の家具を備へ得たのである。

此の柎屋小路住居時代に時々訪ねて來たのは吉田東伍であつた。吉田は徴兵免除の方便として其頃水原小學校の教師をやつてゐた。訪ひ來る毎に時事を論じた文を携へて來た、それを見るとなか／＼識見があり、殊に日本歴史に精通してゐるのに往々舌を捲いた。會津の磐梯山が爆發した時は、わざ／＼探検に出かけてその報告かた／＼來た時は、長篇の噴火の詩を携へて來た。それを見て自分は愈々其の非凡の才に感じ、自分の言ふには、君の如きものが、小學の教鞭を執つてゐるのは、勿體ない。若し自分が東京に在れば、三年を出ずして君を博士たらむるであらうと大言を吐いたが、其言空しからず、君が博士を贏ち得たのは、自分の推輓にも依るのである。自分が新潟を去つて東京の番町に住した頃、吉田は北海道に苦勞して上京し、自分に身を寄せた。其際自分は讀賣新聞の主筆であつたが、吉田は自分を援けて、毎日筆を把り、日清戦役には讀賣の從軍記者となつて、軍艦橋立に便乗して海戦を觀た。歸來大日本地名辭典の編纂を始めた

のも日韓古史断を著したのも皆吾家の書生部屋から端を發したもので、辭書は富山房の經營に移し十三年を費して成つたが、これに依つて吉田は學位を贏ち得たのである。

新潟の酒樓で自分が義理にも行かねばならぬ家は彎月樓であつた。此家の長女に私の同族助次郎の次男政之助が養子となつたので、自分にも義理が起り、自分で人を招く時には、常に此樓に於てした。又人が私を招く時も此家でやつた。此樓には男子もあるのに、何故に長女に養子を取つたか知らないが、嫡男は後に新潟市の助役となつた。尙政之助は當時政次郎と改稱し、後には某旅館を買受けて旅宿營業をやつたので、自分もそこに度々宿つたが、先頃博士の學位を得た會津八一は乃ち政次郎の次男で、早大の出身であり、早大の教授であり、自分は十數年落合の別荘に住ませたが、これも吉田同様の書生部屋から生れた博士だと云へないことはない。

酒樓と云へば當時行形亭へよく行つた。その扉を隔て、新潟監獄がある、高田新聞在社中筆禍で此の監獄に數日あつたことを思ひ、又刑服をつけ市中へ買物に出されて二三度行形亭の前を過ぎたこともあるので、いつも此亭に飲む毎にそれを思ひ出さずには居られない。在監の時、ある日外役に出されて、縣廳裏手、今の師範學校邊の砂山から、ある地點の地形を築くので砂を、モッコにつめて竹村（良貞）と共に土砂を運んだのはつらいことであつたが、自分が新潟新聞に在社

中、其の地形を築いた處に此越學館と云ふが建てられた。それは後日日本女子大學を經營した、成瀬仁藏を中心として萩野左門や自分などが發起したのであつたが、開校の時前年泣きの涙で土を運んだことを追憶し、此學校の基礎を爲すに自分が力あり杯云ふと誰れも不審に思ふであらうが自分の在監の時典獄が復讐的に體力不相應の仕事を課し、土砂を運ばされて出來たのが此敷地であると云ふて、一同を驚かしたことがある。

新潟の白山公園の惜樂館は其頃出來てまだ時代を経ず相當に奇麗であり料理もやつたので、随分頻繁に行つた。藝者などを呼ばずに靜かに飲むには安あがりであり處で、園は狭いが信濃川の見晴しがよいので自分の好む所であつた。白山の社には自分の家の隆盛期に海運業をやつた紀念物たる、巨大の額があり、公園の碑は秋月種樹が前に掲げた片原の松木に寓してゐた時に揮毫したもので、自分の目のあたり見たものであり、又公園の入口に英文の禁制札が立つてゐるが、それは自分の英學の師であつた米人エドワード、モスの書いたものであるなど、自分の追憶をそゝるものもいくらかあるので、こゝに遊ぶ毎に興味を感じた。

一と頃毎日／＼訪ひ來つて可なり煩はされた二人の客があつた。それは中蒲原郡金津の中野貫一と眞柄富衛であつた。兩人所有の石油鑛區が政府より不當處分を受けたと云ふて、其是正を上

申することが要件で、自分は二人の囑に依り、しばし上申書其他種々のものを書かされた。此頃の記者は萬能と思惟され、法律事務も代書も記者の仕事であるかのやうに、辯護士へ行くべきを、辯護士は文章が下手だと云ふのでしきりに私の處へやつてきた。此一件は結局中野等の主張の通り、行政裁判は政府の非違と判決したと後に聞へたが、中野貫一が石油界に雄視するに至つた端緒は此時に發したので、中野は他日大資産家となり、公益の爲め中野財團が出来、曾つては衆議院議員に擧げられたこともある。當時を追懐すると随分五月蠅さいことであつた。

此時分新聞に小説を載せることが漸やく流行し、坪内逍遙から小説の寄稿を得たこともあつた。坪内は文章に繁劇を極めた際であつたから、五六回位書いて遂に續かなかつた。そこで已むなく自分が西洋小説を口譯し、小崎がそれを書き綴ることにして新聞に連載した、其標題は今忘れたが、坪内より借り受けた原書で、*Tanaka Called Back* と云ふのであつた。其の内容は露西亞の士官が或る婦人を犯して、それが軍律に觸れ、遠くサイベリヤへ追放の身となつた。犯された婦人は氣の毒に感じて熱烈の戀をわづらひ、雪中苦艱を忍び、長途サイベリヤに戀人を尋ねることとなり、萬死を冒してサイベリヤに辿り就て見ると、戀人は瀕死の病床にあつたので、極力看護して病が癒へると幸に此士官が特赦に遇ひ、それを婦人が連れ歸ると云ふやうな趣向であつ

たが、サイベリヤ迄の苦艱旅行の筆が冴えてゐた。此の小説は可なり有名のものであつたか、報知新聞にも森田思軒の反譯を掲載した、最初は題が異なるので氣がつかかなかつたが後には同一の原書の譯であることが分つた。幾十回で終つたか、それも忘れたが可なり長く續き、自分が肥塚龍と共に富山縣へ演説に出かけた際も隙さへあれば鉛筆を馳せて此の小説を卒譯し、それを小崎に寄せて書かせたものだ。其際肥塚は自分が演壇に咆吼して、怒濤の如き聽衆の妨害を物ともせず、之れを屈服した氣魄と、座に復すると直ちに筆を呵して譯稿を作るのを見て、ひどく感服し、歸京後毎日新聞に載せた紀行に自分を賞歎したことがある、小崎に書かせた小説はこれに止まらず、自分が長野監獄にありし際の生活を、他人のこのやうに事實を枉げず、繪まで加へて毎日小説のやうに書かせたこともあつた。自分自身は毎日新聞の一隅に隨筆的に西洋文豪の逸話を譯して載せた、それは他日讀賣新聞在社の時堀紫山の名義で今古雅譚と題して出版したことがあり、後に又取捨を加へて早大出版部から「蟹の泡」と題して出版した。此の原書の書名は忘れたが、和田垣博士より借りた書物から特にツムジ曲りの文人の逸話を譯したもので、地方新聞には勿體ない隨筆であつた。東京では其頃宮武外骨が「滑稽雜誌」を發刊してゐた頃で、彼は私に對して何んの挨拶もせず轉載したことが疾しかつたと見え、ある時自分に寄せてきた書簡の表書

に「文界の窃盗……」とあつたので一笑したことがある。併し宮武とは曾て東京に會する機會もなく過ぎたが、先頃熱海から歸京の汽車中に初めて出會した、彼れは其時年齢を七十歳と語つたが、自分より七歳若く、滑稽雑誌を出した頃は、多分彼が二十歳位の時であつたらう、五十年前の已往を默想して坐るに感に堪へなかつた。

新潟新聞では自分の入社した頃「新潟繪入新聞」を發行してゐた。此の新聞に小説を書く二人の記者があつたが其名は忘れた。挿繪を書く畫家は尾竹國雪と云ふた。これは新潟の紺屋の總領で、繪は上手でなかつたが柔和な男であつた。國雪に二人の弟があり、それが毎日兄の辨當を運んできた。これが竹坡、國觀の二人で、共に兄よりも天分があり、他日東京の畫界に名を出した。國雪は後日大阪に居り、越堂の名で畫を書いたが、矢張二弟に譲らねばならなかつた。越堂の名は伊藤公の命したのだと聞へたことがある。私が衆議院に坐席を有した頃、富山縣選出の同僚代議士島田孝之より竹坡、國觀の教育を頼まれたことがある、如何に畫をよくしても多少の學問がなければ氣品が揚らないと自分も島田の請を諾したが、彼等は畫筆を投じて學校に入ることの辛抱が出来兼ねた。それも其筈、彼等は少年ながら博文館の雑誌の挿繪を書き相當小遣錢を取つてゐたから、窮屈な學問などを欲しないので、島田の厚意も水泡に屬した。實に惜しいことで

あつた、少しく學問があらば晝も更らに上達したであらうにと遺憾に思ふてゐる。

新潟の花柳界はよく遠方の客を惹きつける處で、自分の新潟にゐた頃は、市街に貸座敷が普通民家と雜居しており、藝者屋も同様であつた。鍋茶屋など今日の如き盛をなさない時で、其頃の老婦はよく私の宅へ往來し、妻とは懇意であつた。行形屋もそれに隣つた堀田屋（今齋藤家の別荘となつてゐる處）が繁昌時代で、宴會と云へば行形堀田が會場であり、大なる園遊會には兩家を通じて會場とした。洋食屋は伊太利軒のみで、伊太利の曲馬團の一員が經營してゐた。唐物屋の大きなのは布川店で、八木明直が架した信濃川の木橋は其頃橋錢を取つた。長岡までは安進社の汽船が毎日往復し、龜田新潟間にも玩具のやうな小汽船が往復した。

其頃新潟へ東京から來た客で自分の交つたものを追憶すると、宇川盛三郎が監獄の視察に來た、末松謙澄も來たがタシカ縣治局長であつたかと思ふ、岡千仞と大須賀筠軒も來た、兩人を某酒樓へ自分が招いたことを思ひ出す、自分の友人で遊びに來たのは、岡山兼吉、江木衷、大谷木備一郎、高橋捨六などで皆法律家である。新聞記者で遊びに來たものも數人あつたが時事新報の渡邊治と云ふ記者は新潟縣の事情視察にやつて來て、私の家に就き二時間ばかり私の談話を聞き、どこを經廻つてもこれほどの話は容易に聽けない。外を廻る必要はないと云ふて匆々東京へ戻つ

たが、多くの記者は必ず私に就て縣のことを聽へたものである。政治界の人々も追々來たが、それは縣が政治の局面に活氣を帯びた一二年の後であつたが、自分に交渉のあつた人々を擧げると、島田三郎、肥塚龍、波多野傳三郎、加藤政之助、大石正己などで、條約改正一件や大同團結などのために來港した。尙ほ廿三年の總選舉に自分の應援に來たものは小倉鎮之助、能川元重（後に寺島と姓を改む）等四五の人々があつた、此等多數の人々の中には特に言ふべきものもあれど、それは爰に略し、唯だ人名のみを掲げて置く。

新潟在留初一年に自分の一身上大切の關係ある事を爰に漏らしてはならぬ、それは宗家に往來を初めたことである。自分は少年時に早く東京に遊學したので曾て宗家を訪ふことが無つた。從來は自分として敢て必要も無つたのだが、今度新潟に在留することになると、宗家に往來しないことは自然人の怪しむことにもなり、自分に不利でもあつた。宗家は越後第一の素封家として知られ、自分の家とは切つても切れない本末の關係のあることは何人も承知してゐることだ。私の家が富饒時代に新潟で豪奢をやつたことも新潟の年老いたものには尙ほ、記憶に存してゐること、旁々宗家と往來しないことが目立つやうにも感ぜられたが、幸ひにある人の斡旋で往來を初めたが、宗家も喜んで私を迎へてくれた、其頃は今の主人の祖父靜月翁存命の時此人は頗る保

守の人で郷黨から憚られ、頑固翁を以て目されてゐたが、堅實に家を守るには、往々世間から誤解を受けることも有り勝で、自分が遇つて見れば、決して頑固の人でなく、富豪に稀れな通人であつて、自分はいつも訪問する毎に歡待を受けた、殊に今の主人の父湖月翁とは最も親しい關係が生じ、公私の事に此翁の援助を受けたことは、枚擧に遑がない。吾が宗家は天正以來の舊家であるだけに、分家や親族が多く、此等に對しての嚴格の分限規定もあつたのに、自分は常に破格の待遇を受け、後年しばしば選舉場に立つたのも主として宗家の支援に據つたものである。

私が桎屋小路の居にあつた頃、食客として宿泊してゐたものに河内廣次郎と云ふがあつた。これは東京の芳野の塾に學んだ漢學生であつたが、字を書くことをよくする外別に能が無く、新聞社の手傳をさせることも出来なかつたが、本人は至極好人物で、地本村の舊家の弟であるので、自分も心おきなく食客として置いたが、コンナ人物でも意外の大役をつとめるものだと後に感じたのは、自分の選舉に大なる味方を此男に由つて得たからである。自分は第一回の選舉に敗れた原因は單一でないが、毎々困つたことは選舉區に岩船郡が加はつてゐるので、その郡内の有力者佐藤伊助が生憎反對黨に屬してゐた爲め、選舉毎に非常の難儀をした。然るに此の佐藤は河内と親族關係があり、廣次郎の妹が伊助に嫁してゐる所から、遂に廣次郎に説き落されて、自分の黨

與となり、兩人相携へて選舉に當選したこともある。此人が自分の味方となつた爲め、選舉も常に自分の方に利あるやうになつたが、これが無能を以て自からも許してゐた、廣次郎の働きであつたと思ふと、人は決して棄つべきでないと感じた。

新潟在住の時追々各方面と交際が開けたが、最も大切な關係が龜田に起つた。此地には豪族で畠山嘉三と云ふがあり、早通村に玉井貞太郎と云ふ豪族もゐた。此の玉井は坂口五峯の親族で貞太郎の姉が五峯の先妻である、そんな縁因から、龜田に私の講演を聴く會が起り二十名ばかりの附近の有力者が會員となり、それを龜田協會と云ふた。此會員中には自分の後援となる人が多く、新潟新聞に予を留任せしめたのも前に云ふた如く此會が興つて力あるのだが、此地は自分の策源地で、自分が同好會を作つて改進黨の同好者幾千名を糾合した時も此協會が大なる後援をなしたのである。又此の講演會が範となつて、各地に同じやうな會が起り、折り節市町村制が發布され、其の講義を聴く必要が各地に起つたので、自分は毎月十數會に出席して、自治制の講義をやり、幾んど新聞社の座席を空ふしたこともあるが、此の十數會が皆な自分の味方となつて同好會を組織する時それに入會し、侮る可らざる勢をなしたので、反對派も焦つて自分の爲すに倣ひ、特に東京より人を聘し同じ事を企るに至つた。私が立憲の初頭に聊か事をなし得たのは實に龜田

協會の支援に據るのである。若し一年の任期満ち、郷里を引き上げて東京に戻つたとしたら、自分は前任者のごとく何も遺さなかつたであらう。

龜田協會の事から終に同好會のことに言ひ及んだが、同好會に先だち自分の興つた協會がある。それは當時縣會議長であつた山口權三郎の首唱の下に起つた殖産協會である。山口が中越の有力者であつた丈に、中越の富豪の全部をこの會に網羅した、其數は二十數名もあつたであらうが、此内に中越を外れた中蒲原の本間新作などもあつたが大體中越の有力者を網羅した、自分は無資産でありながら、會員の一人であり、柏崎や三條など各所で泊りがけに會合したことを思ひ出す、此會の目的は越後の産業を興すことであつて、會つて地租に關する建議をしたことがある、山口の主張で自分はその建議を草した。殖産の實行として日本石油會社が生れた。これは主として會員内藤久寛が經營したのだが、山口初め會員のすべてが賛成者となり株主となつて成功した。私は此の有力者の團體を政治化したいと内心冀望を抱いたが、自由黨に屬した地方の有力者が倒産しに前轍に顧み、山口は大の政治嫌ひであつた。自分は山口と對酌して往々深更に及び熱心に殖産の爲め政治の改良を説き、政治がよくなければ殖産の好果を期し難いことを屢々説いたが、山口はなか／＼執拗で容易に従はなかつたが、追々時勢が國會の開設にも近づいてくる

ので、漸やく微温的に政治の同好を以つて一團とする事に同意を得て起したのが同好會であつた。これには殖産協會も合流したが、下越地方の有力者を勧めて皆此の團體に抱擁した。政黨こそ資産家の忌憚畏怖するものであつたが、同好會の如き社交俱樂部には設令ひ政治的趣旨が含有されてゐても、人を恐れしむるもので無つたから縣下の有力者は靡然として賛同した。誰れしも長岡の三島億次郎や私の宗家などを捉らひることを困難と見たのであるけれども、此等も私の遊説で容易に賛同したから、新潟の桎屋小路角の六角洋館に發會式を擧げた時は、頸城を除く外、中下越の有力者を幾百と羅致した。此の團體は進歩黨の卵子で、一轉して自由黨に對抗するものとなつたのである。

當時政治上の大糾合、別な言葉で云へば政黨の必要は帝國議會開會期の漸やく迫るに連れて、否定の出来ない時勢であつたが、地方に於ては黨派をもち立てるには、斯くも漸進的で氣長かに微温の方法で無ればならなかつたのである。これには殖産協會や龜田協會や私が諸方に關係した自治體の講演會などが合流したから出来たと云ふべきだが、漸やく苦心の結果が實を結ばんとする矢先きに、大同團結がやつてきた。此の大同團結は、改進黨が政府の壓迫で振はないので、改自合同して大同團結を以つて黨勢の振張を冀團せんとし、後藤伯を押し立てたものであつたが、

新潟縣の如く當時自由黨のみ相當勢力があつて、改進黨はまだ襁褓を脱しない所に大同などの名目で合抱されるれば、弱小は呑まれて仕舞ふ危険があるので、在京の政友は此の大同團結を助けよと云ふて來たが自分は斷じてそれに應ぜず、却つて後藤の來港に乘じ自由黨に挑戦し、偶々新潟に集つて居た大地主會の面々が、大同團結に胡麻化されて誘拐されんことを恐れ、濱政弘と通謀し、濱が後藤と同郷であるのを幸ひに、後藤をおびき出して大地主の宴會に出席せしめ、其故を以つて大同團結の會合に出席を斷らせた。自分は伯に隨行した大石正已を或る酒樓に毎日閉じこめたことは別項大石正已の處に説くから、こゝには略するが、後藤は唯だ自由黨員の歓迎を受けたのみで、毫も目的を達せず歸京した。此の騒ぎを利用して自分は褒貶の巷に立ち、大いに同志を激勵し、爲めに同好會も漸やく政治的氣勢を揚げるやうになつた。

東京の友人は私の態度に不満であつたかも知れないが、新潟に於ける黨の狀勢には全く認識を缺いてゐた。漸やく盛り立てた黨勢を守らねば、大同團結を名とする自由黨の食ひ物になつたに相違ない。大同團結などは一時の權宜に過ぎないので、果してそれが崩壊した。自分は當時非大同團結論を筆し小冊子に印刷して自分の主張を明かにした。自分と同主義を以つて新潟日々新聞の論壇に立つてゐた佐瀬は改進黨を作るに何等の援助もせず、後藤の來た時は社員職工まで驅

り催して伯を迎へ、自分に對立して歡迎會席にも出たが、全く自由黨の敵陣に陥り、罵詈を浴びせられた。自分はあらかじめ同志に檄し、一人も出席せしめなかつた。心ある自由黨員は佐瀬の出席を私に對する商賣敵の嫉妬からとして、私の態度の男らしいことを稱揚したと聞いた位で、佐瀬は全く失敗したのである。後藤伯の新潟滞在は四五日であつたが、着港匆々濱政弘の措略でおびき出し、資産家の會合席に後藤のなした演説は、佛蘭西の革命論や一知半解の經濟論などで、會衆の愛相をつかしたのは自業自得で、別席に控へて手を拍つて喜んだのは自分一人であつた。此の伯おびき出しが自由黨の憤怒を買つて、私を道に擁して暗撃をすると云ふことが、私の社の探訪者の知る所となり、夜分私が歸宅する時其の探訪者は私を護つて大通りを避け、特に小路を縫つて私を導いた。私は此の案内者を拉して或る小料理屋に入り一杯傾けながら、聞けば、自由黨は最初私は何れにか危険を避けて新潟に居らぬと思つたらしいが、左はなくして大石を酒樓にとじこめて、酒樓で自由黨攻撃の社説を書いて居ることが分り、今夜は壯士を使喚して要撃することになつてゐると語つた。幸ひに其夜は無事歸宅し得たが、随分危険であつた、此の林と云ふ探訪者に就ては、更らに奇遇の項に説くから、こゝには略する。

以上の事があつてから、自由黨は大同團結の旗下に別に何も加ふることがなかつたのに、大同

派と稱するやうになり、第三者も又斯く呼び、それに對し同好會を同好連と呼び、兩派の角逐の盛んな處では、旅館も車夫に至るまで、二派に立分れて、車夫の提灯に同好連同連大など、書き別けるやうになつた。柏崎あたりでは現に自分はこれを目撃した。柏崎在の椎谷の山奥に演説をした時、夜陰に自分は馬を僦ふて乗つたが、其の馬夫は其處の村會議員で、これが同好派に屬するものであることが知れ、自分は馬上で同好會の趣意を説き聞かしたことがあり、同じ會員であつて見れば、相當の敬語も用ひねばならず、最初はお前と云ふたのが、後には君と呼ぶやうになり、椎谷の宿で別れる時は、對等の挨拶をしたことを想ひ出すが、同好派も此頃は可なり手廣く縣下に行渡つた。山口權三郎が自費で同好會の會館を建てたのも此頃であつたらう。その場所は新潟新聞社附近で相當に廣ろい二階建であつたが、其の開館の祝日が恰かも大隈外務大臣遭難の當日で、東京から其の悲報が達し、大隈外相の條約改正はこゝに蹉跌を生じたのである。大同連は此の悲報を喜んで其の機關新聞に號外を刷らせて千枚許りを奉書紙に包んで、貴館の開場を祝すと云ふて大勢を率へたものが、私に面してそれを渡した、私は其の惡戯を忌々しく思ふて即坐につき戻すと、彼等一群は喊聲を擧げ、市中を練り歩きながら、此の號外を撒き散らした。自分の生涯中此時ほど無念骨に徹した事は無つた

自分が記者時代に大隈侯の條約改正問題ほど骨の折れた事は無かつた。随つて大隈外相の遭難と此案件の蹉跌は、自分には大なるショックであつた。井上伯の條約改正案には餘りに瑕疵が多かつたので、自由黨と吾々は合流して、其非を鳴らし、自分はこれをリードして長文の建白書を書いた。タシカ新發田の旅舎で三四日筆を把つたが、始終自由黨連は私を警護したものだ。此の條約改正は終に失敗に終り、踵で其の衝に當つたのが大隈外相で、今度の改正案は前案に比すると頗る面目が改まり、多少不満足の點があつても、多年の屈辱を伸す過渡に於て、一時忍ぶことが大局に於て己むを得ないのであるが、十全を望むのは誰れしもの情で、一時多少不満足でも過渡に己むを得ないとするのは、相當の識者であらねばならぬが、紛々たる俗論に對し、大隈侯の條約案を説明するに、ドンなに骨が折れたか、すべて攻撃する立場は樂で、建設的回護をするとは難儀のものである。自分は記者としても演説家としても随分困つた。此の運動中に曾ては私を警護した自由黨の連中が鋒を轉じて、或る人の偽書を以つて自分を誘ひ出し、其の途中私を襲ふて、私を芝田の清水谷の溝中に投げ込んだ椿事もあつた。私は其事が、あつて間もなく東京より加藤政之助が此條約問題で東京からやつて來たので、自分は先導して新發田の演説會に臨まねばならなかつた。先きの清水谷一件で手を下した劍客某が罪を得た揚句であつたから、新發田に

演説することには多少の危険もあつたが、警察署では未曾有の警戒裡に自分を十數の警官で取捲いて會場へ送り込んだ其際は如何にも物々しいことであつた。斯くも難儀を経た大隈外相の案が遭難と共に蹉跌したのは、私に取つても絶大のショックであつた。こゝに思ひ出すことは清水谷の一件の際、警察から醫者を伴ふて私の旅舎に就て、檢診を行ふたことである。自分は水で濡れただけで、怪我はしなかつたのだが、身體検査までして、若し聊かでも傷を受けて居れば、それを以つて罪状としたいと云ふのが警察の望であつたらしいが、自分としてはそれ式の事で反對黨を罪することを大人氣ないとした、亦事實負傷もしなかつた。此の檢診に來た醫師こそ二十數年前築地の肥田野竹塙塾に於ける同窓の長谷川松溪であつて、一別以來初めて會したので、檢診のことなどソツチのけにして互ひに談話に耽けり、警察官を困らせたことがあつたが、此事も奇遇の篇で更らに語ることにする。

當時を考へると随分物騒の事が多く、政治界に立つものは自分なども到底疊の上で死ねないと自分なども内々覺悟を極めてゐた。四十二歳の頃重患に罹つて政治から足を洗ひ、爾後政治には一切携らないが、左もなければ、自分はどうなつてゐたかも知れないと、つくづく思ふことがある。自分は粗豪の質で兎もすると遣り損ふた。高田にある頃筆禍に罹つたのも全く周到の注意を

回 缺いたからであるし、折角衆議院選挙に當選しながら資格に不備の處があつて、失格したのも、納税事務を任かして置いた者の懈怠から、聊か納税が斷續したからであつて、此等の事は主として自分の粗慢の然らしめたものと白状するの外は無い。

私の新潟在住は到頭明治廿三年の國會第一期總選挙の時に迫んだ、選挙前二年計りは同好會員を率へて各地に轉戦し、選挙準備が當時の自分の任務であつた。自分が最も開拓に力を籠めて効果のあつたのは、中蒲原郡であつた。新潟の隣郡であるので、遊説に便利であつたのみならず、こゝに龜田協會が自分の爲めの策源地でもあつたので、旁々便利もあり、此郡の各地は呼應の勢があつた。新津、小須戸、五泉、村松等の郡内の名邑には私を迎へる會があつて、怠らず臨席したので、龜田汽船に乗ることが頻繁で、フリーパス、を授けられた位であつた。若し初度の總選挙に自分が此區の候補に立つたなら、恐らく敵が無つたであらう、それは分つてもゐたが、一派を統率する自分としては、自分の利を先にすることが出來ず、北蒲、岩船、東蒲三郡を一區とする處が、自分の故郷であるので、その候補に立つ事が己むを得なかつた。此區では北蒲原岩船二郡に於て自由黨が早くから盤屈し、自分の生れた水原なども彼等の叢窟であり、岩船郡の村上なども自由黨の占領する所で、最も開拓を要する所であつたが、兎角郷里はやりにくひもので、

開拓が届き兼ねた。岩船郡の如き當時自分を助けるものは幾人となく、演説會を催すにも自分から會場を借りねばならぬやうな始末で、而かも反對派の妨害で會場に充つる寺院を借りることすら困難であつた。自分の生れ故郷にはまだ舊宅が存してゐたから、數月そこに引移つたのも選挙越備の爲めであつたが、此處に同好會員は幾許も無く敗勢は略々分つてゐたが、俄か開拓は不可能であつたのは、自分の活動轉戦は越後の半土に涉つて、多忙を極めたので己れの選挙區に専らなる事を許さなかつた。元來北蒲原は大地主の最も多數を有する處で、多くの地主は一村數村を併せて君臨した。幸ひに有力なる大地主は自由黨を忌むの餘、抵ね私の味方であつた。私自身の家も昔しは此の郡内の大素封家で、誰れにも知れてゐた。其の家の子が産を失つて故郷の人に頼るのであつて見れば、氣の毒の情もあつたと見へて、同情者が多かつたが、實は如何に有力者でも活動が伴はない味方は頼み甲斐が無いものだ、今から考へると、當時ブルジュアは多く吾派に屬しプロレタリアは抵ね自由黨に屬してゐた。プロの運動は如何にも輕快であるのに反して、ブルは遅緩で、己れの命令次第どうにもなる居村の選挙人をすら統制することが出來なかつたので、票數は多く吾派にありながら、それを活用することが出來なかつた。若し北蒲原郡の有力者が其の部曲に於てプロ式の活動をやつたならば、設令岩船全郡の投票を敵に與へても勝利は吾れ

に歸したであらうに、長袖は舞ひ難いもので、運動に讓る所があつたので、終に勝を反對派に與へたが、實は此一敗の爲め選挙の一經驗を得た。選挙と云へば今も同様で參謀があつて、候補者は第一線に立たず之れに一任したが、到底人任せでは選挙は勝てるものでないとの實驗を得た。各所から集まる豫報の打診は候補目から第一線に立つにあらざれば出来るものではなかつた。各地の擔任者は二割も三割もかけて數の豫報をするから、それに誤まられることがいつの場合でも敗因である。自分は貳回の選挙に此經驗から後には參謀に任さず自から打診の衝に當つたので、初めて要を得て、それからは敗を取るやうなことは無つた。

當時の逐鹿界の狀況を云ふと、初度のことでもあり選挙は幼稚であつた。まだ此頃は投票の賣買などなく、地方官の干渉も無つた。選挙費と云ふても三千圓位のものであつた。候補者は演説場にこそ現はれたが、自重專一と神棚に祭り上げられてゐるやうなものであつた、勿論地方では戸別訪問の如きはまだ無つた。當時の候補者は人物本位で、財産家が候補に立つても、金錢で投票を左右することが出来なかつたから、多くは失敗した、自分の場合に就て云ふと、候補は二人であつたが、いつも私の投票數とは數に於て甚しい開きがあつた。嘗ては北蒲原の郡長（小倉某）と共に候補に立つたことがある。郡長などは投票を得る一勢力となつてゐる所もあるが、吾區に於

ては郡長を何とも思はない素封家が多いので、一向振はなかつた。私の友人共は郡長など、提携するのは不名譽であるから、提携を斷てと勸告したこともある。或時は郡内の大地主で財産家と聞こえた人と提携したこともある、此人は多額納税の資格あるものであつたが、金をバラ時く後の選挙と事情が違つてゐたから、一向に振はなかつた。郡の組合せから東蒲原は小郡だから別として、他の二郡から一人の候補を擧げることが戰略であるのだが、數次の選挙に岩船から候補を擧げることが出来なかつた、それにしても追々選挙の統制を得てから、北蒲原で擧げた私外一人それは豪家でもなかつたが、二人とも當選するに至つた。岩船郡で提携の候補を得たのは前に語つた自由黨の一角を崩し佐藤伊助が吾派に歸してからで、兩人提携して格別の苦戦もせず二人共當選するに至つた。岩船郡に此の提携を得るまでは自分もひどい難儀をした、佐藤と共に當選した時、自分が村上の祝宴に回顧演説をやつた時、聲涙共に下つて、會衆を動かしたことを思ひ起さすには居られぬ。

自分の新潟在住の頃の思ひ出は政治方面に尙ほ記すべきものもあるが、大略は隨筆に收めてあるから此處で筆を收める。自分の在住中、しきりに書信の往復をしたのは、高田の室孝次郎、富山の島田孝之であつた。皆黨派の事に關係した往復であつた。其頃高田方面には自由黨に對立し

て上越改進黨があつたが、中越下越と事情の異なる所があつて、吾れ等の同好派とは無交渉のものであつた。條約改正の時大隈外相の帷幕に居た矢野文雄よりも頻々たる書信があつて、條約改正の経過を報道して來た。自分は其の手紙を纏めて危機一髮録と題して今も保存してゐる、自分の政治運動を援けた人に忘れ難い郷友は旗野餘太郎、吉田善太郎、大澤邦太郎、坂口仁一郎、玉井貞太郎、樋口元周、藤山銀太郎、内藤久寛、川上淳一郎、廣井一などがある、旗野は事務に敏達の人で始終自分の選挙の参謀をつとめ、會では相提携して選挙場裏に立つたこともある、大澤邦太郎は早大の校友で龜田協會に屬し、新潟新聞の改革後は新聞の編輯に當る傍ら常に私に隨伴して遊説をつとめた。藤山銀太郎は佐瀬精一の新聞の社員であつたが、村上出身である爲めに村上に私を助けるものゝなかつた困難時代には、常に同行してよく私を助けた。坂口、内藤、川上、廣井、などは長い交りで特に注するに及ばぬ、吉田善太郎は北蒲原の名族で、いつも私の後援となつて努力した、此等の人々は皆易養して存命のものは内藤久寛あるのみだ、大竹貫一は新潟學校の同窓で同甲でもあるが、政治上には常に立場が違つて反目することもあつた。丹後直平は東京大學では吾等よりも先輩で、私の叔母が嫁した丹後宗淳の弟であるが、選挙場では私に對抗し得る人物として自由黨に取り入れられて、しばしば私しの向ふを張つた、此他の人物は略する

が、自分が新潟新聞を退社して東京に戻つた後、後任記者として自分から推薦したものは、石井勇があり、志賀重昂があり、澤本與一などがあるが、これ等は皆故人となつた。

自分が新潟に在つた間は筆硯に親しむ時間が案外少なく、随つて著書などは無い、唯だ在京中早稲田で講義録として續刊した政治原論を纏めて、富山房から出版したのと、改進黨と云ふ小篇を刊行した位に過ぎない。若し大著と云ひ得べくんば同好會名簿こそ、それであらう。汗と涙で名簿にならべた縣下知名の人は數百名に迫んだ。これが新潟記者時代の自分の事業で、其の名簿こそ自分の大著である。

長岡の回顧

自分の書生時代からの長岡の宿は榊家であつた。それは渡里町にあつた古るい宿で、頗る古色蒼然のものであつた。此の宿の女將は長岡の藩風を髣髴するやうな丈夫的の性格で、權貴に對しても少しもヒルムことなく、山縣でも大隈でも掌の内に弄するごとくに取扱つた。宿の女中も其頃は腕捲りで客の前に出たものだが、これも藩風の尙武的感化で風をなしたのかも知れない。一ト口に云ふと此頃の長岡の女は武骨のものであつた。

自分が東京に遊學して夏期歸省の時しば／＼六日町から乗船して長岡に一泊することが例であつた。ある夏例の如く乗船すると川に故障があつて定時に長岡に着することが出来ず、夜分十二時を過ぎて着したことがある、此時は旅費が幾んど盡んとしてゐて、ひどく氣が／＼であつた。一層翌朝長岡に着すれば、一泊の費用を省き得るのに、生憎おそく着したので一層懷中の苦しみを感じた、翌朝宿の勘定を拂ふと、囊中残す所は家に達するまでの車代も充分でなかつた。無論宿に遣す茶代も無つたが、意外の事に宿が計算を誤つて、釣錢など無い筈であるのに、五六十錢の釣錢をくれたので、それを茶代にと與へて、やつと體面を保つたことがある。

自分が新潟で記者たりし時にも長岡へ行けば必ず此宿に泊つた。遊説に出かけた頃は此宿に滞在したこともあつた、其頃遊説の同伴は河上、廣井の二氏を始め二國（萬次郎）其他であつた。長岡の夏は暑いので、白晝蚊帳を吊して、酒を飲んでゐると、廣井氏等の訪ひ來るのを蚊帳の中へ誘ひ入れて献酬した。酒の肴は何時も長岡菜一鉢で、今は此菜は絶へたが、自分の好物であつた。其菜は特徴のあるもので、今の自分の齒では咬めない堅い質で、自分は寧ろ漬り過ぎたのを愛した。

或る時廣井、河上が例の如くやつてきて、自分に云ふに先生は酒ばかり飲んでゐては困る、チ

ト遊説をやらうと勧めるので、自分は然らば罪滅ぼしに、けふは三島億次郎翁を訪うて説くから、君等は案内し給へと、翁を訪うた。翁は長岡の三傑と云はれ河井と名を齊うした人物で、此處では畏敬の的となつてゐた人だ、此人を私が同好會に加盟させることが訪問の目的であつたが、大きな茶の間の火爐を圍んで、翁に遇つたのは此時であつた。廣井などの話では餘程説きにくひ人物であると聞かされてゐたが、私が一ト通りの勧誘に、格別の論議もなく應ぜられたのは廣井等の寧ろ意外とする所であつた。

長岡の俊傑河井繼之助の經歷などは久しく知らなかつた。實は長岡落城の時は自分は幼少の頃で、早く東京に遊學したから、河井の事などは知る機會が無つた。然るに早大の用を帯び大阪に出張した時、自分のことが新聞に出たと云ふので、長岡出身の外山修造翁に招かれて某俱樂部に晚餐を共にしたが、其際大阪に外山氏が興信所を起した苦心談や、長岡の戦争に河井が銃創を受けた委曲の物語があつて、河井と云ふ人を知つたのは此時が始めであつた。外山翁は自分の宿の中の島の花家の附近に住んで居られたので、しば／＼訪問したが、長岡出身では傑出の人物であつた。此人が日本に興信所を起した最初の人である。

長岡の舊藩主牧野子爵には曾つて久須美雪堂の家に招かれてから交があるが、いつぞや長岡の

悠久山で子爵に會した折、子爵は附近の義犬の塚へ自分を案内され、犬の經歷を委しく語られたので、自分も感ずる所があつた、犬は君侯の許可を得ず江戸の藩邸まで百里の道を追隨して到り、後藩侯の勸氣を受けて、百里の道を辿つて、長岡に歸へり疲勞のため悠久山附近に斃れた經歷を子爵より聞き、勸當のまゝ死したと思ふと自分も同情に堪へず、子爵に請ふて勸當を許して貰ひ、其事を犬の靈に告げたことがある、これも長岡に關する思ひ出の一つである。

私は長岡の第三流の安宿に一泊したことがある。それは私が高田新聞在社の時、筆禍で刑を受け高田より新潟本監へ護送された途中、護送の巡查に頼んで、通例警察の留置所へ泊めらるべきを、本監に入れば半歳は沙婆に出られない所から、一夕普通の旅舎に泊めてくれと、頼んだら幸ひに諾した。其時の宿は巡查の選定に委て、不景氣の宿であつたが木賃宿ではなかつた。其際護送された罪囚の内自分と竹村良貞氏の外に質不良の罪人が一人ゐた。護送の巡查の云ふには、此男をあなた方も警戒して下さらねばならぬと注意を受けた。自分は諾して其晩は盛んに飲んだ。高田の町はつれで、何人とも知らず、私の車の中へ金子入の包を投げ入れたものがあつて、それには二十圓の紙幣が入つてゐた。それを本監に持ちこむ譯に行かないから、一夜でそれを費したい爲め散々贅澤をやつた。宴席には質不良の男も加へて同じ酒食を與へたが、巡查は遠慮し

て加はず隣室に監視してゐた。勿論藝者などを呼ぶことが出来ないから、自分は不良男を相手に懇々説教を初めて可なり氣焔を揚げたが此不良兒こそ當夜の好下物であつた、斯る酒宴は一生の内唯一回經驗したことで、其宿屋の名なども思ひ出せないが、長岡回顧に逸し難い珍事であつた。

自分は長岡の北越新報の記者となつたことは無いが、長い間私の隨筆的漫談を掲載した點から云ふと、私も三年位記者として筆を把つたと同様である。東京に通信員として派されてゐた、同新聞の記者が毎日訪ひ來るのでそれに筆録させたものが數百篇の多きに及び、其後には自から二百篇隨筆を執筆して連載したこともある。その關係で新聞を通して私を知るものは頗る多いのである。そのみならず長く主筆であつた關魚川（太郎）も自分の紹介で入社したのだ。丁度東京に於て早大の騒動があつた時、關は毎日私の家に来て秘書役を勤めてゐたが、此頃は關の内政困難の極度に達した時で、本人は平氣であつたが細君が泣き込んで來た前日、恰かもよし廣井君から關を主筆に迎へたいと云ふ申込があつたので、渡りに船と魚川は同社へ入つたのである。

尙ほ北越新報で思ひ出すことは、五七年前何かの紀念會があつた時、高田博士と自分が迎へられて東京より其會に臨んだ。講演やら祝宴やらが濟んで、廣井社長から印刷職工の宴席場に誘は

れ、職工に對して何か言ふてくれよと請はれて、自分も紙面に久しい關係があり、自分の文を幾年も印刷して呉れた勞を職工に謝したが、其際は皆々平穩に見へてゐたのに、意外や其晚同盟罷工が始まつた報を得て愕然とした。

大隈老侯は前後兩度長岡の校友會に臨まれた其都度自分は扈從した。第一回の時には坪内浮田の兩教授も同伴で坪内が席上演説をやつたのは、あの人の校友會での演説の最後で、爾後はやらぬことに極めた、侯の旅宿は常盤屋で侯の爲め疊をかへ寝具を作り風呂を改造するなど未會有の事をやつた。料理なども餘程念入であつたので、新潟よりも優ると思はしめた。二度目には夫人も同伴で豪紳渡邊方に宿泊された、其際である一旦宿と定めた大野屋にまだ作庭がしてないと云ふて宿の主人が狼狽したので、自分は一案を授け、市内に貯藏してある雪を運び來り、それを山岳的に積めば、夏時何よりの馳走で、長岡の名物を見せる趣意にも適ひ、大隈侯は必らず喜ばるゝに相違ないと、宿屋は予の意に従つたが、渡邊の懇請により同家に泊さるゝことゝなり庭には手を着けなかつた。(長岡校友會席上演説)

奇遇

「奇遇」といふ字は随分頻繁に使はれてゐるが、眞に「奇遇」と云ふ字のアテはまる、邂逅は滅多にないことだ。自分の生涯に果して是れが、どれほどあるかと考へて見ると、やゝ奇遇らしいことが聊かはある。今、それを思ひ出るまま書きつけて見ると、自分が、政治運動をやつてゐた頃、江東の中村樓で改進黨の大會のあつた時、都鄙の黨員が數百人集つた。其際私の名を高く呼ぶ人があつたから、その聲をたどつて行くと、見知らぬ人が私を待つてゐた。その人に伴はれて一室に入ると、其人は誰れあらう。私が初めて郷里で英學を習つた時、仙臺から迎へた教頭先生首藤陸三君であつた。其頃の自分は十二三で英語は初學で教頭を仰ぎ見るのみで、其の門弟等から教はる程度のものであつたのに、初めて遇つて見れば今は此人仙臺に於ける改進黨の鎮臺と云はれ、私に對し「自分は頻りに遊説を事としてゐるが、いつも君の著述には負ふ所がある」と厚く禮を云はれたのに、私は恐縮したが、其頃自分は「改進黨論」其他の小著を刊行したので、それが首藤君に珍重されたのであつた。

ある時大隈侯を早稻田の邸に訪ふと、座敷に多數の客がゐた、誰れかと執事に問ふと、降旗元太郎が信州の選舉運動者を連れて來てゐると聞き、侯も其席に居られたからそこに入つて行くと、群客の内に一人面部に紫癩のある人がゐた。これは確かに見覚えがあると思つて、降旗に問

うて見ると果して其人であつた。そこで自分は握手したが此人は誰れあらう、上田の富五郎と云うて信州で通つてゐる博徒の親分で本姓は早川と云うた。自分が記者時代に筆禍で長野の監獄に繋がれた時、此富五郎も獄に在つて、私より古文眞寶の素讀を受けた男である。其頃獄内に此男の乾分が百人もゐた。私が親方の先生であると云ふので、乾分共は私を尊敬したので、便利を得たことも多かつたが、此人と大隈侯の座敷で出遇ふなどは、眞に意外であつた。富五郎は降旗の選挙には有力の運動者であつたらしい。大隈侯が私の郷國越後に遊説の時には、侯の身邊を護衛の爲め是非同伴をと切望し、侯の寢室に夜を徹してフロックコート姿で護衛したこともあつた。

自分の郷里に政争の激甚時代である。反對黨は偽書を以つて私を誘ひ出し、三四の劍客をして途上私を擁して矢庭に、私を人力車より引きおろして堀の中へ投げこんだ。私は幸に微傷も負はなかつたが、旅館へ戻ると、警察から検診にやつて來た。其時同伴の醫師は長谷川松溪と云ふ人で、名刺を見なければ分らないのも其咎、二十年前漢學塾の同窓で、一別以來會つて會することもなかつたので、互ひに懷舊の情に堪へず、警部を傍聽人として、何んの遠慮もなく、検診などは全く忘れて互ひに語り耽けたこともあつたが、これが最後で其後會することもなかつた。此の邂逅も場合が場合であつたので、今も忘れられぬ。

後藤象次郎伯が大石正己と大同團結遊説に新潟に來た時、東京の私の政友は皆之れに投じて私にも後藤を助けよと云ふて來たが、當時郷里の改進黨はまだ搖籃時代でそれに投ずれば、自由黨の呑噬に遇ふより外無かつたのみならず、大同團結などは頼むに足らんと思つたから自分は極力これに反對して、自分の同志を一人もそれに参加させず、且つ自分の新聞紙には自由黨の宿罪を數へるなどやつたので、後藤伯は空しく去つたが、其際自由黨は怒つて、私を路に要撃せんと企てた。此際自分の身邊に危険が迫つてゐた。私の新聞社で探訪記者をやつてゐた林鑄吉といふものは、もと巡查あがり、警察と常に連絡があつたが、私に言ふには、今夜御歸宅の際には不穩の事があるから、自分(林)がおともをする、通路は自分にお任せなさいと云ふので其意に従つて、薄暮社を出て歸宅に就くと、林は小路や路次を縫つて先導するので、會つて知らない狭い巷を経た。此の路次には小料理屋が澤山あるので、或る一亭に入り時間潰しに對酌をやると林が酒間の談に、私が前年高田新聞の筆禍事件で新潟監獄から控訴の爲め長野へ移さるゝ時、私を長岡まで護送したものは、當時巡查であつた此の林であつたことが初めて、知れて私も意外の感に打たれたが、成るほど追憶すればあの際も特別の待遇をしてくれたことが思ひ出され、今又重ねて同じ人に依つて危険を免かるゝことは不思議な縁だと、其の厚意を謝したことがある。

私が初めて北海道を訪うた時函館で多くの郷人が私を迎へて盛大な會を開いた。其際刺を通ずるものがあり、是非面會をと望むので、知らない人でもあるが、別室に延て見ると、七十ばかりの老人が五六の家族を率ゐて來て、老人は私を見ると潜然涙を浮べて、私こそお宅に仕へて長くお世話になつた船頭金藏と云ふもので、主家を一日も忘れたこともないのに、圖らず此地でお目にかゝるのは眞に天幸だと云うて、兒孫を引き合はせたので私も感激した。此男は私の家が回漕事業を營んだ頃函館で成功し、一時は盛んな娼樓を開いたこともあるので、後には其の娼樓を人に譲つて遇つた時は既に隠退してゐたが、まだ娼樓は依然存してゐた。それを訪ふて見ると三層の土藏作りで階上に庭園が設けてあり、窓の扉には私の家の定紋と記號が刻され、火鉢などの調度にもそれ／＼定紋が打つてあつて、此樓の盛時を偲ばせたがこの船頭は頗る忠勤のものであつたと家にも傳へたが、其人と其經營とを偶然に見たのは眞に意外であつた

この様のことを思ひ出せばまだまだあるが與へられた時が盡きるから他を略するとして、以上は奇遇とも言ひ兼ねるが、案外の邂逅とでも云ひ得ようか。(昭和十一年春放送大要)

郷土自慢

郷土自慢は郷土愛から發する自然の情である。併し田舎の狭い郷曲で誇るべき何物もないのに、強て自慢をするのは餘り褒めた話でない。やれ某代議士は俺れが村の出身だ。某將軍はおらが郡の人だなど云うて、偉くもない人物や凡庸水まで數へ立てるものがあるが、往々片腹痛く思ふことがある。上方邊りでは田舎でも歴史に富んでゐるから、偏陬にも自慢に値するものがあるが、吾郷國越後の如きはそれとは同日の談でない。自分は是まで郷土自慢をやつたこともなく、自慢すべき事の有無を考へたこともないが、此頃或る人に問はれて咄嗟に答へたが、案外自慢すべきことの多いのに氣がついた。

私の郷土自慢と云ふのは、新潟縣の管する越佐兩國の廣い範圍でなく、某郡と云ふ範圍でもない。僅かに一町村、即ち自分の生れ故郷の小區域に止まるのである。乃ち私は北蒲原郡の水原町に生れたのだが、今日では多くの人が地名すら記憶しない程の處だが、でも誇るべきものを咄嗟に考へて見ても相當にある。先づ水原と云ふ郷名で思ひつくことは、上杉景勝の驍將、杉原常陸介親憲が此の郷の祖とも云ふべきで、水原も實は杉原の名の轉訛したのだと云はれてゐる。親憲は景勝麾下の隠れなき武勇の人で、當時上杉家で攻落すに難んじた新發田を征服して、其功で水原を領するに至つたのである。此人の傳記は委しく知れてゐるが今はそれを詳述する場合でな

い、唯だ此地の祖先に斯る人のあることを吾等は誇りとするのである。

此郷は徳川時代天領であつて、地區は狭いが富豪の淵藪であつた。最も殷富の天領と云へば此地の右に出るものがなく、代官は此地に祇役することを競うた位であつた。越後には由來富豪が多いが、此地は別して多く、天領時代此地の五人衆と呼ばれた富豪は越後中屈指のものであつて、其頃經濟的に大勢力があり、小大名などは鎗を立て、金を借りに來たものであつた。これも亦誇るべきものであらう。

上陳の如き土地柄である故に、維新の際には爰に越後府が置かれ、踵て水原縣が置かれて、越後に於ける政廳は先づこゝに置かれたのである。斯る關係から大臣格の人物は一時長官となつて來た、それが萩の亂に斃れた前原一誠であり、爾後相當の人物が來た中に奥平謙輔があり、今の人に忘れられてゐる名和などの人もあつて、近世の一史蹟であることは申す迄もない。

富饒の處に學者の生れるのも自然の數で、此地には種々誇るに足る人が出てゐる、自分から云ふもおかしいが、吾家の家祖岱海は郷黨が孔子と仰いだ人であつた。徳龍と云ふ僧は少年時に早く大儒を驚かすの天才であつた。山口坎山なる算學者は其頃日本第一の算學者長谷川西幡の高弟で、三千の門人があり、そして師が歿すると其の學統を繼いだ人である。醫には伊藤仁齋及門の

三浦氏があり、世々漢方を宗とし、淺田宗伯歿して一時其後を承けた人も三浦氏であつた。畫家には抱一門人の池田孤村があり、又大倉雨村がある、著述家としては越後野史を著した小田島允武などがある、これ等は大抵皆誇るに足るべきものであらう。

尙ほ工藝家に就て人は多く忘れてゐるが、刀劍の鍛工に非常の人を出してゐる、星大作藝名は秀興と云ひ、秋水の號もある、此人は我郷土の貧なる鍛冶屋に生れ、鍋釜を鑄るのが、家業であつたが、秋水は少年時に學を好んで自分の家祖岱海の門人となり、可なり修業もしたが、親元では家業の爲め學問を妨げとし、強て家業を営ましめんとした、秋水は學を癡すると共に、鍛工たらんには天下第一の刀銀冶となるべしと志し、初め會津藩の刀工で、水心子正秀の高足秀國に學び、秀國が薩藩第一の刀工奥大和守元平に就て修業し、名を元興と改めて歸つて來たが、此人にも其研究を秘し、師が求めても語らず、爲めに破門さるゝに到つた位で子にも又常に秘した。唯だ秋水は三年間其の秘法を知らんと苦心した甲斐があつて、おのづから其の秘を會得したので、師も已むなく免狀を與へた。斯くして秋水は郷里に歸つたが、師歿して其秘法は會津に傳はらず、會津では秋水を聘せんとしたが應じなかつたので、強ひて請ふて會津は其の秘法の傳授を得た。これが爲めに會津藩ではしばしば重役を水原に派し、貧婁の鍛冶屋の前に鎗が立つたので、

郷黨は初めて秋水の偉さを知つたと云ふ、秋水は會津から賜つた金幣を一錢も費さず、私の家に預けて其の子を江戸に遊學せしめたが不幸にして其の子は夭折した。この刀工の如きも亦誇るに足るものであらう。

こんな風に舉げて見ると、いろ／＼あるが、實は自分は少壯早く郷關を辭して東京に遊び、郷土の事に暗いから、探討したら尙ほ他に自慢すべきことがあるかも知れない。自分の唯だ遺憾とするのは自慢の價のあるのは多く過去に屬し、現時に求めて何物もないことである。此意味に於て私は郷黨に猛省を冀はねばならぬ。

山口坎山に就て嘗つて郷里水原の知人漆山順治氏に取調を依頼したことがある、其の取調の結果は大略左の如くであつた。

水原の天神町に山口吉六と申すものがあり、これが坎山先生の家に相違ない。唯今の主人は水原驛に日雇稼ぎをしておるもので、明治元年九月生れで、本年（昨年）六十八歳其老母が坎山先生の長女で、位牌には高學慈尙信士明治十九年一月歿、五十八歳とある、如何さま凡輩の戒名とは思はれない。先生の遺物はと云ふと、戊辰の戦争の時隣家より發火したのですべて烏有に歸したが、僅かに残つた書類は爺様の大切な書きものと云ふて帳面行李と袴匣に納めてあつ

たのが、數年前清潔法施行の際焼き棄てたと云ふが、惜しいことであつた。菩提寺は近村勝屋村に在つて、數年前某文學博士が訪はれたことがあるなど語つた、もと此家は近村須走村山口金之丞の女に婿を貰ひ天神町に分家したもので、其の悴が即ち先生で其の娘が今の老母でこれも婿取である。先生は家に在ることが稀れで、學問に熱中した爲め失明したが十年計り生存した。此家は水原の舊家小田島氏の出入のものであつたと云ふ。此他のことは一切不明であるが、遺忘を慮り、こゝに附記して置く。

大隈侯の國民葬

此の回顧録に漏らしがたいのは、大隈侯の薨去と其の葬儀である。侯は八十五歳を一期として不歸の人となられた。これは早稻田大學の痛恨事であるのみならず、眞に國家の大不幸であつた。吾等は大學の同人と共に十數日間侯の邸に詰め切つて、御容態を打護り切に回復を祈つたが、實に最後まで不治の症であることを知り得なかつた。十二月十八日と云ふ日に、私を病床に呼ばれたから、直ちに參ると、侯は危篤の病人にも似ず、例の快潤の調子で、其頃の不祥事であつた安田善次郎翁と原敬首相の横死を氣の毒であると同情を表され、俺れも長く病褥に在るので

君等に厄介をかけてゐるなど語られ、病前からしきりに編纂に努力された「東西文明の調和」を是非出版してくれと囑され。文明協會に就ても是非盛り立て、存続するやうにと語られた。私は此等のことを承つて非常に感激したが、これが實に侯の遺言であつた。

侯の母堂が逝去されたのは十二月三十一日であつたから、侯の病勢が次第に重りゆくのを見て或は母堂と同じ日に薨去されはしまいかと思つた位だ。それ故に其日が來ると、私は心配で心臓が烈しく鼓動するやうな氣がした。然るに幸ひに侯は三十一日を無事に過し、大正十一年の新年を迎へられ、そして尙ほ十日の壽命を保たれた。愈々臨終の時、私共極少數のものが侯の枕頭に集まつた。もう二三時間で絶命の場合であつた侯のお顔を拜すると、極めて安らかに何んの苦惱も無い様子であつた。私は靜かに水を筆につけて侯の唇頭に點じた。此時ほど私が沈痛の感慨に打たれたことはなかつた。四十餘年間侯に追隨して侯の赴かるゝ所へは影の身に副ふが如く陪侍し、侯の薫陶に浴したことが無量であるのに、今お別れと思ふと、熱涙が止めどもなく出て、吾れを忘れて慟哭した。私が生涯忘れられない深い悲みを感じたのは此時であつた。

私が一生の光榮としたのは侯の御葬儀の衝に自から當つたことである。葬儀委員長としては時の宮相波多野敬直子を推したが、委員長は萬端私に任かされ、侯の令嗣も亦私に委かされた。實

は高田博士が此の衝に當るべきであつたのに、不幸病んで居られたので、私が此の光榮を擔つた。勿論早稲田大學の理事諸君は皆私を扶けて非常に努力された。吾等は大學の同僚と共に侯が不起と定まつた時から、秘かに如何にして侯の終りを飾るべきやを寄り／＼相談した。侯の死は國葬に値するものであるけれども、國葬は現役の人で無ければ行はない規定と聞いて、何かそれに齊しい葬儀はあるまいかと案じた結果が國民葬となつた。私は此案を決する前に加藤高明伯にグラッドストンの葬儀の模様を聞いて見た。グラッドストンの靈柩はウエストミンスターアベに安置されて、大衆の參拜を許したと聞き、其例に倣はんとしたのが、國民葬を行ふ動機となつたのである。實に侯に最もふさはしい葬儀は、或る階級に限つて參列せしむる國葬でなく、あらゆる階級、熊も八も包含する大衆が、隨意に參拜し得る告別式であらねばならぬ。それは日比谷公園に行ふべきであるとして案を立てたものゝ、未亡人の一諾を得るにあらざれば、勝手にやることは無論出來ないので、内々其の準備を進めながら、どうすれば未亡人の同意を得ることが出來やうと、これが自分等の大いに頭を悩ました問題であつた。侯の絶命の其夜は、吾等は悲みの間に夜を徹して内議を凝らした。其席には加藤高明伯は不在であつたが、町田忠治君などはゐた。種々協議の末、侯の未亡人は病氣であらるゝから、どうあつても告別式は本邸に於てせねばなる

回 まい。それが終つて後ならば、日比谷に大衆の告別式を行ふことには未亡人も多分不同意はあるまい。併し一日二度の告別式を行うて埋葬まで済すことは、なか／＼容易でない。本邸の告別式は朝から行ふにしても勅使や皇族も見える譯だから、餘り早く初めることも出来まい。日比谷の告別式も大衆の参拜に遺憾なきを期するには、三時間位の時間が必要であるが、終つて護國寺の墓地に埋葬するにも餘り深更になつては困る等々で時間の組合せを案ずる苦心も一通りでなかつた。

吾等は所謂國民葬を行ふに、それに要する費用まで内々工夫をした。と云ふのは二重の告別式を行ふに、大隈家を煩すべきでないと思へたからだ。が、其費用に充つべき資金は案外容易に出来た。併し未亡人の同意が得らるゝかどうか一種の謎であつた。悲しみの間に居らるる未亡人に、薨去の翌日直ちに御相談するのは餘り無遠慮と、多少躊躇する所があつたが、大體の案が決しねば準備に手を下す譯にも行かないので、自分の氣を揉んだことは一ト通りでなかつた。幸に薨去の翌日加藤伯も武富敏氏も早朝から來邸されたので、兩氏を先頭に立て自分も後に隨つて未亡人に相談に及ぶと、萬事を任すとの挨拶があつたので、吾等も初めて安心した。書院に居並らぶ多くの同人も、暗に心配して其結果を知らんと待構へてゐたが、皆な結果を聞いて安心して

歡聲を發するものすらあつた。

愈々正式に準備に取りかゝつたが、告別式當日まで十日間を費さねばならぬほど大規模の葬儀であつた。侯の靈柩は三百六十貫と云ふ重量のあるもので、それを日比谷に運ぶには自動車に依るの外はなかつたが、校葬の心持で居る早稻田の學徒は、日比谷まで昇ぎたいと云ひ出したのは其の麗はしい赤誠から出たものではあるが、一分の時間も誤つてならぬ葬送に、萬一の事があつてはならぬと氣遣つた自分は、學徒の折角の望を拒むことが已むを得なかつた。靈柩を載せる自動車を新たに製造したり、日比谷に式場を作つたり、途中の道普請をしたり、種々の土木を營むにも、いろ／＼面倒もあつたが、此葬儀の委員たらんことを冀望するものが澤山あるので、折角の念願を無にする譯にゆかず、追々委員が増加して遂に八百人と云ふ多衆になつた。それが爲め度々委員名簿を印刷し、何か通知を發するにしても八百枚の葉書を出さねばならない始末で、此事務のみでも容易なことではなかつた。

偕て愈々當日が來た。本邸の告別式は豫定通り滞りなく行はれ、侯の靈柩は混成旅團の儀仗兵に護もられ、肅々と本邸を發し、親近者を載せた幾十の自動車は靈柩に尾し、二萬に餘る早稻田の教職員學徒は、沿道の兩側に堵を築き、それが九段の坂上に達し、靈柩が九段下を過ると、そ

れに尾して早足で早稲田關係者は日比谷公園まで随つた。公園は前日降雪があつたので、折角石炭ガラで泥濘を整理したのが、降雪のためぬかるやうになつたのを、急に一萬枚の蓆を敷くと云ふ騒ぎで、靈柩は一刻も違はず、假りにしつらひたる式場に安置され、定刻左右二個所の門を開くと、弔客は潮の如く入り來り、忽ち幾萬の人を以つて、さしにも廣ろい場が満ちた。豫て混雜を恐れて、御大葬の式場に倣らひ、靈柩前に左右に吐ける道を作つたので、拜を了ると直ちに自然足が移り、斯くして幾十萬の人衆は間斷なく去來したが、何れも敬虔の念を以つて禮拜し、毫も混雜なく、亦非禮のものも無かつた。此日は一月中の寒天であつたから、脱帽を強ひず、外套を脱するに及ばぬと揭示をしたが、其の揭示は全く無駄で、手を引かれて入り來つた小兒すら、皆な脱帽して一人の彌次馬らしいものがなかつた。殊に群衆中には侯を神の如く尊敬し、雨の如く賽錢を投じ、靈柩の前に賽錢の堆をなした。此日朝野知名の士は皆委員となつて參拜者の通路に立つて一々丁寧な挨拶をなしたので、場を一層嚴肅にした。私は大衆の去來に萬一何事か起つてはと時間中心配で溜らなかつたが、それは全く無益の心配であつた。此日大衆の取締は警察を煩さず、學生が熱心に其の衝に當り、懇懃に來會者に對したので、心あるものは校風の美なるを思つて感激した。

靈柩を護國寺の大隈家の墓域に移して全く埋葬を畢つたのは夜の九時であつて、朝の告別式より終局まで一糸亂れずプログラム通り一刻の違算も無かつた。埋葬を畢るまで幄舎内に多數の侯の昵近者がゐたが、當日儀仗兵を指揮された堀内將軍は私に握手を求めて無事結了の喜びを陳べられ、且つ云はるゝに、此葬儀に就て君の技倆に敬服した。實に葬儀の準備中毎日大隈邸に集つた面々の内に論客が多く、葬儀に就て囂々の論があり、多分總務に任ずる君も方針を變ずるならんと豫期した。軍隊などでも傍議に左右せられて方略を變ずることは珍らしく無いが、君は紛々たる群議に頓着なく初めに立てた方針を幾日経つても毫も變ずること無つたのは恐れ入つた。君は三軍を率ゐるの能があると、溢美の褒辭があり、尙ほ二萬の學徒が九段より日比谷まで自動車に尾して駆け足で歩き續けた。如斯は軍隊に於ては不可能の事に屬し、誠に異數の事だと云はれた。自分は自から揣らず、此大任を故障なく果し得たのは、侯の令嗣が自分に萬事を委せられ、傍議を一切取り上げられざりしこと、早稲田大學の同僚が極力自分を輔けたことに依るので、決して自分の手柄など、思つてゐぬ。

此の葬儀は誰れ云ふとなく國民葬と名づけられたが、葬史に前例のない盛儀で、あらゆる階級の人が式場に臨み、其數三十萬と註せられ、日比谷附近の電車は一時停車を餘儀なくさるゝ雜踏

であつた。常に國民を友とせられた侯の葬儀としてはふさはしいと一般の公評であつた。これを二ヶ月後山縣元帥の國葬に比すると、繁閑同日の論でない。國葬は餘りに階級本位で、服装などがやかましく、會葬を望むものもおのづから制限せられて、如何にも淋しかった。これは強ち山縣元帥の徳が大隈侯に譲るにあらず、國葬の儀式が時代後れをしたのに據るもので、或る人は、國葬は國葬だと云うたが、吾等は國葬儀の今後改善されんことを望まざるを得ぬ。所謂國民葬こそ國葬の實質を具すもので、國葬の式を改善するとなれば、國民葬に學ぶべきものがあらうと思ふ。

私は儀全く果て、坪内逍遙翁と自動車に同乗して歸途に就いたが、車中戯れに翁に問うた。君は劇通だが、今日の日比谷劇を見て君はどう感じたかと、翁の答は如何にも大規模であるのに恐れ入つたと云はれた。翁は亦あれ丈の大芝居を打つにどれほどの費用を要したかと問はれたから、未だ精算してゐないが、多分十萬圓を下るまいと答へた。

大隈侯國民敬慕會

大隈侯薨去後十年にして侯を追悼する會が催された。此の發起の中堅となつたものは隈門會で

あつた。此會は侯の薨後、侯を偲ぶ爲め、常に侯の邸に出入したものが組織したもので、今も繼續して時々大隈會館に催されるが、侯の薨後九年目に此會に動議が起り、來年は侯薨去の十年目に當るから、侯を追悼する會を開きたい。侯の國民葬は日比谷に行はれたから、宜しく日比谷の公會堂に開會して、會名を國民敬慕會としたいと、衆議これに決して、準備委員を擧げ、自分は亦委員長に推された。

此會の準備行爲として、式日に頒布すべき侯の偉蹟録を編纂することが、尤も急務とされた。幸ひに渡邊幾次郎氏が明治以後の文獻に依り、侯の偉蹟を考證しつゝあつたから氏に囑して、之れを完成せんことを需め、半年許りで脱稿したのを「文書より觀たる大隈重信侯」と題署し之れを印刷に附した。侯の傳記八十五年史三冊は既に刊行されてあるが、渡邊氏の編纂に係る著は種々の文獻と侯の事蹟を考證したもので、八十五年史と全く趣を異にするものである。乃ち侯の事蹟の明瞭を缺くもの、侯が謂はれない非難を受け、久しく謎となつてゐる事蹟などを文書に就て宛を雪ぎ暗らきを明るくしたのがこの一書である。

準備行爲として骨を折つた他の一事は、一千人の發起者を募ることであつた。これも案外容易に出來て、一千人が醸出した會費は一萬圓に上つた。これは侯の往年の葬費の十分の一に過ぎな

いが、これを以つてすべての経費を支拂ひ得る豫算で、編纂物の費用は勿論、侯の墓域に國民敬慕碑を建てる費用も皆包含されてゐるのだ。

準備は悉く調ひ翌年豫期の如く、式を日比谷の公會堂に行うた。當日場を飾つたものは三十數團體よりの獻花で、それが侯の影像の左右の壇に置かれた。司會者として山本達雄男を推し先づ會を代表して追悼文を朗讀し、踵で犬養首相の追悼の詞があり、徳富蘇峰氏等の追悼文朗讀等があつたが、國民葬の時と同様、何人も皆場に入り得たので、忽ち會衆は堂に溢れた。發起人のみで千餘人もあるのだから、實に盛況であつた。此夕べ兒童に對し、自分は侯に就て放送をした。自分は此會 就て感慨に堪へなかつた。實は十年前の國民黨で、侯に對し最後の御奉公が終つたと思つてゐたのに、十年後に此の敬慕會の衝に當らんとは、思ひもよらなかつた。幸にして盛況裡に終り、國民敬慕の碑も此式後侯の墓域に建設することを得た。

大隈侯追隨記

所謂る侯の大名旅行

大隈老侯の旅は大名行列と呼ばれて有名であつた、併し其真相は知れて居らぬ。唯だ侯が旅行の度ごとに、多數の隨伴者があつて如何にも賑やかである外形を見て、大名行列と云つたに過ぎない。實は侯の旅行の内容はなかく複雑で、到る處侯が豪奢を極めたのが大名行列の内容であるかの如く思ふのは真相を知らない皮相の觀察で、そんな成金の俗的なものでなかつたが、これまで侯の旅行の内容を如實に書いたものがない。畢竟侯に隨伴して侯の動靜を仔細に知る者で無ければ書けないから、斷片的には多少の記がないでもないが、較々纏つたものは無い。

自分は大隈家の家職でないが、いつも侯の旅行には家職同様に必らず隨伴した。其の譯は侯の晩年は早稻田大學の總長で、大概の旅行は早大の總長としての旅行であつたから、早大から理事若しくは幹事が隨伴せざるを得なかつた。但し侯の旅行が政治的であつた時も、總長の肩書を帯びて居られた關係上、早大から誰れぞ隨伴する必要があつた、侯が首相として議會を解散し、總選舉の爲め旅行された時も、自分は恰も侯の後援會の會長であつたので、職責上矢張隨伴の必要があつた。斯様な譯で、自分は侯の動く時は必ず追隨したので、おのづから三太夫頭の觀をなし、出先の公的交渉はすべて自分が擔任し、旅行の先々侯を招待することが頻繁にあつたが、自分の關門を通らねば、侯は諾否を云はれなかつた。行違を豫防するには事實斯くせねばならなかつ

た。自分はこれが爲めに多忙を極めた。長途の汽車などで、侯の話相手も自分であり、旅館に於ても侯が寝に就かるゝまではお伽役は自分であつた。去れば侯の旅行の巨細を知るものと云はゞ、不束ながら自分であると言はねばならぬ。

侯の旅行の規模

侯の旅行の場合、汽車の二三室を買切ることが幾んど例であつた。侯は身體が不自由であるので、醫師や看護婦が必ず随伴する、晩年は侯の衛生を氣遣はれて夫人が大概随伴されたから、夫人に屬する女中も二三人加はつた。侯は動もすると知人を勧めて一行に加へられたこともある。足利へ赴かれた時などは、支那が足利の織物の得意先であると云ふので、支那公使并に公使館員を伴はれたこともある。各地に講演する爲めに二三早稻田の教授が大抵一行に加はり、侯を送迎するものゝ内、代表者らしいものが、三四必ず一行に加はる。各地の校友の幾許か加はるのは言ふまでもない。尙ほ大都會に近づく、必ず新聞記者が各社から入り來り侯を取巻いて其の談論を聴くが例で、それやこれやで一行は十五人位であつても、臨時の來客がどしどしやつてくるので車内に餘程の餘地が無ければならぬ。侯の荷物もあの不自由の身體に應ずる大なる便

器や寢具まで携帯さるゝから、夫人のを併せて、如何にも大量のものであつた。汽車の沿道で侯の旅情を慰めんと種々のものを持ち込むものが多く、或る時は大なる盆栽を持ち込んで侯の坐前に据えたことがある。又薩摩琵琶を弾する婦人を車中に伴ひ來り、侯の面前に彈奏せしめつゝ、數驛を通過したこともある。私としても汽車中琵琶の彈奏を聴いたのはこれが初めて、驛頭に堵をなす歡迎者を驚かしたに相違ないが、大名行列など云ふに至つたのも此等の故でもあらうが、侯は敢て豪奢を喜ばるゝでもないが、種々の必要から斯く旅行が規模大きくなるのも止むを得ないのである。

旅行に先だつ準備行動

侯の旅行に先だちいつも準備行動に相當骨が折れた。關西方面は旅館其他の設備が調うてゐるから、餘り面倒もなかつたが、北陸地方の僻地になると、宿泊所に適當の處を得ないことがあり、已むなく地方の富豪の家を宿所としたり、新潟ですら當時適當の大旅館がなく料理屋を宿所に充てたことがある。私の郷里に行かれた時には親族の家に宿られたが、主人は準備の爲約一週間晝夜努力して萬遺憾なきやう没頭した。侯は足が不自由である爲めに浴槽を改造する必要があ

つた。又、汚損の畳は新しいものに替へ、寝具まで新調する宿屋もあつた。越後の長岡の旅舎では、家は新築だが庭がまだ出来て居らなかつたので、急に作庭をやると云ふのであつたが、自分はその制し、丁度夏季三伏の候であつたから、越後名物の雪を以つて山を築くべしと指圖をしたことがある。實は雪は澤山に包藏されてあるので十圓も拂へば山が築けるから經濟的に此案を立てたのだ。侯は二階の上り下りが難澁であるから、下座敷を必らず選ぶ必要があつたが、二階に相當の座敷がありながら、下座敷が相當でなかつたりして困つたこともあつた。すべて這般の準備も其地元の有志者が東京に打合せに来てやることであるが、自分の郷國へ侯夫婦が行かれた時は、それに先立ち自分が萬端の事を自からやつた。幾回の旅行に自分が些しも與らず、萬端行届いてゐて、申分なかつたのは讃岐の高松のみであつた。

侯の茶代

老侯がどこの宿に泊つても二百圓、三百圓の茶代を投ぜらるゝのが例だ。これを以つて大名行列とするものがあるけれども、老侯を待つには前陳の如く相當の設備も要るので多くの茶代を投ぜられても實は不思議はないのである。維新の元勳達の内では、儉約家もあつて、俺れが泊つて

やるのは宿屋の光榮だと云はん許りの自尊の人もあるが、侯は全く其選を異にして思ひ遣りが深かつた。そして夫人が同伴であるために決してその邊にぬけ目が無く、どこに行つても大もてあつた。侯は人に招かれた席に藝者などが來ると、それにも纏頭を與へる人であつた。金澤に行つて一泊された時、侯は自分に云はるゝのに、先頃井上が來て一週間もこゝに泊つた筈だが、茶代をいくら置いたか調べてくれとあつたので、調べた所井上侯は百五十圓置かれたのを隨伴の早川千吉郎氏が内々それを二倍にして置いたことを知り、其事を侯に告げると、侯は笑つて俺れは一泊だから三百圓でよからうと云はれた。侯はぬけ目のない人だが、夫人は常に氣にされて、夫人同伴でない時は、東京へ私が歸へると、大隈は一人で出ると兎角ケチで困りますと云はれたことがある。如何さま侯の各地の寺宮に參拜されると廿五圓を納められたが、夫人同伴なら其二倍であつたと思はれる。

大阪の宿屋の勘定

大隈侯はあの通り陽氣な人で、おまけに規模が大きく、宿屋の勘定などは寧ろ嵩むのを喜ばれたかに思はれる。大阪でいつも泊らるゝ宿は、この頃廢業した花屋であつて、五六日も滞在さる

と拂が數千圓に上り、自分は出納には全然關係のない身分だが、侯が滯阪となると、毎日どうでもよい訪問客が朝から宿屋に来てブラ／＼してゐる、それに對して無差別に酒飯を饗するは、莫迦々々しいやうに感じ、宿屋に申付けて多少の斟酌をした結果、その勘定はいつもの半分にも達しなかつたので、侯は家職に就て何故勘定が少ないと問はれた。聊か來客の接待に斟酌を加へた結果だと云ふと、侯は喜ばるゝどころか寧ろ不満であつたと聞いたが、侯は景氣のよいことが大好で、旅中の費用は決して惜まれなかつた。所謂大名行列も内々侯は得意であつたらしく、ある會場で藤田平太郎男に遇はれた時、俺れは貧乏でも苟くも足を擧げると衆と共に樂むのが愉快で、自然散財をするが、君などは金持の癖に四疊半で内々金を散じて衆と樂まない、チト僕に見習ひ給へと戯れ半分に揶揄されたことがあるが、侯の大名旅行は成金的でなく、衆と共に樂むことにあるのは此小話で知ることが出来る。

日程の齟齬

侯の旅立に先だち細心の注意を要するは日程を定むることであるが、殊に氣を配らねばならぬことは汽車の連絡であつて、いつも汽車通が調査の衝に當るのであるが、二三度失敗したことが

ある。越後路から越中に入る時などは汽車の連絡を誤つたので大混雜を生じた。斯様な間違から行先の日程が全部狂ふのであるから、實に大變である。越後の柏崎で豫定連絡が出来ないと知つた時には夜半まで、越中と數十回の電信の往復をした位であつた。さて翌日富山縣の入口なる泊町に入つて下車すると、富山の有志者十數は自分を包围して時間の喰違をどうするかと難詰を受けた時は、自分も實に困つた。終には大隈侯も其の混雜の處へ出て來られて、時間の都合で朝食前若くは深夜であつても俺れの都合に構はんから、急速日程を作り換へて豫約してある方面に失望させぬやうにと云はるゝので、無理の時間に侯を煩はしたこともあつた。尙ほ東海道線の或る處で乗り後れた時などは、鐵道の好意で特に速力を早めて失つた時間を取りかへしてくれたこともあつたが、こんな無理な臨機の措置は大隈侯に對してこそ出来るので普通行はるべきでない。侯が高野山に登られて、下山して和歌山市に臨まるゝ時も、電信文の時間の誤りが混雜を惹き起し、夜半まで和歌山へ數次大阪から人を派したこともあつて、此時もひどく困つた。侯の旅行には例として各驛に挨拶のため多衆が群集するので、時間が狂ふとそれ等の立往生をさせることにもなるので、旅程と日程とは尤も精確であらねばならないのである。

大都會に於ける侯の繁劇

侯の旅行には大阪の如き大市には三日位滞在さるゝが例であつて、其の滞在中の日程は出發前凡そ定まるのだが、臨時侯を招待せんとするもの、侯に演説を請はんとするもの杯が、いろいろあつて、侯は旅舎に到着さるゝと、待構へてゐる幾多の面々は、私を先づ玄關に包圍して口々に種々の要求をすることが例であつた。侯は時間の許す限り、どんな所にも行かるゝ流儀であつたから、結局多數の冀望を容れ、會社でも工場でも學校でも私人の宅でも、極めて短時間臨まるゝことを諾して日程に編入すると、朝から晩までぶつ通し巡回さるゝことになるが、侯は寧ろそれを本懐とされ、時間にアキが生じてボンヤリ次の時間を待つことを嫌はれた。私はその爲め招待する當事者にあらかじめ注意して虚禮の爲めに時間を潰さぬ様にと茶菓の饗應までも斷つた。侯は朝旅舎を出らるゝと、其日の日程に隨つて順次に回つて長短さまざまの演説や講演をさるゝのが常であつたが、大抵夕刻迄に六七回の講演をされた。侯の會場に着さると行きなり演壇に臨まるゝのが常で、私はいつも時計を手にして侯の傍らに侍立し、時間になると侯に注意し、それで演説が終ると、休憩室にも入らず直ちに辭して馬車に乗らるゝ、車上に侯の喫煙中私から次に

臨まるゝ學校なり會社なりに就て大要を言ふと、侯の頭腦には即時に演説の趣向が定まり、始めて臨まるゝ所でも極めて剴切の演説をさるゝのには自分も恐れ入つた。尙侯に敬服することは、どこに行つても演説の趣向が異つて、決して同じことを繰返されたことが無つた。侯自身も内々之れを得意として居られたやうであつた。

侯の經濟演説と軍隊に訓示演説

侯の大阪滞在中實業家に招待を受け、そこに經濟上の大演説をされた。經濟は侯の最も長ずる所であるから、其演説は最も出色のもので、極めて近い貿易其他の統計が、精確に功妙に繰り出さるゝのには實業家は皆感じ入つた。北濱銀行に取引所の仲買人を集めて仲買人の責務は銀行家のそれにも倍するものと仲買人の人格修養を鼓舞せられた演説は、侯ならではと思はるゝ名演説であつた、侯は僧に對しては法を説き、醫に對しては刀圭を論じて往く所として可なるさなき該博な能力を示されたが、自分が扈從中に敬服したのは、大阪の造幣局に「ミント」の沿革を仔細に説かれたのは、如何に造幣當初の事に與られた經歷があらるゝとは云へ、餘りの記憶の好さに驚嘆した。尙ほ又侯は大阪師團に於て將校に對して一場の演説をされたのは侯の演説として

回 は一風變つたものであつたが、僅かに五分間の簡潔の演説で、威容堂々三軍を叱咤するの概があつた。人は侯の長廣舌を稱するが、簡勁にして寸鐵人を刺すの演説も亦天下の逸品であることを知らねばならぬ。

録

侯の愛嬌

侯は大阪で二三の小學校にも簡単な演説をされたが、學童は送迎の爲め門内兩側に堵列してゐた。侯は例の不自由の足を引ずり、愛嬌を振りまきながら、兒童の頭を撫でつゝ演壇に進まるとのが常で、兒童は侯の愛嬌に魅されて忽ち親しみを生じ、馬車で市中を通過さるゝ時には、路頭の兒童は皆な脱帽して侯に禮をした。これは小學校に臨まれた反響で他所に見難い光景であつた。大阪を根據として高野山に登られた時山上は五六十人の團體が足を駐めて整列して侯を迎へた。侯は歩いて居られたので、團長らしい者と握手されたが、其男は感激して懷中より忙がはしく手拭を取り出して握手を受けた手を包んだ。何故かと問うと見ると、これは居村に歸へり、村人に大隈さまの握手を移してやりたいので、大切にせねばならんと云うたので、如何さまと思つたこともあつた。高野山に於ける侯に就て別に言ふこともあるが、これだけは爰に記して

置く。

旅舎に於ける侯

旅舎に於ける侯は朝の六時に起床せられて、運動されるやうな場所もないから、一行のものの寝て居る部屋を廻つて、まだ寝て居るかなど云はるので、皆々勿起さるやうな始末であつた。夜は十時頃まで寝に就かれないので、話し相手に侍坐したこともあつたが、侯から種々の話が湧き、他日の爲め書き取つて置きたいこともあつたが、侯に隨伴の時は甚しく多忙で、そんなことをする暇がなく、今になつて惜しいことをしたと思つてゐる。侯の談話に受け答することは不肖なる自分には可なり難儀を感じ、後になつてから、あんな侯の閑散の時にあの事を問うて見ればよかつた。この事も聞けばよかつたと感じたこともあるが、あとの祭りで残念に思ふが、それにしては自から待設けない種々の談論を聽いて興を感じ、益を得たことが少くない。侯の旅中は汽車中でも旅舎でも應接に忙殺されるので、夜中旅宿で話のお相手になるやうなことは極めて稀れであつた。大概夜分は招待があつて、そこに行かると、それに就て思ひ出すのは、或る時藪田と云ふ其頃株式界に雄視した人が自宅に侯を招待した。其時澁澤子爵も來阪中で共に行かれ

た。此の招待につき如何に侯を饗應すべきやと自分は相談を受けた。先方の言ふには大阪の名物と云へば淨瑠璃の外にないから、越路大夫を招いて語らせてはと云ふ、自分はそれがよからうと云ふて越路は二段語つた。實は侯に淨瑠璃を聴く趣味の無いことは自分は百も承知であるが、前に云うたごとく、侯は終日各所に講演をやられて少しの休憩もない、侯に沈黙を餘儀なくするに淨瑠璃を聴かせるのも一案と考へたからであつた。越路は入念に二段まで語つたから、侯は可なり退屈さうに見えたが、併し口舌はこれに依つて休憩を得た。事果て、馬車に乗り旅舎へ歸る途中、自分を顧みて散々苦情を鳴らされ、越路のあの不自然の態度、あの苦しさうな聲、どこに妙があるのだと云はれたが、自分も説明も出来兼ねて一笑した。侯は淨瑠璃嫌ひであらるゝのに、大阪には實業界の巨頭に土居通夫と云ふ人がゐた。此人も昔し大隈家に寄宿した縁故があるので、侯の大阪滞在中度々見えたが、此人の得意は淨瑠璃を語ることであつて、侯に一段聞かせたいとあつて、著名な三味線引を伴うて旅舎へやつて來た。侯の執事はいつもの通り侯夫婦の室に案内せんとすると、土居氏の言ふには、今日は太夫格で参上したから別室に控へると云ふ餘所行きの挨拶であるのに侯も笑はれたが、漸やく侯夫婦の前に語り出す段となると避けてゐた私なども聴聞を命ぜられたが、土居氏は得意の一段をやつてのけたが自負ほどでもなかつた。大隈

侯は苦り切つて居られたが、夫人は流石に愛嬌ある讚辭を寄せて土居氏を喜ばせた。同じやうなことで侯を困しめたことが今一回あつた。それは大阪でなく静岡の旅舎であつた。侯の一行中に高田博士もゐたが、博士は深更一人の校友を伴ひ來り、共に謡曲をやり出した。自分は隣室に寝ながら聴いてゐたが、侯は吾等の室の二階に寝ねて居られた。翌朝侯に面すると、侯は昨夜は謡曲に當られたと云はれ、二人の内下手なのは市島君だらうと云はるゝので、自分は謡曲をうなるやうな邪道に入ることゝ幸に免かれてをります。高田君の相手は某校友であることを告げて一笑したこともあるが、侯はすべて音曲に興味が無つた。

京都と金澤に於ける侯

侯は京都へ行かるゝ毎に片山春子の舞踊をしばしば見られた。これにも侯は趣味をもつて居られないのだが、夫人が喜ばれるので侯も辛抱されたらしかつた。風の變つた踊の饗應に出たのは、大丸下村の小松谷の別荘に招かれた時、庭園の野趣に調和さすべく八瀬小原の農婦を招いで其郷土固有の踊をやらせたことがあり、嵐山の對嵐房に招かれた時、空也踊を農夫連がやつたが、これはなか／＼複雑な踊で、其の野趣のある所を侯は却つて喜ばれた。侯は常に自ら云はる

ゝのに、俺れは野武士で都びた事はわからないと。會つて加賀金澤の兼六公園内にある前田家の別荘に招かれた時、侯は私を茶室に伴はれ、云はるゝのに、こゝだよ昔し俺れが失敗した所はと懷舊談があつた。維新の當初こゝに前田侯から招かれ、當時の顯官四五が會した折、庭前に潺溪聲を發して流れてゐる水を見て、侯は庭に降り立ちて水を手で掬して口を噉がれた。それを見てゐた岩倉公は「どうも野武士の行儀のわるいのに困る」と評したのを、侯は忘れず當時を思ひ出して一笑されたこともあつた。

下村大丸に招かれた時の侯

話は又京都へ戻る、大丸下村が侯を本邸に招待した時、設備に付て自分は豫じめ相談を受けた。私の言ふには侯は書畫などを見て喜ぶ人でないから、そんなことに意を用ひるは無駄だ。侯はすべて雄大なことを喜ばれるが、何か侯を驚かす様なものはないかと相談すると、下村には綠青で松を畫した金屏風が百雙あると云ふから、それこそ屈竟のものだよろしくそれを立て回すべしと。先づ入口の長い路地の兩側に立て、玄關に入つて五六の室を通過して本座敷に入るまで同じ屏風を左右に立て、どこまでも金屏風の垣根を通過せしむべしと一決したが、當日若し降

雨があるかも知れぬから、路地にはテントを張るべしと注意したが、下村では濡れても構はぬと云ふので其意に任かした處、丁度侯夫婦が路地に入らるゝ時に小雨があつた。雨中に金屏風が立つて居るので侯の注意を惹いたが、それが、奥深い座敷まで際限なく牆壁の如く通路を飾つてゐるので流石の侯も驚かれた。實は各室のアラ隠しであつたが確かに成功であつた。此時も餘興は片山春子の舞踊があつたが、酒次侯の口から興味ある談話が出た。侯の曰く、自分の京都の旅舎は祇園の中村樓であるが、或る時矢野文雄が大嘉をしきりに褒め、是非一泊を試みよと云ふので、其言ふに任かせて一泊して翌朝早く二階の洗面所で楊枝を使つてゐると、前樓に蚊帳が吊つてあつて、間もなくなまめかしい若い女が出て來た。誰れがあとから出てくるかと思つてゐると、案外にもそれは矢野であつたと云うて笑はれた。傍らの夫人はその話を承けて、矢野さんは白らばくれて大嘉の娘を褒められたが、實はおのりけであることを萬々承知であると云うて笑はれた。侯は料理の二の膳に大きな鯛のあるを瞥見して云はれた。これは目鯛と云うて饗應に出て見るばかりで、箸をつけずに持ち歸へるものとなつてゐる。いつであつたか東本願寺の枳殻亭へ招かれた時、矢野も同席であつたが、此の目鯛が出ると箸を着け出したのがをかしかつたなど云うて笑はれた。侯は此處案外野武士でなく、寧ろ龍溪居士はあの態度不似合の野武士であつたと

回 一笑を發した。

願

村井の長樂館に於ける侯

録

序に尙ほ京都に於ける侯を語るが、侯は曾つて村井煙草王の請に應じ其の洋館別荘長樂館に寓されたことがある。村井は善美を盡した馳走をしたが、それが却つて野武士的の侯には氣に喰はなかつた。浴場其他に苦情もあつたが、尤も飲食が氣に入らなかつたのだ。侯は田舎風の鹽辛ら好であるのに、村井は京都第一の料理を吟味したから、淡泊に過ぎて、侯の口に適しなかつた。マサカ人の厚意を彼是と云へないから辛抱されたが、東京へ戻られてから、其際同伴の夫人の云はるゝのに、村井さんの別荘では實に困りました。食物が大隈の口に適はないので、大隈はコンナ時に鯉節と大根おろしがあればよいがと度々申しましたが、二三日あすこにゐた爲め少し痩せましたと云はれたことがある。事實は侯は上品の料理など好まない人であつた。さうかと思ふと番茶が嫌ひで、私が同癖であることを知る侯は、いつも番茶が出てくると、茶碗を指して自分を顧みらるゝが例で、煎茶を供したが、それを満喫さるゝのが侯の流儀であつた。祇園の中村樓が長い間侯の旅舎でありながら、侯の食味を心得ないので、往々苦情が起るので、中村樓から指導

を請はれて、出かけたことがあつたが、校友の谷村一太郎氏も同伴で、藝者まで揚げて散財したことがあつた。あの樓は元來旅館でないから、客の扱ひに慣れず、大隈侯が宿泊されると、ある限りの女中は侯の身邊に集中して別室にある自分等を全く閑却するので、いつぞや嚴格に吾等は、大隈家の令扶でない。外に宿を持つて居るから粗略にすれば泊らないとねちこんで、臨時に吾々付の女中を特に傭はせたこともあつた。

侯の乗用の馬車

侯が入洛さるゝ毎に東本願寺が馬車を提供することが例となつてゐた。縣廳の馬車の方が新式であつたけれども、本願寺の厚意を無にする譯にゆかないので、縣廳の方は辭して滯洛中本願寺の馬車を用ひられた。ある時此馬車で侯が西本願寺を訪はれた時、恰かも遠忌に際し多數の人衆が門内に蝟集してゐた。侯の馬車が門に近づくと、人衆は侯を見んと吾れ勝に門外に出て雑踏を極め、馬は駭いて門にも入らず、門外の空濠に沿うて駆け出したので、アハヤ濠に落ちまんとしたが、幸に仇車が路頭にあつて車夫は其車で前を遮り辛うじて馬車を駐めたので、難を免れたが、仇車はメチャ／＼に破壊した。さて仇車の賠償問題が即時起つて、西本願寺では自分の寺前

鯉 肝 録

の出来事だから當然自分方で始末すると云ふ、東本願寺では自分の馬車が事を起したから自分方で處理すると云ひ出す。侯は亦兩寺共御心配に及ばぬ自分がどうでもすると云はれるので事が決しない。それこれで雑沓中に時間を潰すのは馬鹿らしいので、馬車に同乗してゐた自分は、侯の主張を止め、兩寺の爲すに委して寺に入つた。寺では光瑞師始め赤松連城等の耆宿が侯を書院に迎へた。侯は長幹なる光瑞師と並び立つて挨拶を替はされたが、身長は光瑞師の方が幾らか高かつた。光瑞師は侯に向つて、閣下は百二十五歳の壽を期して居らるるやうに承るが、私は聊か御遠慮して百二十歳の壽を期して居りますと云はれた。侯と師はしきりに盆裁談を交換されたが、自分は其頃寺に齋されて一見を得た敦煌の發掘物に就て云々し、師は時機が後れたのと、資力が乏しい爲め充分發掘が出来なかつたと謙遜の挨拶があつた。やがて能の催されてゐる席へ導かれ拜觀後に饗應を受けて辭去すると、前刻の出来事が新聞の號外に出たり、各地へ電報が飛んだりして旅舎へ見舞に来る人が相踵ぎ意外の混雜を生じたが、夜に入ると各地から織るが如く見舞の電報が來て、家職連は夜を徹して事務を執り頗る多忙を極めた。

比叡山に於ける侯

侯の滯洛中叡山の延曆寺管長が訪うて來て是非登山をと請求したので、侯は登山さるゝことゝなつた。此日京都の有力者校友などの隨行者數十人皆徒歩で従つた。此頃は勿論今のやうなエレヴェートルの設備がないので登山は可なり難儀であつた。自分などはヘコタレて籃輿で登つた。延曆寺では禮を厚うして大緑門を作り盛んに歡迎の意を表した。山上の根本中堂は國史に輝やく名蹟で、天子の行幸でも無ければ開かない所だが、此日は特に侯夫婦の爲めに開門して佛に直面する帝座に侯夫婦を坐せしめ、吾等四五の隨員も其の背後に坐した。侯の母堂は曾つて自製の耦糸曼陀羅を納められたが、此日は特にそれが侯の座邊に置かれてあつた。此席は僅かに四五人を容るゝ位の狭い所だが、これは通常人の入り得ない所である。如何さま管長始め一山の僧徒は帝座の下に坐するので、間もなく梵鐘が鳴り讀經の聲は吾等の脚下に起つた。吾等は坐るに此席の尊さを感じざるを得なかつた。讀經終つて休憩所へ案内されたが、侯の休憩所の床に掲げてある幅に私の目が留まつた。其繪は杉聽雨翁の筆で、登山者が嶮路を攀る所を畫し、諦視すれば登山者の臀部を丁狀の棒を以つて押す合力が居るので、ハテ此人は誰れかと案じつゝあると、侯は其男は誰れか分るか、前年登山した時杉も同行したので戯れに俺れを圖したのだと云はれて、侯の健脚の昔しを偲んで感慨に堪へなかつた。饗應を受けた後、山上を散策して眼下の琵琶の湖景を弄

し、今の寺の荒廢を見て昔時の隆盛時を追懐し、遂に日枝神社を拜した。偶々小雨があつたが、宮中の禮儀に通じて居らるゝ侯夫人は下駄を脱ぎ棄て、足袋跣で雨に濡れて石道を歩し、一拜の後背退された。吾等は其物慣れた儀禮に敬服した。侯は此の境内に節を曳ながら、延曆寺并に此神社に就ての史談をいろ／＼説かれた。侯は一場の演説をなすべき腹案もあつたのに、管長が遠慮して請はなかつたのは甚だ遺憾であつた。侯は腹案の大略を語られたが、惜しいかな筆録し置く暇がなかつたので、今は殆んど忘却した。維新勿々高野、比叡等の寺々の廢寺とならんとしたのを助けたのは侯で、此の日の歓迎は謝恩の爲めであつた。

加茂の葵祭見物の侯並に妙心寺と侯

侯の滯洛中加茂に葵祭があつたので侯は見物された。繪卷を展開したごとき古式の行列に吾等も興を感じたが、侯は行列中の服裝其他に破損のあるを認められ、此祭典は朝廷の盛儀であるのに、破損を修理しないなどは以ての外だと憤慨され、歸京の後宮内省に注意を促さねばならぬと云はれた。又妙心寺を訪はれた時、境内を散策されたが、傍らに歩しつゝある私を顧み此寺は思ひ出の多い所だ。幕末に捕吏に付き纏はれ逃るに處なく、且らく身を潜めたのは此寺であつたと

云はれたことも忘れ難い侯の逸事である。侯は又京都の實業家中井三郎兵衛氏の請に應じ、東山に行かれたことがある。中井氏は東山を京都の公園にしたいと計畫した際であつて、東山の地形を侯に見て貰ひたいと云ふ懇望であつた。此時も京都の有力者は菊池帝大總長を始め、幾十の人々が随伴して賑かであつたが、其際侯が記念の爲め手栽された樹木は今大きくなつて、一昨年であつたか京都の校友會は記念碑を建て、且つ記念樹の保護を計畫したが、此記念樹は今東山の一名物となつた。

神戸に於ける侯

京阪の記事が案外長くなつたが、神戸に就ても多少云はねばならぬ事がある。いつであつたか侯の馬車に同乗して神戸を周覽した際、侯は維新前の事を回顧して、今は立派な開港場となつてゐるが、維新の前はまばらに家があつた田舎で、土地の價も二束三文で、買占めることも容易であつた。他日の繁榮は期して待たるゝあの頃に神戸の地を買占めたら間もなく暴富をなすは知れ切つたことであるから、自分は鍋島家の爲めに土地の買収を策したことがある。藩の俗論は之れを納れなかつたが、今目前の繁榮を見て自説の行はれなかつたことを残念に思ふと語られた。侯

夫婦が川崎造船所主川崎正藏氏に招かれ、其饗應を受けられた時は、自分も席に陪したが、自分の青年時代校長であつた服部一三氏が兵庫縣知事であつたので、陪賓として席に臨まれ、造船所の社長格であつた松方幸次郎氏も亦席にあつた。主客の間に懷舊談が交換されたが、侯夫人は松方氏を顧みて、宛かも少年に對する如く、あなたも大きくお成りだと云はれたのには、松方氏も苦笑し、自分も一笑を禁じ得無つた。十歳位の少年時代夫人が見られた幸次郎氏は、今は二十數貫の肥大の人であるから、夫人の驚かれたのも道理であつた。神戸で盛んな侯の歡迎會のあつた時、服部知事は總代として歡迎辭を陳べられたが、知事は青年時代佐賀の大隈侯經營の學校に學んだ侯の門下生だと言はれ、侯が早稻田大學を起した功を稱へたのはよかつたが、侯が到る處に雄辯を振はるゝが、侯の門前にどんな材料でも直ちに供給する多くの學者のあるのは、美しいと云はれたのは、自分から抗議しなかつた。成るほど早大には幾多の學者はあるが、侯は唯の一遍でも學校に頼んで、統計やら材料などを得られたことは無いので、この事實を知つたら服部氏も驚歎したであらう。侯は幾回も神戸に演説されたが、或る時外交演説のあつた時、其の誤譯が電報で外國へ傳はり、意外のセンセーションを起し、正誤電報を發するやうなこともあつた。

中國筋に於ける侯

中國筋では岡山市を始め倉敷、津山、吉備津などに數ヶ所講演された。岡山では後樂園の内會つて明治大帝行幸の際、行在所に充てた座敷に侯は立つて庭の風景を詠められ、明治大帝もいたく此庭がお氣に召し、御賞讃があつたと語られた。此庭の特色は天守閣が庭の一方に雄姿を現はしてゐることゝ、樹木や丘陵の視界を遮るものがなく、明るい庭であることゝ、附近の山が京洛の東山の如く溫藉で、それが宛がら庭中のもとなつてゐることなどが特色で、山を庭中のもとするために平庭にしたものであらう。寺もない眼前の山に五重の塔の立つてゐるのも庭に風致を添へんが爲めであらう。併し何物か缺けてゐるかに思はれ、侯がしきりに賞せられても實は自分はそのほどよいと思はなかつた。夜に入り同行三四の友人と水邊の一亭に小宴を催した時、清い一帯の河流に柴舟の通過するのを見、沙磧に白布の曝してあるのを見、亦中島と云ふ遊廓が橋を隔て、燈火を漏らしてゐる景を見ると、宛がら鴨河そつくりで、水の多いだけが鴨川に優つてゐるので、自分は激賞して後樂園よりも此景が優ると云ふと、一友人は笑つて此流れは園に附帯の一景で、此河が園を抱へて居るのだと語つたので、自分も始めて覺り、この河流が園の附屬

なれば園に對して遺憾はないと、翌朝侯に此事を語つた所、侯もうなづき、後樂園は全く京洛の景に擬らひ、山も河も京都に形どつたものだと言られた。

早大の出身者であり岡山縣下の有力者である大原孫三郎氏に招かれ、侯は倉敷へ赴かれた。大テントを張つての講演であり、大原家の饗應も善美を盡した。津山では舊城趾内で侯の歓迎會が催され、侯は舊藩主松平確堂と閣僚として交はりがあつたので追懷の談があり、津山はスウェツルランドと地形が似て居ると云はれ、工業國たるべしと鼓舞された。吉備津神社の參拜の折の演説には犬養木堂に言及され、あの人の祖先は此神様の犬の番人だと語り、此神社の名物釜鳴りに就ても侯一流の興味ある説を立てられたが、すべて省略して四國に渡り、高松の松平頼壽伯の客となられたことに筆を移さう。

四國に於ける侯

侯は船中珍らしく休養の時間を得られたので、私などを相手にいろ／＼のことを語られた。それに據ると、曾つて夫人同伴の旅に讃岐へも立寄られたことがある。それは燈臺建設の官用を帶び、外國の技師を伴うての視察旅行であつた。其頃征韓論で内閣は大紛議を生じ、閣僚は大隈を呼

び戻せと騒いだが、今のやうに電信が自在でなく、一度電信に接しても侯は平氣で戻らず旅行をつゞけたと云はるゝ、實は内閣の紛争はおよそ知られてゐたが、極度まで争はねば治まらないからと思つて態と急いで歸ることをしなかつた。然るに大阪に着した時には東京から迎へが來てゐたと言はれた。此の燈臺視察に侯は伊勢に立寄り、外人が太廟を拜したいと云ふのでそれを初めて許したが、一條件を附した。それは跪いて拜せねばならぬと云ふことであつた。外人はその如くにしたが、慣れない爲めに後ろにヒツクリ返つたものもあつたと語られた。尙古市の踊が見たいと外人が望むので、縣知事に交渉すると、あの踊りは今禁じてあるが臨時にやらせようと云ふので、備前屋であつたか油屋であつたか忘れたが、臨時に命じてやらせると、知事は其娼樓からひどくやられた。人の營業を勝手に禁じて置きながら、必要であるからと云うて突然やれと命ぜらるゝは餘り蟲がよすぎると散々苦情を鳴らされ、知事も閉口したなどの笑話も出た。

さて船は高松に着し、侯夫婦は數日滞留され、屋島の勝地を始め鹽田地其他數ヶ所に講演されたが、屋島の懷舊演説などは頗る揮つた名演説であつた。自分が何よりも嬉れしかつたのは讚地では世話役が物慣れた人で、何から何まで申分なく行届いてゐて、自分が容喙せねばならぬことは一つも無かつたことである。自分は山水明媚の此地を最も好むもので、滞在中は全く觀光の客

となつて愉快を感じた。松平家の客となつてゐる間に、一夜松平伯夫婦より正式の饗應があつて私も其席に侍した。席には侯夫婦と伯夫婦の外、私があつたのみだが、宴酣にして中野（武營）をお相伴に呼べと命ぜられ、私の席の次ぎに客の膳よりも小なる膳が持運ばれ、そこに中野氏が入り來り了寧に禮をして座に着いた。中野氏は其頃東京實業界に雄視してゐる巨頭であるのに、こゝでは君臣の關係が嚴重で、踰ゆ可らざる畛域があるのを見て、ひどく感激した。

馬關に於ける侯

夜中の汽船で高松を發し、深夜の岡山に上陸馬關に着いたのは朝であつた。侯は前夜不眠の爲め顔色は不愉快げに見えたが、自分の郷里の商業學校の教頭であつた齋藤軍八郎氏が此地の商業學校々長となつてゐて、自分を訪ねて來て、突然だが是非侯に講演を請ひたいと云ふ。豫定しないことでもあり、殊に不眠のため氣色わるげに見える侯に請求して承諾さるゝかどうか私には難色があり、海峽を渡るにまだどれほどの時間があると聞けば、一時間半位はあり、會場には人が集まつてゐるかと問へば早朝から立錐の地のない程詰めかけて居ると云ふから斷り兼ねて、侯に云ふと、案外早速に承諾盟歎が済むと朝食も取らず直ちに會に赴かれた。自分も例の如く隨從

し、コンナ場合の演説は果して氣乗があるかと暗に氣遣つて、侯の演説を傍聽すると、如何にも堂々たるもので、あらかじめ工夫でもされたかの如く行届いたものであつた。實は此地には侯の一ト演説無かる可らざる地である。侯は長州の先輩が維新の大業に與つた功績を列擧され盛んに氣焔を吐かれた。ホテルに歸る途中、自分が傍聽した感じを陳べると、侯は莞爾として、朝食前の演説は餘りやらんが、腹がへつてよい氣持だ、時間があればまだ言ふべきことがあつたにと語られた。

九州に於ける侯

愈々九州に入り博多に於ける醫科大學に於てなされた講演は一時間餘に涉つたが、醫學の大家が席の前面にぞろり列してゐるのを見て、侯は徹頭徹尾、醫學範圍の談論をされ、それがなかなか興味があるので、壇に侍立して聽聞してゐた自分も侯の多能であるのに驚いた。侯は長崎に於ける和蘭の沿革やら、政治家中にも醫者が幾人かあると云うて寺島外務卿などを引合に出し、醫學や醫術に關する興味ある經歷が沸くが如く陳べられて、遂に百二十五歳説に移り、養生の要を説かれたが、目前の大家先生を宛がら書生を扱ふごとく、諸君はまだ若いから深いことを云うて

も分らんなど、横柄ながら愛嬌ある辯を弄して全衆を烟に捲かれた。

侯は不思議な強健の記性の持主で、腹笥に満々たる種々の事實が必要に應じて續々迸り出で、それが如何にも多方面である。どこの講演でも多くの場合、其土地に就て若くは其地の故人に就ての懷舊談が出るが、侯の演説に光彩を添へる要素は確かにこれである。侯は何れの地でも跋渉を經ない所はなく、知名の士で知らないものとは無い。侯の記憶に存する程のことは史的興味のあることで、それが場所に應じて續出するのだから聴者の興味をそゝるのも無理はない。侯は醫者に對すると醫を説くと同じ様に僧に對して法を説き、神主に對しては神を説き、皆侯獨得の見解があつて、強ち故事附でない。吉備津では故事記が引合に出で、高野山では空海の稀有の天才であることを稱し、經文を侯一流の解釋で説くと云ふ工合で、土木でも工業でも商業などに就ても大なる經驗を有せらるゝから、それ等は云ふまでもないが、侯は又外交の辭令に通じ、人をそらさぬ妙があつて、人の感情を害するやうなことは決して口外されぬ。加賀の金澤に行かれた時、加賀藩は收斂を以つて名高かつたと喝破されたから、場所柄妙なことを云はるゝと思つてゐると、直ぐに政治家は手腕が無ければ收斂は出來ないものだと思はれ、縦横の辯に驚かされたことがある。醫科大學に於ける講話の如き多能の侯の演説の一標本とするに足ると思ふ。

佐賀に於ける侯

九州でも各所に講演され、録すべきことが少くないが、割愛して佐賀に於ける侯を少しく觀察しよう。侯の汽車が佐賀に着すると官民多數の人が驛頭に迎へた。小學兒童も澤山に堵列してゐたが、それが皆跳足であるのに吾等は驚いた。侯はまだあれを止めないで困るとつぶやかれた。侯の佐賀入は大人氣であつた。丁度閑叟公の銅像除幕の式があるので、侯夫婦もそれに臨む爲め歸省されたのであるが、鍋島直大侯一家も前日既に到着されてゐて、佐賀は歡喜で満ちてゐた。全市お祭騒ぎで、フリーユとか云ふ獅子舞は各町村のを併せると三十團もあるとか云うたが、それが一々侯の旅宿の前で舞ひ踊る、一は歡迎の意を表する譯でもあるので、大隈家では各々相當の酒肴料を出さるゝので、これ丈でもなか／＼混雜であつた。侯の久方振りの歸省と云ふので、侯の舊知は頻りに訪ねて來た。大隈家では四斗樽の鏡を抜いて之れを待つ様な騒ぎで、到頭侯の外出の留守に來島恒喜の弟が夫人に面會を求めて叩頭謝罪をするやうなこともあつた。閑叟公銅像除幕の日、生憎雨が降つたが、侯は雨中に立つて公の偉蹟を陳べられた。私は長幹の公の像を拜し、又式場にあつた武富時敏氏に公の達辯なりしことや、人を待つに傲らず如才のなかつたこ

回
などを聞き、大隈侯に似寄つた人だと思つた。侯は又因縁の深い寺院を會場にして郷黨に演説をされた時は、郷國に對する種々の感慨を陳べ、且つ苦言を吐いて警醒されたが、侯は前年來た時よりも烟突が減つたと云うて工業の不振を喝破され、佐賀人は兎角議論好であるが、無用の言を繰返す癖がある。此の繁劇の世の中にはそれを改める必要があると云うて、ロヂツクを習へなど云はれ、兒童の跣足の陋習などを説かれた。

侯の政治的旅行

以上は侯の非政治的旅行の大略であるが、侯の政治的旅行は侯の首相として議會を解散し信任を國民に問ふ時に在つた。侯は上野の精養軒に閣僚と共に都下の有識者を會して解散の理由を陳べられたのが皮切りで、候補のため都下各選挙區に演説をされた。首相が足を舉げて自から逐鹿場に立つことは日本に於て前例の無いことである。侯は都下のみ運動を以つて足れりとせず、遂に地方遊説を試みらるゝに到つたが、此遊説は侯として前例のない多忙を極めた。侯は東海道路筋の都會地には大概演説されたが、汽車中でも各驛に選挙人が群集して居るのに對し室外に顔を出して一二分の停車時間を簡單ながら群衆に呼びかけられた。此の簡単な演説には侯は既に經驗

肝
録
があるのであつた。私の郷國越後に北越鐵道が出来た時、侯は此汽車で全線を視察されたが、片言一語でも侯の説を聽かんとするものゝ各驛に群をなしてゐたので、侯は驛毎に起つて呼びかけられた。越後地は侯が御巡幸に扈從されて熟知の地であるので、簡單ながら土地に適切な事を説かれ、多衆の満足を得られたこともあつたので、東海道でも此の經驗を繰返されたに過なかつたが、侯の當意即妙の演説は、千鈞の力があつて、沿道の選挙民は靡然として侯に左袒し、侯の經過の候補者に落選したものは殆んどなく、時間の都合で侯の經過されない地方では氣の毒にも落選者が若干あつた。三四日に互る侯の不眠不憊の運動は、侯の咽喉に祟つて聲が全く潰れ、低調で物を言はるゝと聽き取れないほどであつたが、侯を煩はす難場が一つ残つた。それは小山松壽氏のため名古屋に演説さるゝことであつた。名古屋の通過はいつも夜半近くで、自分は内心コナ夜深かに聴衆があるであらうかと思ふと同時に、侯の發聲を氣遣つたが、事實は私を裏切つた。名古屋に下車すると群衆は會場に到るまで數丁の沿道に堵を築いてゐたが、會場は數時間前に既に満員となつて、沿道の人衆は皆場に入り難いものであると聞いて、其の意外なるに驚ろいた。侯は會場國技館に導かれ、直ちに演壇に立たれたが、侯の音聲は自分の氣遣つた程でなく、低聲に語らるゝ時こそ不鮮明であつたが、大聲ではよく徹し、一時間に渉る大演説も無難に濟

回 目、大感動を興へたのは實に意外であつた。

録 富山に於ける侯

名古屋に於ける侯の大人氣に就て想ひ起す一事は、侯が富山に赴かれた時である。此地は旅順の戦鬪に出征した兵の所在地で、此役に戦歿した将卒は無慮三千を數へた。侯の來遊を機とし戦歿者の追悼會が催された譯は、侯が軍人後援會の會長であられた爲であつた。會場は西本願寺の別院で貳千人の遺族は朝來詰めかけてゐた。勿論將校も澤山に座にあつた。侯は演壇に立つ前に、鎖してあつた佛殿の扉を開かせて聴衆の目前に香を焚き、合掌された後、徐ろに演壇に進まれ、愈々演説となると言々語々戦歿者の遺族に同情を寄せられ。白骨の文などを引用されて熱誠溢るゝ演説には聴衆も感に打れた。場内歎歎の聲に満ち、將校も首を垂れ泣く人も少なくなかつた。侯は終に報國の大義に論及して降壇されたが實に大説教であつた。

富山は東西兩本願寺が對立して各々別院がある、均勢上西の別院に軍人の追悼會があつたから東の別院にも侯に講演を請ひたいと切なる要求が出て、侯は諾された。講演は午後三時に始まるのに朝から近在のものが詰めかけて、午前中既に満員となり、入場の出來ないものが貳千人寺の

境内寺の門前に溢れてゐるので、侯が臨まるゝ時、通路が雑踏を極め警官が如何に制しても通行が出來ないので困つた。自分は車を下りて侯に近寄り、此等の群衆は場に入ることが出來ないので失望して居る。願くば車上で二三分群衆に呼びかけて戴きたいと需めた。侯はよろしいと例の當意即妙の演説をさるゝと、群衆は歡呼して漸やく道をひらき、追々歸路に就たので寺に入るこゝとが出來た。仇車上の侯の演説はこれが始めてあり。亦絶後でもある。こゝに一瑣事を附記するが、富山では侯夫婦の仇車を紅紫の花で飾つて車夫にも特別の服を着せたが、田舎じみた工夫ではあるが、一行三十人も車を列ねて練り歩く時、侯夫婦を容易に認識せしむるにはよい工夫であつたので、自分は郷里に於て此故智に倣つた。

新潟に於ける侯

録 肝 鯨
侯はどこに行かれても舊藩のある所では必らず藩祖の廟を拜せられ、或は地方の崇敬してゐる神社佛閣を必ず参拜された。此参拜で思ひ出すのには新潟で法音寺を訪はれた事である。此寺は前年火災に罹り本堂も其頃は假設であつた。そこへ侯夫婦が訪れて懇なる讀經を頼まれたのには人々は奇異の思をなしたが、侯夫婦には深い因縁がありながら、始めて参詣されたのであつた。

安政頃に新潟で名奉行の稱があつた小栗又一忠高と云ふ人が、幕末の俊傑小栗上野介の父で、大隈侯の夫人には肉親の關係があるのだ。奉行の墓も此寺内に在つて立派に存してゐるが、侯夫婦は展墓して香花を捧げられた。此奉行在世中、新潟の藤井忠太郎の家と特別懇意の關係があつたので、小栗上州が其の領地高崎で官軍のため横死すると、遺族は遁竄して此の藤井の家に潜伏するに至つた。藤井は自分の妻の親戚であるので、侯夫婦に紹介し、家に傳はる小栗上州の遺族に就いて語つたのに據ると、三人の婦人は従僕が一人付き添うて藤井に投じた。其婦人の内、老體は新潟奉行たりし人の未亡人で、妊娠中の婦人が小栗上州の室で、十七歳許りの一女子は、藤井家では大隈侯他日の夫人であらうなど、云うてゐたが、さうではなく、小栗家の親族であることが侯夫人の談で分つた。藤井家では油断なく大切に隠匿したが段々危険が迫るので、深夜會津へ落した後は杳然消息を絶つた。併し其後多少の消息が知れ上州の未亡人は分娩後死し、産れた一女は三井の三野村氏が引取つて育て、七八歳の頃始めて侯夫人に引き合はされたとは夫人の談だが、此の女子こそ矢野文雄氏の弟貞雄氏の配偶となり、貞雄氏は小栗の姓を冒かすことゝなつたのである。此の因縁話しは旅中尤も興味を感じ、脚本にでもしたいと思つた事實である。侯は越後校友の熱誠なる冀望により前後二回來られた。其間の事に就てはいろ／＼記すべきこ

ともあるが、綺羅の巷新潟に於て侯が寛いで喜ばれた一事を語らう。初度新潟に來られた時校友會の宴席も侯の宿泊も割烹店行形であつたが、校友は侯の旅情を慰めんと歡待至らざる所なく宴席には特に新潟の佳麗三千の粹を抜き、妙齡の藝妓をけふを晴れと粉粧を凝らさせ、侯の座を圍繞せしめた。陽氣の侯は御機嫌殊に麗はしく、新潟美人は日本第一とまで賞讃され、興の盡きない内追々夜が更るので、自分は侯の健康を氣遣ひ退席を請うたが、侯は餘程遺憾とされたらしく、歸京して後も、しば／＼私に君等は俺れを邪魔がつて早く寝せたなど云はれたので、十年後再び新潟へ來られた時は夫人も同伴であつたが、今度こそは引取ると云はれても應ずまいと校友連とも謀し合はして、前回よりも一層派出に百餘の佳麗に座敷の兩側の縁に盆踊をさせた。侯は自ら野武士を以つて任ぜらるゝだけ、此種の陽氣な舞踊が大いに悦に入つて、深更まで退席されなかつた。自分は前回の侯の不平を十年目に償つた心持で頗る愉快を覺えた。

侯の旅の到る處何人にも先んじて斡旋歡待をつとめるのは校友で、宛がら慈父母に對するごとく熱誠を籠めた。以上新潟の事も其一例だが、侯夫人は衷心悦ばれて、往々涙ながらに謝されたこともあつた。侯はいつぞや松方侯に澤山子孫のあることを言はれ、俺れは随分負け嫌ひだが、兒孫を多く有つてゐる點では松方に勝てぬ。併し俺れの兒孫は早稲田大學に始終一萬有餘居

回り、全國に散在してゐるものは幾萬とある。俺れも強ち子供が無いとは云へないと云はれたが、實に其通りである。

結語

侯の所謂る大名旅行と云ふものゝ内容は凡そ、以上の如くで、賑かな旅行であるには相違ないが、決して成金的に豪奢を極めた旅行でない。侯に舊交のあるもの早大に生れた校友は天下に充ちてゐるから、其の關係で侯の旅行は勢ひ大規模となるのである。大名の旅行は云ふまでもなく、大名はロボットと一般であるが、侯の旅行は侯一人のみ間斷なく根氣限り活動さるゝので、人は之れを見て侯の文化運動と評するが、侯の志もこれにあるのである。侯は少からざる自費を散じ、勞を厭はず活動されたのである。侯の旅行は決して觀光の爲めでない。地方人の案内するに任せ、風景地を訪はれたこともあるが、それは侯の趣旨ではなかつた。侯の趣味は風景にあらずして、多數の人衆に會し自家の主張を傳へんとするのである。されば侯の行かるゝ先々、各地の新聞記者は侯の車中でも旅館でも遠慮會釋なく訪ね來るが、侯は之れに接することを寧ろ興味として喜んで應接せらるゝことが常であつた。侯の精力は絶倫とは云へ既に古稀を超えての老

齡で、よくも身體が堪へたものと敬服の外は無つた。自分などは侯の長途の旅に隨伴して格別自から勞することも無いのに、歸京すると多少の疲れを覺えて一日位客を謝して休養したいと思ふほどであるのに、侯に於ては歸宅の翌朝訪問して見ると、常の如く早朝客に接して居られて些の疲勞の態を見なかつたことを思ふと、體力に於ては吾等は太刀打が出来ないことを感ずる。自分は東京に在つても幾んど毎日侯の邸に伺候して、其の談論を聴き、これが爲めに啓發したことは少くないが、侯の旅行には幾んどいつも追隨したので、他人よりも侯の薰陶を受ける機會が多かつたことを思ふと、私は衷心侯に感謝を捧げなければならぬのである。

初度の旅

毎年夏期に入ると旅行の經歷を想ひ出す、今は老て山河の跋涉など思ひも奇らないが、青壯時には旅行が大好きであつた。昔しから愛兒に旅をさせよとあるが、如何にも旅はつらいことであつたが、併し一種の硬教育であつた。自分の初度の旅は明治八年母方の祖父に伴はれて上京した時で、會津道中で、越後から東京まで六日間を費した。道中乗り物がないので、草籠で擔がれたり、宿屋が貧弱で往還に風呂桶を据へて浴したり、宿屋の冷遇に疝癢を起して疲れ足をひきづつ

て二里餘を歩いて他の驛に宿屋を求めたり、乗合船に壽司詰にされて一夜窮屈を感じて不眠であつたり、さまざまの事もあつたが、童心には寧ろおもしろく思うて、道中の難儀はこんなものかと輕んじた位であつた。

一ツ橋の東京大學にゐた頃或る暑中休暇に同窓の岡山梧堂（兼吉）と東海道仲仙道甲州街道を旅して四十餘日を費した。これが自分の旅らしいことを體驗した初めである。今考へると多少の教訓を得たのは、此旅であつたのだ。旅に尤も肝腎なのは好同伴を得ること、梧堂を同伴に得たのは、誠に仕合であつた。梧堂は同窓ではあるが、年輩は自分よりも四五十年の長者であり、世故にも通じ苦勞人で旅行の通人でもあつた。此人は幾十里歩いて疲勞を知らぬ健脚の持主で、日和下駄で富士の絶巔を極めて平氣であり、酒が嫌ひですべて贅澤を排し何事にも用心が深かつたので、自分に取つては此上のない輔導者であつた。初め東京を發する時、内規を定め、毎日互ひ／＼に會計方をつとめること、一切車馬に乗らないこと、日費一人一圓を越ゆ可らざること、こんな申合せで出かけたが、其頃はまだ東海道の鐵道も無つたので、五十三驛を膝栗毛で踏破した。徳川期の遺風がまだ到る處に存してゐて、道中に胡麻の蠅もゐた。宿驛に雲助もゐた。宿屋に行燈を用ひた所も少なくなかつた。自分も氣鋭の時であつたが、梧堂は世間慣れたもので、自

分の我儘を許さず、申合を徹底的に守らした。若し同年輩の友人と此の長途の旅を共にしたら、随分不經濟な散財もしたであらう。骨の折れる山嶽登攀を見合すこともあつたであらう。梧堂は飽まで日程を崩さないで、富士も淺間も御嶽も日程通り踏破した。登山には富士だけは案内者を備ふたが、他は案内を不要とした、道に迷うたり不測の難儀もしたが、後日思ふとそこに旅の味もあつた。梧堂の如く嶮難を輕視すると、動もすれば、怪我をすることもあるが、それが無つたのは何寄の仕合せであつた。しかし半可通の案内で山に登ることは冒險であると其時既に感じた。梧堂は時間の經濟家でもあつたので、日が暮れないと宿泊しなかつたので随分疲勞した日もあつた。宿屋に着いて腰の立たないやうなこともあつた、しかしこれも一經驗であつた。

此旅行で日程を變ずる必要が起つた、それは關西地方に虎列刺病が流行し出したので、關ヶ原で旅客を喰ひ留め三日間滞在を命ぜられると云ふので、自分等は宿も定めず、郡役所に駆けつけて、關西の地を一步も踏まないものまで滞在を命ずる道理はないと、經過地の宿屋の勘定書などで立證して争ふたが、なか／＼簡単に埒が明かず、深更に及んで漸やく抑留を免かれたが、吾等が極力争ふた譯は、虎列刺流行地を経た客と同宿することが危険であると感じたからであつた。梧堂は他日辯護士界に名を博した丈に執拗に抗争した。若し自分のみであつたら多分屈して抑留

回されたであらう。此事の爲め此行遂に京都に入ることが出来ず、關ヶ原に泊ることなく道を轉じて中仙道をさして夜の旅行をやつて養老に赴いた。深夜の旅行は此時が初めてである。木蘇では御嶽に登つて福島の驛に入ると、どの旅舎も客に占領されてゐるので、已むなく木賃宿に泊つたが、これも生涯に唯た一遍の経験である。木蘇街道の僻驛には随分閉口したが、木蘇道から甲州路に出で、二日の間人家の幾んど無い茫々たる荒蕪の野を歩いた時は全く心細かつた。僅かに宿泊所として得たのは、茅屋の農家で、一室十數の雜客を壽司詰に寝せ、馬の嘶くのが枕頭に來るやうな不安心の處に一夜を明かしたこともあつた。こんなつらさも後日になれば皆回顧の種である。

自分は其頃相當健脚でもあつたが、梧堂の健脚に訓練されたのと、富士や淺間などを跋渉したあとであるから、歸途甲州街道では吾れながら驚ろく程足が達者となり、笹子小佛の嶮などは苦もなく踰へて一日平氣で十六里を歩し、道連れの態飛脚に感心されたこともあつた。今追憶すると此の旅行は自分には有益の修學旅行であつた。汗を流して懸命に大地を踏むの旅で無ければ何んの得る所もないので、今の修學旅行の便利に比して難儀ではあつたが、講堂より得ることの出來ない修業をやつたのだ、まだ人生の行路などの分らない青年期にこれほどの長旅をして日々異

なる風物に接し、各地異なる人情に觸れたのは、人生を理解するに相當効能があつたに相違ない。特に變化中にあつた舊日本の面影を見たことも大切な経験である、儉素や忍耐も此旅行で自から教はりもした。必竟輔導者其人を得た庇蔭とシミ／＼亡友梧堂を偲ぶの情に堪へないものがある。

以上を録し畢つて旅行のことを追憶すると、聊か附記したいこともある。富士や淺間の登攀記は既刊の隨筆に收めたから再叙を要しないが、二三人事に就ての思ひ出を云ふと、箱根の宿には同窓の三和親本に出遇つて同舟湖水を渡つた。富士に登る時には大學の歴史教授クーパーの下山するに出遇つて登山の危険の注意を受けた。名古屋では同窓の坪内逍遙と田口貞祥を訪うて、その各々から響應を受けた。遠州掛川は梧堂の舊里で其の親戚立石某の家に二三泊し、信州の松本では梧堂の知人某醫師を訪うて淺間の温泉に誘はれてそこに一泊し、同じ松本に同窓の鶴見次昌の家を訪うて一泊した、これ等は皆羈旅の快事であつた。吾等は大學の紹介状を所持してゐたが、之れを携へて人を訪ふたのは唯だ一回のみであつた。それは遠州の佐野木東に郡長岡田良一郎を訪うた事である。此人は岡田良平・一木喜徳郎の實父で、良一郎の父なる人は二宮尊徳翁の門人で佐平治と云ふ高德の人で、當時の報知新聞は其の徳行を稱讚したので、

吾等が其の遺蹟を訪ふこともプログラムの内にあつた。併し此の訪問は吾等を失望させた。良一郎は郡役所には出勤してゐなかつたので、炎暑を冒して田間を歩し、居宅を訪うて見ると、一時間餘も密室に待たされて、さて遇つて見ると、尊徳翁の薫陶に浴した人らしくもなく、吾等が大學生であるのを侮つて、しきりに西洋の經濟學の迂なるを罵倒するのみで、折角聴かんとした乃父の遺蹟を語つても呉れず、實に馬鹿々々しかつたので、議論などもせず、辭したが、此邊の田圃の整然たるを見て、農事に趣味の無い自分も、二宮翁の遺法が立派に存してゐるのに感服した。良一郎と云ふ人はしきりに吾等大學生を輕侮したが、其癖愛する子息が二人共大學に入つて名を成したことを思うて、後年梧堂と共に一笑したこともある。

此の旅行に格別失敗と云ふ程の事もなかつたが、養老の瀧では意外の事があつた。今でもあつた大きな旅館と思ふから特に名を出さないが、自分共が兩肩にかけてゐた行李を、この家にあつた、午飯は瀧に浴びてから後に命ずる積りで、瀧に浴して歸つてくると、何も命じもしないのに、八珍を列ねた意外の料理が續々出て來て、大いに膳部を賑はしたのみならず、所謂飯盛と云ふ女が七八人も坐に待つて、酌をするやら、勝手に飲み食ひする亂脈なサービスには驚いた。一日二圓の費用を規定としてゐるのに、こゝでは勘定が十圓もかゝつたので、午飯に兩

人の五日分の旅費が烟散したやうな譯で、吾等は此處に泊ることを危険として食後直ちに出發したが、途中で探ぐると、昨日内務大輔の林友幸が來る筈であつたが、遽かに來ないことになつたので、其の待設けの料理全部が宛てがはれたのであると知つた。これは旅行中の一失敗であつたとも云ひ得よう。

自分は此頃から酒を好んだが、まだ酒の改良前で、東海道筋でも悪酒に困んだ。已むなく酸味のある酒も飲んだが、今考へるとよくもあんなものを口にしたと思ふ位だ、それでも木蘇の寢覺めの里では、例の浦島の故蹟の深潭に架したベランダで、酔倒したこともあつたが、最も困つたのに木蘇の細工手と云ふ僻驛で何故か旅舎で酒を供しないので、隣室の客が矢張り困つてゐて、私の爲めに酒を買つて來てくれたことなどを思ひ出す。

旅の今昔

自分は青春期に旅が好きで、山河跋涉が得意であつたが、今は其趣味をもちながら、實行の脚をもたないので、唯だ昔しの思ひ出を語つて、自から慰めるより外はない。

自分は今となつて昔しの旅が戀しくなつた。まだ鐵道の無かつた頃の旅、旅舎にまだ行燈のあ

つた頃の旅が戀しくなつた。昔しの旅は不便であつたに相違ない、多少危険もあつた、併しそれだけに興味もあつた。餘りに便利であつて町の内を歩くやうなものでは興味がない。膝栗毛で歩けばこそ、歩々大地に接する。山に河に海に森に親しむことが出来る、一日流す所の汗一斗、随つて收穫も少くない。大自然は汗する者にのみ其の深秘を露はすものである。それが汗と勞に對する褒賞である。苦が無ければ樂がない。勞が無ければ逸がない。旅は勞苦に由つて愉樂を味ふものである。

私は昔しの旅が戀しいので。數年前に箱根の舊道を籃輿^{かご}で越し、輿丁に例の箱根八里の俚語を唄はして昔しを偲んだことがある。此頃も或る人がドンナ旅を欲するかと聞くから、私は敢て人に勧めるのではないが、昔しの旅がやつて見たいと答へた、多少難儀もある、金を遣ひたくも遣ひやうのない僻地に旅をして見たい、華美豪奢の此節の旅と反對に簡素質朴の旅をして見たいと云うた。併し鐵道縱横の今日では、私の望むやうな旅は、高山登攀の外にはあるまいと思つた。登山には勞苦があり危険がある、兎もすると野營の必要もある。赤裸の大自然に觸るゝには昔しから登山が第一だが、今も昔しながらに、これには汗と勞苦を費さねばならぬ。

どこの國も同じであるが、山水美は多く人寰を離れた處にある、人間臭い所に山水美は無い。

金の遣ひやうもない處に山水美が潜んでゐる。近年水力電氣事業の爲め人間未到の神秘境が段々開けたが、まだくゞどれだけ隠れた所があるか知れない。此等を開發するには、いやでも應でも昔しの旅を再現するでなければ、出来ない。私が昔しの旅を戀しく思ふのは戀舊思想に囚はれて云ふのではない。

自分が簡素の旅を主張するのは、經濟の爲めにするのではない。旅の豪奢を許さない境地であり、質素を由義なくされる所でもあるからだ。人に由つては平生の生活と同じことを旅でやるけれども、旅は全體其の境地に由つて生活状態を異にするものであつて、旅の趣致も實にそれから生れるのである。都門にあると同じことをやつて、どこに旅の趣致があらうか、自分が簡素と云ふのは平生の生活程度を引下げることを云ふので、山間の僻地などでは、有り合はせの食物で口腹を満すより外に方法もないが、質素生活でなければ出来兼ねることである。世の中には見へを張る人があつて、旅には平生よりも豪華を衒ふものがあるが、これなどは莫迦の沙汰として自分は感服しない。旅は氣輕であらねば到る處轉向が自在でない。餘所行きの態度では氣輕になり得ない。旅の禁物はこれである。質素であれば氣が驕らないから、汽車汽船も込み合ひば、三等に乗ることを何とも思はなくなる。旅舎を選ぶにも必らずしも一等級を選ぶに及ばない。實は汽車

汽船も一等級が必ずしもよいとは限らない。餘り上客として崇められると氣苦勞のことが多く、儀禮づくめでは其の煩に堪へないこともある。ひとり茶代やチップの嵩ばる不經濟のみではない。氣任かせに時に由つて宜しきに従ふ方が至極氣樂である。自からの態度を重くして見えを張つては、それに囚はれて動きが取れぬ、退屈を感じても雜客相手に話すことも出来ず、態度を崩して寝轉ぶことも出来ないやうでは、實に見え坊は災難である。全體旅客に必要な資質は、喜んで人と交はることである。殊に質問好であることが大切で、斯る人は退屈を免かれ、交際の上から意外の益を得ることが少くない。

簡素の旅行に就て特に強調したいのは輕装であることだ。通し汽車で終點に達する旅行は別だが、一里でも二里でも徒歩を要する所があると、荷物は厄介もので、爲めに人を傭はねばならんことになる。自分の輕装と云ふのは、己れ一人で提げ得るものゝ外何物をも携へないことを云ふのである。旅中に荷物ほど煩はしいものはない。用心深い人は色々のものを携帯し随つて荷物も太るが、實際に臨んで無くてならないものは幾許もあるものでない。是非缺き難いものは手カバン一つで充分足りる、季節に由つては着替も要らぬ、シャツなどの汚れたものは小包でどしどし宅へ送り出すがよい。各地で購つたものや贈られたものも、同様小包で發送するがよろしい、要

は荷物をカサバラぬやう注意すべきで、旅慣れぬ人の荷物は例として必ず大きい、如何なる場合でも咄嗟出發の出来るやう輕装であることが、旅の秘訣である。

自分の貧弱な經驗から云ふと、早朝(場合に依つては拂曉)旅舎を發して早く宿に着く方が宜しい、夏などは拂曉發する氣分は爽快のものである。實は朝旅舎にあつても何等の用もなく、グヅグヅしてゐることはつまらない。早發するとおのづから時間に餘裕が生ずるから、寄り道が出る。多くの勝區を逸するのは寄り道である爲めであることを思ふと、傍徑に入ることを輕んじてはならない。午後は成るべく早く宿に着くことだ、おそいと適當の旅舎がなく萬端不便である。土地柄に由つては思ふ存分早く投宿するのがよい、友人や故舊のある處などはそれを訪ふことも出来る、亦相當の市街地などは一應視察の必要もある。言ふまでもないことだが、旅舎に於ける大切な仕事とも云ふべきは前程をよく調べることである。精細の地圖を携へることは何寄りも大切だが、山河の形勢をよく調べず、豫備知識なしに旅することは全く無意味である、斯る折に調べて實地を踏んだ地理こそ生涯の記憶に残るものである。尙ほ徒歩旅行に必要な注意は急歩を戒め、悠々たる態度で、始終同一歩調であるべきだ、これが疲れを生じない要訣である。登山には別して輕躁の勇を慎まねばならぬ、山は明朗に見えても、意外の危險が伏在するから、必

らず案内者を要する。大雨大風大雷等の天候の變に遇ふては、諦らめて滞在することである。前途に危険があるのみならず、意外の不經濟が起る。長旅に滞在するのは決して無駄のものでない、これに依つて疲勞を慰したり、書信を發したり、紀行を整理したりするにも斯る餘裕が必要である。尙ほ旅中の經費は必ず簡約に従ふべきである。一日二日の旅程には茶代を張り込んで一時の快を取るのもわるくはないが、數句に渉る旅は僅かの節約も通算すれば莫迦にならない額となる。小貨幣の用意が此意味に於て甚だ必要がある。

雪の想ひ出

吾郷里越後昨年の降雪は格段多かつたので、今尙（三月下旬）五尺位な雪に埋もれてゐる所がいくらかもある。越後の人は雪に慣れてゐるから、大雪に驚ろきもしないが、消へるべき氣節に消へないことはいろ／＼の事情に於て雪國人の悩みである。融雪の頃恐ろしいのは出水であつて、雪解けの水が溢れて河が汎濫することは、雪よりも人家を惱ませる。自分は雪中高田にゐたことがあつて、多少の経験もあるが、春先きに市中の雪を鋸で大きなブロックに切り割り、それを市中の川にほうりこむが、大きくもない川だから、見る／＼ブロックで川が塞がりなかく／＼急に流

れないから、同じ場所に雪を度々ほうりこむと、見る／＼汎濫する。そればかりでなく氣候が緩み出し堆雪が融解し始めると、其の捌きをつけるのは川より外になく、界限の落水に遂に汎濫を生ずる。だから毎年大雪のある高田や長岡などの市街地には相當の大きな川がほしいものだ。暖國の人は雪國の光景など夢想もしかねるだらうが、一丈の雪位は決して珍らしくない、いつぞや信州路を経て雪中越後路へ入つた時、ある旅舎の前は流石に道は出来てゐたと云ふても、地上四五尺の雪を踏みならした道で、其の取除けた雪は兩側に積み重さねられ、丁度東京の見付の胸壁さながらの雪壁が屹立してゐるのを見て今も忘れない。宿屋に泊つて兎もすると一夜の内に四五尺も降り積もることがある、そうなるといくら急ぐ旅でも道の或る程度開けるまで、宿屋に籠居せねばならぬ。土地のものは慣れてゐるから一夜四五尺降り積つても敢て驚ろきもしない。併し二三日も間斷なく降り續くと、折角雪を排除しても其甲斐がないから、流石に困却する。斯く云ふても雪は労働者に仕事を授け糧を與へるものであるから、岡目で見るとやうに雪國人を困らせるものではない、どうかして深雪を見ないことがあると、却つて労働者は生活に窮する。労働しないものでも雪國人は餘り大雪を苦にしない。雪中に埋もれてゐるのが、却つて落着いてよいと云ふものすらある。これも習慣から來た諦めであらう。岡目から見ると寒氣は堪へないであらうと

思はれようが、雪に封じこめられると、風も吹きこまず、意外に暖か味を覺へる。唯だ電燈のない所などでは家の中が暗くて困るのみならず、外出に困難であることは言ふまでもなく、數十日禁足同様の籠居はどんなに困しいであらうと岡目で考へるのは無理もないが、習慣は恐ろしいもので、一年一遍避け難いものと諦らめるから、堪へ難い程苦しいものではない。衛生統計など調べたことはないが、雪中には案外病者が少いやうである。

雪國に於ては雪と親しむ關係から自然雪を愛する情もおこる。深夜人定まつて聲もなく降りしきる雪を想像することも一興である。家が雪に埋もると萬籟聞として嘗つて經驗しないシンミリとした靜寂の味を覺へる、隣家がひどく遠くなる、街頭を行く人語が微かに聞へる、窓前雪を被むる叢竹が風を迎へて雪を振り落してガサ／＼の聲を發する。朝起きて前夜降り積つた雪の寸尺を測るなど皆多少の興がある、常には手を勞さないものでも家前の雪を拂ひ、雪沓を穿き雪を踏み堅めて、道を通ずるなども一興たらずとしない。村人が見舞に來て雪中の出來事を語るのを聞くなどは、別して興のあることだ、よく家に引籠ることを籠城と云ふが文字通りの籠城は雪にとちこめられた時である。一家の團樂、家族も婢僕も、鶏犬馬牛も、一步も外に出ることが出來ない。どんな家でも家内のあらゆるものが、ジツトして團樂を味はふのは、此時であつて興味もお

のづから其内にあるのだ、

雪國の風景は特別のもので、雪景ほど興味のあるものはない。白皚々たる山河を觀るのは、風流氣がなくとも大自然に對して崇高の感起る、氣紛れにカンジキをつけた深沓を穿ち、矢鱈道もない雪を踏んで、日光の反射を厭はず汗を流して亂歩するなどは青年期に喜んだものである。足をふみ出すまでもなく、家の周圍にも異様の風景がある。街路の雪が二階の屋根に達し、トンネルを穿つて向ひ側に往來したり、數段若くは十數段の雪階を上下したり、雪に没したる高樹や電柱の上頭の露はれを見たりするのも、雪國に限つての一光景である、自分は高田にゐた頃、雪の殊に深い、隣郡の安塚に旅行したことを憶ひ起さずには居られない。此時は數人と徒歩旅行をやつた。田も畑も水路も何もかも雪に掩はれて、一白の野原である、斯うなると一直線に行けば一里の道も半分になる、漫りに捷路を貪つたが、少しも危険を覺へず、案外早く目的地に達した。安塚は其頃でも郡役所々在地であつたが、例年雪の深い處で半歳も土を見ることが出來ないので、葬式を行ふにも埋葬が出來ず、土地の習慣で、死骸を轎に載せて山間の絶壁から下に放つこれを櫓葬と云ふなどの話を聞かされた。此處に吹雪の難に罹るものが頻繁にあるので、他村へ行くものは、糧食を擔ひ、長竿を携へて出かけることが避難の一法で、吹雪が起ると躁あわてず、雪

中に竿を立て、静坐し、人の救を待つてゐるのが法で竿を目當てに救手が来て掘るから皆な助かると云ふ話も聞かされた。

鐵道の無つた太古に工風された運搬の唯一機關は橇であつた。物貨もこれで運び人間もこれで搬ばれる、人の乗用の橇にはいろ／＼工風され、人力車の車輪を外した車體を橇に取りつけたり、特に幌や屋蓋のある装置などをいろ／＼やつたが、實際に幌も何もないものがよい。幌などがあると兎もすると眩暈を催すことがある。橇引は曳くものと押すものがあつて、流石に雪國だけによく訓練されてゐる、どんな急坂でも無難に走る、横に倒れることがあつても雪の中だから怪我はないが、ケ様な失體は幾んど有り得ない。越後の難所と云へば大タンギリ小タンキリと云ふ所だが、自分は橇でこゝを通つた時は、つく／＼橇引の熟練を感じた。今になつて比較を求めると、支那の車夫が椅子に人を坐さしめて山を上下するのが如何にも巧妙だが、橇引は決して之れに譲るものでない。

雪國の脅威は雪崩なれである。これは多く春先きに陽氣が地に發して雪底が弛む時に起る。山端を行くものなどが、歩行の微動で起すこともある。これだけは雪國に慣れたものでも往々此の厄にかゝる、鐵道工夫が作業中大雪崩に遇つて幾十人命を殞した例は近く聞く所である。十數年前魚

沼地方に起つた大雪崩は、一村數軒の人家を深夜崖下に拂き去つて、人畜全滅したことがある。幸ひ家に居らざりし一人山柴某と云ふものが自分の家と知合であつたが、當時その實況を聞いて戦慄させられた。雪崩は地之と趣を同ふし、往々其の面積數丁に及び、豫知が難く、不可抗力であることは云ふまでもない。

今は雪國に汽車の便が開けたけれども、此汽車が往々立往生をやる、大吹雪が來ると、宛がら海中でガスに出遇ふたやうに咫尺を辯し兼ねる。そのみならず汽車の進行中一二時間で三尺四尺の雪が降り積ると、鐵道沿線の幾千の人も、強力のラツセルも如何ともしがたく、汽車は停止する外はないが、それが長く續くと乗客は食料を缺き饑餓に瀕する。如斯きことは事實に於て度々ある。全體物資の缺乏ほど雪國に困阨を感じることはないが、十日間も雪が降りつゞくと、交通は全く杜絶して、人家は薪炭でも食料でも全然供給を得ない、雪の壓力で家が潰れることは稀れだが、物資の缺乏は頻々で心細い限りである、昨冬の郷國も大雪に困んだが、明治大帝崩御の歲などは寛文以來初めてあると云はるゝ程、十數日降りつゞいたので民家は生色がなかつた。大雪も惱ましいが間斷なく十日以上も降りつゞくことは尤も大厄で、壯丁は驅り出されて家を明けて鐵道線路に立つから、人を備ふて雪を落すことも成らず、物資を購はんとしても運搬の

人手がない。こうなると家の崩壊を防ぐ爲め、家族の男女は皆立働かねばならぬ。いづぞやの大雪には高田では藝娼妓までも屋根の雪を下すに、没頭したことがあつた。糧食や薪炭などは隣保互ひに有無を通したとは云へ、隣家へ行くすら容易でなかつたから、設令ひ救護支給があつても運搬に事を缺き實に悲惨のものであつた。

私などは雪國に生れながら甚して雪艱を體驗しないが、大震火で帝都を焦土とした體驗から郷國の雪艱を思ふと、眞に同情に堪へないものがある。帝都の火災は急性疾患で世界の同情も集まつたが、雪國の災厄は内科的慢的生病の如きもので、見舞をする人もないが、實は窮狀は大震火と大なる相違がない。雪國を知らないものが雪の難儀を知らないのは無理もないことで、天日の有難味や土地の懐しみなども雪國の人でなければ知り得ない、幾十日も雪に降りこめられてゐるものが如何に太陽の輝くのを喜びを以つて迎へるか、僅かに雲間より日が漏れても人は皆狂氣して、晴天來るの徵とした。幾月も土を見ざる雪國民は土けむりの立ち上るのを見てすら、快感に堪へずと狂喜するなど、溫熱地方の人の全然理兼ねることである。

雙柵舎に於ける坪内逍遙君

坪内逍遙翁が伊豆の熱海と深い因縁を結び終に常住するに至つた、其の最初を尋ねると明治十年頃にまで溯ほらねばならぬ。その頃翁は東京大學の學生であつたが、長兄の病痾保養のため、熱海の富士屋別館に宿した時、翁も付き添うて初めて熱海に來た。自分が初度熱海を訪うた時も其頃で、旅舎は異つたが頻繁に往來した。其頃の熱海は蒙昧期に屬し、旅館などは自炊主義が本則で、漁夫は毎朝魚類を客室に持ち回つて直接客に賣つた。(勿論客の依頼により旅舎は賄をやつたけれども)東京からの交通も甚だ不便で、是非小田原に一泊せねばならず、小田原から熱海までは例の人車鐵道も無かつた。随つて旅費も相當かゝるので、書生などは熱海に遊ぶこともなかつた。恐らく書生で熱海に遊んだものは吾等大學生が始めであつたらう。

追々他の同窓も熱海に遊ぶやうになつて、或る年などは七八の友人を數ふるやうになり、旅舎は皆異つたが、なか／＼賑やかであつた。皆々舟で錦ヶ浦を経て網代を訪うたこともある。露木旅館の二階で近邊の娘達を集め、吾等も打混じて歌かるた會を催したこともある。其際も其後も翁はいつも例の早口で和歌の讀み役であつた、或る夜露木に泊つてゐた穂積八束が匆皇自分の宿へやつて來て今夜泊めてくれと云うので、どうしたと聞くと、今夜宿の長女が結婚するので、それを見せつけられるのが溜らないと云うた。井上圓了なども此頃から熱海に來て、露木の陶器店

の薄暗い不景氣の二階に起臥してゐた。

自分が翁と高田博士と熱海に落合うたことも度々あつた。ある時高田君が云うには、吾々は單獨に此地に別莊を營む力はないが、三人で共同別莊を營むではどうかと云うた。翁は例の諧謔を弄して共同墓地かと戯れ、三人打連れて其の場所を検討したこともあつた。なんでも今熱海ホテルのあるあたりの丘陵が見晴しがよいから此邊にするかと評議したこともあつたが、遂に實行に至らなかつた。然るに翁のみ熱海に因縁があつて、終に獨力で別莊を設けた。それは荒宿の別莊で其地は今の露木の別館の地續で川に臨んだ所であつた。二階に八疊の書齋と十疊の寢室があつて、階下は茶の間と下女部屋があつたに過なかつたが、翁は寒中は多く此別莊に來り、多くの著作はこゝに成つた。自分としても此別莊が忘れ難いものである。自分が毎年の初頭に熱海で翁の趣味ある談論を連日聞いたのも此別莊の書齋であつた。此別莊の設けられたのは今より二十七年前で、此頃聞いて見ると、十年ばかりはこゝに冬期に限り起臥されたと云ふことである。然るに追々熱海が繁賑に赴くに隨ひ、近所合壁が皆な待合や小料理屋に變じ、翁は終夜絃歌に惱まざるゝやうになつたので、此の別莊を棄てゝ更らに山手の方に地を相して今の雙梯舎を設くるに至つた。これが今より十七年前の事である。翁が此別莊を營む時地を相するに相當苦心され、自分も

翁と散策しながら、あちらこちらとしばしば探討したことがある。翁は熱海の地理通でどんな所でも知らぬ所がないが、さて翁一流の風景趣味に投ずる所はと云ふと容易に見當らなかつた。然るに通例「イリ」と唱へてゐる、水口村の小高い所に百姓家があつて、それは荒れ果た茅屋であつたが、二本の柿の樹の枝振が如何にも趣味があるので、翁はこれに惚れこんで到頭こゝと定めることになつた。こゝは丘陵であるから眺望がよく海を見晴すのみならず、熱海の市街も眼下にあり、背後には透邇たる山が屏風の如く風致を添へて、遠く錦ヶ浦に通ずるトンネルを見透すことも出来、翁の風景趣味には尤も適つた所であつた。此屋敷は前の別莊地に較べると面積が十倍も大きく、雙梯を取込んで庭を作るにも充分の餘積があつた。翁は流れを庭に引くに苦心して、其の浅い溪流に橋を架したり、山葵を培うたり、果樹や其他の樹木を植ゑたりして、古い石佛や石塔などを配し園に風致を添へた。建物もわざと茅屋にしたが、堂々たるもので荒宿のに較べると天壤音ならざる差があり、幾多附屬の建築もあつて、追々執事の居る文化的の建築も成り、終に塔式の建物が庭下に經營された。それは階下が書庫で、階上にも書齋があり、熱海に一美觀を添へた。これは翁の趣味の結晶とも云ふべく、其意匠には翁も相當苦心されたやうである。書齋に上つて見れば四方の戸がひらくやうになつてゐて見晴らしがよく、夏時には涼を納るゝに足

り、廊下に出て見ると、此邊に多く梅樹が植ゑられ、夜分の電燈は其影を白壁に映して繪を見るごとく、自分をして「梅花書屋」なる哉と叫ばしめた。翁は普請巧者であり、亦建築の意匠に富んでゐた。此の塔庫と早稲田大學内に設けた沙翁の運命座に倣つた演劇博物館は、全く翁の意匠の標本として長く傳ふべきものである。

翁の趣味的經營は追々成つたが、翁に仇なすものは熱海の繁榮である。丹那トンネル開鑿の結果、其吐き出す土砂が大なる山をなし、翁の書齋から見るとそれが正面にある。翁は此の土砂を見て、他日富士の形の上に土を盛り、山下に水を引いて五湖に擬し、熱海富士と名づけて名所となすべしと巨細に私案を立てたが、實は斯くせざればこれも目障りのもので、翁としては勘辨の出来ないものである。翁の邸宅の丘陵下には大なる温泉兼割烹旅館が出来た。これは敢て風致を害するでもないが、其の庭中に落る瀑布は夜中騒々しく、不眠症の翁には勘辨が出来ず、夜中だけは瀧を落さぬことに、一時交渉が成つたが、實は隣地に温泉の湧き出したのは翁の別荘の大缺點を補ふことになつた。翁の家には温泉がなく、毎日村の共同湯から人を役して浴室へ運ばせてゐたが、隣地に温泉が湧き出したので、之れを管で引上げ翁の浴室に通し得るやうになつたのは翁の仕合せで、熱海の繁榮を一概に仇とする譯にはゆかぬ。併しこの様な都合のよいことは他に

無くして翁の目障りになるものが續出した中に、翁の庭先きの一角に柴四郎氏が其夫人を居らしめんと茅屋を建てた。これには全く前面が遮られ、見晴しを失うたので、翁も閉口し其の茅屋をつぶすため、終に其土地を購ふに到つた。此地こそ翁がこんど終焉を告げた新築の室のある所で、實は夫人のために建てたのである。萬一夫人が病む場合、別荘には病臥の室がないと云ふので設けたのであるが、翁はこゝに病み、終にこゝに歿したのである。

翁の雙柿舎から坐して見ての一大風致は屏風の如く透邇たる鬱翠の山で、翁はある時朱塗りの華表を作り、山の持主に交渉して、山上緑樹の間に之れを立て、奥に神祠でもあるかと思はせる工夫をして風致を添へたこともあつた。これは荒宿の別荘の庭園が餘りに狹隘であるので前の農家の畑にある柑橘を毎年買収して、それを詠めとしたと同じ筆法であるが、段々分譲地が盛んに行はれて来て、山の切り崩しが始まり、追々禿山になりつゝあるのには、翁は奈何ともしがたく、毎日附近の景の俗化を憤慨し、いつも苦情ダラ／＼であつた。

自分は熱海に遊ぶ毎に雙柿舎に宿泊することが數年つき、其都度翁の書齋に起臥した。自分はい儘もので他の家に泊ることを好まないが、新年は熱海の旅舎が混雑して泊る處がないのと、翁夫婦が自分を款待さるゝので終に厄介になり、毎日晚酌に翁と快談を交ふことが此上ない愉

快であつたが、夫人が眼疾に罹られてからは、宿泊を辭した。翁の書齋は翁の趣味で作られてゐて極めて居心地がよく、いろ／＼の書物も置かれてあるので、退屈を覚えることがなかつた。或る時書齋の作り付けの机に憑つて物を書いて、フト窓外を望むと隣家の百姓家の馬小屋から馬が頭を出してゐるので、自分は思はず噴き出した。翁の生年の干支は羊であるので、小羊とも云うて居らるゝが、こゝに翁が坐して時には隣家の馬と鉢合はせすることであらうと、をかしく思うてそれを晩食の笑資としたことを思ひ出す。此書齋の下には隣家の瀑布が囂々の聲を發するが、それは以前に録したごとく、夜中は止めるので別に聲もないが、丹那から吐き出す土砂を箱から出す際にコツ／＼箱を敲く音がするので、往々夢を醒さるゝことがあつた。コンナ事から丹那トネルの成否問題が、折々翁と共に討論され、長い間氣に懸つて多少難工事の経緯を調べたこともあつたが、愈々開通となつたので、わざと數多の友人を誘うて三島まで行き、神社境内の茶店で友人に對しトネル工事の説明をしたが、熱海に戻つて酒宴を張つた時は、翁は重患に臥し容態がよくないと聞き、いつもなら訪うて丹那通過の報告をする所であるのに、それどころでないので、自分も黯然たらざるを得なかつた。

自分は熱海に赴く毎に、翁と散策を與にし、附近界限は跋渉し盡した。翁の仲兄の存命時代に

は初島遊覽に同伴したこともあり、五七年前には翁夫妻に伴はれて伊東に遊んだこともある。梅園などは幾十回行つたか知れない。熱海も繁昌と共に刻々に形勢が變じ、吾等が曾つて散策中名區として喜んだ所は今概ね亡びた。翁も一種の風景歎美家で、氣に喰つた風景となると幾回となく探討した。その一二を云ふと、梅園の奥に今も亭々として聳えてゐる、一本の松が頗る翁の鑑賞に入り、之れを光琳の松と云うた。その樹下に大なる老樟がある、地震で大いに損うたが、これこそ翁が役行者を作する時自分から行者に扮し、試みに攀て坐した記念樹である。嘗ては來の宮に行く途中に風致のよい處があつて、そこに廢屋ながら門に四五株の柳があつたが、翁は之れを喜んで五柳先生の家と稱したこともある。今は全く痕跡もないが、衛戍病院の門前に溪流があつて、其上に鬱林が天を翳し晝も薄闇らく、其溪流は傾斜があつて山葵が培養されてゐたので、山葵谷と云ふ名があつた。こゝは翁が喜んだ所で度々散策したが翁は此溪流に多く蟹の居るのを見て、蟹は山葵を喰ふものと解し、或る時云はれるのに蟹は文人に賞翫される動物だけに生意氣に辛い物を嗜むと見えるが、實は渠れは山葵の大敵であると、自分も其頃は同感であつたが、後に調べて見ると山葵を害するものは一種の黴菌で、蟹ではなく、蟹は山葵と同じく停滞しない水を好むので同居してゐることが解り、其後翁と節を曳いた此ことを話して蟹の冤を雪いだ

ことがある。翁は自身の庭に故ら山葵を培養してゐる程此植物の愛好家である。翁と自分と同賞の所が尙他に一ヶ所ある。それは伊豆に赴く途中、元と鳥尾子爵の別荘地の一端で高く崖をなしてゐるあたりで、そこは深く谿が落ちこみ、一方の山から溪流が奔つてゐる。そこに橋が架されて、人は何心なく通行してゐるが、熱海から行く時此橋を渡つて直ぐダラ／＼下りの道を民家に沿うて降ると海に達するが、此邊の風景に一種の趣がある。殊にある農家に馬専用の浴場があつて鑛泉が下からどん／＼出て居る。温度が低いので、馬が愉快さうに四足を入れて佇立してゐるさまが如何にも興味深く感ぜられ、此景を洋畫にしたらよからうと評し合つた。實に連簷櫛比農家であるから、道ばたに大根の皮などが遺棄され、蕪穢を極めてゐるが、流石に美景はそれ等に向妨げられず、此の一區に一種の山水美がある。翁は此の風景を賞して之れを沙翁の作に比し、沙翁の作は宛がら此景の如きもので、細かい所に文の整はん所もあるが、大體の文章美に何んとも言へない所があつて、如何にも規模が大きく、小瑕瑾があつても少しも大體を傷けない、そこに沙翁の大手腕を見る。他の作家例へばイブセンなどは、頗る字句の洗練に力を籠めて、一點の汚穢も留めないやうに掃除が届いてゐるが、それだけ規模が小さく、遠く沙翁に及ばない、と説かれたことを今も記憶してゐる。

自分が翁から種々の文學談を聞いたのは重に荒宿の別荘時代である。毎年々首に熱海に出かけると十日位は滞在したが、旅館では何んの爲すこともないから、朝餐後は翁を訪ふことが毎日で、樓上の書齋で翁と對話をつゞけて正午近く辭して歸るのが常であつた。翁は例の能辯で三四時間ぶつ通しに種々の事を語られたが、多くは文藝上の事に互つて、いつも興味を以つて傾聴した。毎日如此であるから階下の夫人はよくも毎日話しても種が盡きませんな杯と云はれた。ある時は散策中に、翁が興に乗つて文藝談を試み家を出ると直ちに談し始め、梅園に赴く途中無氣になつて談を続け、梅園に達しても憩もせず、直ちに踵を回らして歸途に就きつつ談話を続け、幾んど無意識に往復したことも度々ある、ある時翁の云ふのに自分ばかり毎日話だけでは興がない、隔日に君と僕と語りたと言はれて、自分も半日愚談を試みたこともある。自分は斯くして旅舎へ歸へると別に用もないから、翁の談話を筆記して二三時間を費やした。其筆記を此度搜がし出して見ると十冊許りもあつて案外委しく書いてあるが、明治三十五六年から三十七年頃の筆録が多い。此等の記事を整理したら翁を研究する資料となるかも知れん。

或る夜翁と酒を酌みながら君の好き嫌ひを聞かせよと云ふと、翁云く、私は紅葉とは異つて物に頓着しないから好き嫌ひなどは無いと云はれた。然るに自分からいろ／＼のことを持出して聞

くと、中にはおのづから好悪があつて随分抱腹に堪へないやうな話もある。まづ食物に就て云ふと好物は自然薯のとうと汁と鰻位なもので、總じて新らしいものでなければ嫌ふ、新らしいと云ふのは貯へたものに對して云ふので、鐘詰類は尤も嫌ひと云ふことである、骨董書畫などの類に至つては絶対に所持するを欲しない。なまじい少しばかりあるのは目障りと云うては仕舞込む流儀だと云ふ。先年文科の校友が謝恩の爲め柴檀の大机を贈つた時、その置き所に困つて眼のとゞかぬ長持に入れてあると云ふ始末、自分は壁間に掲げてある山陽の幅を指さしこれは君の藏品に不都合でないかと云ふと、これは仲兄の所持品を預かつて居るのだと云ふ。衣服に就ても好みはなく、昔しは縞柄位は分つた人で、小説にも衣裳を細かに描寫したこともあつたに、それが一變して今は少しも頓着しない。それで小説が書けるかと問へばそんなことは小説家の本領でないと言うてゐる。翁は右の次第だから、自家の衣服には絶対に構はない。細君が側に居つて云ふのに主人は着古しの衣類が一番よいと申すので、そればかり用ゐます。つまり體によく合ふからと見えますと、これは細君の考、自分は之れを聴き、如何さま君が今現に着てゐる、茶色の毛絲のシヤツも随分古るものだね、自分が知つてから既に十年にもならうと云ふと、細君笑つて、これは毎年／＼自分が作つて改めますので、古るいではありません。しかし何んでも在來のと同じ

の／＼と申しますから、色がいつも同じですと云ふ、自分は更らに一問を發した。ソレヂヤあの茶色で太の縁のある洋服は、學校でよくお目にかゝつたがあれこそ随分古るいですなと云ふと、細君は吹き出し、あれはヤツト此頃暇を出しました、あれも着慣れてよいからと申しますので、洋服屋に同じ柄は無いかと尋ねましたが、流行が棄つて、どこにも無いと申しました。若しあればそれで新調する積りであつたと聞き、あのオールドスタイルの洋服を思ひ出して一笑を禁じ得なかつた。そこへ翁は一話を付け加へた。或る年藝人や文人が鶯溪に會することがあつて、自分(翁)も招かれた。その時自分は例の洋服で小兒を連れて往つたが、あとで聞くと誰れも坪内とは思はなかつたと云ふ。成るほど其時日本風の烟具、即ち君が僕の三種の神器と冷かす、指しつき烟草入をズボンに差し込んで往つた、折々それを引き出してパク／＼やつたから、随分妙に見えたかも知れんが、自分はやり慣れてゐるから、無論他人の思惑などに氣のつく筈はなかつたと云ふのには、自分も絶倒した。翁の好き嫌ひを尙付け加へて云へば、翁の本貫である名古屋の人が嫌ひ、招かれて人の家で馳走を受けることが嫌ひ、あらゆる集會に出席することが嫌ひ、親友以外に手紙を書くことが嫌ひ、天才めかしい人に接することが大嫌ひと、なか／＼列擧すると嫌ひのものが少からずある。

翁は多趣味の人であつたが、あの人の第一趣味は劇で、幼少から芝居を好んだ、翁の道樂は何かと云うたら、劇だと云はねばならんが、その道樂が本藝となつたので、娛樂どころか却つて苦痛となつたとは、翁の毎々自白する所であつた、翁は専心劇に没頭したから、他の趣味には一切頭を向ける暇が無かつた。

翁の不眠症も長い間の事で荒宿時代既に悩んでゐた。翁の二階の寢室を蔽ふやうな樹が一本あつたが、それは夜分になると眠る如き態度で一切の葉が垂れ下がるので、椽きの樹と名づけられてゐる。自分は此庭樹に気がつき、或日翁に云ふには、樹ですら夜分は、彼れが如く眠るのに、君は何故あれに見習はないかと詰つたこともある。なか／＼一週一回も自然の快眠を得ず、眠薬を藉りて僅かに眠る様な始末であるので、翁の家に宿して毎朝起ると先づ翁の前夜の眠況を聞くことが例であつた。或る時自分は翁に問うた。君は連宵眠られぬと云ふが、そんな時に巧い作の工夫が案じらるゝかね、翁云く、床に這入つて二時間位寝ないで、いろ／＼考へて居る内に、自分ながら驚くほど神経が澄み、頭腦が透明になる、斯うなるとなか／＼巧い工夫がつくこともある。一例を挙げると、淀君夢の場の趣向だ、あの金鈴銀鈴を櫻樹に繋ぎ、風吹けば琅々の聲を發し、散ずれば天を飾る星となるあの趣向などは、深夜フト浮んだ案である。連宵睡を得ないのは

衛生にわるいのは知れてゐるが、作家としては實は大切な研究時間だ。唯僕以外の作家は夜分不眠の代りに朝寝をするが、僕は朝から學校の稽古があるので、長く寝て居ることが出来ない……ナニいつ筆を取る、僕は朝旭日の瞳々として輝く時分、戸を明け放して書くのが一番好きだ、これは作家各自のテムペラメントに依る。陰鬱な作家は白晝でも闇黒のカーテンを卸してゝなければ書けん人がある。

翁は不眠症のある上に長らく胃酸過多症に因んで、嗜好の食の攝れぬことが長かつた。あの羸弱の身體で、よく喜壽迄保つたと自分は思ふ程である。全く翁の氣魄が身體を支へたかと思ふ。いつぞや大隈會館で例の朗讀を試みた時などは水一滴も口にせず、三時間も更らに倦む色なく、聲鮮やかにやつてのけたなどは古稀翁としては實に驚き入つたことである。

翁の別荘の茶の間には一枚の洋畫の額面が掛つてゐる。椅子に坐してゐる大隈老侯に翁が顔を近寄せて何事か語つてゐる圖である。これは翁がある人に寫させたものだが、これに就て思ひ起すことがある。いつぞや大隈侯と翁が共に演壇に立れたことがある。翁は自分の演説を侯に二時間聞かせるのはお氣の毒と遠慮して、侯に先づ演説を請ひ翁は後に回つたが、侯は自分の演説を終つても席を去らず、椅子に憑つて二時間に餘る翁の演説を靜聽せられた。翁の茶の間にある

額は其時の寫眞に據つたもので、侯は翁が降壇すると翁に向つてどうも君は如何にも面白相に講演するね、多分愉快であらうねと云はれたが、侯の眼には愉快らしく映しても、翁は一生懸命で、如何にすれば聴衆が理解するか、如何にすれば聴衆を倦ましめざるか等に苦心慘愴であるかを、翁は深く包んで左も愉快さうに談ずる所に翁の藝術があるので、翁の講演は何時でも聴者を陶醉せしめざれば止まない概があつて、翁の講義は天下一品と一般に評されたのも偶然でない。自分は此の茶の間の額面を見る毎にいつも翁の能辯を思ひ出さずには居られない。

或る時の晩酌に自分はフト思ひ出して、翁に向つて戲に例の三種の神器はどうなかつたかとうた。翁の家には吾等が稱して三種の神器と稱するものがある筈、それは何かと云ふと、

(一)蝙蝠傘 毛縹子で作られ、羊美色に褪めても居たが、これが幾年か東京専門學校時代に、翁のお供をしたものだ。

(二)朝鮮扇 尺長の油を引いた鐵扇、これが家康の扇の指し物と同じく、幾戰場を経たかしくない古物で、翁は演説の都度これを振り廻したものだ。

(三)書物入靴 これは銀金具がつき、新らしい時は立派なものであつたが、傘と同じく長年學校へお伴をするうちに雨露にさらされて、追々革が硬化し、色もはげて見るかげもなくなつ

たが、これは早大時代となつても翁のお伴をしたものだ。此外に翁の若い頃を偲ぶ品が三點ある筈、

(一)渡邊省亭筆 掛幅

月下欄花散亂の圖

(二)象牙の烟管筒

これには櫻花の散りたるを彫刻しあり

(三)箸 箱

黒塗に櫻花の蒔繪がある

此等が翁の龍岡町時代自から通がつて作つたものだが、翁は「あれも舊惡全書と同じ取扱をして居る」と笑つたが、細君に聞けば以上三種の内、烟管筒は翁が廢烟を決行した一ヶ月ばかり前に紛失したさうだ。

翁は性急の人で思ひ立つと容赦がなく直ちに取りかゝる、何時頃訪問すると云ふと、その時間前から必らず待つて居る、時間を後らすと不満である。萬事が其通りで原稿を作る時は筆が走り、繪を書く時は筆が飛ぶ、散策の時は健脚で坂路を意とせずズン／＼歩るき、杯を舉げれば一

擧に飲みほすの例で、相手をするのが甚だ難儀である。翁のセツカチは萬端の事に就て徹底してゐるが、セツカチはソ、カシイ失の付き纏ふもので、いつぞや貳百圓かの紙幣を渡した時、よせばよいのに不慣な手で計算を始めた。幾許か足らぬと云うたが、實は十圓札に若干の二十圓札が交つて居るのに、區別なしに勘定した誤りであつたので一笑を發したことがある。

翁の家庭の事は細君と分業で、俗事は細君の擔當だから、翁は俗事に遠ざかり、自から金錢の勘定などする必要がない。外へ出る時は細君が若干の貨幣を紙入に入れるが、いくら在中とも知らずに翁は出て行くやうな始末であつた。

翁は嚴正の人であつたが其實溫情があつて、窮迫の門人其他に對しては甚だ涙もろく、翁の生涯にどれほど人の急を救うたか、幾んど枚擧に暇ない位である。一面責任觀念が強く、金錢の事は勿論、其他に就ても責任を果さずしては一刻も安んじない人であつた、前年大患に罹られた時、幾んど危篤に近い病態であつたが、恰かも自作の熱海のペーゼントを町で演ずることになつたので、翁は病床に三絃や舞踊を自分から指導されたが、瀕死と傳へられた翁の病室から三絃の聲が外に漏れたので、人は奇異の思をなした。此の挿話も翁の責任觀の一端を語るものである。

翁は多方面の趣味家で、行く所として可ならざるなき才能を有し、繪も書けばうまく和歌も出來れば小説も書き、芝居となつては脚本も書き舞臺の監督もやる。これほど多方面の藝がありながら、さて道樂は何かと尋ねると道樂は無いと云うてゐる。實は幼年の頃から芝居が大好きであつたから、芝居こそ翁の道樂でありさうであるが、翁は劇の改良向上を終生の仕事としたので、道樂でありさうなものが、遂に本業となつた。本業となつてみれば遊びとも又すさびともならず、仲々苦しい辛いものだと言つてゐた。翁の述懐の和歌はこれを道破してゐる。

二心ゆめもたじとて唯一つ此わがすさびをしつとめとはしつ

遊びとも又すさびともすなるわざをつとめとすればうきこと多し

わみづから人にならばはで作るてふ此すさびなくばわれ生けらんや

世間の人がすさびとするものを、翁は務めとしてゐるので、憂きことが多いといつてゐるが、併し樂もおのづから苦中に存するので、翁はこれが無ければ生きて居られんと本音を吐いてゐる。

翁は非常な凝り性で、何か研究でも始めると徹底しなければ止まん、殊に劇は翁の半生の事業であるから、其の凝り方はすばらしいもので、見るもの聞くもの皆な劇の材料とする。劇が翁の頭腦全部を占める天地であるごとく、何をみても何を聞いても劇がつき纏うてゐて、何事も劇を

以て批判せんとする。

翁は、或時私の家に訪ひ來り、玄關前の松をしきりに賞讃し、此の松は稀れにみるよい形だ、就ては君に勧告することがある。それは玄關の入口の扉を四枚の白木の繪坂にしてほしいと云はるゝので、自分はその意味を推し得た。翁は此の松をみて能舞臺の背景に畫く松を聯想し、その背後の扉を白木にすれば能舞臺ソツクリであると思うたのである。此松は自分も愛してゐるのだが、大震災後大切の枝を枯らして幾許風趣を害したので、翁の勧告に従はずにゐる。

翁は私にそんな勧告をする位であるから、一と頃大久保余丁町の自宅の板屏を黒色と柿色と互ひ違ひに塗つたことがある。言ふまでもなく芝居の緞帳に擬したのである。

翁と連れ立つて大阪へ赴いた時の事だ。或る人に招かれて灘萬で饗應を受けた。その頃此割烹亭は改造前で、日本造りであつた。樓上に立つて望むと、浪華橋が近く見えて多くの人が橋上を往來してゐる。此家の周圍には板屏があつて家との間は僅かに四五尺位の餘地が存する程の狭くするしきで、そこに只一本枯れかゝつた見越の松がある。自分はこれらを見て、俗氣の紛々たるに寧ろ不快を感じたが、翁には妙に氣に入り、これは全く芝居がかりだ。此の見越の松もよいが、あの橋の書き割は何んともいへない趣があると褒めそやしたので、如何さま芝居道の觀察は違つ

たものと思うた。

又ある時、翁と共に高田博士の國府津の別荘に宿つたことがある、翁は不眠症だから、夜の明けぬ内から眼を覺まして居るので、自分もおつき合ひで早くからいろ／＼床中で談話を交へてゐると、翁は脚本の書き方を語り、脚本は單調であつてはならぬ、どこかに山がなければならず、莊重の所もあらねばならぬが、くだけた所も亦必要で、錯綜趣をなす所に妙があるというて、家屋の構造論に移り、この高田君の建築には如何にも氣が利いてよく出来てゐるが、どの部屋もみな同調であるやうに思はるゝが、君は何んと思ふと云はるゝので、自分も同感を表し、別荘などは、待合めかしく洒落れた作りが多いけれども、なんにしても座敷は莊重でなければならず、書齋に洒落れた意匠も望ましくない。納戸などこそ洒落れた意匠が望ましい。家も君の脚本の説と全く其揆を一にすると答へ、こゝにも翁は劇をもつて建築を評された。

翁の建築評で聯想の起るのは演劇博物館である。これは翁の古稀を祝し且つ記念するために早稲田大學の構内に建てたもので、これも全く劇的である。昔し沙翁劇の演ぜられた運命座の略圖が残つてゐるので、翁はそれによつて意匠を凝された。即ち正面の玄關が舞臺で左右の翼を張れば觀覽席が出来るのである。劇の博物館建築に沙翁の舞臺を應用したのは誠にふさはしい工夫

回 翁ならでは思ひつかない意匠であると感じたが、此館こそ翁の劇を趣味を永久に傳へるであらう。

翁は其半生を劇に精進した。創作の名脚本も少なからずあるが、劇の世界的大脚本、沙翁全集四十巻を完譯し、普及版を作るに當つて大なる修補を施し、全然書き直した篇もある。翁は五十年の長き其反譯に心血を灑ぎ其完成と共に終に斃れた。翁の死は惜んでも餘りあるが、不朽の此大業を成し遂げたので翁にも遺憾はあるまい。

翁に就て語れば必ず劇の事に涉る、劇を離れては幾んど翁を語ることが出来ない。翁と劇とは實に一心同體の如くである。翁は常に曰く、人世は大なる劇であり、天地は大なる劇場である。然り翁は此見解をもつて劇に終始し、劇のためには何物をも犠牲に供して惜しむ所がなかつた。實をいへば翁の一生も劇であつた。翁ならではの脚色し得ない大なる劇であつた。殊に翁の最後は壯烈で吾等を泣かした。翁は發熱と闘つて沙翁譯を征服し畢るや自ら不起を覺り、勇猛心を鼓舞し死前十日早く飲食を絶ち、絶對に注射を辭し醫者をして手を下すに由なからしめ、遂に大往生をとげた。觀じ來れば翁の最後も劇的であつた。

四五年前熱海に赴いた折、翁に就て案山子のことを色々尋ねると、翁は翌朝二三枚の自畫に案

録 肝 鯨
山子の故事や、沙翁中にある案山子や、自作の歌謡にある案山子などを書いて贈られた。翁は親友などに揮毫を興へることを決して惜む人でないが、強ひて頼む人には絶對に諾せず、方々から依頼し來るものを返却するに可なり執事は勞するのである。翁は興動けば直に筆を馳する流儀で、いつぞや熱海に大地震のあつた時、翁と高田氏と自分三友が久方振りに同席したが、翁は三人宴會の圖をもつて寄せられた、それには自分の杯の持癖が書かれてゐるが、自分は無意識だが學生時代の持癖が今も其儘だと翁は云はれた。亦銀座の繩暖簾濱作と云ふ家を紹介せられた時も、戲畫で演作の光景を描き數首の狂歌を添へられた。尙幾多折に觸れての墨蹟は架中に少からずあるが今は翁を偲ぶ大切な記念物となつた。翁の臨終に就ては多く語ることが出来ない。唯だ夫人の語らるゝを聞くに聊かの苦悶もなかつたと云ふ。併し死前十日頃から全く覺悟を極めて、少量の水の外絶食を續けられたと云ふ。翁は常によく語られた。餘命があつても働くことの出来ない餘命は何もならないと、翁が臨終に大なる覺悟のあつたのも、平生の翁の言に徴すると自ら理解がつくので、吾等は誠に悲しみに堪へない。自分は長い間熱海を樂土として屢々往來した。それは氣候が暖で温泉の湧く故では無かつた。此地に翁が居らるゝからであつた。翁に親炙して翁の薰陶に浴する事が、自分の此上のない愉快であつたからである。而るに雙柝舎あつても今は

翁がない熱海は最早唯の熱海と成り畢つた。これにつけても思ひ遣らるゝのは未亡人が如何に寂寥を感じらるゝ事であらうか、自分は五十年未亡人を知つて居る。未亡人が此長い年月翁に盡された内助の大なるを憶ふと、落涙を禁じ得ないものがある、翁は幾十年不眠症や胃酸過多症に罹つて苦惱し乍らもよく喜壽を迎へ得た。之は一に夫人の行届いた看護と注意に依るもので、夫人は醫師よりも遙かに大なる任務を果された。夫人は子が無かつたけれ共養女を始め長仲兄の兒女を養育されたのみならず、翁が家庭に舞臺を設けて子女に藝術を教へられた際は、夫人も翁を助けて舞臺を監督し、且つ身躬から和洋の樂器を操縦された。夫人は或る意味に於て翁の藝術の内の相談役であつた。夫人は家庭を見るに周到で、殊に調理割烹に通じ、失明の後外出の時は翁に手を引かれ乍ら、家に在つては調理割烹を自らせられた。夫人の勝氣は翁に比して敢て遜色無かつた。自分は筆を本輝に絶たんとするに臨み、夫人の功を稱へねばならぬ。

翁は六十歳の頃から、和歌を折ふし詠ぜられた。いつぞや自分に書き與へられた、「きまぐれ集」と題する翁自筆の歌集が一冊ある。その巻首の歌は

六十を二つ越えたることゝなりしきしまの道をふまんとそ思ふ
 古い人の飛鳥山ふみならなくにむそちをこえて入るや此道

歌にあらずたゝことなりといふ勿れたゝことにもあらず獨りことそこれ
 尙ほ集中より數首を摘録する。

新居

わか住むは熱海の戌亥となり村宇入村と土地の呼ふなり

古詩に「人生不滿百、常懷千歲憂」又淵明に「世短意常多」東坡に「意長日月促」の句あり。

ねられぬも或時によし意は長く世を足らはぬを夜を日に繼かな

不眠

あなちねられの夜半を呪はんや作と靜思は多くこれに得つ

われ好かず

われすかず古風な干菓子諸鐘詰二番煎し茶やくさ反譯

形式の手紙書くこといとつらし鄭重な禮を要するはなほ

まこゝろの伴はぬ物を買ふいや頭をさけて物頼むいや

頼まれて物かくはいや真似もいや外國人を拜むのもいや

ひとりこと

髮髭に霜はおけとも目も耳も心も筆も老いぬと思はず

なからへは三年は三年十年あらはとせのわさをわれ營まん
今死ぬもわれはうらみし然れとも尙世にあらはすへきこと多し

新居の庭に二百年経たらんと思ふ柿二本あり

我庵のもゝ年柿の枝越しに咲く梅こしに青海を見る

冬の庭に瘦せ仁王とも立ちはゝる二本柿の姿おもしろ

熱海の磯の松枯れゆく

とし／＼に枯れゆく磯の松のことく古き手振の亡ふる熱海

創作

孫子なきわれとまこゝとわか作を思ひつゝ生めと捨てたきか多し

装成りて手にするまでと近き作をいつもさすかに頼むおそまし

をさなくも醜くもあれと生着れはいろ／＼きぬをまとはせもしつ

以上の物語を書き終つて後明治三十七年中の雑録を検索すると、若かりし頃の翁に就て十枚ばかりの記を發見した、既に物語の内に収めた事實もあるが、全く漏らしたことが二三あるから、

爰に追補する。

明治廿三年帝國議會が初めて開かれんとする時、愛知縣からは、遙々總代を上京せしめて翁に議員の候補者たらんことを懇請したのを翁は拒絶したとの夫人の談で自分には初耳であつた、それも其咎自分はその頃郷里に在つて東京に居らなかつたからだ。此話が出ると翁は傍らより俺れのやうな臆病なものがどうして政治家になれるものかと一笑し去つた。が、實は此事は翁が自家の弱點を自白したものであつた。翁は餘りに正直過ぐる人であつた。をかした話だが、あの頃は大學を出ると、誰れもが一時の融通をつけるため、高利を借りたものだが、翁は例の神経質と正直とで、曾つて一たびも約を破つたことがなかつたので、いたく高利貸の信を博したことがある、此事實の如きも翁の性質の一端を現はしてゐる。

翁は大學を出てから寓居を諸方に移したが、一ト頃本郷元町の山川健次郎氏（後の男爵）の向側にある三軒連なつた長屋を借りてゐたことがある、これは人から託された子弟を置く爲めであつたが、その頃は漸やく活計丈は差支なく營んで行けたと見えて、學生の外二人の同窓を食客として收容してゐた。それは他日相當の司法官となつた香坂駒太郎氏と染谷徳五郎氏（此人は其後どうしたか知らない）の二人で、皆大學を卒業しながら失脚して身の託し處がなく、翁に救はれ

て可なり長い間翁の厄介になつてゐたが、往々飯焚婆に酒を買つて來い肴を取つて來いと云うて我儘をやると婆は承知せず、それは旦那様に對して濟みますまいと云はれて頭を搔いたといふ話が残つてゐる。翁は此頃から義氣のある人であつた。

翁は後に小石川の傳通院の或る寺院に居たこともあるが、其後本郷の眞砂町に移つた。これは翁に學生を託した永富謙八氏が、特に製圖して新たに作つた家で、廣い食堂の外貳間もある家であつた。翁が書生氣質を書いたのも、亦結婚したのも皆此家であり、山崎覺次郎、丘淺次郎二博士が翁の監督下に勉強したのも此家であり、此家の所有權は富永にあるやうだが、實は永富は翁に與へる積りで建たと聞いたこともある。翁も書生の監督を廢めることになつた時、一日も他人の家に居ることが例の氣象で厭やになり、しきりに貸家を探がしてそこに引移つた。これは永富の本意でなかつたらしいが、翁が無理に移轉したので、已むなく眞砂町の家を翁に賣らせた。それが五百圓に賣れたので、匆々其金を細君に持せて永富へ遣はし、金を渡さうとすると永富の云ふには、あの家は坪内さんにやる積りであつたから、此金は受取るまいと云ふ。翁は高利貸に褒められる程の人間で、他人の金を貸りて居ると、夜も寝られない神經質だから、前以つて細君に入念に是非渡して來いと言ひ附けてあつたから永富の言ふことには従はない、そこで永富も少し

考へて、何か書いたものを嚴封して細君に渡して云ふには、此中に一通の證書がある。坪内さんが他日困ることのあるまで、これを開かず仕舞つて置きなさい。其時開封さるれば多少の便宜を得らるゝであらうと云うた。細君は此思慮ある取計に對し辭退も出來兼ね、謝意を陳べて立別れ、數年これを篋笥の底深く秘め置いたが、大久保の邸宅を營む時試みに此封書を開いて見ると、五百圓は何時にも贈與する旨が書かれてあつたと云ふ。此小説めかしい話は翁の性格を語ると共に、永富氏の義氣を語るものであつて、誠に美談となすに足る。

此程文部省の社會教育局長山川健氏に初めて面接した折、逍遙翁の逸事を語られた。山川局長は山川健次郎男の次男で健次郎男の實兄の山川浩男の家を繼でゐる人である。氏の談話に據ると、翁は一時男の所有に係る五軒の長屋の内に住したことがあると云はれたが、前に記した山川氏の家の前の長屋三軒を借りたと云ふのが即ちそれに當るのである。其頃山川氏には三人の女中がゐて、四十恰好の年増が女中頭で他の二人は若い女であつた。其内の一人が翁の風貌を見て熱烈の戀に陥ち、どうあつても坪内さんの嫁になりたいと云ふので女中連も困り、結局直談判と云ふ事になり、女中頭が連れて坪内氏に引合はせ、本人より切々の情を訴へると、無殘にも氏は言下に刎ねつけたので、いたく女を失望させたと云ふ、これは吾等が曾つて聞かざる逸事だが、若い

頃の氏は女に思はるゝ程の美男子であつたことは確かである。

逍遙博士の業績

私は東海道の旅行で名古屋の停車場を通る時いつも、アゝここだと獨語いたします、實は坪内君の家は昔し此邊に在つたのが桑滄の變で、名古屋の地區が變はりました。坪内君の書生時代に住んだ家は、郊外地の笹島村であつて、家の周圍には木華の垣根があり、さびしい村居であつたが、今は殷賑なる大停車場の所在の處となりました。私は七八年前名古屋の友人に伴はれて始めて日本ラインの勝を探り、その風景美を喜びましたが、自分に取つて他の喜びの一つは、此のラインの河から、近く太田の莊を望んだことであつた。こゝは木蘇川が氾濫すると水害のあつた地で、尾張藩でも常に警備を怠らず、こゝに代官所があつた。其の代官が即ち坪内君の先人で、君は此處に生れたので、君には深い縁故のある地で、時折り此地名を聽かされながら、其境を目睹したのは此時が始めであります。私は太田の莊を望みながら、坪内君と若かりし頃の交りを種々に追憶し、曾て帝大同窓時代修學旅行をした時に、暑中休暇で家に歸つてゐる坪内君を訪うて、半日話し暮した揚句、君に伴はれて得月樓と云ふに鰻を食ふたことを思ひ出し、同行者に得月樓

と云ふ割烹店はまだあるかと問ふたら、其家は名古屋で今も名高い割烹の老舗だと聞いて、急に其家に行つて見たくなり、そこそこに歸路に就いて、得月樓に上りこみ、五十餘年前の往事を追憶し、遙かに坪内君に書を寄せて感想を言うたことがあります、此旅行は君の古稀の紀念に演劇博物館を經營のため寄附金を名古屋に募集した時であります。

私がコンナ因縁話を講演の冒頭に持出したのは、六十年の長い交りをコンナ因縁話で大體の諒解を得たいと思ふからであります。實は坪内君に就て語るべきことは決して少くないが、さて愈々となると、何を語つてよいか、語るべきことが多いだけ、甚だ惑ひます。

世間では故人の行蹟を委しく知つてゐる人が澤山あります。藝術方面の事などは私よりも遙かによく知つてゐる人が多くありますから、私から特に此方面に就て委しく言ふには及ぶまいと思ひます、私は寧ろ世間の餘り知らない方面で、それが故人を知るに一番大切であることを聊か陳べて見たいと思ひます。

故人を稱讚する人々は、一概に故人は天才であると云うて簡単に片付けますが、私が故人のために先づ辯じねばならぬのは此點にあります、故人は決して斯る稱讚に満足して點頭する人ではありません。如何にもあの人は少壯より文藻に富み藝術に天分があつたに相違ないが、それだけ

があればどの人を造り上げたと言ふ譯には参りません。

此頃も君の墓を作るため墓石の檢分に出かけた自動車の中で或る友人は私に問うた。坪内さんは若い時どんな人でしたと。私は同窓時代に思ひを馳せて、頗る美男子であつたが、どことなく俳優めかしい處があり、如何にも瀟洒な優しい人で、何事も人と争ふことをせず、極めて柔順であつたので、同窓は皆此人を呼ぶに坪さんとやさしく云ふたものだ、と答へた。此瀟洒な美男子が筆を揮へば、馬琴もどきの名文が成り、時には三馬を凌ぐやうな滑稽の筆を弄するので、戯作者の素質は既に備つてゐた。瀟洒な才子でこれだけの藝があるのだから、兎もすると墜落の危険もある譯で、一步を誤れば戯作者と成り畢せなかつたかも知れないのであつた。

君は後年になつて若い頃の事を回顧して自から時々言うた、實にあの頃はフワ／＼してゐた。振り返ると實にお恥かしい、と言はれたが、全く其自白の通りで、君の若い頃には随分弱點が多かつた。亦其當時いろ／＼の誘惑があつて。君を危ない所へ誘はんとした。當時小説など書くものは假名垣魯文の門に入つて名に「文」の一字を頂戴せねばならなかつた。脚本を書いて劇界の人とならんとするには團十の如き名優に跪かねばならなかつたが、實は其膝一たび屈すれば、伸ばすことが出来なかつたのである。君はまた大阪の有力なる新聞からしきりに誘引を受けた。若

し潤澤な収入を欲するならば、それに應ずべきだが、併しさうしたら恐らく一生地方新聞記者や田舎文學者で終つたかも知れない。君は此等危険の瀬戸際に立つて、流石に屹然として獨立の地歩を保つた。これは君の高邁の素質にも因るが高等の教育が然らしめたに相違ない。若し血氣にはやつたならば、生涯取り返しのつかぬことになつたかも知れないのである。

君は曾つて云うた。自分の發奮して志を立てた動機はまことに些細の事で、長兄から叱られたことが、發端となつたのだと。偉らい人達の發奮の動機などは、大抵コンナ風なもので、君は大學生中早やく、自立の人となり、學資を家兄に受けることを辭し、自から働きつゝ學資を自給した。實を云へば君は當時苦學生であつたのだ。併し此苦學時代君の貧弱な下宿に同居して君の監督の下に在つた山崎覺次郎、丘淺次郎など云ふ人々は共に後ちに堂々たる大家となり、君自身も此の頃が大なる修養時期であつた。

君は文藝家として専ら喧傳されてゐるが、自分などから見ると、教育家として終始した人と寧ろ傳ふべきだと思ふ。君が晩年劇道に熱中したのも矢張り社會教育に外ならないのである。君は大學生中君自ら自身を教育した。その材料となつたのは前に述べた知人から托された五六の子弟であつた。君は彼等を監督する爲めに、自らを修めた。亦彼等に範を示す爲めに自ら勉強もし

た。そして彼等の英語練習に資する爲め故ら彼等と英語で應答をした。子弟に斯くしたのは實は自らを教育する所以でもあつたのだ。

君は大學を卒業すると、種々の事情で教育に携はらねばならなかつた。と云ふのは早大の前身東京専門學校が其頃創立されており、君の友人は皆な其學校に關係してゐて、君の來り投ずることを待つてゐたからである。此頃はまだ文科は無かつた。文科は數年の後君に頼つて創立されたのであるが、當時君は自家の専門でない歴史、憲法論や政治學などを教へた。君は最初から教へ方が上手と云ふ名を流したが、實は知人から預つた子弟を教へた經驗があるので、教育には丸素人ではなかつたからである。

君が早稻田の講壇に立つて晩年に至るまで五十數年の長き、名教授と云はれたことは餘りに世間に能く知られてゐるので、特に呶々するを要しないが、君の中等教育に没頭した事蹟は、兎もすると閑却されんとするが、君の經歷に於て此事蹟は頗る大切である。君は強ち中等教育に興味があつた譯ではない。君は何れかと云へば、大學教育殊にその専門の文科教育が其の志望であつたに相違ないが、早稻田中學に相當の教頭が無いのを見て、自ら枉げて中學に投じ終に校長にも任じた。此間十幾年同時に早大の文科にも間斷なく教鞭を執つたが、中學の奉仕は君に取つて容

易ならぬ心勞であつた。中等教育家として特別の修養のなかつた君は、先づ自から其の修養にとめた。何事にも一旦事に當ると眞劍である君は、間もなく立派な中等教育家と成り濟ました。が、その辛勞は並み大抵で無かつた。君は教頭として倫理を教授するため、一時倫理學哲學を研究するに没頭し、日本の倫理思想を參酌して君一家の倫理説を立てる迄には相當の苦勞をした。

君は何事も徹底せざれば己まない人で、中等教育に従事しつゝある間に感じたことは、中等教科書の甚だ杜撰であることであつた。そこで君は終に自ら教科書を編することを思ひ立ち數年これに力を注いだ。此事に就て五十嵐博士は近著六十一莖集に左の如く言ふてゐる。

『教科書の方面に於ける先生の事業は、先生の多くの事業の中で、世間的に最も光らなかつたものである。殊に文壇方面からは殆んど顧みられなかつたもので、或は寧ろ全く忘れられた存在と云ふ方が適當であるかも知れぬが、しかしながら教育界から見ると、そのいづれもが劃期的のすばらしいもので、殊に教科書編輯に經驗のある者から見ると、實に破天荒な仰敷すべきものであつた。それは考が新しく、深く、遠く、それに誠實がこもつてゐて、文辭が洗練を極めてゐるからである。』

尙ほ逍遙君が讀本に就ての主張は左の如くであつて、如何にも適切を覺える。

『在來の小學讀本は、とかく上中流本位である。英傑本位であり、都會人本位である。戰爭讚美本位であり、隨つて尙武第一であり、智育第一であるが、これからは中流以下を眼中に置いて、むしろ凡人本位、平和本位、農本商工業獎勵本位、同時に文藝趣味の養成や、情育、徳育の鼓吹を主調とし、内容をも形式をもそれに副はしめるやうにせねばならぬ。』

右の如き根本主張から、編纂された教科書は「英文小學讀本」(明治十八年)尋常高等の「小學國語讀本」(明治三十三年)「中學修身訓」(明治三十九年)「中學新讀本」(四十一年)の四種が出版されてゐるが、君の斬新の編纂方針は當時に容れられなかつたけれども、後の讀本に影響を及ぼしたことは頗る大なるものがあつた。

君は以上の如く中學教育に任ずると忽ち優れた中等教育家となり、教科書を編ずると忽ち天下第一の編纂者となつたが、實は何事にでも携はると全幅の力を注ぐから斯くならざるを得ないのである。事實君が教頭校長時代は早稻田中學の全盛期で、監督官廳も同校に對し模範中學の銘を打つたのである。

君は斯く一方に中等教育に没頭したけれども、君の志は終始文學に在つて、君は終始早大の教授を苟くもしなかつたのみならず、時間の許す限り文藝上の研鑽を怠らず、此の繁劇の間に君は

雑誌「早稻田文學」を編纂し又時々著述を出した。當時吾々君を知るものは、窃かに思ふた、君の如きアキラ才能を中學教育などに鎖磨せしむるは不經濟であり惜しいことであると。君も遂に開放を得て後に文學と創作に専らなることを得たが、實は徐ろに考へて見ると、君が高い人格を作り上げたのも、君が意思の鞏固の人となつたのも、輕佻の氣を脱して眞劍の人となつたのも、全く身を挺して教育に任じた結果であると思はざるを得ない。然らずんば文學界の原野を開拓するにいつもイニシヤティヴを取り得られやうや。何人も君を師表として許すやうになつたのは、全教く育に苦心したお蔭である、然れば君に取つて此の難儀の時代こそ、君の修養の時であつた。君が一世の師たらんとする前に先づ自から修養を積んだからである。若し君の素質にある天才の奔放に任かして、氣儘に行動せしめなば、恐らく人を服する程の大文豪とは成り得なかつたかも知れないと思ふ。

君は文學界に珍らしい人物である。藝術家の弊は往々偏癖に陥るが、君は博大の人であつた。

博大の人は動もすれば熱が足りないが、君は飽まで熱誠の人で、自分の成さんとすることは、徹底せねば止まなかつた。君の克己力は驚ろくべきもので、中年以後の君と青壯時代の君とを比較すると全く別人の如き思ひがある。自分などが最も敬服するのは君が終始文藝の原野を開拓する

の案内者を以つて任じたことである。君は常に大なる炬火を捧げて未開の文藝界を高く踏んだ。君は些細な事には目を閉ぢ、一意草分をやつた。君は道を拓けば後事を人に托して、ツン／＼前進而常にイニシヤテ、イヴを取つた。實を云へば一旦開けた道を整理するには種々の人があつて必らずしも君を要せぬ。例へば文藻の如き君よりも優れた人はいくらもあり、亦今後もある。君はそれ等と争ふことをせず一旦荆棘を拓き、行くべき道を指し示すことを任務としたから、君の一生は短かいが、君の業績は甚だ大なるものがあつて何人も君と争ふことが出来ない。

明治以來多くの文人が出た中に、名聲の高かつた人もあり、稱すべきメリットの人もあつたが、その名聲は概ね一時的で永續がしない。君に於ては名聲に冷熱なく棺を蓋ふまで續いた。これも畢竟君の業績の偉大であるからの事だ。いつぞや文部省で文學奨励のため四五の文豪に賞金を與へることがあつた。初めに四五の候補者があつたが、段々煎じ詰めると、各々一長一短があつて、坪内君が只一人無垢の候補として残つた。併し此の人は賞金などを受けることが大嫌と知れてゐるので、文部省も餘程苦心した。折角の省の計畫が坪内君に拒絶されると、面目が潰れる所から、上田萬年博士は早稲田大學へ来てどうか坪内君に貰つてもらひたいと、懇ろなる頼みであつて、自分は其意を諒とし、坪内君に貰はせたが、君は此の賞金を得ると、直ちに窮苦の生活

をしてゐる故文人の家庭に之れを惠與して自分は一金も取らなかつた。

坪内君の如く文藝に忠實で勤勉勵精の人は極めて稀れである。君は長く教育に従事して極めて多忙の間に發奮して外國の文學を博く涉獵し、内地の文學にも常に注意を拂つて、門下生格の作にまで目を通し、其間に種々の創作をやり、其の創作を質演するために、家庭に舞臺を作り、子女に舞踊を教へた。君は思へらく日本の舞踊には世界にない特徴がある。世界のオペラは耳に聴く方が主であるが、日本のは目に訴へる舞踊の姿態に大なる趣があると。君の歌曲は皆此見地から創作され、其實演には君自から舞臺に上つて演者を指導した。又劇の改善をも思ひ立つて、文藝協會を興し新俳優を養成した。君の藝術に對する躬行實踐は、世界に名高いワグネルと頗る趣を同うするものがある。君は俳優として舞臺に立たなかつた點はワグネルと同様だが、自身の骨肉を舞臺に立たせることも偶然ながらワグネルと同様であつた。

君の業績に就て漏らすことの出来ないのは沙翁四十篇の全譯である。劇を以つて生活を送つた君としては、此の事業なかる可からずであるが、實は大事業であつた。抑々君がシーザー奇談を劈頭に出してから完譯まで五十年の勞を積んでゐる。中には度々譯し換へたものもある。西洋でも完譯はあるが、坪内君の如く舞臺に充分の心得のある人の譯は殆んど無い。此意味に於て坪内君

の譯は、世界に誇ることが出来るのである。試みに森鷗外氏のマクベスと坪内君のマクベスを比較して見るがよい。優劣は何人にも直ちに判じ得るであらう。一方は直譯であり一方は沙翁の精神が漂ふ脚本である。坪内君の苦心は邦語を以つて原作者の詩趣と精神を邦人に理解せしむるに在る。だから英字新聞は批評して坪内君の偉業はイギリス人の心と日本人の心とを靈的に接觸せしめたと云うたが、如何にも其通りで、斯まで漕ぎつけた君の苦心は容易なものでない。或る人は言うた、坪内君の譯は君の創作と見做さるべきものだ。自分なども此言に同感のものである。君は最後まで沙翁と組打を續け病を冒してまで奮闘して死期を早めた。然し終に全部の新修を畢つたから、沙翁を終に征服したとも云へる。君に於て遺憾はない筈である。

君は或る年輩からしきりに藝術は眞劍で無ければならぬと力説して先づ自身の遊戯的態度を排斥した。實は君が少壯時代得意であつた徳川文學は遊戯的のものであつたから、君は其態度を改めるに人知れず苦心した。文章などもそれから眞劍味が加はつて大いに改まつた。君の演壇に於ける興味のある辯説や、朗讀や、演説會に於ける能辯などが、人を魅するの妙があつたので、動もすると、遊戯的の辯舌を弄するかのやうに誤解するものがあつたけれども、君の最も厭ふ誤解はこゝに在つた。君に於ては全く眞劍で、どう話せば人が理解するか、どう話せば人が倦まずに

聞き入れるか、聽者は面白く聞いて居るけれども、君に於ては全く懸命であつた。君は或る年輩から絶対に學校の校友會などで席上演説をすることを廢したが、實は聽者が演説の妙に魅せられ、兎もすると遊戯的の誤解をなすことを厭ふたからである。

君は七十七の齡で没したのは惜むべきではあるが、實は年に於て必ずしも不足はない。別して君が踏むだ幅廣ろい足跡を考へると、よくも働いたものと思ふ。君は羸弱の質で、何十年も連続的に不眠症に罹り、亦常に胃酸過多症に悩んだ。それ等を考へると、よくも喜壽迄齡を保つたとも云へるのだ。全く君は氣魄で生きてゐたかと思はれる。君の氣魄は偉いもので、既に古稀の齡を迎へてからでも、大衆の前に三時間に亙る朗讀をつづけ、一滴の水すら喉に入れず、少しも倦色なく、鮮かにやつてのけたなどは眞に驚異に値する。

君に就て云ふべきことがまだ澤山あるが遺憾ながら時間が許さない。唯だ終りに臨んで言ひたいことは君の藝術に忠誠なる、一生の心血をこれに漑いだのみでなく、物質的にもあらゆるものを犠牲にした。君の古稀を壽するために起つた演劇博物館のごときも、殆んど君の物質的援助で半分成つたものであり、君は國劇向上のためにも本宅別邸土地典籍標本は勿論多くの版權や興行權なども寄附して殆んど遺す所がない。これ等は實に莫大のもので、斯る寄與は文人に餘り先

回 例のない所である。此等を思ふと君の肉體は亡びても、君の精神はいつ迄も存続するに相違ない。

録 尙ほ終りに臨んで君の一生を概観するに、君ほど後進に教訓を残した人はないと思ふ、君は正しく立志傳中の人で、君の如く志を立て、克己、勵精眞劍であれば、彼れが如き偉業の成ることを如實に示してゐる。又君の如く謙抑で人に驕らず人に對して温情があれば天下に敵なく、君の如く不羈であれば高歩して一世を指導し得ることも示した。凡そ此等は皆な君の足跡から何人も徴し得る教訓である。惟ふに努力なくしてどうして彼れが如き人が出来よう。一概に坪内君の天才のみを稱する如きは君を知らないもので故人の本意でないことをこゝに繰返して、この講演を了へる。(日本圖書館協會紀念會講演)

後藤新平伯

自分が後藤の名を最初聞いたのは相馬事件の起つた時であつた、その際は自分は讀賣新聞記者であつた。相馬事件の御家騒動で、随分複雑のものであつたのが、後藤が忠奸何れであるか最初は判じ兼ねた。後藤も一端下獄したのに種々の評判があつた。後に至つて後藤の任侠を知つたけ

れども、その頃は唯だ醫者であると知るのみで、或は毒藥などを用ひ兼ねない姦物であるまいかなどと思ふたこともあつたが、彼れは姦黨では無かつた。最初此人に遇つたのは、衆議院議員であつた時、亞片に關する何かの案の委員會に、後藤はタシカ臺灣の民政長官時代であつたと思ふが、政府委員として委員會に出席したのを見ると白哲濃髯の人で、役人には珍らしい磊落潤達の人で、辯舌は東北の訛があつたが、豪傑風に高聲で談笑し、どことなく稗氣があつて多少の愛嬌もあつた。相馬事件で或る時多少の疑訝を抱いたが、其人を見るに於て釋然とした。

録 當時はまだ水澤藩の給仕から出身したことや、齋藤實と同じ境界から立身したことや、曾ては名古屋の病院長であつたこと、高野長英と多少の血縁があることなどは全然知らなかつた。然るに妙な事から追々關係が深くなつた、と云ふのは臺灣で實業に従事してゐる賀田金三郎と云ふ人が、後藤を介して當時洋行留學中の自分の同姓の直治といふ農學士を賀田家の養子に貰ひたいと云ふ一件が起り、賀田は亡友昆田文次郎と懇親であつたので、しきりに昆田に之れを求めたので、昆田は自分にしばし同意を促した。當時直治は臺灣總督府の營林局の役人であり、臺灣にも洋行させられたので、後藤長官も自然賀田に左袒する様な關係から、自分も遂に同意することになつたが、直治は長子でもあり隔絶した獨乙にゐることであるから、諾するかどうかも判じ兼

ねる、だが身事一切を自分と昆田に委ねて居るのだから、私より長文の書簡を寄せた結果、直治も應諾して来たのだ。其の歸朝匆匆結婚の式を擧げる前後には、しばらく後藤を麻布の邸に訪ふて追々懇意となつた。

結婚式を擧げる時も後藤と馬車を與にして賀田邸に出かけたが、車中種々談話を交へた時、後藤より殖民政策の一端を聞き、彼の俗吏にあらざることを感じた。其後紅葉館に結婚披露のあつた時、後藤夫婦と溜りに同席した時もいろ／＼寛ろい話が出た。其際後藤が會つて醫者であつて名古屋の病院長であつたことも語られた。傍らにゐた夫人は安場保和の娘で聰明の人であつたが、後藤の話を受けて、あの頃の診察録のやうなものが残つてゐるので、或る時子供等に示しておとつさんは會つて醫者であつたと聞かせたが、そんなことがあるのですかと、到頭信ぜずに了つたと云ふて笑はれたが、後藤自らも一笑話を漏らした。日清戦争の時廣島に石黒軍醫總監がゐた、名醫であらうと諸方から診察を求めに来た患者もあつたが、石黒は之れを斷つてお前方不要の命があるならば俺れが治療を求めよ、序に言うておくが、こゝに後藤新平と云ふ人が居る、これも自分同様のナマクラだから其積りで居れと云ふた時、自分（後藤）は偶々隣室にゐたが、石黒は己れの拙を白状したのはよいが、俺れを友づれにしたのはツルイ奴と笑つた。後藤と石黒

とは懇意の間柄で、或る時後藤が石黒の牛込の家を訪ふと、取次ぎの云ふは閣下は御不在と云うたので、後藤は其の尊大が癢に障はり、主人が歸宅されたら後藤閣下が尋ねたと云うたと云ふ笑話も出た。

後藤が名古屋の病院長であつた時、岐阜に於ける板垣伯の遭難事變があつた、後藤は招かれて醫者として赴いた時の事は文明協會が後藤を煩して公衆に講演を請うた折控室で詳細に聞いた。それは余の隨筆にあるから委しく述べることを避けるが、こゝに云ふべきは岐阜は名古屋より近距離に在りながら隣縣である。隣縣への往診は愛知縣知事の許可を得なければならぬ譯であつた。事が急であつたので其手續を履むいとまもなく出かけたが、病院へ歸へると間もなく縣知事に招かれた。テツキリ無斷往診を咎められるだらう、と辭職を覺悟して出かけて見ると、そんなことでもなく板垣伯の負傷の様殊に勅使差遣は事實かとそれを聞くのが要件であつたと語つたが、後藤の直情經行と責任感の一端を窺ふことが出来る話である。尙ほ此控席で後藤は對ロシア政策の大略を語つた。これは後藤の得意の話でロツフェと上野の靜養軒に連日私的國際談判を累ねたことも想ひ出されるが、遂に伊藤公を勸めて露國を訪はしむることとなり、不幸にも公はハルピン驛頭で命を殞すの慘事を惹き起した。後藤は此事を追憶して公を殺したものは後藤である

と云はれても一言ない。公の使命は全く俺れの進言に由つたのだと流石に落涙に迫り、吾等を感じさせた。高野長英と血縁であることも此時に聞いた。高野は養家の姓で本姓は後藤であると語られたやうに記憶する。

後藤は一見粗豪の人らしく見えたが、其實思慮周到の人だと左右のものは云うてゐる、なか／＼よい頭脳を持つてゐたと見えて、機に應じ變に投じ湧が如き對策を有してゐた。桂内閣の時であつたと思ふ、加藤高明伯から聞いたのだが、後藤は多策の持主で、いろ／＼の策を進言したが、多くは採用されなかつた。採用されなくとも更らに失望するやうな様子も無かつた。それも其筈一案が用ひられなければ、更らに乙案丙案と續き提案し、中には採用されるものもあるから、案の成敗に喜憂することは無かつたと、彼れは確かな縦横の機略を有し且つ相當の疎腕もあつたやうに思はれる、大震災の後帝都復興の爲に建てた案の如き、其通りに行はれなかつたとは云へ、頭腦の凡ならざることは確かに示した。彼れは其の性格其の智識何となく高野長英に似た所がある、最初醫者を志した所までも似てゐる、血縁は争ひないと思つたこともある。

早稲田大學に騒動のあつた時、後藤は内務大臣であつた。あの際は自分が目ざ、れ第一の被告人で、月餘非常の難儀をしたから、何もかも知つてゐる、學校を擁護すべき警察が遽かに矛を逆

さにして學校の當事者を困め、學校から内務省に訴へても一向要領を得なかつたので、私等は後藤が背後に悪戯をやつてゐると感じた。あの機に乗じ早大を潰さんとする悪意があつたか、それは速断も出来ないが、兎に角叛軍を援けたことは確かで自分は今でも簡様に思つてゐる。然るに騒動が鎮定して數年の後、早大で後藤に一席の講演を請うた時、彼れは開口一番、早大から講演を求められたことは意外と放言した。多くの人は此言に餘り注意を拂はなかつたかも知れないが、これは所謂問ふに落ちず語るに落ちたもので、彼れは當時の悪戯を暗に自白したものであると自分は受け取つてゐる、しかし彼れの無邪氣な性格は……にも露はれて、彼れが餘り敵を作らないのは此の性格に由るのである。

大隈家收藏の數多き書簡の内に後藤を初めて紹介した徳富蘇峰の書簡がある。それには後藤と云ふ男は案外話せる人間だから遇つて御覽なさいと大隈侯に推奨してゐる。これは後藤がまだ餘り頭を擡げない頃で、當時大隈侯の眼中に無つた後藤が地位を得ると彼れがごとき悪戯をなす、官僚の心術ほど油断のならないものはない。併し給仕より身を起して僅かの生涯に伯爵を贏ち得るには、斯る狂言も亦己むなき歎自分は後藤の爲めに惜まざるを得ない。

謝耳目

閑耳目

聖夢と國難

明治三十七年日露の國交が斷絶して開戦となつた時、皇后陛下は葉山の御用邸に在らせられて深く御軫念であらせられたが、或る夜、土佐の傑士坂本龍馬が白衣を纏ひ御前遙かに跪き、此度の戦は決して御心を煩し給ふに及ばぬ、不肖ながら微臣皇國の海軍を守護致候へば、皇國の勝利疑ひなしと言上し、其姿は消へ失せたと云ふ、翌夜も同じことがあつたので、陛下は香川太夫を召して御下問すると、太夫は龍馬の海援隊の經歷を言上し且つ龍馬の寫眞を御覽に入れると、陛下の夢枕に立つたものの貌相と毫も相違がないと仰せられたとは、當時吾等も聞いたことであつたが、深くも意に留めずにあつた所、此頃龍馬の像を見ると、此の瑞夢は當時の御歌所録事加藤清作に由つて新體の歌に作られ、且つ龍馬の碑に此の事が刻されてゐることなどを知り、妙な瑞夢もあつたものと感した。

西園寺公の事

西園寺公は明治初年の戦争に吾越後に來られ、越後府知事ともなられた。越後府の置かれたのは新潟でなく、私の郷里水原であつたのだ。吾縣の最初の長官は公であつたことを思ふと、公は越後に淺からぬ因縁がある。越後に來られた際には私の家と私の妻の家にも親しく訪られた。公は其頃十九歳で私は五六歳の小兒であつたが、公が私の家の座敷に立て居られたのを庭から見たのが最初で、爾後面會の機會がなく今日に及んでゐるが、何となく懐かしみがあるので公の事蹟に關する書物を折々讀んでおり、略々公の事歴に通じてゐるが、公自から物された陶庵隨筆に、會津落城の際の事が書かれてあるが、自分には初耳である。公は會津の或る家を占領して一週間程そこに居られたが、どうも井水に異臭があるので、井戸を調べて見ると、死骸が五つ迄出てきたとあるが、戦時にあり勝の事ながら、潔癖の公は嘔ぞ閉口されたであらうと同感に堪へない。公は早くから時勢の推移を知り福澤の著書を好んで讀まれた。同僚の公家はそんな本を人の見る處に置ては君の爲めにならぬと忠告したこともあつたと云はれるが、公は清華の門閥家であるの

に、階級などに頓着なく、曾ては特殊部落の女と結婚したいと企てられたこともあると聞くのも初耳である。公は普佛戦争が終つてまだほとぼりのさめ切らぬ頃佛國に遊學され、ガンベツタにも面會されてゐる。明治三十三年再遊の時ガンベツタを吊はれた詩がある。

來宿南洋第幾灣、濤聲拍枕夢頻還、起憑欄角無涯恨、月轉含翁埋骨山

公は佛國遊學時代クレマンソーと同窓の好みがあつた、兩方名をなしてから會見の折、ク翁は公が書生時代の磊落の風が變して、眞面目の間に皮肉を寓する人となつたのでク翁は驚ろいたと云ふ逸話もある。

公が巴里遊學時代には風流逸事が多かつたので、吾等の耳にしてゐる挿話も少なくないが、左の二詩は其の片鱗の閃きである。

巴里客中書感

燈痕如水映羅幃、秋入莎庭蟲語微、記得紅樓疇昔夜、嬌歌如夢曉依稀

入佛京口占
桂冠漸覺絕塵緣、才人玻璃身忽仙、翊々明朝化胡蝶、尋花何處最鮮明

公は青年時代から詩書を善くされ、自分の家で書き残された「靜以修身」の四字額は山陽風の書でよく出来てゐるが、公は畫もよくされたと見へ、京都の伊藤古義堂に藏してある山水二枚は安藤徳器の公の像の首端に收めてあるが、山陽よりも一等以上であるかに見受けた。

公が私の妻の家を訪はれた因縁から、妻の祖父の和歌氷壺集を刊行するに當り、友人石渡敏一氏を介して題字の揮毫を請ふたのが、今も座右の屏風に貼り込んである。其語は「一片氷心在玉壺」の七字で揮毫は十五六年前の舊に屬してゐる。

私の父が宮内省に奉仕してゐた頃、公は那破翁傳を譯して陛下の御覽に給された。それは餘程洪瀚のものであつたと見へ、父は幾んど其淨寫に三年位没頭した。御覽用の罫紙の欄心には「富春」の二字が刻されてあつたことを記憶してゐる、公は勅命で其主宰の自由新聞から退かれ、その後此反譯に従事されたと思ふが、知らず此譯書の寫本は今圖書館に存するや否や。

頼山陽の新事實

頼山陽が家庭に檻禁せられて日本外史の初稿を作つたことは隠れもない事實であるが、此の著述に對し、藩侯から若干の手當を受けたと云ふ新事實が発見されたと聞へた。遠からぬ内に其實證を知る得ることと思ふが、何んでも淺野家の文書の内の手當に對し頼家からの禮狀があると云ふことだ。兼ねて一説として従來傳へられたものに依ると、山陽の父春水は豫て、日本歴史を書くの志があつた、子の山陽が外史を書いたのは乃ち父の志に基くのだと、これは或る方面に信ぜられてゐるのだが、其の證據がないのでハッキリしなかつたが、或は春水に斯る志の在つたのは、藩侯の内旨に由つたので、其の緣因から手當が檻禁中の著者に與へられたのであるかとも想像されるが、併し實證を見て研究した上で無ければ輕卒に臆斷する譯にゆかない。

驚 婚

支那の或る詩話に「驚婚」と云ふ二字を見たことがある。これは未婚の婦人を強制的に宮中に納める濫妄なことが行はれた時代に、自然出来た言葉だが當時はどこの家庭でも之れを懼れて、

愴皇婚嫁を定めたこと云ふてあるが、朝鮮でも曾つて王子が妃を定めんとすると、全國の未婚女子に令して沙汰のあるまで、結婚を差控へよとの禁令が發せられ、民間では非常の迷惑を感じたが、此禁を犯すのは結婚を取消されたり財産を官沒されたりするので、妙齡の女子は斯る禁令の出ない内、急ぎ立つて結婚をやつた。朝鮮に早婚の習慣のあるのは、他にも原因があるやうだが、こんなことも原因であるかに説くものもある。

戀愛結婚是非

戀愛結婚が成り立たないので悲劇の多かつたのは昔しである。戀愛結婚が成り立つて離婚の悲劇の多いのも今の世の中である。青春時代の兩性血の湧く盛りに、戀愛を生ずるも血のなす業である。分別などあつてのことでない、否なく分別などあつては、それは純なる戀愛でないといふ、排斥し去るのは今の戀愛の見解である。前途を考へたり家庭の折合を顧慮したりすれば、不純の戀愛とされる、随つて向ふ見ず、お先眞暗ら、身分構はず、ふれ合へばそれで純正の戀愛が成り立つ、それが結婚の礎をなすのだから、これなど日本の昔しの慣習と異なるものはない、今の戀愛觀からすれば昔しの結婚などは幾んど全體虚偽となるのである。今の戀愛觀から昔し情死した

男女こそ眞の戀愛を體したもので、それを許さずして悲劇を致した兩親は無慈悲極はまる極惡非道となるであらう。併し待てよ、此の向ふ見ず無分別の所謂純なる戀愛は果して結婚の礎となしてよいものであらうか、結婚は生涯を結びつける人事の尤も大切なことで、その破却は實に此上のない大不幸である。戀愛は結婚の一條件で大切な條件であることは吾等は否定しないけれども、それがすべての條件ではないと吾等は信ずる。殊に日本の如き家族制度の行はれてゐる所では、戀愛一點張では結婚生活を同穴の最後まで續けるなどは思ひも寄らぬ、人或は云く、家族などは眼中に置くに及ばぬ、夫婦は獨立して自から家庭を作るべし、他から牽制を受くべきでない、假りに此説に従ふとして扱て戀愛は果して些しの變化もなく、續くべきものであらうか、夫婦がどんな境遇と立つと、どんな年輩にならうと、どんな誘惑が起らうと、初めのごとく熱烈なる戀愛が保ち得られ得るであらうか、之れに對しては冷靜に考へるまでもなく、保證は出來ないことゝ答へるが本當であらう。血氣の情熱は血氣の衰へると共に情熱の薄らぐのも性理的必至の事である。兩姓の道義觀念や智識も年を経るに隨つて最初とは異なり來つて、それが併行しないので、そこに鴻溝が生ずる。如何に膠漆音ならざる情交關係でも、以上の鴻溝が兩者の間に乖離を生ずることを免れぬ、況んや社會的の刺激や兩性各々異にする遺傳的情意志は年を経るに従

ひ、初め無つたもの又は潜在してゐたものが段々に現はれ出で、互ひに案外と思ふやうのことが生じ和せんとしても和し難いことも起つて衝突が起る、設令ひ衝突葛藤と云ふことでなくとも圓滑を缺くことが起る、斯くして彼等は思ふ、どふも兩人の間に和し難い性質がある、兩立し難い智徳の相違がある。斯くまで良人は意氣地がないとは思はなかつた、斯くまで妻は傲慢であらうとは思はなかつた。一旦不満足に感ずることが起ると、何もかも不満足となるのは人情の必然で、もと結托の時萬事萬端が互ひの思ふ通りであると、漫りではあるが斯く思ひ込んでゐただから、愈々不満が募つて、普通なれば辛抱もし勘忍をするのを一刻も耐堪が出来なくなつてこゝに破綻が生じ離縁沙汰の生ずるのは頻繁に見ることであるが、思慮分別を全然抜にした所謂純戀愛が生ずる當然の結果と云はざるを得ないので、吾等は之れを不思議とも意外とも思ふては居らぬ。寧ろ破綻を當然の事と思ふてゐる、土臺西洋と日本とは習俗が根柢から異つてゐる、日本では家に重きを置き西洋では家を幾んど眼中に置かぬ、彼れには個人主義が行はれてゐるが、家族主義の日本には除外例はあつても大態それを許さぬ、さるが故に日本に於ては結婚に重要とする條件は家族の機構としての適否である。夫婦相愛は決して否定をしないが、其關係が一家を維持し得るか否かをコンシデレーションに入れねばならぬ、随つて思慮分別が最も重要となり、兩

性が互ひに相愛でもそれを父兄が許さないことのあるのは此故である、婦は良人に仕へる外、舅姑に仕へねばならぬ。親族にも圓満の關係を保たねばならぬ、長子相續を慣習とする日本に於ては結婚と家とは重大關係がある。家を相續せず、別家をなすものと雖ども家の延長と見做さるが故にどこまでも家がつき纏ひ結婚の可否は概ねこれに問ふことになるのも自然の教である。それだから婦を選ぶに門地を問ふ其家風を問ふ其の親族を問ふのも皆な家の機構たり得るか否やを顧慮するからであつて極めて複雑である。親權が立入つて結婚を拒否するのも婦を選ぶのも亦此故であつて、婦人が他家に嫁する必要の教育を其家庭で受けるのも亦此故である。女大學の七去の法などは今日取捨なくして行はるべきでないが、これも家を重點に置いて定めたものである。日本の結婚は多くの場合當事者兩性の戀愛から生ずることが少ない。寧ろ夫婦の愛情は結婚後に起ることが通例であつて、其の夫婦關係が憎老を保ち得る所以も却つてこゝに存するのである。兩性が互ひに其の理想に據つて結托し、結婚する西洋の場合に於ても其の理想が變すれば破綻が生ずる、日本の家では支柱がいくらもあるが、個人主義の結婚にはこれが無い。膠漆膏ならざる兩性愛には兩間にユトリがないから、些の衝突があつても往々大事となる、早やい話焼餅は世界の何れにもあるが、焼餅を婦人の惡徳と教へる日本に於ては良人に多少のユトリがあり、婦人に幾

許の忍耐もある、これが兩間を圓滿に保つ所以でもある。西洋での離婚が頻々とあるのに顧みて、友愛結婚と云ふものさへ工風され出した。これは無分別結婚を制する所以で、一家を形づくる能力のないものに早やく子が産れては支持も出来ないの、避妊法に依つて産兒を制し相當の資力を有するまで正當の結婚を延ばし友愛關係を持続する一法を案するに至つたのは、西洋の青年輩が若氣に逸つてお先眞暗の結婚の非を認めたからの事で、今となつては追々日本の家を中心とする思慮あり條理ある結婚と家庭を羨望するやうになつて來て居る、西洋には「無妻に次いで良妻」と云ふ諺がある、西洋人が如何に妻に困んで居るかわかる、寧ろ無妻を可とす、強て妻を持つてと云は、切めて良妻を持ちたいと云ふのは随分苦しい言ひ分である。彼等が互ひに愛し合つての結婚の結果は斯くも悲惨のものである。兎角理想を本位としては、結婚は幾んど成り立ち得ない。外國の藝術家に無妻の人の多いのも、男性の理想が高かくそれに副ふ相手がないからである。一旦結んだ關係がしばしば破れるのも亦此故である。妻を以つて良人の理想に投合せしめんとするなどは實は無理の沙汰と云はざるを得ない。

軍 費

戦争ほど錢の要るものは無い。ナポレオン當時は一日の軍費三十四萬一千弗、日露戦争の一日の軍費が三百八十三萬二千弗で十倍である。世界戦争となると一日三千三百萬弗、日本の金で約七千萬圓、これは五ヶ年間の戦費を平均したもので末期には一日一億圓の金が飛んだ。

鬼 門

或る學者が講演された筆記を讀んで面白く感じたのは、方位説を罵倒した一節であつた。其の大略を擧げると、方位家は良位即ち東北を丑寅と云ふてそれを鬼門として忌み嫌ふてゐる。どんな鬼かと云ふと、牛の角を戴き寅の皮の禪をしてゐると云ふのも滑稽である。此鬼門が如何にこはがられたかと云ふに、京都の皇宮の鬼門は比叡山に當ると云ふて、大きな寺を建てた位であるが、何んぞ知らん、此比叡山こそ皇居に對しての鬼門で、山門の僧徒は武裝して時々暴れ出して、天皇を困しめ奉り、聖上をして加茂川の水と山法師はどうにも朕の手におへないと仰せられた程であるが、鬼門ヨケが却つて鬼門を生じたのもおかしい。

江戸では上野が江戸城の鬼門に當ると云ふので、ここにも天海和尚は比叡山に擬して東叡山を經營し、不忍池を琵琶湖に擬したが、此の東叡山は京都の皇居の鬼門に當つてゐないが、事實鬼門

閑
であつたと云ふ譯は、天海はなか／＼の策士で、爰に法親王を迎へ奉り、萬一皇家が徳川將軍に
何事かお企てどもあれば、法親王を擁して對抗すると云ふ計畫を立てたから、これが京都の鬼門
であつたとも云ひ得るもので、此等のことを想ふと方位説もおかしなものだと云ふのが大略で全
く同感である。尙ほ日本は東半球の鬼門に當つてゐると云ふて、興味ある説を立てゝゐる、云く
元冠がやつて來てサン／＼に負けたのも實は鬼門に觸れたのだ、今日日本の國勢が隆々としてゐ
るので、世界は皆鬼門として恐れてゐるのも無理はないと説いてゐる。

琴臺と高田の雪

東條琴臺は江戸お構ひで、越後の高田藩に身を寄せた學者だが、西園寺公が明治戊辰に越後へ
來られた際は、まだ存命で、其際は明史稿の校訂に従事しつゝあつたと云ふ。藩命に由つたので
あらう。公は琴臺が高田の藩校にどんな關係があつたか、まだ調べたこともないが、昨年であつ
たか、斯人自筆の「費舍用度制紀」と標題のある寫本を手に入れたことがある。それを讀んで見
ると、高田の學校の用度が冬時頗る當むことが書かれてあつた。今左に抄出する。

費舍家根雪おろし入用

百二十兩

暖國は勿論、他國の人一向に存知不申儀にて、越後上頸城郡は雪四五尺積り候て、家根よ
り氷雪を多人數にて堅確なること石の如きを碎き割り投落申候、甚以て人手掛り申候、
費舍總體雪圍ひ、雪ナデ留、並雪踏付入用 百五十兩
是は西北方は薦コモ又は蘆洲アシノにて間口と窓の御座候方塞き、相圍ひ、往還の雪踏堅め、其上を
通行申候、右様之儀世上にて知り不申、寒國の儀につき雪の手當は甚以入用（多し）
此外に尙ほ寒國には薪炭並に被服費等の入用の多いことが書かれてゐたが、他藩の學校には全然
無い費用で、幕末に二百七十兩と云へば、少額の費用でないから、琴臺も多分驚ろいたことであ
らう。説明の内に四五尺の雪とあれども、初冬の雪は兎も角事實雪は丈餘に及ぶのである。郷土
志料の一端とも思ふてこゝに收めおく。

原宏平と蓮月尼

吾が郷里に原宏平と云ふ人があつた、若い時から和歌を達者に詠んだ。明治四年京都に遊んだ
頃は蓮月尼も存命であつたので、訪ねて見ると、不在といふので、一首の和歌を書き残して去ら
んとした、其歌は

一聲もきかで歸らばほとゝぎすぬれて尋ねしかひやなからむ

蓮月は留守をつかつたのであつたから、此歌を見ると呼び入れて、偽りを云ふたことを謝し、茶など給して蓮月の和した歌に

いたづらに君をかへさばほとゝぎすひとりや啼かむ聞人なしに

宏平が晩年ののろけ話に、蓮月から島原の遊女薄雲太夫の美貌を語られ、心動いてその女と深い申となり歸國しても手紙のやりとりをやつたと云ふが、此の薄雲は蓮月の歌の門人であつたので、宏平に吹聴したのが紹介であつたと見へる。

親不知の三家村

自分は曾つて郷國越後と隣國越中の境にある所謂「親不知子不知」の嶮を踏査したことがあるが、其頃は既に崖上に立派な通路が出来てゐたので、強て此の難所の全部を踏査をせず止んだが、相馬御風氏の隨筆「人生行路」を讀んで見ると、田園雜興の内に意外の記事がある。

私が親不知の嶮道を歩いて見た度に、いつも最も強い印象を與へられたのは、その嶮岨な道そのものでなくして、その途中に僅か三戸だけ殆んど全く他の村と隔絶されたやうになつてゐる

る部落のあることである。その部落の風波と呼ばれてゐる。斷崖の中腹を削つてつけられた新道と斷崖の裾の波際傳いに行く舊嶮道との中間に當る、崖の一角に瀧のやうな谷川に沿ふた、いくらか平らな場所に、その三戸の家が建てられてゐる。これはいつの頃に始めて出来た部落であるか、今では全くわからぬほどに古い歴史を持つてゐる、しかも家の數も昔しから三戸のまゝだと云ふことである。口碑に依ると、此あたりには、昔こゝを通る旅人を殺して所持品を奪ふのを生業としてゐた怖ろしい山賊が住居してゐたとのことである、そしてその殘忍な所業に就いての身慄ひするやうな話も幾つとなく語り傳へられてゐる。

個様な三家村が今尙存してゐるのは寧ろ不思議である、相馬氏は其村を通りながら、立寄つて村人と會見はしなかつたと云ふてゐるが、村の存在は確かである。此村では、ある時うつくしく着飾つた女子を殺したことがある。そして其所持品を調べて見ると、それが自分の娘で絲魚川へ藝妓稼ぎに出してあつたのが歸つて來た途中であることが知れ、流石殘忍の鬼夫婦も、それから發心して回國順禮の旅に上つたと云ふ話が傳つてゐると云ふ。

浮世繪大家は多く田舎出身

浮世繪研究家の調査に據ると、斯道の大家は多く田舎出身だと云ふて列擧したのを見ると、菱河師宣は房州保田の人、鳥居清信は大阪の人、湖龍齋は常陸土浦の藩士、寫樂は阿波藩の能役者、歌川豊春は豊後臼杵とも云ひ但馬の豊岡とも云はれ、歌麿は武州川越邊のものと云はれてゐる。これに由ると如何さま田舎出身が多い。生粹の江戸美人を描すに田舎の畫家が多いのは、不思議のやうにも思はれる。或は之れを解して江戸の人は常に江戸の女を見慣れてゐるから、却つて寫實の筆を缺く、他國のものには特徴がよく見へるから寫實の繪が出来るのだと、一應理もあるやうだが到底附會の説たるを免がれない。實は天才は都會に生るゝに限つたものでなく、どんな所にもゐるが、それが顯はれないのは其の境遇に由るのである、乃ち顯はるべき機會がないからである。浮世繪に限らず種々の流派の畫家は田舎で名をなしてゐるものが多いからであるが、どこなく垢ぬけがないので、折角畫才があつても大家となり得ない。大家となるには一度は江戸に出て磨きをかけねばならぬ、前に列擧の浮世繪師も多くは江戸で磨きをかけて大家となつたのである。或る境遇で都會へ出ることの出来ない畫家が、大家となるべき素質を有しながら、名を成さずに畢つたものがどれほどあるか知れない。異なつた例を取ると明治以來の大使公使の外交官の出資地を調べて見ると、東北其他田舎出身者が極めて多い。外交官は言ふまでもなく外國

語の操縦に熟達を要する。地方訛りの豊かなものには外交官は最も不適當でありそうなものだが事實は反對で、田舎出身の外交官は概ね成功してゐる。逸足を其の爲すに任かして處を得せしむれば、成功することが寧ろ當然の歸結である。人物は一時薩長閥に限るものゝ如く思はれたこともあるが、外交官の如き特能を要するものは、關に拘はることが出来ない所以自由選擇となると、能者が處を得るから成功するのは寧ろ當然である。何に寄らず逸足は到る處にある。唯だ之れをして大名を博せしむるは、その處を得せしむると否とに由るのみ。

新渡戸博士と唐人お吉

これは入澤博士の隨筆で教はつたことだが、新渡戸博士が伊豆の伊東を訪ふた時、何に感じてか、例のお吉の爲め、其投身の淵邊に地藏尊の像を建んことを企て、或る人にそれを托したが、其の建設を見ずして博士は外國に客死した、然るに入澤博士が下田に遊んだ際、其佛像が出来てゐて、建設の場所の選定に與かり、「明烏」と云ふ喫茶店から程遠からぬ處に定めたとある。

世界的好色本

世界共通の好色本と云ふたら誰れもクレヲパトラ物語を推すであらう。自分は久方振りに此頃読んで一二の挿話を得た。彼女の豪奢を語る一端として或る時の饗應にアントニーを驚かすべく、一席の宴會に十數萬の金を費さんと語つた。アントニーは之れを信せず、そんなに多くの金^目が費さるゝものかと笑つて、若し果してそれ程の金をかけたならば、某國土を與ふべしと約したが、クレヲパトラは常に指頭を飾つてゐる最愛の指輪を酒杯に投じた、其の指輪の寶石が十幾萬の價あるもので、それが酒に由つて見る／＼溶解したので此の賭事はアントニーの負けとなつた。他の一話は或る青年が女王に戀して種々の手段で思を寄せた、終に女王が浴してゐた時、窃かに浴室に近づき覗き見したので女王の認むる所となり、捕へて見ると美貌の青年であつたので、女王は心を動した。青年は死罪覺悟で禁苑に入つたので、女王に對し思慕の情を訴へて伏罪せんと云ふと、女王は敢て殺しもせず、内廷に召して宴を設け終に抱擁して寢所に入り、彼れの爲すに任した、さて翌朝宮内官が此の青年に毒を與へるのを監視しながら、アントニーにこれほどの情があつたらばと歎息したとあるが、此事はアントニーが一時歸國した留守に起つたこと、云はれてゐる。

浴場の女

昔し湯屋に湯女と云ふがありて、浴客の垢をすり、また三絃を弾じて興を添へたことがある。此の遺風と見るべきものが田舎に存してゐる。自分の郷里の某地と佐渡の小木などでは料亭に浴すると藝妓が禱^{カスネ}かけて尻まくりして浴室に來り、平氣で垢をこすつてくれる、手拭や垢スリなどを用ひず、肉體が肉體に觸れる所に情味があると云はれて客に喜ばれてゐるが、これなどは正しく湯女の名残りであらう。工藤直太郎氏に據ると瑞典にも若い女が浴室に垢すりに來ると云ふて右の如く語つてゐる。

瑞典のバスの特色は風呂に入つてゐると、若い女が平氣で浴室に入つてきて、洗ひませうかと云ふ、瑞典の習慣を知らない人は、大抵ドギマギしてノーと答へる

とあるが、此先生も後に人に語つてひやかされたとあるが、日本の湯屋で男子の三助が女湯で婦人の身體に觸れることを許されてゐると同じ習慣で、湯女とは趣の異つたものである。

鰻の串

江戸時代鰻屋の用いた串は水戸の士族の製産が最上とされたと云ふが、水戸藩は財政が饒かではなく、或る階級の士族は、内職に串を削つて辛ふして生活した。彼等は鰻の串を削りながら、鰻を口にするにも出来なかつた。櫻田門の烈士なども皆此連中であつた。ある人は水戸藩の朋黨を評して鰻を食ふ階級と鰻の串を削る階級との黨争であると云ふた。貧富階級の抗争とするのも一面の觀察で、水戸は串も削り亦鎬も削つたのだ。

おいらん芋

デパートから薩摩芋を購ひ歸つて、臺所で煮て見ると中身が白いので妻は、おいらん芋だと云ふた。自分は始めて聞く名だからおかしく思ふて笑つたが、よく考へて見るとよくつけた名だと感じた。外部の皮は赤色で眞の薩摩芋と變りがない、唯だ黄色なるべき中身が白いから茲に表裏がある。花魁の心に譬いた所に皮肉がある。これに就て思ひ出すことは、赤蕪である。此蕪にも中身まで赤色のものがあり、皮のみ赤いものがある。所謂赤化思想も根本的のものには心まで赤いが、多くは中身の白いものである、彼の容易に轉向するものは即ち皮ばかり赤いのに屬すると一笑した。

雪中の履物

雪の國越後のやうな所では、他國に無い種々の履き物がある。すべらぬ爲め、ぬからぬ爲め凍傷を受けぬ爲めなどが目的で工夫されてゐる。今思ひ出るまゝあらましを書きつけて見ると、雪中に用ゆる下駄に種々あるが、スベラヌ爲めとヌカラヌ爲めに作られたものが主なるもので、前者には下駄の齒に鐵釘を打つ、後者には越後の高田邊では、普通の下駄の齒よりも四五倍も厚い齒を用ひる。或は下駄の齒の所を箱のやうにクリ抜いたものもある。

少年のスポーツ用にスベリ下駄と云ふものもいろ／＼あるが、自分の知つてゐるのは、青竹を豎に半截して緒をつけ、下部の雪に觸るゝ所を、適當に手入をして圓滑ならしめる位で、極めて簡單なもので手細工で出来るものである。他の一はコンニヤク下駄と云ふ、木で作られ、其形蒟蒻に似て齒が無い、底の中央に鋸目を入れ多少屈伸するやうになつてゐる。

深雪を履んでぬからぬ用意にカンジキがある、元來カンジキ或はカジキと云ふは、可なり大きな板に緒を着けて木履の如くし、深田を履むことから工夫したものらしく、越後では藁の深靴の底に樹枝を輪の如く組んでそれを装置する之れを輪カンジキと名づけてゐる。尙ほカナカジキと

云ふのがある。これは鐵製で三ツの爪がある、それがとがつてゐるから滑ることがない。爪の位置は一本は踵に二本は前方の左右にあるのだ。

草鞋の首部に藁細工の覆をかぶせて凍傷を防ぐ之れを越後では爪かけと稱する。或はツマゴと呼ぶ所もある。爪かけと似たもので、スリッパの如き足の半分程這入る藁沓がある、これを突掛沓と云ふ、近隣を訪ふに用ひるもので「トナリタ、キ」など云ふてゐる地方もある。

踏俵と唱へるものは小さな俵に綱をつけ、足を俵の中へ入れて綱を手に持ち、足の歩行を助け、積雪を踏みつけて通路を作る、これは福島縣にありと云ふが越後にもあるか自分は未だ知らない。

アイヌなどは獸皮或は鮭の皮などで靴を作り凍傷を防ぐと云ふが、越後あたりでは絶無でもないが、廣く行はれてゐない。

墮胎 專業者

昔し江戸も墮胎を專業とするものがあつた。川柳などによく出てゐるが、其業者は中條と稱した。墮胎は昔しでも許されなかつたが、事實は盛んに行はれた。流石に看版に「おろしやなど」

、書く譯にゆかず、謎に類する文や繪を書いたりしたが、其の意匠の中で自分が興味を覺へたのは、子持稿に錠を書き添へた繪である。これなどは文字を辯しない女にも、それとなく寓意が分かり、品のよい工夫と思ふた。併し中條と云へばそれと知れてゐたから、大體は中條の看版で通つてゐた。

署 名 狂

名家のサインを集めることを興味とする人ばどこにもあるが、大きなスケールで、世界を股にかけ幾十年もそれのみにかゝつて大金を費してゐるものは決して多くない。昭和十年十二月十二日の東京朝日紙上に此の署名狂に就て詳細の記事があつたが、其の蒐集家の名はナンバー、ワンで、或る博物館の囑托で刻苦蒐集に没頭し、既に得た署名は三萬人に上り、各國の帝王や大統領など漏れなく署名してゐると云ふが、中に署名を欲しない人があり、面接も出来ない人もあるのだ、その爲め無駄に多くの日子と宿賃とを拂ふことを由義されても、尙ほ屈しないなどは珍らしい例である。

學藝隨筆 第五卷

鯨肝錄 市嶋春城著

昭和十一年十二月廿二日印刷

昭和十一年十二月廿五日發行



定價壹圓五拾錢

著者 東京市牛込區東五軒町三十五 市嶋春城

編輯者 東京市小石川區高田豐川町四十二 白鳥省吾

發行者 東京市麴町區下六番町三 千葉春雄

印刷者 東京市牛込區山吹町二六 櫻井專吉

印刷所 東京市牛込區山吹町二六 高瀬印刷所

發行所 東京市麴町區下六番町三 東宛書房

東京振替二六五二四番

『學藝隨筆』全八卷

會費1圓50錢 各380頁 送12錢

第一回配 第一卷 自然の煉獄 吉江喬松

第二回配 第八卷 我執轉々記 五十嵐力

第三回配 第五卷 鯨 肝 録 市島春城

第四回配 第二卷 學窓夜話 山岸光宣

第五回配 第七卷 わが鑑賞の世界 本間久雄

第六回配 第六卷 動亂の靜觀 五來素川

第七回配 第四卷 演劇獨語 中村吉藏

第八回配 第三卷 匠房雜話 佐藤功一

白鳥省吾著

★ 詩心旅情記

四六全 315 頁 函入美裝
定價 1 圓 50 錢 送 12 錢

★ 現代詩の觀方と仕方の鑑賞

四六全 330 頁 函入美裝
定價 1 圓 80 錢 送 14 錢

★ 隨筆 世間への觸角

四六全 330 頁 函入美裝
定價 2 圓 送 14 錢

★ 現代歌謠百話

四六全 460 頁 函入美裝
定價 2 圓 70 錢 送 16 錢

★ 諸國民謠精査

四六全 540 頁 函入美裝
定價 2 圓 50 錢 送 20 錢

津亞